

一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)
埋蔵文化財発掘調査報告書

玉 越 遺 跡

1986

磐田市文化財保存顕彰会

一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)
埋蔵文化財発掘調査報告書

玉 越 遺 跡

序 文

自然環境に恵まれた磐田市は、約2万年前から先人が住み始めて、貴い文化遺産が数多く残されています。特に、磐田原台地は埋蔵文化財の宝庫であり、その数は計り知れなく、地下の博物館とさえ言われるほど歴史環境にも恵まれています。貴重な文化財はできる限り保護・保存・継承に努めると共に、特別史跡遠江国分寺跡のように史跡公園化をはかり、文化財と市民を有機的に結びつけて公開・活用を図っていくことが最も大切なことです。

今回は袋井バイパス建設工事に伴って、市内玉越地内に存在する玉越遺跡の発掘調査を、建設省中部地方建設局のご理解と、静岡県教育委員会のご指導を得て実施してきました。調査は昭和58年度・59年度の2カ年にわたって実施、昭和60年度は報告書の整理をすすめできました。調査成果は弥生時代から江戸時代におよぶ複合遺跡で、中から環溝屋敷跡や土器・木器など貴重な資料が検出されました。これら資料は、太田川左岸の歴史を解く大切な資料になりました。今後は貴重な資料を十分活用できるように努めてまいります。

ここに本報告書が刊行できるようになりましたのは、建設省中部地方建設局、静岡県教育委員会ならびに関係諸機関のご協力ご援助のたまものであり、厚くお礼を申し上げる次第であります。また、本報告書が文化財保護関係者、学術関係者、さらに社会教育・学校教育に携わる関係者にも広く活用されることを期待いたします。

昭和61年3月

磐田市長 山内克巳

序 文

磐田市玉越は太田川の左岸にあり、袋井市と接する農村地帯です。玉越と袋井市小山との境界には、金山堤という人工の堤が太田川から蟹田川にかけて築かれています。この堤は、江戸時代の文書にも記され、古くより太田川流域の住民が氾濫に苦悩していたことがわかります。近年でも昭和49年の七夕豪雨による太田川決壊は、記憶に新しいところです。当初バイパス工事に伴ない金山堤が路線内に没してしまうことに憂慮し、地元より何とかこの歴史的遺産の記録を残したいとの要望がありましたので、航空写真を撮り記録の保存に努めました。

今回バイパス工事に伴ない排水路を掘削したところ、排土内より上器片の出土がありました。そこで中部地方建設事務所・県教育委員会・市教育委員会の三者で取り扱いについての協議を重ね、発掘調査を実施するにいたりました。今まで、この地域において埋蔵文化財は周知されておらず、新たに先人の歴史を解明する手掛りとなつたわけです。

発掘調査は2年度にまたがる約1年間実施しました。その結果、弥生時代から近世にいたる複合遺跡であることがわかりました。特に鎌倉時代の環溝塹痕は、ほぼ完全な姿で見つかったもので、今後の中世村落研究の一指標になるものと思います。この報告書が地域史解明の一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査や遺物整理に協力いただきました関係者の方々、並びに地元住民の皆さんに御礼を申し上げます。

また、加藤芳朗・山内文・藤下典之の各先生方には御指導を賜りましたことを、厚く御礼申し上げます。

昭和61年3月

磐田市教育委員会
教育長 浅井重典

序 文

静岡県内における埋蔵文化財発掘調査件数は、昭和52年度72件に対し、55年度118件、57年度153件、59年度112件でありましたが、60年度は150件と再び増加の傾向を示しています。このことは、工場用地の造成、上地・区画整理事業、農業基盤整備事業、ゴルフ場の造成、道路建設などがさかんに行われていることを裏づけています。

埋蔵文化財が「土地に刻まれた歴史」といわれますように、先人達の文化遺産は後世まで伝達継承されなくてはなりません。しかし、市町村住民の価値観の変化に伴います要求は、地域文化的保存創造とともに地域開発の促進にあります。文化財保護行政のみが地域開発の対象範囲外とすることはできない現状にあります。そのためには、開発によって消え去る文化遺産は詳細な調査の記録という形で保存されなくてはならないことは言うまでもありません。

さて、一般国道1号袋井バイパス建設に伴います埋蔵文化財発掘調査は、昭和55年度から袋井市坂尻遺跡、土橋遺跡、掛川市原川遺跡、磐田市玉越遺跡について行われています。この度、玉越遺跡の調査成果が磐田市教育委員会によって刊行されることになりました。

ここに、建設省中部地方建設局ならびに磐田市をはじめとする関係諸機関、さらには発掘調査に従事された関係者の方々の労苦に深く敬意を表するとともに、本書が広く活用され地域文化の創造の一助ともなることを念願するものであります。

昭和61年3月

静岡県教育委員会
教育長 三浦孝一

例　　言

1. 本書は、一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として実施した玉越（たまこし）遺跡の発掘調査報告である。
2. 当初本遺跡は、袋井市土橋遺跡の一部と考え、契約上は土橋遺跡の名称を用いたが、その後の調査により、別の遺跡であることが判明したので、字名を取り玉越遺跡とした。
3. 発掘調査は建設省中部地方建設局長を委託者とし、磐田市長を受託者として磐田市教育委員会が実施したものである。
4. 発掘調査は、山崎克巳を調査担当者として、静岡県教育委員会文化課の指導を得て実施した。
5. 出土品の整理・実測作業は、磐田市立郷土館において、山崎克巳を中心に、次の諸氏の協力を得て行なった。
小林ゆり・小宮猛幸・加藤恵子・小宮康弘（奈良大学学生）・伊藤雅文（関西大学学生）・松本一男（掛川市教育委員会）
特に弥生土器の尖削・淨書には下記の諸氏にお願いした。
星 龍象（保谷市文化財専門委員）・久保田雅浩・竹内宇哲・千野 浩・黒渕和彦
6. 写真撮影の担当は次のとおりである。
発掘現場　主として山崎克巳・小宮猛幸
出土遺物　山崎克巳
種 子 藤下典之（大阪府立大学）・山崎克巳
7. 調査資料はすべて磐田市教育委員会で保管している。
8. 木調査に関する事務は磐田市教育委員会郷土館職員が行なった。
9. 石製品の石材鑑定は、森 伸一氏（磐田南高校）にお願いした。
10. 木製品の保存処理は、桜井 洋氏（東京国立博物館・仏像修理室）にお願いした。

目 次

第1章 玉越遺跡の発掘調査について	1
第1節 調査に至る経過	小池 一吉 1
第2節 調査の方法	山崎 克巳 1
第3節 層位について	2
第4節 調査体制	2
第2章 地理的・歴史的環境	山崎 克巳 4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 検出遺構	山崎 克巳 7
第1節 弥生時代の遺構	7
第2節 古墳時代の遺構	10
第3節 奈良・平安時代の遺構	12
第4節 中世の遺構	13
第5節 近世及び時代不明の遺構	24
第4章 出土遺物	山崎 克巳 29
第1節 弥生土器	29
第2節 古墳時代の土器	47
第3節 奈良・平安時代の土器	48
第4節 中世の土器	48
第5節 木製品	49
第6節 石製品	加藤 恵子 52
第7節 銭貨・金属製品	山崎 克巳 54
第8節 土製品	54
第5章 まとめ	山崎 克巳 55
第1節 検出遺構について	55
第2節 出土土器について	56
第3節 球溝屋敷について	小宮 猛幸 57
付編	
付編1 玉越遺跡の基盤砂疊層の地質学的検討	加藤 芳朗 143
付編2 玉越遺跡出土材の樹種および果実・種子について	山内 文 149
付編3 玉越遺跡から出土したウリ科植物の種子について	藤下 典之 157
付編4 近世史料にみる「金山堤」について	徳橋 伸 161

挿 図 目 次

- 第1図 周辺の遺跡分布図
- 第2図 発掘区位置図
- 第3図 S D - 14 実測図
- 第4図 S D - 16 実測図
- 第5図 O I - Y区周辺溝実測図
- 第6図 IX-G・H区周辺溝実測図
- 第7図 S D - 6・9・10・41実測図
- 第8図 S D - 52・53断面図
- 第9図 VI-G・H区周辺溝実測図
- 第10図 VII・IX-I区周辺溝実測図
- 第11図 S D - 85・102接合部分実測図
- 第12図 S K - 1・3・4・5・6実測図
- 第13図 S K - 13実測図
- 第14図 S K - 10・14・17実測図
- 第15図 S K - 7・16・19実測図
- 第16図 S K - 18・21実測図
- 第17図 S K - 22・24・27・28実測図
- 第18図 S K - 30・31・33実測図
- 第19図 S K - 34・36・37実測図
- 第20図 S K - 20・39・40・41実測図
- 第21図 S B - 1・2・3実測図
- 第22図 S B - 4・6実測図
- 第23図 S B - 5・8実測図
- 第24図 S B - 7・9実測図
- 第25図 S B - 10・11実測図
- 第26図 S B - 12・13実測図
- 第27図 S P - 2・124・179・483・628実測図
- 第28図 S P - 358・382・386・476実測図
- 第29図 S P - 481・486・627・749実測図
- 第30図 S E - 1 実測図
- 第31図 S E - 2 実測図
- 第32図 S E - 3 実測図
- 第33図 S E - 4 実測図
- 第34図 S E - 5・S A - 1・2実測図
- 第35図 配石遺構実測図
- 第36図 S X - 3・4実測図
- 第37図 S X - 6 実測図
- 第38図 S X - 7・8・9実測図

- 第39図 S X -- 13 実測図
第40図 金山堤実測図
第41図 水田状造構実測図
第42図 上器実測図
第43図 土器尖実測図
第44図 土器実実測図
第45図 土器実実測図
第46図 土器尖実測図
第47図 土器実実測図
第48図 上器実実測図
第49図 土器実実測図
第50図 土器拓影図
第51図 土器実実測図
第52図 土器実実測図
第53図 上器拓影図
第54図 上器実実測図
第55図 上器尖実測図
第56図 土器実実測図
第57図 上器実実測図
第58図 土器実実測図
第59図 土器実実測図
第60図 土器実実測図
第61図 土器実実測図
第62図 土器実実測図
第63図 土器実実測図
第64図 土器実実測図
第65図 木製品実測図
第66図 木製品実測図
第67図 木製品実測図
第68図 木製品実測図
第69図 石製品実測図
第70図 石製品・土製品・金属製品実測図
第71図 玉越遺跡周辺の地形・地質図
第72図 玉越遺跡周辺の微高地帯と低地湿地
第73図 袋井バイパス予定路線沿いの地下地質断面図
第74図 発掘区の砂礫層表面の海拔高度
第75図 発掘区南東側の砂礫層・グライ層の出現深度
第76図 「見付」五万分の一地形図(明治22年測図・昭和15年部分修正、大日本帝国陸地測量部)より
第77図 「静岡県管内全図」(明治22年)より
付図1 玉越遺跡全体図 付図2 環溝塹敷造構全体図

図 版 目 次

- 図版1 遺跡周辺航空写真
- 図版2 上 発掘調査前の全景（北東より）
中 I～0 II区遺構全景（南西より・後方は土橋遺跡）
下 I～0 II区遺構全景（南西より）
- 図版3 上 I～0 II区遺構全景（北東より） 中 I～IV区遺構全景（北東より）
下 VI～VII区遺構全景（北東より）
- 図版4 上 SD-14遺物出土状態（北東より） 中 SD-14完掘状態（北東より）
下 SD-14遺物出土状態（北東より）
- 図版5 上 SD-14遺物出土状態（北より） 中・下 SD-14遺物出土状態（南より）
- 図版6 上・中 SD-16遺物出土状態（北東より） 下 SD-14完掘状態（北東より）
- 図版7 上・中 SD-16遺物出土状態（北東より） 下 SD-16完掘状態（北東より）
- 図版8 上 V～X区南側遺構全景（北東より） 中 VII～IX区南側遺構全景（北東より）
下 SK-5 遺物出土状態（南より）
- 図版9 上 SK-13遺物出土状態（西より） 中 SK-14土層断面（西より）
下 SK-14完掘状態（東より）
- 図版10 上 SK-7 遺物出土状態（東より） 中 SK-17完掘状態（西より）
下 SK-21完掘状態（東より）
- 図版11 上・中 SK-18遺物出土状態（東より） 下 SK-20・41完掘状態（東より）
- 図版12 上・中 SK-39遺物出土状態（東より） 下 SK-30疊山上状態（北より）
- 図版13 上 SK-33疊山上状態（西より） 中 SK-42遺物出土状態（北より）
下 環溝屋敷南東隅全景（南西より）
- 図版14 上 環溝屋敷南側全景（北東より） 中 環溝屋敷東側全景（南東より）
下 環溝屋敷全景（北東より）
- 図版15 上 SD-53コーナー部分近景（北西より）
中 SD-52・53コーナー部分近景（南東より）
下 SD-52・53接続部分近景（北東より）
- 図版16 上 SB-1全景（南より） 中 SB-2・3全景（南西より）
下 SB-13全景（北西より）
- 図版17 上 SP-1・2周辺柱穴群全景（南東より） 下 SP-1検出状態（南東より）
- 図版18 柱穴完掘状態（SP-2・45・124・179・271・296・358・382）
- 図版19 柱穴完掘状態（SP-386・476・485・487・627・628・749・754）
- 図版20 上 SE-1半掘状態（西より） 中 SE-1完掘状態（西より）
下 SE-2井戸枠検出状態（北東より）
- 図版21 上 SE-2井戸枠検出状態（北東より） 中 SE-2完掘状態（北東より）
下 SE-3完掘状態（南東より）
- 図版22 上 SE-4遺物出土状態（北東より） 中 SE-4完掘状態（北西より）
下 SE-5井戸枠検出状態（西より）
- 図版23 上 配石遺構検出状態（北東より） 中 SX-6完掘状態（北東より）

- 下 S X—6杭としがらみ検出状態（西より）
- 図版24 上 S X—3・4完掘状態（南西より） 中 S X—12完掘状態（北東より）
下 S X—13縫検出状態（南東より）
- 図版25 上 S X—13縫検出状態（北西より） 下 S X—13遺物出土状態
- 図版26 上 金山堤調査前の状況（北東より） 中 金山堤近景（北東より）
下 金山堤半掘状態（北東より）
- 図版27 上 金山堤横断面（北東より） 中 金山堤縦断面（南西より）
下 S D—85横断面（北東より）
- 図版28 上 S D—85・102接合部分縫出土状態（北西より）
中 S D—85・102接合部分縫出土状態（北東より）
下 S D—85・102接合部分縫出土状態（北西より）
- 図版29 上 水田状造構全景（南西より） 中 水田状造構全景（北東より） 下 金山神社跡地
- 図版30 出 土 土 器（1）
- 図版31 出 土 土 器（2）
- 図版32 出 土 土 器（3）
- 図版33 出 土 上 器（4）
- 図版34 出 土 上 器（5）
- 図版35 出 土 土 器（6）
- 図版36 出 土 土 器（7）
- 図版37 出 土 土 器（8）
- 図版38 出 土 土 器（9）
- 図版39 出 土 土 器（10）
- 図版40 出 土 土 器（11）
- 図版41 出 土 上 器（12）
- 図版42 出 土 上 器（13）
- 図版43 出 土 上 器（14）
- 図版44 出 土 木 製 品（1）
- 図版45 出 土 木 製 品（2）
- 図版46 出 土 木 製 品（3）
- 図版47 出 土 木 製 品（4）
- 図版48 出 土 石 製 品（1）
- 図版49 出 土 石 製 品（2）
- 図版50 出 土 土製品・金属製品
- 図版51 出 土 種 子（1）
- 図版52 出 土 種 子（2）
- 図版53 出 土 種 子（3）
- 図版54 上 S D—14出土土器 下 記念写真

表 目 次

- 第1表 掘立柱建物一覧表
- 第2表 主要柱穴一覧表
- 第3表 検出土上坑一覧表
- 第4表 弥生土器器種構成比率表
- 第5表 弥生土器観察表
- 第6表 木製品計測表
- 第7表 石鐵計測表
- 第8表 石製品計測表
- 第9表 弥生土器形態別比率表
- 第10表 帳内における中世村落調査例
- 第11表 全国における中世村落調査例
- 第12表 桃の果核計測表
- 第13表 野生桃の果核計測表
- 第14表 木製品利用材一覧表
- 第15表 出土植物名（材および果実・種子）一覧表
- 第16表 材質鑑定一覧表
- 第17表 静岡県下の遺跡から出土したメロン仲間の種子
- 第18表 静岡県下の遺跡から出土したヒョウタン仲間の種子

第1章 玉越遺跡の発掘調査について

第1節 調査に至る経過

バイパス建設は都市内交通混雑の解消、流通の合理化、生活環境の改善、計画的な都市開発など、経済の発展と都市整備に欠くことのできない事業である。磐田バイパスは東の藤枝バイパスまでつなぐ構想から昭和40年に藤枝・磐田バイパス建設促進期成同盟会を結成して建設の運動をすすめた。昭和45年に事業が着手されたが、48年オイルショックにより大幅な事業の遅れが予想されたため有料化に躊躇して工事の進捗をはかった。そして、56年3月に待望の磐田バイパスが開通した。

磐田バイパスは太田川を挟んで袋井バイパスとつながるが、袋井バイパス予定路線内には土橋遺跡という周知の埋蔵文化財が存在しているため袋井市教育委員会が発掘調査中であった。袋井バイパス予定路線の磐田地内には江戸元禄以前に築造されたと推定できる金山堤があり、この取扱いについて昭和56年度に建設省中部地方建設局浜松工事事務所と磐田市教育委員会の間で記録写真を撮ることで協議がされていた。

昭和58年度に袋井バイパス工事が進むにつれ、市内玉越先でも工事が施行されるようになった。同年7月文化財パトロール中に、袋井バイパス予定路線内で施行した仮設排水工事の排土中から弥生時代・鎌倉時代の土器片を発見した。静岡県教育委員会へ連絡をとり、同教育委員会を通じて建設省中部地方建設局浜松工事事務所と調整をはかった。文化財保護法に従って磐田市教育委員会が7月18日付けで発見届を提出した。その後、建設省中部地方建設局浜松工事事務所、静岡県教育委員会、磐田市教育委員会との三者協議を重ねた結果、建設省中部地方建設局浜松工事事務所より昭和58年10月19日付けで発掘調査の実施依頼があった。同年11月、遺跡範囲を確認する試掘調査を磐田市教育委員会が実施した。試掘の結果、弥生時代から鎌倉時代までの遺構・遺跡が検出され、その範囲も約4100m²に及ぶことがわかった。

試掘調査の資料を基に建設省中部地方建設局浜松工事事務所、静岡県教育委員会、磐田市教育委員会の間で協議をし、発掘調査を58年度（調査対象範囲1100m²）・59年度（調査対象範囲3000m²）の2カ年で実施し、60年度に報告書整理を行う事業計画を作成した。昭和59年1月21日に三者の間で協定書に調印すると共に昭和58年度一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査の委託業務の契約を結んで調査に入った。なお、昭和59年度は前年度の調査結果から遺跡の面積が広がり3600m²に変更された。

発掘調査は、昭和60年1月12日に終了した。

第2節 調査の方法

当初調査範囲は、東側はI-A区の東にある仮設農道、西側はバイパス架橋工事のおよび調査区西端、南側は金山堤保存という地元民の意向から金山堤まで、北側はバイパス工事用仮設道路幅までの約4100m²が対象であった。基準点は、平面直角座標・第VII座標系、X軸（南北）-54,970.00、Y軸（東西）-139,000.00の交点とした。この交点は、当初の調査区の北東隅にあたる。区画は全体を10m四方に区切った。区画には東から西へI・II・III……とローマ数字を、北から南へはA・B・C……とアルファベットを付した。I区画は100m²でありI-A区、I-B区と呼称する。

調査は最初に、全面の耕土・床土をバックホーにて除去し、耕土は西側調査区外に置いた。一度間に耕土を除去した目的は、調査地を乾燥させることと、遺構を容易に検出することにあった。我々は

経験上、長期間遺構検出面を露出させることによって、容易に遺構が検出できることを知っていたからである。現に下越遺跡においても、調査後半の方が遺構検出はスムーズに行なえた。

調査の進行に伴って、まず東側の拡張を行なった。これは、当初の調査区内で東へ延びる溝が検出され、これを追求する目的であった。拡張部分の区画は次のように呼称した。基準点より東へ 0・0 I・0 II……、北へ X・Y・Z と付し、0 I-X区、0 I-Y区と呼称した。

また環溝屋敷の検出に伴ない、金山堤を含めた南側の拡張を行なった。

尖測図は、縮尺 1/20 を原則としたが、遺物の出土状態については 1/10 で行なった。

写真撮影は、大型カメラ（トヨピュー 4×5）、中型カメラ（マミヤ RZ 6×7）、小型カメラ（ニコン F 3 2台）の4台を使用した。

第3節 層位について

上層の堆積層序は、調査区北壁沿いに深掘りを行ない観察をした。しかし IX区以西は、中世の環溝屋敷が検出されたことから、この部分についての深掘りは行なっていない。また、便宜的に分けた調査区の南北方向についても、数箇所のトレンチを設定して、堆積状況の観察を行なった。その結果、全体に土層は西から東へ傾斜する。この傾向は遺構検出面より下部において認められるものであり、遺構検出面での標高は、西側で約8.7m、東側で約8.6mとその差10cmしかなく、ほぼ平坦であるといえよう。遺構検出面までは約50cmの耕作土、水田床が覆う。これは東側では薄く、西側で厚い。遺物包含層は認められず、床土除去後遺構検出面となる。ただし、西側で検出された水田状遺構・S E-2 は、やや上層で検出されており、中世の検出面とは異なる。土器418・419・420が遺構に伴なわずに出土しているのもこのためである。S B-13周辺では砂礫層が露出している他は（付編 I 参照）、遺構検出面は黄褐色粘土であり、この土層は安定した状態ではほ査区に認められた。

第4節 調査体制

調査指導機関 静岡県教育委員会文化課 主席指導主任 山下 晃

調査実施機関 磐田市教育委員会 教育長 浅井 重典

同上 郷土館 館長 平野 和男（昭和59年度まで）

館長 宮内良太郎（昭和60年度）

係長 小池 一古

主事 山崎 克巳

嘱託 松浦美恵子

調査補助員 小林ゆり・小宮猛幸・加藤恵子

現地調査参加者 浅井ゆかり・安間克巳・稲垣新平・江塚佐平治・江塚清一・江塚安雄・大島 覚
・太田良平・大場明・大場嘉平・大橋庄一・大場つや子・大場とし子・大場はつえ・大庭康子・
大場義一・神谷常次・川島良一・栗原久平・後藤武蔵・後藤春男・小宮康弘・坂本敬子・坂本三
男・勾坂ユキ子・佐藤好幸・杉田菊江・鈴木 東・鈴木きみ子・鈴木源一・鈴木品子・鈴木せつ
・鈴木辰男・鈴木たみ子・鈴木つたえ・鈴木ふみ・鈴木康子・鈴木嘉子・曾根百合子・高橋恵子
・高梨とし・寺田寛一・永井猪三郎・永井民枝・丹羽はる江・平間秀雄・福尾ます子・前田菊平
・曲木信一・松下邦夫・村松信司・森下すみ子・山下 操・山田成子・山田トミ子・山田秀雄・
山田茂平治・山村佳人・横井 進・渡辺菊男

遺物整理参加者　浅井ゆかり・伊藤幸子・伊藤算子・伊藤雅文・大島芳乃・大場とし子・太田朋子
・北島園子・久保田雅浩・黒済和彦・坂本敏子・鈴木康子・曾根百合子・高橋恵子・竹内守哲・
千野　浩・永田花子・丹羽はる江・原　豊子・水野輝子・森下すみ子・山山成美・柳沢嘉洋
発掘調査及び出土品整理にあたっては、次の諸氏に御教示・御協力を賜わった。

石坂　茂・伊藤美鈴・井上喜久男・大塚淑夫・川江秀孝・後藤建一・柴田　稔・渋谷昌彦・鈴木
節司・鈴木敏則・鈴木好直・永井義博・中嶋郁大・平野喜郎・松井一明・松本一男・八木勝行・
山村　宏・山本宏司

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

玉越遺跡は、一級河川である太田川左岸、磐田市玉越地内にある。磐田市は、静岡県西部にあり、東は太田川を挟んで袋井市と、西は天竜川を挟んで浜松市に接する。

磐田市は、地形的には洪積台地である磐田原台地と、台地の東西を流れる山河川によって形成された沖積地及び、南の遠州灘に続く沖積地とに大きく二分される。磐田原台地上は、剝離状に発達した浅谷によってゆるやかな起伏がみられる。台地西縁は、直線的であるのに対して台地東縁は、大小の谷が台地を侵食し変化に富んだ地形を呈する。これら谷地形の一つが桶ヶ谷沼であり、また鶴ヶ池でもある。近年はマスコミの影響も助長し豊富なトンボをはじめとする生物相を有する場所として、全国的に知られるようになった。台地上は、茶畠によって覆われ、沖積地は水田として利用されている。また一部では、温室によるメロン栽培も行われている。

太田川は、春野町の春塙山（はるのさん）を源として南流し、森町・袋井市・磐田市・浅羽町・福田町を通る過程で、敷地川・小藪川・原野谷川等の河川と合流して遠州灘に注ぐ。玉越遺跡は、この太田川の左岸に形成された自然堤防の微高地に立地し、東側には蟹田川にかけて後背湿地が広がる。この後背湿地を生活領域の基盤として成立する。標高は約9mを計る。遺跡一帯は、袋井市との市境が複雑に入り込んでいる場所であり、今回調査した範囲においても東側及び北側は袋井市に含まれる。またこの一帯は太田川の氾濫による水争いの絶えなかった場所であり、下の部落である磐田市玉越と上の部落である袋井市小山との間には、江戸時代から金山堤の盛土をめぐっての記録が残されている。なお遺跡周辺の詳細な地形については付編1（加藤芳朗氏・玉越遺跡の基盤礫層の地質学的検討）を参照されたい。

第2節 歴史的環境

玉越遺跡は、行政的には磐田市と袋井市、その両市にかけて分布の範囲が求められるのはすでに述べたとおりである。袋井市と磐田市とは、埋蔵文化財の包蔵地としては県内では上位にランクされる数を有する。その数は、袋井市で695箇所、磐田市で622箇所を数える（1980年3月現在の静岡県文化財要覧による）。それらは、年代や性格によって立地条件が異なるものの、多くは台地縁辺部及び沖積地内の微高地に占地するものが多い。地図上に遺跡の地点を記入すると数条の帶状に分布していることがわかる。玉越遺跡の所在する太田川流域の沖積地、及びそれを望む河岸段丘上にも数多くの遺跡が知られている。これらの遺跡群の中には発掘調査によって遺跡の性格が明らかとなったものもあり、こうした資料の蓄積が地域史解明の一助となりつつある。ここでは周辺の歴史的環境を年代順に概観し、その中に玉越遺跡の位置付けを考えてみたいと思う。

先史器時代の遺跡は、県西部ではその大部分が磐田原台地に集中する。しかも台地上に万遍なく分布するのではなく、台地北半から台地西縁にかけての分布が濃密である。これは、台地表層の生成によるためと考えられている。当地方を代表する山田原II遺跡・池端前遺跡・寺谷遺跡・広野北遺跡・京見塚遺跡等もこの範囲内にある。玉越遺跡周辺では、向笠西1号跡（下原遺跡とも呼ばれている）で剥片が出土しているにすぎない。太田川以東の袋井市域においては、現在のところ出土した例は聞いていない。

縄文時代の遺跡では、その前段階で50箇所を超える遺跡がありながら創始期の上器が出土する遺跡

は皆無である。しかし尖頭器の出土する遺跡が数箇所あるので、近い将来発見される可能性は高い。早期から中期末葉にかけては、磐田原台地上に生活の拠点を求めていた。県東部のように大集落をなす遺跡はないが、新豊院山遺跡C地点、袋井市長者平遺跡で数軒の住居跡が調査されている。いずれも中期後葉である。後期に至ると台地南縁に生活の拠点を移し、貝塚を形成するようになるが、遺跡数は減少の一途をたどる。小笠山丘陵上に立地する袋井市大畑遺跡でも、地点貝塚が形成されるのは後期に入ってからである。晩期の遺跡としては、見性寺貝塚が知られているが、この時期に新たに形成される遺跡はなく、後期からの継続として営なまれる。玉越遺跡周辺では磐田原台地東縁で中期の資料が出上している。向笠西1号遺跡では土坑が調査されている。

弥生時代には、中期に生活様式が確立し、後期に飛躍的に発展するといわれている（柴田1984年）。まず集落跡では立地面から大きく沖積地上の微高地及び、沖積地に面した台地縁辺と、台地上とに二分できる。前者の例として磐田市では、御殿・二之宮遺跡、野際遺跡、鎌田鎌影遺跡、中村遺跡等があり、袋井市においては旧太田川流域の微高地上に土橋遺跡、徳光遺跡、鶴松遺跡、鶴田遺跡、川田遺跡と南から北へ並ぶ。土橋遺跡は玉越遺跡とは二級河川磐田川を挟んで直線距離で100mと離れていない。太田川中流域で玉越遺跡を含めた6遺跡では、まず鶴松遺跡において生活が営なまれる。中期後半白岩式の住居跡が検出されている。その後、後期後半に周辺に拡散していくのであろう。しかし現在のところ鶴松遺跡以外での遺跡で住居跡の検出例はない。後者の例、つまり台地上の集落跡としては、磐田市で向笠西1号遺跡、袋井市では一色前田遺跡がある。いずれも眼下に太田川の沖積地を望む台地縁辺部に立地し、向笠西1号遺跡で1軒、一色前田遺跡で4軒の堅穴住居跡が発見されている。時期は後期後半に属し、所謂高地性集落として防衛的機能を有していたのであろうか。しかし両遺跡とともに石礫等の武器となる遺物は出土していない。機能を含みいかなる要因で立地の相違がみられるのか今後の問題点の一つであろう。また大竜川沖積地を望む磐田原台地の西縁には加茂東原遺跡があり、磐田原台地の南縁に広がる沖積地を望む台地上に城之崎一丁目遺跡がある。この時代の墳墓は鶴松遺跡・野際遺跡で方形周溝墓が検出されている以外は、台地縁辺部に多く分布する。特に磐田原台地東縁には新豊院遺跡群をはじめ多くの墓域が確認されている。

弥生時代の後半にみられた遺跡数の急増、人口増加の中でこれらを統括する動きの始まるのが古墳時代であり、新豊院D-2号墳・松林山古墳に代表される4世紀代の大型墳墓が築かれる。市内には現在550基を超える数の古墳が確認されているが、これらの古墳は大きく三つのブロックに分布が分れる。天竜川沖積地を望む磐田原台地西縁部、遠州灘に続く沖積地に接する台地南縁部、太田川流域を望む台地東縁部である。袋井市においても、太田川を望む河岸段丘西縁には古墳が集中する。しかしこの時代の集落跡は古墳の圧倒的な数に比較して微々たる数しか知られていない。太田川流域で発掘調査が行なわれているのは磐田市で七反田遺跡、袋井市で土橋遺跡と鶴松遺跡くらいである。これらの遺跡では古墳時代初頭の遺構・遺物が検出されている。

律令期に至ると、磐田市には遠江国分寺が置かれた。昭和26年の調査によって伽藍配貢・建物の規模等が明らかとなったが、翌27年の特別史跡の指定を受けるにおよび、その後の調査は実施されていない。不明な部分が多く残されているが、近年は周辺地の調査により側面からの復元が行なわれている。国府の所在について、未だ推定の域を脱し得ないが、墨書き器・木簡の出土により磐田原台地南縁に位置する御殿・二之宮遺跡を候補とする説がある。袋井市土橋遺跡からは、「國厨」と墨書きされた七器が溝より出土しており報告者は国府との関連を推察している。また袋井市には佐野郡衙の可能性が高いと指摘される坂尻遺跡がある。坂尻遺跡出土の墨書き器に「玉郷長」と記されたものがあり一玉郷長一の省略されたものと推定されている（原1984年）が、今回調査分の玉越遺跡では、この

時期の遺構・遺物は微々たるものであった。また条里制については、天竜川の下流域の平野部（長上・長下・龜井・磐田・豊田の各郡）や太田川・原野谷川流域の平野部（山名・佐野の各郡）に認められる。その方位は前者でN-8°-W、後者でN-23°-Wであるという。

平安時代の末期遠江は平氏の勢力が浸透し、代々遠江守には平氏一門が任せられてきたが、富士川の合戦以後源氏の支配下となり、遠江守護には甲斐源氏の流れをくむ安田三郎義定が任せられることになる。その居城は見付端城といわれている。鎌倉時代の集落跡には磐田原台地南縁・伊勢神宮の所領であった鎌田御厨の一角にある長江崎遺跡や野際遺跡がある。また十橋遺跡でもこの時代の遺構・遺物が見つかっている。特に注目されるのは、屋敷の周囲を巡る掘跡が検出されていることである。遺構全体は検出されていないが、掘の規模は一辺33m、幅3m、深さ68cmでコの字形にあり、内側には柱穴群が見られる。玉越遺跡との関連が興味深い。

この後、遠江一円は今川氏の勢力圏内に組み込まれるが、徳川家康の天下統一によって争乱の時代は終えんを迎える。

第3章 検出遺構

検出された遺構には溝・土坑・掘立柱建物・堤・性格不明の落ち込み等がある。時代的には弥生時代から近世にいたる長きにおよぶ。しかしこの玉越の地が集落の拠点として生活が綿々と続いていたわけではなく、ある時は集落を営み農業に従事し、またある時は集落が廃絶し水辺に水鳥の遊ぶ光景も見られたことであろう。現在の景観からもうかがい知れるように、集落は太田川の左岸の自然堤防上に集村的村落を営み、ここは生産の場として利用されていた景観が一般的であったものと思われる。遺構は時代別に記述を進め図は後に一括して示す。

第1節 弥生時代の遺構

調査区東半から中央にかけて溝・土坑が検出された。溝は多くが流路を南西方向から北東方向にかけてとる。一見地形に逆らうような感覚を受けるが、これは南側に同一方向で延びる砂礫層の分布に関係してのことであろう。規模は、古墳時代、鎌倉時代の溝に比べて幅があり、また深さもある。形態において明らかな差異が認められる。土坑は4基確認できた。また遺物の出土は見られなかったものの、覆土の状況より該期のものと思われる土坑S K-10がある。土坑は密集した状態ではなく散漫に分布する。

溝

S D-14 (第3図)

I-X区からIV-C区にかけて調査区北側の縁辺にそつ形で検出された。全長で50mを測りI-X区において調査区外へ延びる。幅は平均して95cm、深さは検出面より50~60cmを測る(以下深さはすべて検出面よりの深さである)。当初重機による掘削をII-A区より始めたが、その時点で土器片の出土と黒色土の落ち込みが確認できた(この黒色土の落ち込みは後にS D-14の上部に設けられたS D-15である)。覆土は灰褐色粘質土~黄褐色粘質土を基調にし、周辺の土壤との差異は見かけがつかない程であった。土器の出土で遺構の存在が確認できたといっても過言ではない。特に西側においてはそれが著しく数mおきに確認用のトレンチを掘り、断面を観察しながら、断面より追求した箇所もある。西側において溝底の標高は約8.05m、東側において約8.0mを測る。溝底はややU字形を呈し凹凸は見られない。

上器は覆土中位から底面にかけて完形品を伴なって出土している。完形に近いものは底面に接して出土する例が多い。溝全体から万遍なく出土するのではなく、数箇所に密集して出土する状態を示す。特にII-A区、III-B区において濃密に出土し、東側においては破片が数点、西側においてはほとんど出土は見られない。覆土が粘性の強い影響もあり器面の荒れが目立つ。木製品については木片が一点出土したのみである。時期は出土土器より後期後半と思われる。

S D-15

S D-14が埋没後にこの上部に掘られている。II-A区からIV-Bにかけて検出された、全長21m、幅35cm、深さ12cmを測る。弥生時代の溝としては他に比べて規模は小さい。覆土は黒褐色土が充填しS D-14とは明確に異なる。遺物は弥生土器が数点出土している。時期は後期後半である。

S D-16 (第4図)

S X-1・6によって途中分断されているが、調査区東端からII-C区にかけて調査区の南縁にそ

う形で検出された。S X-1・6を境に溝の規模は異なる。東側においては幅3m(中央部は4m)、深さ最大で1.4mを測り、西側においては幅2m、深さ最大で1.0mを測る。両者を比較した場合規模・形状・遺物の出土状態等異なる点は多々あるが、覆土の状況および他に接続する溝のないことから同一の溝S D-16としてとらえた。ここでは便宜的に両者を分離して説明する。まず東側であるが両端は幅3mを測るのに対して中央部は4mと一段増す。立ち上りは1~2段の平坦面をなして底面に到る。底面は凹凸が激しく凹地には荒砂が堆積する。中央部の幅広い部分に北側の平川面から底面に到る斜面に合計30本の杭が打ち込まれている。また杭は残存していないものの、杭の存在が推定される凹形に変色した部分が数ヶ所ある。杭はいずれも直徑1.5~3.0cmと細いものである。杭は垂直ないしは先を外にむけた形で打ち込まれている。溝の南側には杭が1本見られただけである。またこの部分には木製品⑧~④を始め多くの木片が重なり合うようにして出土している。この一まわり広い部分から東にかけて一段深さの増す細溝が設けられている。覆土は砂が充填し、蟹田川西側の新設排水路まで確認することができた。溝底のレベルは西側で標高7.4m、東側で標高7.25mを測る。覆土は1~6層とそれ以下と大きく二分できる。上部はやや粘性を帯びる砂に対して下部は砂を主体とする。特に11・12層は砂層と言ってもよいくらい砂質分が多い。遺物は各層から小破片が万遍なく出土しているが、特に11・12層は多く包含する。場所によっては重なり合って出土している。種子は10層を中心に出土したものが多い。

S D-16西側は両端をそれぞれS X-1・2によって切られる。S X-1およびS X-6によって東側とは分断する。幅は東側で1.8m、西側で2.4mを測るが、S X-6東側より一段狭い。立ち上りはゆるやかなU字形を呈し、東側のものに比べ単純な傾斜を示す。西側の北において途中平坦面を有し、二段に落ちる。覆土は上部において粘性が強く下部では植物の未分解層があり、最下層では砂が堆積する。溝底は凹凸が見られず平坦である。遺物は最下層の砂から弥生上器片が少量出土している。また脚付容器(第65図2)・梯子(第66図10)・穿孔のある木製品(第65図1)がいずれも長軸を溝の方向に平行させる形で溝底より少し浮いた状態で出土している。杭等の構築物は認められなかった。

出土した土器より時期は後期後半である。

S D-17

IV-B区からI-A区にかけて検出された。平面的には検出し得なかったが、S D-14掘り下げ時に確認できた。S D-14・15・16とは異なり北に弧を描く。幅は1m、深さは西側で8.05cm東側で8.0cmを測る。断面形はU字形を呈する。覆土は下部において暗灰色粘質土堆積がみられる。この上層のために遺構全体が完掘できた。上部層においてはほとんど色調的に他の土層と区別ができないため、数mおきに土層観察用のトレーナーを設け、砂層に掘り込まれて堆積している暗灰色粘質土を検出としては追求した。出土遺物は量的には極めて少量であり、数片の弥生土器が出土したにすぎない。時期は後期後半である。

S D-34(第5図)

0 I-Y区から0-X区にかけて検出された。調査区内で長さ16.5m、幅は平均で1.3mを測るが西側においてやや広がる傾向がある。深さは東側において標高8.24m、西側において8.18mを測り、西側にかけてやや深さを増す。検出面よりは32cmを測る。断面形は東側でゆるやかなU字形を呈するのに対して西側では北に平坦面をなす。溝底は平坦面をなす。全体として北に弧を描く。遺物は弥生上器が数点、小破片が出土している。時期は後期後半である。

S D-35 (第5図)

0 I-Y区から0-Y区にかけて検出された。S D-34に切られる。調査区内で長さ16.7m、幅は平均で0.7mを測り、断面形はU字形を呈する。末端部は両端共に検出されず調査区外へ延びる。溝底は平坦面をなす。深さは東西両端において標高約8.1mを割り全体的に平均する。検出面より25cmを測る。平面的には検出が不可能であったが、上層観察用のトレンチによって暗灰色土の充填した溝下部が検出されたことから、存在が確認された。S D-34に重複し北に弧を描く。遺物は弥生土器が数点、小破片で出土している。時期は後期後半である。

S D-38 (第5図)

0-X区で検出された。東側はS D-35によって切られ、西側は調査区外へ延びる。長さは10m、幅は平均で45cmを測る。断面形はU字形を呈し、立ち上りは急である。溝底は平坦面をなす。深さは中央で標高8.1m、両端で約8.0mを測り、両端にむかってやや傾斜している。検出面より35cmを測る。S D-35と西側で平行するが、東側では切られる。但しS D-35の北側で検出されていないので両者は同時期の所産である可能性もある。遺物は出土していない。

S D-39 (第5図)

0-X区で検出された。中央の排水路を挟んで南北で検出されている。北側はS D-38と接するが重複関係は不明である。南側もS D-43と接するが同様である。長さ7.5m、幅約40cm、深さは標高で約8.21mを測り検出面より15cmを測る。断面はU字形を呈し、底面は丸味を有する。排水路南側で底面より浮いた状態で高壙と甕が出土している(第54図225・226)。時期は後期後半である。

S D-43

VII-E区で検出された。中央排水路とS D-47とに両端が切られている。隅丸のL字形を呈し、長さ6.5m、幅40cmを測る。深さは標高で8.6mを測り検出面より約12cmである。底面はやや中央部分が窪む。覆土は黒褐色土が充填する。遺物は弥生土器が数点、小破片で出土している。時期は後期後半である。

S D-82 (第9図)

調査区の南端、V-G区からIX-J区にかけて調査区にそつ形で検出された。両端はそれぞれ調査区外へ延びる。長さ55m、幅1.0~1.5m、深さは検出面より最大50cmを測る。溝底の標高は東側で8.1m、西側で8.2mを測りやや東へ傾斜する。断面形は立ち上りのゆるやかなU字形を呈し、東側で一部北に平坦面を有する。底面は中央部でやや窪む。覆土は暗灰色土を基調とし中位において粘性を帯び、下位においては砂質が強くなる。遺物は弥生土器、須恵器、土師器が出土している。東側ではほとんど出土していないが、S X-8周辺で集中して出土している。須恵器、土師器は上層に、弥生土器は中位から底面に接して出土するものが多い。遺物の出土状況から弥生時代後期後半の所産と考えられる。

土坑

S K-5 (第12図)

VI-D区にある。S K-6と重複関係にあるがS K-5が切る。形態は楕円形を呈し、長軸が2.35m、短軸1.15m、深さ20cmを測る。底は平坦面を呈する。検出面においてすでに土器の一部が検出

された。覆土には黒褐色土が充填し少量の炭化物片を含む。粘性が強く掘り下げ時に土器の表面が剥離するものがある。上器は底面より約10cm浮いた状態で土坑全体に散漫な状態で出土した。器形の復原できるものに壺・甕・高环がある。時期は後期後半である。

SK-6 (第12図)

VI-D区にある。SK-5と重複関係にあるが、SK-6が先行する。形態は楕円形を呈し、長軸1.65m、短軸0.65m、検出面からの深さ10cmを測る。SK-5とは直行する方向に長軸をとる。覆土は黒褐色を呈し、黄褐色土粒子を含む。炭化物片は認められない。底はやや北に傾斜するが平坦面をなす。時期はSK-5に切られていることにより弥生時代と思われる。

SK-13 (第13図)

VII・IX-E区にある。検出時においては平面形態が不整形を呈し規模も大きく自然の崖地とも考えられたが、確認用のトレンチを掘り下げた段階で弥生土器が出土したので土坑として扱かった。形態は不整形を呈し長軸5.30m、短軸3.00m、深さ20cmを測る。断面形は南側において2つの平坦面をそれ以外で1つの平坦面をなして底面にいたる。二箇所にまとまった状態で弥生土器が出土した。頸部より上半を底面にすえた状態で一点出土した(第47図63)他は、いずれもおしつぶされたように細片化して出土している。時期は後期後半である。

SK-14 (第14図)

VIII-D区にある。SD-47調査後検出された。北側及び東側は排水路によって中位まで切断されており、南側1/4でのみ旧状を留める。北側は調査区外へ広がる。平面形は円形を呈すると思われる。南東隅においては中位で段差を有する。中段において径1mを測り、深さは0.75mを測る。底面は平坦面をなす。覆土は中段を境にして大きく二分される。上部(1~5層)はやや粘性に富み、黄褐色土粒子を混入する黒褐色土が充填する。これは該期の他の土坑に共通する覆土である。下部(6~9層)は未分解の有機物を多量に含んだ暗灰色粘土を主体とする。底面に接して台付盤の台部が一点出土した(第55図250、図版9中)。

第2節 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構には溝と土坑と性格不明の落ち込みがある。溝が主体となるため調査区全体から検出されたが、土坑は西半において検出された。古墳時代においても弥生時代同様集落の外縁部分にあたると思われる。遺構の検出にあたっては他の時代の遺構同様黄褐色土上面で行なわれたが、土坑2基については中世と考えられる遺構完掘後に、溝も後世の遺構調査後に検出された。溝については規模・方向性について一定の規格が見られる。

まず規模について観ると、幅が1m未溝と狭いのに対して長さは調査区の東半から西側調査区外へ延びるSD-2に代表されるように非常に長い。そして断面形についてはU字形を呈するものが多い。方向についてSD-54・55のように一部東西方向に走るもの、その多くは南北から北東方向に流路をとるものが多い。この方向は後世の金山堤及び今回建設される袋井バイパスの方向とも一致する。これはこの地域における時代を超えた地形的規制の強くかかわっていることによるものであろう。また遺物はSD-109を除いて小破片が少量含まれている程度である。該期の溝に上器の保有量が絶対的に少ないことも共通する要素の一つにあげられる。

溝

S D-2

東はⅢ-B区から西は調査区西端にかけて検出された。東端からIX-H区までの約78mの間は南西方向から北東方向に流路をとり、IX-H・I区で一度蛇行し、再びX-I区から流路を整える。蛇行部分で若干増幅するが、それ以外では約70cmの幅である。覆土は暗～淡黒灰色粘質土で深さは約25～40cmを測り平均しない。溝底の標高は西側で8.33m、東側で8.35mである。遺物は若干の赤生土器小片と共に須恵器の坏身（第56図255）が出上している。S D-1・3・4・5も同じ形状を呈することから古墳時代の溝と考えられる。

S D-12

II・III-A-13区でS D-14・15を切る形で検出された。西端は調査区外へ延び、東端は中央排水路で跡切れる。規模は全長で20m、幅1m、深さは23cmを測る。

S D-54

IV-E区、S B-2東側からXIV-J区にかけて検出された。西端は調査区外へ延びる。全長92mある。VII-G区を境に流路を変える。東側ではS D-2と平行して走り、IX-G区からX-G区にかけては東西方向に、そして冉び西側では南西から北東方向に変わるが、S D-2と対象的な方向をとることが指摘できる。X-H区周辺つまりSA-2西側に流路を変更させる何らかの要因があったのであろうか。しかし調査結果では、この部分においてこれを検証すべき遺構は検出されていない。S D-54は西半部分において数条の溝が枝状に分れる。

幅は約70cm、深さは約11cmを測る。溝底の標高は西側で8.51m、東側で8.50mとほぼ水平である。

S D-81

VII-H、S D40・42の間で検出された。全長20m、幅1.2m、深さは28cmを測る。断面は皿状を呈し、南西から北東方向に走るが末端部分は把握できなかった。坏蓋（第56図257）が出上している。

S D-109

金山堤の除去後中世の溝と思われるS D-87・88発掘した後、検出された。VII-H区からX-L区にかけて全長44mある。東側は金山堤内に、西側は調査区外へ延びるため末端は検出できなかった。幅は約1.8m、深さは約50cmを測る。規模としては古墳時代最大の溝である。覆土には黒灰色土が充填し、建物は杯を中心実測可能なものが8点出土している（第56図261～268）。時期は7世紀前葉と考えられる。

土坑

S K-39（第20図）

VI-H区でS D-90発掘後において、溝底で砂の充填する円形の落ち込みが検出され確認した。形状は、平面形において円形を呈し直径約70cmを測る。底面は、楕円形を呈するため、断面は短軸においてはゆるやかな立ち上りを示し、底面もやや中央部分が凹むが、長軸方向においては急峻な立ち上りを示し、底は平坦面をなす。深さは55cmを測る。遺物は残存した覆土の上部より須恵器の杯蓋が、底面に接して押しつぶされた状態で短頭壺が出土している（図版12上・中）。両者の口径は10.5cmと一致する。短頭壺に杯蓋が被さって出土していないが、本来蓋として用いられていたものであろうか。

上擴葉と考えておきたい。時期は出土土器（第56図270・271）より7世紀前葉と考えられる。

S K-40（第20図）

金山堤除去後のVII-H区においてS D-87完掘後に椭円形の落ち込みが検出された。平面形は椭円形を呈し長軸2.46m、短軸0.7mを測る。深さ20cmを有し断面は浅い皿状を呈する。底は凹凸が少なく平坦面をなす。土坑内の北東寄り底面から須恵器（第56図269）と土師器が出土している。時期は7世紀前葉と考えられる。

性格不明の落ち込み

S X-12（図版24中）

IX-J区からVII-H区にかけて広い範囲で砂を多量に含んだ暗灰色土の落ち込みが検出された。形状は東西に長軸をとる不整形を呈する。検出は、平面で明確にはとらえられず、下層の砂を基準に掘り進めた。掘り込みも最も深いところで30cmと浅い。土層の観察によればS D-109より新しい。小破片を含めて多量の須恵器と土師器が出土したが、実測可能なものとして23点図示した（第57図274～296）。時期は7世紀前葉と考えられる。

第3節 奈良・平安時代の遺構

この時代の遺構は、確認された時代の中では最も希薄であり、溝1条と土坑4基が検出されたにすぎない。遺構の集中も見られず、調査区中央から西半にかけて検出された。

溝

S D-96

VII-I区で検出された。ほぼ南北方向に掘られ、南側は調査区外へ延びる現長5.6m、幅0.8m、深さ6cmを測る。覆土は暗灰色砂質土が充填する。遺物は北端で底面に接して、須恵器1個体分が出土した。時期は8世紀前葉である。この溝と平行して東側に掘られているのが、S D-91・92である。この3条の溝は他の時代の溝に、交差している。VII-H区で出土した298・301はこの溝の延長上で出土したものである。

土坑

S K-7（第15図）

IV-B区で検出された。平面形は砲弾形を呈し、長軸1.3m、短軸0.95mを測る。断面形は皿状を呈し、深さは35cmを測る。底は平坦面をなす。覆土は暗灰色粘土が充填する。覆土中より自然礫と上器が出土している。いずれも5～10cm位浮いた状態で出土しており北側斜面部に集中する。礫はいずれも掘り込みの傾斜に平行する形で出土しており、掘え置いた状態は示さない。礫表面は加熱によるものか、長時間水につかっていたためか黒褐色に変色している。上器も保存状態は悪くもろい。焼土等の検出は見られなかった。時期は出土土器より11世紀後葉と考えられる。

S K-24・28（第17図）

IX-Gで検出された。この2基は約50cm離れており直径約70cmと土坑としては小型である。深さはS K-24が約65cmあるのに対してS K-28は15cmと浅い。S K-24内から土師器片が出土し、S K-28内から灰釉陶器の底部（第61図399）が出土した。S K-24はS D-53完掘後に検出されているので、環溝屋敷より古い時期のものである。S K-28は10世紀後葉と考えられる。

S K-31 (第18図)

VII-I区、SD-96の西側で検出された。平面形は楕円形を呈し、長軸1.25m、短軸85cmを測る。断面形は浅い皿状を呈し深さは16cmを測る。底は平坦面をなす。覆土は黒褐色土が充填する。覆土中より土師器が出土している。底面より6~8cm位浮き、押しつぶされた状態で出土する。保存状態が悪く復元はできなかった。時期は土師器の特徴より占墳時代~奈良時代のものであろうか。

第4節 中世の遺構

中世の遺構には溝・土坑・井戸・柱穴・掘立柱建物・柵がある。調査区中央から西半にかけて分布する。西半において検出された環溝屋敷は一部未調査部分が残ったものの、およその全景は把握できた。この時期の環溝屋敷は各地で調査例が報告されており、類例が増えつつある。今回検出された資料は、今後の該期における集落構造の研究及び集落景観の復元に寄与できるものと言えるだろう。

溝

SD-6 (第7図)

V-C・D区で検出された。全長は5.7m、幅40cm、深さは10cmを測る。覆土は暗青灰色粘質土が充填し、小皿が出土している(第58図304)。方向は異なるものの同様の規模を有する溝にSD-9・10・41とがある。これらの溝からは遺物は出土していないが、同一時期と考えられよう。時期はSD-6出土小皿より13世紀後半頃と考えられる。

SD-7

V-B区からIV-D区にかけて調査区を横断する形で検出された。現長は13.5m、幅は18m、深さ5cmを測る。SK1・3に切られている。覆土中より、山茶碗の小破片が出土している。時期は不明であるが、覆土及び切り合い関係から中世のものと考えられる。

SD-52 (付図2、第8図)

SD-53と対になる溝で環溝屋敷の外溝にあたる。調査区内では南東側にはば直角のコーナーをもつL字形に検出された。現長は72mを測り、XI-F区でバイパス工事下の側道下に、XI-L区で金山堤の下に延びる。幅は南辺では1m、東辺では2mを超える。東辺は直線的であるが、南辺は途中から南へ開く。断面形は南辺では単純なU字形を呈するのに対して、東辺では内側が二段に掘り込まれている。東辺の状況を詳細に観ると中央部では中位に幅50cmほどの平坦面を有するのに対して、コーナーに近い部分では、なだらかな掘り込みから途中で傾斜が強くなる掘り方が行なわれている。深さは、検出面より南辺では20~30cmであり、東辺では50cmある。東辺でも南側に対して北側は5cm程深い。底はやや中央部が窪む。底辺の標高で観ると東辺の北側で20cm以上の水位が上がらないと南辺には導水されないことになる。覆土は第8図に示すとおりである。XI-F区で溝の方向を探る目的で一部拡張を行なった。その結果コーナーを有して西へ曲ることを確認している。溝の東辺は外側で全長41mとなる。遺物は完形に近い状態のものは1点もなく、量的にもビニール袋一杯程度であった。極めて少量である。覆土上部では奈良時代の須恵器も出土しているが、全体として山茶碗が圧倒的に多い。特に覆土下部で出土したものが多い。時期は出土土器から12世紀前葉のものが含まれるが、13世紀前葉くらいまでは機能していたものと考えられる。

S D—53（付図2、第8図）

S D—52と対になる溝で環溝屋敷の内溝にあたる。調査区内では北東側に直角に近いコーナーをもつし字形と調査区西端で一部が検出された。西端は現用水路が調査区を横断しておりその攪乱のために東側立ち上がりが断続的に検出されているにすぎないが、屋敷の西限が確認されたことは規模を考える上で大きな成果であった。S D—53は全周するのではなく南側にむかうに従い深さを減じ、確認面においては最終的に消える。掘削時ににおいても同じ状況と思われる。これは西側の溝においても同様である。西側の溝は東辺に対してやや南へ開く。深さは北側最深部で検出手より45cmを測る。底面は中央がやや窪む。底面の高低差を観ると南側より北側の方が20cmばかり深い。幅は2.0～2.5mある。断面形は北区ではU字形を呈するのに対して東辺はS D—52同様、内側が二段に掘り込まれている。またコーナー部分では外側にも一部二段に掘り込まれている。覆土は第8図に示すとおりである。XIV—II区で溝の方向を確認する目的で一部側道部分の拡張を行なった。その結果コーナーを有して東へ曲ることを確認している。溝の内りで東西間は北側で34m、南側で39m測る。遺物の出土状況はS D—52同様量的には非常に少量であり、完形に近いものは出土していない。なおS D—53はSK—19に切られており、また完掘後にSK—18・24の平面を確認している。従って12世紀前葉以降撤削され、13世紀前葉には埋没したものと思われる。

S D—52と53は前述したように屋敷を閉む溝として一対のものであり、2条の溝が平行して1つの機能を果していたものである。XI—G区では両者をつなげる溝が検出されている。この部分での高低差はS D—52の方が20cm深い。2条の溝の間には約1mの間隔を有する。推定するにこの間隔は西・北・東辺の三面において見られたものと思われる。小穴列も検出されていないので柵の存在は考えられない。土盛りでもあったのであろうか。

S D—84

X—H区においてS D—52と53の間で検出された。全長は、北側が排水路のため破壊されているが55m、幅は40cmと形態としてはS D—6のグループと一緒にである。遺物は山茶碗が出土している。

S D—86（第10図）

IX—I区からX—J区にかけて検出された。東側は金山堤の下に延びるため明らかでない。現長14.5m、幅約1.5m、深さ15cmを測る。SK—30と重複関係にあり、S D—86の方が古い。遺物は覆土中より山茶碗が出土している。時期は不明である。

S D—87（第10図）

VIII—I区からIX—J区にかけてS D—86・88に平行する形で検出された。東端では古墳時代の土坑であるSK—40を切っている。西端は徐々に深さを減じ検出手においては消失する。現長23m、幅1m、深さは東側で約5cmを測る。断面は浅い皿状を呈する。覆土は暗灰色粘質土が充填する。溝内より土器の小破片や山茶碗が出土するが時期は不明である。

S D—88（第10図）

VII—H区からX—J区にかけて検出された溝でS D—87の南側にあり、S D—87と平行して走る。両端ともに深さを減じ、検出手においては消失する。全長24.5m、幅1.0m、深さは検出手より20cmを測る。断面はU字形を呈する。覆土は暗灰色粘質土が充填する。溝の南辺に沿って上場から掘

り込み面にかけて杭列がみられる。杭の残存している例は少ないが、残存している例及び痕跡から断面円形の杭が用いられていたようである。この杭列はⅦ—H区までおよんでいるところから、S D—88の方が占い。溝内より弥生時代の須恵器・山茶碗が出上しているが、山茶碗が量的には多く、時期は12世紀前葉と考えられる。

上坑

S K—1 (第12図)

IV—C区で検出された。平面形は楕円形を呈し、長軸1.16m、短軸0.6m、深さは64cmを測る。断面形は浅い皿状を呈し、底面は平坦である。S D—7を切る。十坑内より遺物の出土は見られなかった。

S K—3 (第12図)

V—C区で検出された。S K—3と接する。平面形は隅丸長方形を呈し、一辺 1.33×1.33 mを測る。深さは43.3cmあり、断面形は浅い皿状を呈する。上坑内より小破片の山茶碗が出上した。S D—7を切る。

S K—4 (第12図)

V—C区で検出された。S K—4と接する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸2.04m、短軸1.05m、厚さは52.3cmを測る。断面形は浅い皿状を呈し、底面は平坦である。上坑内より遺物の川土は見られなかった。

S K—16 (第15図)

XII—H区で検出された。平面形は楕円形を呈し、長軸2.15m、短軸1.46mを測る。深さは50cmである。底面は中央でやや丸味を有するが、ほぼ平坦である。覆土は最下部に淡黒灰色土が一面に堆積しその上部は細かく分層できる。土坑内から遺物の出土は見られなかった。

S K—17 (第14図)

XI—I区で検出された。平面形は不整方形を呈し、南北1.6m、東西1.6mを測る。断面形はゆるやかな立ち上りを有し、底面も中央に最深部があり丸味を有する。深さは検出面から最深部で62cmを測る。最下層の暗灰色粘土で底面からやや浮いた状態で甕の破片と自然凹縫が出土している。

S D—18 (第15図)

S D—53完掘後、半円形に落ち込みが検出されたので周辺を精査し確認した。平面形は円形に近い楕円形を呈し、長軸1.07m、短軸94cmを測る。断面はU字形を呈し深さは75cmを測る。覆土中位から下部にかけて自然縫と共に土器が出土した。完形品は一点もない。当遺跡の土坑では最も土器の出土量が多い。底面に接して杓子状木製品が完形で出土している(図版11中)。時期はS D—53より古く出土土器から12世紀初頭と考えられる。

S K—19 (第15図)

XI—G区、S D—53上部で検出された。平面形は円形を呈し、直径95cmを測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さは15cmである。底は平坦面をなす。底面より約10cm浮いた状態で山茶碗の底部が出

土している。時期はこの土器から13世紀前葉と考えられる。

S K-20（第20図）

XII-I区で検出された。S K-41と、河原石の上に礎板をすえた状態で検出されたS P-484と重複する。その新旧関係はS K-20→S K-41・S P-484となる。平面形は長軸1.93m、短軸1.05mの楕円形を呈し、深さは98cmを測る。遺物の出土は見られなかったが、S D-484に切られていることからS K-18同様環溝屋敷が成立する以前のものであろう。

S K-21（第16図）

XIII-G区で検出された。調査区の北端にかり、一部は調査区外へ広がる。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸で現長2.93m、短軸2.03mを測る。深さは92.5cmある。掘り込みは途中で立ち上りの傾斜が変化する。覆土内から山茶碗の破片が出上している。

S K-22（第17図）

XIII-H区で検出された。S B-11に伴なうS D-703に切られる。平面形は楕円形を呈し、長軸2.28m、短軸1.61m、深さは29cmある。断面形は浅い皿状を呈する。底面は平坦であり、長軸方向の南寄りに河原石が1個置かれていた。S K-17の状況と似ている。土坑内より遺物の出土は見られなかったが、S D-703に切られていることから、環溝屋敷より古いものである。

S K-27（第17図）

X-F区で検出された。平面形は楕円形を呈し、長軸1.58m、短軸1.42m、深さは7cmを測る。断面は浅い皿状を呈し、底面は平坦である。S D-71を切る。S D-71の覆土は黒褐色土が充填し、弥生土器片が出土しているが、この溝はS D-71を切って掘られている。

S K-30（第18図）

IX・X-I・J区の交点で検出された。S D-86と切り合い関係にあるが、S K-30に包含されていると思われる礎がS D-86の延長上まで続くのでS K-30の方が新しい。平面形はS D-86と切り合うため全形はうかがい知れないが、楕円形に近い形状を呈すると思われる、深さは11cmを測る。土坑の長軸方向を中心にして親指先大へ人頭大の礎が出土する。規則性ある配置は見られないで埋没時に混入したものであろうか。礎の検出範囲は東西2.7m、南北1.7mあり、礎に混在して土器片が出土しているが、時期は不明である。

S K-33（第18図）

X-J区、S D-100とS D-109の間で検出された。平面形は楕円形を呈し、長軸90cm、短軸80cmで小形の上坑である。深さは50cmあり、底は平坦面をなす。遺物は1点も出土していないが、自然の破礎が2点、3層の堆積傾斜にそって上部で検出された。

S K-34（第19図）

XI-K区でS D-99完掘後に検出された。楕円形を呈すると思われるが排水路で切られているため不明である。土坑内より馬と思われる歯が出土している。

S K-36・37 (第19図)

XIII-I区で検出された。平面形は不整形を呈し、深さも10cm未満と浅く詳細については不明である。

S K-42 (図版13中)

XI-J区で排水路の断面で検出された。径50cmの円形を呈する。上坑内より白磁片と小皿が出土した。図版作成前に崩壊したため図面は提示できない。時期は小皿の形態より13世紀前葉と思われる。配石造構

S S-1 (第35図)

X-J区で検出された配石遺物である。位置的にはS D-98の上部にあたるが相關関係については不明である。全長約10.5m、幅約1mの範囲で拳大の礎を中心で検出された。中には礎石に用いられたような偏平な人頭大の礎も含まれている。礎と混在した状態で山茶碗や甕・宋銭(皇宋通宝)が出土している。時期は山茶碗から12世紀前葉に位置付けられよう。

柱穴

柱穴と思われる小穴は合計で771個検出された。これらの柱穴は大きく二つのブロックに分布が分けられる。一つは調査区中央でS E-1の西側、IV-VII区にかけての東西40m、南北45mの範囲(南北については調査区外へ広がる可能性がある)であり、一つは調査区西寄りでS D-52・53に囲まれた約36m四方の範囲である。この他にもVI-H区やIX-H区等での検出が見られたが、密集する状況は見られなかった。平面形は方形・梢円形のものもあるが円形を呈するものが多い。検出面は遺構完掘後において発見したものもあるが、多くは黄褐色粘土上面である。柱穴の切り合いや掘立柱建物の重複関係から最低でも二時期の、あるいはそれ以上の時期系が認められよう。

771個の柱穴のうち内部に柱の存在を推定させる一部の残存しているものが36例ある。その内訳は礎板が残存しているものが13例、柱痕の残存しているもの4例、礎石の残存しているもの2例、木質部の残存が見られたもの6例、礎板と礎が残存しているもの2例、覆土中に礎の出土が見られたもの10例である。このうち覆土中における礎の出土であるが、礎の大きいものでも拳大以下であり、全体に小礎が多い。柱の根固め的な機能でも考えられようか。礎石として用いられた礎は河原石が用いられており、うち1個については表面が赤化し、破碎されていた。礎板及び柱痕の残存している主な柱穴は第27~29図に示した。

掘立柱建物

全体で13棟が検出された。このうち9棟(S B-4~12)については調査時点で確認されたものではなく、整理段階の検討の中でのものである。この9棟はすべてS D-52・53に囲まれた環溝屋敷全量写真の中で白く線引きしてある建物とは異なることを明記する。残り4棟のうち3棟(S B-1~3)はIV-VII区にかけての柱穴集中箇所で、1棟(S B-13)はVI-H・G区境で検出されたものである。掘立柱建物内で特に踏み壓められたような堅緻な面は見られなかった。

S B-1 (第21図)

V-C区で検出された。1柱間四方のもので実長で東西1.35m、南北1.3mと1.5mとやや東に開く

がほぼ平面形は正方形となる。柱穴 1 と 2 は S D—8 内に掘り込まれている。南西の柱穴からは礎板が検出された。底面より約 7 cm 程浮くが水平に置かれている。検出された 13 棟の中では最も規模の小さなもので柱穴の中心を結んだ範囲内の面積は 1.96 m² しかなく（以下面積はすべてこの方法で算出した）建物の性格を考えた場合、疑問である。梁方向は N—22°—E である。

S B—2 (第21図)

VI—E 区を中心に検出された。1 柱間四方のものが実長で長辺 3.9m、短辺 3.8m を測るか東側の柱穴がややずれて矩形をなす。他の柱穴に比して大形であるのが指摘できる。柱穴の深さも浅く皿状を呈するものがある。面積は 14.67 m² を測る。S B—1 と共に建物としては疑問が持たれる。梁方向は N—39°—E である。

S B—3 (第21図)

VII—E 区で検出された。1 柱間四方のもので実長で長辺 2.75m、短辺 1.8m を測り、平面形は正方形をなす。柱穴は 4 戻とも二段に掘り込まれ一方向に平坦面を持つ。面積は 4.95 m² を測る。梁方向は N—34°—E である。

S B—4 (第22図)

XI—K 区を中心検出された。側柱だけの東西方向の建物で身舎 2 柱間 × 1 柱間で西側を除く 3 面に庇を持つ庇付き建物と考えた。柱穴は総数で 13 個あり、うち庇の柱穴は 7 個である。実長で桁行長は 4.85m、梁行長は 3.4m で平面形は長方形をなす。庇を含めた規模では桁行長 5.7m、梁行長 5.2m を測る。庇の柱穴は身舎の方向に平行する。身舎の柱穴は P 2 のうちに 49 × 35cm と大きく楕円形をなすものから P 1 のように 30 × 23cm と小さく方形をなすものまでバラエティに富む。各柱穴間の距離は桁方向に P 1 から 2.4 • 2.3m、P 6 から 2.4 • 2.5m、梁方向に P 6 から 3.5m、P 5 から 3.5m、P 4 から 3.4m である。面積は約 16.49 m² である。梁方向は N—20°—W を測る。

S B—5 (第23図)

XII・XIII—J 区で検出された。側柱だけの東西方向の建物で身舎 3 柱間 × 2 柱間で西側を除く 3 面に庇を持つ庇付き建物と考えた。しかし梁方向や庇部分の柱穴が一部検出できなかった。柱穴は総数で 19 個あり、うち庇の柱穴は 10 個ある。実長で桁行長は 5.2m、梁行長は 3.2m で平面形は長方形をなす。庇を含めた規模では桁行長 5.9m、梁行長 5.0m を測る。庇の柱穴は身舎の方向に平行する。身舎の柱穴のうち P 3 と P 4 には礎板の残痕が認められる。各柱穴間の距離は桁方向に P 1 から 1.7 • 1.9 • 1.4m、P 9 から 1.7 • 1.6 • 1.8m、梁方向に P 9 から 3.2m、P 6 から 1.4 • 1.8m である。P 19 などは 50 × 44cm の方形を呈し、庇の柱穴としては規模が大きい感じもする。面積は約 16.64 m² である。梁方向は N—22°—W を測る。

S B—6 (第22図)

XI—i・J 区で検出された。側柱だけの東西方向の建物である。身舎 2 柱間 × 1 柱間で柱穴は 6 個ある。実長で桁行長は南側 5.0m、北側 5.4m、梁行長は 3.1m で平面形は矩形をなす。各柱穴間の距離は桁方向に P 1 から 1.6 • 3.8m、P 6 から 1.6 • 3.4m である。面積は全体で 16.22 m² あり東側、桁行の長い部分では 11.16 m² を測る。梁方向は N—28°—W である。

S B—7（第24図）

XI—I区で検出された。側柱だけの東西方向の建物である。身舎2柱間×1柱間で柱穴は6個ある。実長で桁行長は南側3.4m、北側3.7m、梁行長は2.2mで平面形は北側に開く矩形をなす。各柱穴間の距離は桁方向にP1から1.6・2.1m、P6から1.5・1.9mである。柱穴P3内には北寄りに礎板が残存する。面積は7.81m²ある。梁方向はN—30°—Wである。

S B—8（第23図）

XIII—I区で検出された。身舎2柱間×1柱間で柱穴は7個ある。総柱建物である。実長で桁行長は東側で6.95m、西側で6.5m、梁行長は北側で3.8m、南側で4.2mで平面形は南に開く矩形をなす。各柱穴間の距離は桁方向にP1から2.6・3.9m、P6から2.85・4.0m、梁方向にP2から2.3・1.9mである。面積は約27.26m²ある。梁方向はN—55°—Eである。

S B—9（第24図）

XI—H—I区で検出された。身舎3柱間×2柱間の総柱建物で、本遺跡では最大の規模を有する。柱穴は11個あり、北東隅の柱穴が検出できなかった。実長で桁行長は7.9m、梁行長は6.1mで平面形は長方形をなす。柱穴P1・4・6・8・9・10内には礎板が残存する。各柱穴間の距離は桁方向にP1から3.0・2.5m、P10から3.2・2.2・2.8m、P5から3.5mである。面積は48.19m²あり、梁方向はN—20°—Wである。

S B—10（第25図）

XI—H区を中心にS B—9に平行する形で東側に検出された。側柱だけの南北方向の建物である。身舎3柱間×1柱間で柱穴は7個ある。実長で桁行長は6.6m、梁行長は3.8mで平面形は長方形をなす。各柱穴間の距離は桁方向にP1から2.25・1.4m、P7から3.0・2.1・1.6mである。面積は約25.1m²あり梁方向はN—67°—Eである。

S B—11（第25図）

XIII—H区を中心にS B—9の北側で検出された。身舎2柱間×2柱間の総柱建物である。南側中央の側柱が検出できなかった。柱穴は8個である。実長で桁行長は5.2m、梁行長は2.8mで平面形は長方形をなす。各柱穴間の距離は桁方向にP1から2.45・3.15m、P7から2.2・3.0m、梁方向にP5から1.45・1.4m、P6から1.3・1.45mである。P1とP7との間に柱穴が検出されたが、P1に寄るため除去した。面積は14.56m²あり、梁方向はN—72°—Eである。

S B—12（第26図）

XII—J区を中心にS B—5と重複する形で1棟を考えた。身舎2柱間×2柱間の総柱建物であるが柱穴は7個であり、また基準線上からはずれる柱穴もある。他の建物の主軸方向とも異なるが一応建物として記述する。実長は桁行長で5.4m、梁行長で3.6mで平面形は長方形をなす。各柱穴間の距離は桁方向にP1から2.1・3.25m、梁方向にP5から1.9・1.9mである。面積は19.44m²あり、梁方向はN—6°—Eである。

第1表 挖立柱建物一覧表

建物	方 位	柱間数 桁×梁	規 格 × 模 板 [m]	面積 [m ²]	備 考
S B-1	N-22°-E	1×1	1.35×1.3 と 1.5	1.96	礎板残存柱穴 1
S B-2	N-39°-E	1×1	3.9×3.8	14.67	
S B-3	N-34°-E	1×1	2.75×1.8	4.95	
S B-4	N-20°-W	2×1	4.85×3.4	16.49	庇付建物
S B-5	N-22°-W	3×2	5.9×5.0	16.64	庇付建物、礎板残存柱穴 2
S B-6	N-28°-W	2×1	5.0 と 5.4×3.1	16.12	
S B-7	N-30°-W	2×1	3.4 と 3.7×2.2	7.81	礎板残存柱穴 1
S B-8	N-55°-E	2×1	6.95×6.5	27.26	総柱建物?
S B-9	N-20°-W	3×2	7.9×6.1	48.19	総柱建物、礎板残存柱穴 5
S B-10	N-67°-E	3×1	6.6×3.8	25.1	
S B-11	N-72°-E	2×2	5.2×2.8	14.56	総柱建物
S B-12	N-6°-E	2×2	5.4×3.6	19.44	総柱建物?
S B-13	N-41°-W	1×1	3.6×1.8	6.48	礎板・礎石残存柱穴 1

S B-13 (第26図)

VI-J区を中心に検出された。南東方向の未調査区に延びる可能性がある。身合1柱間×1柱間で柱穴は4個ある。実長で桁行長は3.6m、梁行長は1.8mで平面形は長方形をなす。P3からは河原石を礎石として用い、柱痕部の一部も検出された(図版16下)。面積は6.48m²あり、梁方向はN-41°-Wである。

柵

S A-1 (第34図)

環溝屋敷内で検出された。その位置はS B-8・9・10の南側で、あたかもS B-9を中心とする建物群とS B-5を始め4棟の建物群とを区切るような形である。S B-9の桁方向と平行する。柱穴は7個である。柱穴の規模、形状は一定の規格性がなく、変化に富み深さも10~30cmと変化に富む。方位はN-24°-Wである。

S A-2 (第34図)

IX-H区で検出された。周辺に遺物がなく柵としての有効性を考えた場合疑問を感じるが、一直線上に並ぶのでここでは柵と考える。柱穴6個で構成される。形状にはバラエティがあるが、深さは6~10cmと概して浅い。方位はN-40°-Nである。

井戸

S E-1 (第30図)

IV-C区で検出された。素掘りの井戸である。当初赤褐色砂質土が円形に確認でき、土坑として処理していたが、期間がたつうちに底面周囲に亀裂が入り始めた。従来低地における調査においてこのような状況は経験するところがあった。特に柱穴が多く、その場合掘り足らないのが常であった。この経験に基づき写真撮影・実測の終了後、半蔵することにした。このようにして検出されたのがS E-1である。

形状は平面で円形を呈し、検出手面で直径約1.7mを測る。底面も円形をなし直径約60cmを測る。断面は丸味を有する底面から内湾しながら立ち上り、中位で外へ開く。趣を連想させる断面形を呈する。深さは約1.8mを測り、底面の標高は7.1mである。覆土はレンズ状に堆積し、粘質土が主体となり、

第2表 主要柱穴一覧表

建物番号	柱穴 番号	形 状	規 模		備 考
			長軸×短軸	深さ	
SB-1	814				
	-1	楕円形	36×29	36	
	-2	楕円形	23×12	35	
	-3	楕円形	19+α×27	24	
SB-2	-4	円形	36×34	31	基礎
	-1	43	楕円形	60×53	17
	-2	44	円形	47×47	3
	-3	46	楕円形	70×60	3
SB-3	-4	45	楕円形	60×54	8 士器脚部
	-1	49	楕円形	41×38	48
	-2	51	楕円形	61×47	20
	-3	52	円形	42×40	29
SB-4	-4	50	楕円形	55×44	29
	-1	201	楕円形	30×23	27
	-2	200	楕円形	49×35	30
	-3	632	楕円形	31×27	24
SB-5	-4	636	楕円形	34×28	38
	-5	196	楕円形	38×29	27
	-6	652	楕円形	40×30	35
	-7	202	円形	26×26	28
	-8	631	円形	36×35	26
	-9	119	円形	28×27	23
	-10	637	楕円形	38×32	26
	-11	637	楕円形	38×32	26
	-12	215	楕円形	26×16	3.5
	-13	653	円形	21×21	46.5
	-1	666	方形	45×33	12
	-2	629	円形	25×25	8
	-3	605	楕円形	30×25	26.5
	-4	606	楕円形	36×31	26
	-5	112	円形	13×13	4
	-6	113	円形	30×26	27
	-7	125	楕円形	37×33	30
	-8	622	円形	42×40	43
	-9	213	双円形	27×13	7
	-10	217	円形	25×24	36
	-11	255	円形	33×30	25
	-12	603	楕円形	40×34	23.5
	-13	608	円形	27×24	8
	-14	106	楕円形	25×20	42
	-15	107	円形	18×17	9.5
	-16	109	楕円形	30×23	50
	-17	110	方形	33×28	35
	-18	126	円形	28×28	29

建物番号	柱穴番号	形 状	規 模		備 考
			長軸×短軸	深 さ	
-19	203	方 形	50×44	29	
S B - 6	142	方 形	33×33	26.5	
	140	椭 圆 形	46×34	18	
	132	圆 形	45×43	18	
	188	椭 圆 形	33×26	23	
	80	圆 形	40×38	51.5	
	81	圆 形	45×35	23	
S B - 7	147	椭 圆 形	38×31	35	
	514	圆 形	30×28	10	
	179	不 整 形	72×42	30	木
	174	圆 形	19×15	7	
	136	圆 形	30×28	29	
	141	圆 形	33×30	20	
S B - 8	682	椭 圆 形	33×28	9	
	402	圆 形	27×27	11	
	411	圆 形	37×34	56.5	
	359	椭 圆 形	23×18	21.5	
	390	圆 形	22×20	18	
	579	圆 形	20×19	19	木
	395	圆 形	39×38	41	
S B - 9	358	長 方 形	33×26	25	礎板
	555	椭 圆 形	56×48	33	
	310	椭 圆 形	56×49	61.5	
	628	圆 形	38×38	16.5	礎板
	222	椭 圆 形	25×21	25.5	
	481	圆 形	46×40	24	礎板
	467	圆 形	32×31	28	
	486	椭 圆 形	47×32	22	礎板
	485	圆 形	40×37	32	礎板
	382	圆 形	47×44	39.5	礎板
	484	半 圆 形	12+α×36	13.5	石と礎板
	710	椭 圆 形	44×39	30.5	
S B - 10	752	椭 圆 形	29×23	19	
	463	圆 形	25×24	38	
	241	椭 圆 形	35×32	47.5	
	231	圆 形	28×26	16	
	226	椭 圆 形	30×25	12.5	
	716	椭 圆 形	32×25	17	
	303	圆 形	35×35	30	
S B - 11	347	椭 圆 形	31×26	8.5	
	340	圆 形	27×24	33	
	703	椭 圆 形	26×15	40	
	451	圆 形	31×29	26.5	

建物番号	柱穴 番号	形 状	規 模		備 考
			長軸×短軸	深さ	
- 5	550	楕円形	27×21	38	
- 6	338	円形	34×32	37.5	
- 7	557	楕円形	25×18	43	柱?
- 8	339	円形	28×26	27.5	
S B - 12					
- 1	254	円形	24×23	12	
- 2	257	円形	26×22	7	
- 3	612	円形	20×19	7	
- 4	625	円形	25×25	15	
- 5	128	楕円形	40×33	15	
- 6	255	円形	33×30	25	
- 7	253	円形	27×26	21	
S B - 13					
- 1	756	円形	75×71	14	
- 2	755	双円形	101×59	22	礎板 礎石、柱旗
- 3	754	円形	65×64	37	
- 4	757	円形	61×58	22	
S A - 1					
- 1	582	円形	20×19	9.5	
- 2	589	円形	24×24	30	
- 3	587	円形	26×24	17.5	
- 4	259	楕円形	45×27	27	
- 5	598	円形	37×34	19	
- 6	599	円形	44×41	28.5	
- 7	182	円形	26×25	10.5	
S A - 2					
- 1	536	方形	29×27		
- 2	535	双円形	40×22		
- 3	533	楕円形	33×23		
- 4	531	楕円形	40×30		
- 5	530	円形	38×35		
- 6	529	楕円形	37×32		
S P	1		28×	47	土器
	2	円形	39×36	59	柱
	124	円形	22×22	23.5	柱
	179	不整形	72×42	30	木
	296	不整形	32×27	34	木
	358	長方形	33×26	25	木
	382	円形	47×44	39.5	礎板
	386	方形	43×34	77	礎板
	476	楕円形	51×43	30	柱
	481	不整形	46×40	24	礎板
	483	不整形	20+α×40	24	木
	485	円形	40×37	32	礎板
	486	楕円形	47×32	22	礎板
	527	楕円形	55×49	42	礎板
	628	円形	38×38	16.5	礎板
	749	不整形	29×24	25	礎板

間層に二層の砂質土を挟む。S E—3 の覆土中でも観察されたが、粘質土中に白色の粘末を一面に含む。

中央に直立した状態で竹が1本検出された。竹の下端はVI層中位で終わり、底面には達していない。なお竹の節は抜かれていません。また底面の中心部、竹の延長上に底面に接して山茶碗が完形で置かれた状態で出土した。時期は13世紀後葉と考えられる。

從来遺構内のこのような十層の埋没状態は自然堆積と考えられていたが、S E—1の場合、上器・竹の山上状態から井戸完絶後・時に人為的に埋没されたものと考えられよう。

S E—3 (第32図)

XI—1 区で検出された素掘りの井戸である。平形は円形を呈し、検出面で直径約1.5m、底面で約90cmを測る。断面は底面から素直に立ち上る。深さは検出面より約1.4mを測り、底面の標高は7.2mである。覆土はレンズ状の堆積状態を示し、20層に分層できるが、大きく二分される。1~11までは酸化鉄を多く含みややしまった粘質土に対して、12~20は酸化鉄を含まず、S E—1で観察された白色の粉末が一面に含まれ、粘質土もしまりがなくやわらかい。

遺物は20層中より山茶碗と小皿が出土している。時期は13世紀後葉と考えられる。

S E—4 (第33図)

X—1・J 区で検出された素掘りの井戸である。S D—52とはわずか5cmしか離れていない。平面形は検出面で楕円形を呈し、長軸で約4.8m、短軸で約3.6mを測る。断面形は所謂漏斗状を呈し、二段に掘られている。上面から中央部にむきい傾斜しながら下がり、中央部で直径1.4mの掘方をもって底面にいたる。この井戸は完掘後も湧水が激しく、また下部は砂を掘り込んでいることから完掘後下部は崩壊してしまった。底面は椭円形を呈していたが、計測値等は不明である。深さは検出面より2.2mあり、底面の標高掘方上部のゆるやかに傾斜する部分には親指先大へ人頭大の礫が多量に含まれており、特に長軸方向にかけては著しい。北東側の礫に関しては小礫が多く、また高低差も見られるが、南西側のものはやや大型の礫が一列に中心部分に対して平行に並ぶ。またこの列石の外側には直径5cmほどの自然木が平行して出土した。石や木を止める杭等の施設はみられないが、足場としての機能があったのではなかろうか。断面形からして足場となる施設があったとしても不思議ではなく、また礫が多量に混入しているのは排水的な機能もあったのではなかろうか。南西側の列石に対して直交する形で南東側にも一列に石の並びが認められる。あるいは中央部を方形に開む足場の想定も可能であろうか。上層の堆積状況からまず中央部分の一段深い部分が埋没して後、上部の傾斜面が埋没したことが考えられる。

遺物は上部の傾斜部分で礫等に混在した状態で土器片・木製品・石器が出土している。時期的には13世紀前葉と考えられる。

第5節 近世及び時代不明の遺構

金山堤

金山堤の記録は古くは江戸時代元禄期にさかのぼる。当時の状況については、付編4 德橋伸一氏「近世史料にみる『金山堤』について」で触れられているので、ここでは調査の成果について述べる。我々が調査を開始した時点においてはすでにバイパスの工事は着工されており、堤の一部は盛土内にまた一部は掘削されて、確認できたのは調査地区における全長約85mだけであった。高さは約1.5m

を計り上面は一部高まりが見られたが、総じて平坦面をなしていた。南側の立ち上りには境を登り下りすることができないくらいの急傾斜を呈するのに対して北側はゆるやかな斜面であった。堤の西側ではテラスが見られたが、これは旧状の形ではないだろう。頂部では二ヶ所の窪地が、あたかも北側で溝水となった水が南へはけるように掘られていた（第40図上段）。断面は横断で四ヶ所確認した。また縦断も東西両端部を除く中央部分で観察した。この縦断観察は堤の上層調査と共にS X-13類似遺構検出の目的も兼ねそなえたものであった。斯面は大きく二分される。下層は粘土質を基本とし堅緻であり、多くの小塊に分離が可能である。水平に順次下から盛られていることがわかる。これに對して上層は粘土塊の混入がほとんど見られず、色調も腐蝕の影響で、黒味が強く、しまりがない。上面ではうすく、斜面にかけて厚く堆積している。明らかに時期的な差が認められる。なお上層と下層との間には砂質土層が存在する。砂から小指先人の礫を含むものであって、冠水があったことを物語る。時期については不明である。この砂質土を除去した時点での平面図が第40図下段である。堤上層の除去前に比べより上部の平坦面が明らかである。S X-13類似の落ち込みは検出できなかった。なお中世の環溝戸敷の調査のためにこの部分の堤は削平したが、両端部分については保存した。江戸時代より続いた堤を挿む両部落の争いの種は半永久的に歴史上から姿を消したことになる。この堤と関連する遺物としてS D-85及びS D-102がある。

遺物は堤の上層・下層の盛り上内から出土している。上層からは近世の磁器が出土するのに対して、下層には含まれず、中世陶質土器が量的に多い。また掻乱内より須恵馬（第70図）と五輪塔（第70図21）が出土した。

土層は以下のとおりである。

E-F間土層説明

1 客土	34~52 嵌褐色土（白色粘土の混入量で分類）
2 水田耕作土	53~71 青灰褐色粘土（白色粘土・鉄分の混入量で分類）
3 鉄分集積	72 暗赤褐色土
4 混白灰色粘土理	73 暗青灰色土
5 丸太・枝を多量に混入する	74 黒色粘土
6 黒青灰色粘質土	75~83 青灰色粘土
7 黑青灰色粘質土（鉄分多い）	84 黑赤褐色粘土
8 混白灰色粘土理	85, 86 赤褐色土（青灰色粘土混入）
9 暗青灰色粘土（鉄分多い）	87~89 黄褐色粘土
10 乳白色粘性質土	90 黄褐色粘質土
11 暗褐色土（しまりがない）	91 黑黄褐色砂礫
12~16 11に似るが白色粘土を混入	92 青灰色粘土（炭化物混入）
17~18 11に似るが赤褐色粒子が多くしまりあり	93 乳黄色粘土
19 青灰色粘質土	94 青灰色粘質土（炭化物混入）
20 黄赤褐色粘性砂質土	95 青灰色粘質土
21 黑赤褐色粘質土	
22 暗青灰色粘質土	A-B間土層説明
23 暗青灰色粘質土	1 海乳黃灰色粘質土
24 明黄褐色粘質土	2 小指先大の疊
25 淡青灰色粘質土	3 乳灰色粘質土
26 暗黄赤褐色粘質土	4 暗茶黃色砂質土
27 暗黃青灰色粘質土	5 乳灰色粘質土（3より白色粘土少ない）
28 黑茶色土	6 乳灰色粘質土（5よりマンガン多い）
29 黑茶色土（白色粘土混入）	7 黑茶色土
30 暗黑茶色土	8 乳灰白色土
31 暗黑青褐色土	9 乳灰白色土（8より白色粘土多い）
32 黑黃褐色土	10 乳黃灰色粘質土
33 暗黃褐色土	11 黑灰色土（マンガン多い）
	12 黑乳茶灰色土

- | | |
|------------------------------|----------------------------|
| 13 黒乳黃灰色土 | 26 費灰白色粘質土 |
| 14 黒黃灰色土 (白色粘土多い) | 27 乳黃灰色粘質土 (鉄分多く、白色粘土塊を含む) |
| 15 乳黃灰色土 (鉄分多い) | 28 暗青灰色粘土 |
| 16 乳黃灰色土 (15より鉄分少ない) | 29 白色粘土 |
| 17 黒灰色土 (マンガン多い) | 30 暗青灰色粘質土 |
| 18 乳黃灰色粘質土 | 31 白青灰色粘質土 |
| 19 乳黃灰色土 | 32 暗青灰色粘質土 |
| 20 乳黃灰色土 | 33 白青灰色粘質土 |
| 21 乳黃灰色土 | 34 暗青灰色粘質土 |
| 22 乳黃灰色土 (白色粘土の含有量は19<20<21) | 35 暗茶黃色砂質土 |
| 23 乳灰白色粘質土 | 36 暗茶黃色砂質土 (砂は細かい) |
| 24 乳灰白色粘質土 (23より白色粘土の量多い) | 37 暗青灰色砂 |
| 25 黒灰色土 (マンガン多い) | 38 赤黄褐色砂 |

溝

S D-85・102 (第11図)

S D-85は金山堤にそって南側に掘られている。またS D-102はX-K区でS D-85から導水するように掘られている。

S D-85は幅約1.1m、深さは上層観察では80cmを測る。断面形はU字形を呈する。一部に径10cm程の丸杭を半蔵したものが、溝の南縁に打ち込まれている。杭の形状で半蔵したものが用いられるのは、近世以降の特徴である。

S D-102は幅1.1~1.3m、深さ17cmを測る(ただし、検出面からの深さであり、S D-85の底面とは同じ高さである)。断面形は皿状を呈する。S D-85と接する両側には、丸太杭を中心に打ち込まれており、横木がわたされている。杭例の周辺には礫が集中し、混在した状態で山茶碗が出土している。近世陶器が一点も含まれず、当初は中世の溝と考えていた。S D-85内でも、S D-102の入口にあたる部分には小礫を中心とした集石がみられる。この集石内より曲物(第67図22)の出土があった。S D-102の集石は裏込めの機能が考えられるが、S D-85については不明である。なおS D-85の集石から西へ1m離れた底面で、「天保通宝」が出土した。

S X-3・4 (第36図)

VI-E・F区を中心に検出された。南側は調査区外へ広がるため全体の形状は不明であるが、調査区内での形状はS X-3が隅丸方形、S X-4が隅丸長方形を呈するものと思われる。S X-3と4とは約30cmほどの間隔を有するが、幅約80cm、深さ約44cmの溝によって結ばれている。S X-3は東側で内側に傾斜するテラスを有する。あたかも昇降道路のようである。底面は平坦であり、充填する上層も水平堆積を示す。S X-4は一部で南辺が確認されている。直線的で立ち上りも急であり、他の掘り込みとは趣きを異にする。底面は平坦であった。遺物は両者とも1点も検出されていない。時期的には検出状況から近世以降のものと考えられる。

性格不明の落ち込み

S X-6 (第37図)

0-A区を中心に検出された。調査区外へ広がるため全体の形状は検出できなかったが、形態は不整形を呈するものと思われる。西側I-B区で検出されたS X-1や北側からR X-6にそぎ込む溝と結びつく。底面は凹凸が見られ、北側の立ち上り部分には数箇所の平坦面が作られている。S X-6内の西側、北側から延びる溝が、S X-6に注ぎ込む場所には、あたかも不純物を浄化するよう

な機能を有した施設がみられる。これは長さが約2.1mあり、高さは35cmある。直径6~10cmの丸太杭が4本頭部を東側に傾けて打ち込まれた痕跡がある。この杭は丸太杭ほどの大きさではなく、竹を止めている程度のものである。このしがらみの東には一段深くなる部分が円形があり、この部分の西側にも南北に杭列がみられる。ここにしがらみ状のものがあったのか否かは不明である。SX-6の深さは15cmある。時期は覆土中より「柏屋」と銘の入った徳利が2点出土していることから近世以前のものであろう。

SX-7・8（第88図）

VII-J区を中心に検出された。南側は調査区外へ広がるため全体の形状は不明であるが、調査区内での形状はSX-7が不整形、SX-8が隅丸方形を呈するものと思われる。いずれも深さは15~20cmと浅い。底面は凹凸が見られ、SX-7には一段深くなる部分が二箇所見られる。下部にSD-82があるため、覆土中より弥生土器片の出土があった。時期・性格等については不明である。

性格不明の落ち込み

SX-13（第39図）

金山堤の横断面観察のためVII・VIII区境で堤を切断していたところ本来黄褐色系の粘土上で盛られているはずの堤の一端が黒色土の広がりが認められた。また黄褐色系粘土中には礫を含まないのが常例であったが、黒色土の部分に礫の混入があり、特異な上層であることが注意された。土器片の混入が目立つのも特徴であった。掘り下げていくうちに五輪塔の一部が出土したこと、あるいは墓跡の存在を考えられるのではなかろうかと予測した。そこで東側を残し、平面的に掘り下げを行なった。その結果、金山堤のほぼ中央部分で北側で約1.8m、西側で38mの長さにわたってL字形に落ち込む形状を検出し得た。この落ち込みは方形の掘り方をなすものではなく、西側においては明確な落ち込みが認められるものの、南と北では堤の傾斜で落ち込みは消滅し、平坦面を挟んで東においては徐々に高さを増すものであった。従って明確な掘り方はないようである。

第13図で示すように礫は親指のものから人頭人のものまでと大小様々であるが、量的には巨大的の礫が多い。これらの礫は東側の斜面部分では希薄であるが、平坦面では力強く全体から出土する。特に礫が集中するとか配列するとか一定の基準は見られない。焼礫や焼土等の検出も見られなかった。

出土遺物には土器・石製品・銅錢があり、南寄りの隅では骨片の出土があった。遺物について概観すると、まず土器であるが、完形品は一点もなく復元実測でも全形をうかがい知れる資料は出土していない。西側で落ち込みを検出してから全てドットを落としてみたが礫同様、集中する箇所もなく礫に混在して出土している。時期的には古墳時代から中世にいたるもののが混在しているが、中世を下る資料は1点もない（第63・64図）。銅錢は「聖宋元宝」（1101年初鑄）、「洪武通宝」（1368年初鑄）が各1点出土している。石製品には砥石五輪塔・宝篋印塔・石鎧がある。石鎧は弥生時代のものであろう。五輪塔・宝篋印塔は、この遺物だけ年代が新しい。当初、山七十器中に近世のものが含まれないことから、金山堤の築造二期説を考え、起源は中世にさかのぼると想定したが、五輪塔・宝篋印塔の分析により否定された。

水田状遺構（第41図）

IX区の西側から西へかけて畔状の高まりが検出された。この部分は表土剥ぎを行なってから半年を経過した時点で調査に入ったため、黄褐色粘土質に達する上面で遺構の検出が行なえた。調査区南西隅では幅10~20cm、高さ25cmの高まりが直角に接する。接点では、この高まりは断絶し、あたか

も水みちが作られているようである。水田状遺物1～4は規模も大きく方形の区画を形作るが、北側にある6～10は帶状に並ぶ。性格が異なるものであるのかもしれないが、方向性は一致する。覆土は2層に分かれ、上層は耕作土と思われる鉄分・マンガン粒子の少ない青白灰色粘土が、下層には床土と思われる鉄分を含んだ黄灰色粘土が充満する。SE-2は、これらの遺物に伴う井戸である。時期的にははっきりしないが、水田内に灌漑用の井戸があったことは今でも記憶している人がいる。煙管（第71図2）と「寛永通宝」（図版50の1）が1点出土している。

井戸

SE-2（第31図）

Ⅷ-J区で水田状遺構検出時に検出された井筒を持った井戸である。平面形は検出面で梢円形を呈し、長軸1.5m、短軸1.3mを測る。底は不整円形となる。断面形はほぼ垂直に立ち上り、底面は平坦を呈する。深さは検出面より2.2mを測り底面の標高は6.7mである。井筒として竹で編まれたものが高さ1.7mにわたって検出された。下部において土圧のためかやや変形していたが、おおよそ径70cmの円形をなす。それは縦に15本の径2cm位の丸竹をたて、1/4～6/6分割された竹を交互にからめたものである。井筒の内側には丸木が1本斜めにわたされている。また井筒の外側においても下部で井筒を固定する目的のためか周囲を木で開いている。井筒内部と裏込めの上層は上部で区分できたが、下部では狭く、分層が不可能であった。遺物は1点も出土していない。

SE-2は水田状遺構検出時に発見されたこと、竹や木の端部切り難しが鋸を用いたように平坦で材質も新しいことから水田の灌漑用の井戸と思われる。事実、周辺では灌漑にこのような方法が用いられていたということである。

SE-5（第34図）

Ⅷ-H区で検出された素掘りの井戸である。平面形は円形を呈し、検出面で直径1.7mを測る。調査中崩壊し、深さ等は不明である。一部でSE-2で見られたような竹で編んだ井筒が検出されていくことから、時期・性格についてもSE-2と同類と考えられる。出土遺物はない。

第3表 土坑一覧表(SK)

番号	区画	形 状	規 模		出 土 遺 物	備 考
			長軸×短軸	深さ		
1	VI-C	楕円形	161×60	63.9		SD-7を切る
2	III-C	円形	176×169	37		
3	V-C	隅丸方形	133×113	43.3		SK-4と切り合う
4	V-C	長方形	204×105	52.3		SK-3と切り合う
5	VI-D	楕円形	235×115	20	弥生土器	SK-6を切る
6	VI-D	楕円形	165×65	10		
7	IV-B	砲弾形	130×95	35	灰釉陶器・石	SD-15を切る
8	IV-B	楕円形	(180)×(116)	120		発掘区にかかる
9	IV-B	不明		6		SD-21に切られる
10	O II-Z	円形	68×59	37.1		
11	欠					
12	欠					
13	VII-IX-E	不整形	530×300	20	弥生土器	
14	VII-D	円形	100×96	75	弥生土器	SD-47下にある
15	VII-D	長方形	(183)×55	10		
16	VII-H	楕円形	215×146	50		
17	XI-I	不整方形	160×160	62	礫・甕	
18	X-H	輪円形	107×94	75	甕・山茶碗・本製品	SD-53に切られる
19	XI-G	円形	95×95	15	山茶碗	
20	XII-I	楕円形	193×105	98		
21	XIII-G	長方形	(293)×203	92.5		
22	XIII-H	楕円形	228×161	29	礫	SD-58を切る
23	XI-I-J	長方形	120×45	34		
24	XI-G	円形	72×63	65		SD-53に切られる
25	XI-J-K	不整形	(545)×(170)	34	甕・獸骨・山茶碗	排水路に切られる
26	XII-I	不整形	351×299	19	陶器片	
27	X-F	円形	158×142	7		
28	XI-G	楕円形	85×70	15		
29	IX-I	楕円形	174×76	22		
30	IX-X-I-J	(楕円形)		11	山茶碗・礫	
31	VII-I	楕円形	125×85	16	土師器	
32	X-K	楕円形	206×128	43		
33	X-J	楕円形	90×80	50	礫	
34	XI-K	楕円形	(90)×136	16	齒	排水路に切られる SD-99と重複
35	X-K	楕円形	240×225	124		
36	XIII-I	長方形	221×85	5.5		SP-660に切られる
37	XIII-I-J	楕円形	289×95	8.5		
38	X-H	不整形	57×32	11		
39	VI-H	円形	70×69	55	須恵器	
40	XIII-H	楕円形	246×70	20	須恵器・土師器	
41	XII-I	円形	117×(57)	20.5		SK-20に切られる SP-722を切る
42	IX-J				小皿・白磁器	

第4章 出土遺物

第1節 弥生土器

弥生時代の遺構は、溝を中心に若干の土坑が検出されたが、遺物がある程度のまとまりをもって出土した遺構としては、SD-14・16・82、SK-5があげられる。ここでは玉越遺跡出土土器の分類を行ない、次に遺構ごとに記述を進める。

図示した弥生土器は、実測図131点、拓影図120点の合計251点である。量的には決して多いとは言えないが、小破片でも実測可能なものは図示した。形態的には壺形土器が最も多く、次いで甌・高杯がこれに次ぐ。

I 壺形土器

法量より口径20cm以上の大型壺、口径15cm前後の中型壺、口径10cm前後の小型壺に分れる。しかし中型壺と大型壺は形態・紋様構成で類似する点が多いので、ここでは口径10cm前後以上のものを一括して壺形土器、それ以下のものを小型壺形土器と呼ぶ。

壺形土器A 単純口縁を呈するもので、口縁部の形態により2類に分けられる。

A 1 口縁部が内湾しながら開くもの（9・42・58）。文様帶は口縁部及び内側には見られず、肩部に集中する。量的には少ない。

A 2 口頭部がやや外反しながら開くもの（60）。口唇部は垂直に落とされ下方に粘土のはみ出しがみられる。量的には少ない。

壺形土器B 折り返し口縁を呈するもの。折り返し部は断面三角形と断面長方形の粘土帶。張り付けによる器形と頭部のミガキ、頭部の形態によって3類に分けられる。

B 1 頭部は直線的に立ち上り、口縁は大きく開くもの（5・37・40・41・126・127・129）。口縁部は外反するものと直線的に開くものがある。頭部には太く短いもの（5・37）と細く長いもの（40）がある。

B 2 頭部は湾曲し、口縁部は大きく外反して開くもの。玉越遺跡では主体的な方を示す器形であり、代表的な土器として14、73等があげられる（4・17・18・19・20・23・38・39・61・62・63・64・67・68・69・70）。

B 3 頭部で屈折して口縁部にいたるもので1点出土している（66）。表面の剥離が著しく、調製等については不明である。

壺形土器C 複合口縁を呈するもので、口縁部の形態により2類に分けられる。

C 1 口縁部はほぼ直立し、下端部がやや垂れているもの（72・130～132）。棒状浮紋の貼付されるものが多い。

C 2 口縁部はやや開き、粘土の張り付けは見られないもの（13・122・249）。口縁部内側はミガキの行なわれているものがある。

小型壺形土器A 単純口縁を呈するものである。頭部から口縁部にかけてやや内湾しながら開くもの（6）と口頭部が短かく頭部のくびれもゆるやかな7がある。口縁部が欠損し、形態の不明なものが数点あるが、83・133も単純口縁を呈するものと思われる。

小型壺形土器B 折り返し口縁を呈するものである。口縁部は直線的に開くものであり壺形土器Bのように口縁部内面が水平に面をなすことはない。胴部下半で最大径を測る。8の1点のみ出土した。

小型壺形土器C 細い長頭をなすもので胴部下半で最大径を測り、強く屈折して底部にいたる。44

が1点確認できた。

小型壺形土器D 口頸部はやや内湾しながら開き、口唇部は内側に肥厚する。頸部で屈折して胴部にいたる。134が1点確認できた。古墳時代に含まれるかもしれない。

他に35・84のように胴部から底部にかけてのものがあるが、A・Bのいずれかに含まれるものと思われる。

II 壺形土器

完形品は1点もなく全形をうかがい知れる資料はない。口縁部には刻みを有するものと無いものがある。平底甕は確認できなかった。しかし無いということではなく、周辺遺跡の出土例から伴出することは知られている。といって台付甕が圧倒的に主体を占めることにはちがいない。

調整は頸部と胴部のハケの方向が異なる。頸部を横方向に(215の1点は横方向にある)。胴部を斜めないしは横方向に施すものが多い。台部は縱方向のハケ口が施される。内面について観ると頸部までは横方向のハケ目が施され、それ以下はナデ調整される。中には全面にナデの観られるものもある。台部はハケ目の残るものが多いが、なかにはナデの施されるものもある。口縁部の形態より2類に分けられる。

壺形土器A

A 1 口縁部はゆるやかに外反し、口唇部は面取りされる。刻目の有無により2種類に分類できる。面取りされた口唇部に、刻目が施されるもの。頸部の屈曲は弱く2以外はゆるやかに胴部に移行する。刻目は短く口唇部の稜を刻むものと、29のように長く口縁部全体を刻むものがある。拓影図118・215は後者の例である。215の口唇部は面取りがなされず尖る(△128・51・92・93・144)。

A 2 口唇部は面取りされるが、刻目の施されないもの。頸部から強く開き、胴部上半で最大径を測るものがある(53・55・91・94)。

壺形土器B 復元された資料には1点もないが、拓影図182のように折り返し口縁を呈するものである。量的には極めて少ない。口縁部は外反しながら開き、折り返し部分に刻目が施される。

III 高壺形土器

47で全形が知れる以外は壺部・脚部のみという断片的な資料が多い。全般的な特徴としては47で代表されるように漏斗状の壺部にやや湾曲しながら開く折り返し口縁の付く壺部と、裾部の外側では屈曲するが内側ではあまり顯著でない脚部とからなる。脚部上半には櫛の刺突による羽状紋が施され、脚裾部にはハケ目が残る。口縁部および脚裾部の形状より4類に分類できる。

高壺形土器A 漏斗状の壺部にやや湾曲しながら開く口縁部が付くもので口縁部は単純口縁である(124)。

高壺形土器B 壺部の形状はAと同じであるが折り返し口縁の付くもの。口唇部には櫛状工具による刻目が付けられる(47)。脚部は直線的に開き、裾部の屈曲は明瞭でない。上部に櫛刺突羽状紋が施される(47・48)。

高壺形土器C 脚部のみの資料であるが、Bの脚が直線的に開くのに対して、裾広がりに幅広く開くものである(89・225)。

高壺形土器D 脚部のみの資料であるが、脚裾部で一度屈曲し、そこに凸帯が付けられるもので1点出土している(139)。

S D-14出土土器

玉越遺跡では最も遺物出土した遺構である。遺物は溝の全体から万遍なく出土したのではなく調査

範圍の中央部において、しかも数箇所に集中してみられた。肩位的には分類は困難であり、覆土中位から下部にかけて出土している。いずれにしても短期間において廃棄されたものであろう。この廃棄の時期が集落存続期間との時点で行なわれたのか、住居跡の検出が行なわらず不明であるのは残念である。なお遺物は出土箇所別に図示した。土器番号4~13は第3回中段中央、14~36は同回中段左、37~57は同回中段右、58~121はその他からの出土である。

壺形土器A 1 (9・42・58) が出土した。9は口縁部では斜めのハケ目がみられ頸部はナデが施されているものと思われる。器面の荒れが激しく、あるいはタテのヘラミガキの可能性もある。肩部には段が2箇所みられ、櫛刺突羽状紋が2列に施されている。胴部はタテハケが施されているが、まず上段のハケ目が全周したのち、下段のハケ目が施されている。最大径を中心にして上下は横方向のヘラミガキが、それより下部は斜めのヘラミガキが行なわれ、再び底部付近で横のヘラミガキが見られる。内面調整はナデを主体とするが、胴部についてはヘラによるナデの痕跡が残る。底部は中央がやや凹む上げ底風であり木葉痕がみられる。器高35.6cmと現存する土器の中では最大である。42は肩部から口縁部にかけてのものである。器面が荒れているが、外面は縱方向のハケ整形の後ヘラミガキが施されている。頸部と胴部の境界には櫛による連続刺突紋が施され、下部に斜行する刺突紋がみられるが、恐らく羽状をなすものと思われる。段は認められない。9に比べて長胴の形態をなそうか。

58は肩部にヘラによる刺突羽状紋が施され、肩部の段もなだらかである。頸部は縱位のヘラミガキと思われる。

壺形土器A 2 (60) 60は口縁部には横斜位のハケが、頸部には縱位のハケ調整後縱位のヘラミガキが施されている。口縁部内面には横位のハケの後、横位のヘラミガキがみられる。口径13cmと大きくはない。

壺形土器B 1 (5・37・40・41) は口縁部を欠損あるいは壺形土器A-2に含まれられるかもしれないが一応ここに分類する。器面は荒れているが、口縁部から頸部にかけてハケ調整が認められる。肩部には段と櫛による羽状刺突紋が二段施される。その下に縱位のハケ目が3~5cmの幅で施されそれより下位は斜行するハケ目である。最大径のやや上部から底部にかけて横方向のヘラミガキが施される。口縁部内面にはハケ調整の後、原休R Lの繩紋が横回転される。底辺部にハケ調整がみられるが、それ以外はナデである。底部は平底であり木葉痕がみられる。41は口縁部が直線的に開くもので、この形態をなすものは1点しかない。口縁部内面が平坦面をなさないため、粘土の張り付けによる口唇部は断面がくの字状を呈する。口縁部内面に若干のヘラミガキが施される他はハケ調整である。

壺形土器B 2 (4・10・14・15・17・18・37・38・43・64・72・73・75・98・100) 14は胴部下半を欠損する。口唇部には断面三角形の粘土が張り付けられ断面はくの字状を呈する。くの字状に突出した部分にヘラによる刻みが施される。口縁部から頸部にかけては縱位のヘラミガキがみられる。肩部には段を有し、ヘラによる羽状紋が2段に施される。胴部はヘラミガキと思われるが器面が荒れているため不詳。内面は口縁部においてヘラミガキが認められるが、それ以外はナデによる調整である。73は胴下半部の一部を欠損するが、ほぼ全形の把握できる土器である。口唇部には断面三角形の粘土が張り付けられるが、口縁部内面が平坦面をなすため、断面はくの字状にならず垂直に落ちる。張り付部分にヘラによる刻みが施される。口縁部から頸部へかけては縱位のヘラミガキが施されるが、肩部との境は横位のヘラミガキとなる。肩部には段が一段みられ、ヘラによる羽状紋が2段施される。胴部はハケ調整後ナデまたはヘラミガキが施されたものと思われる。胴部下半は器面の荒れのため不詳である。内面はナデ調整である。底部は中央のやや凹む上げ底風を呈し、木葉痕が認められる。15は口縁部と胴部下半を欠損するが、一応この類に含めた。肩部には二段の段を有し、櫛による羽状刺

突紋が二段施される。羽状刺突紋より下部には縦位の櫛描波状紋が垂下する。当遺跡において肩部を除く脣部に紋様が明確な形で施設されるのは本例を唯一とする。この波状紋は最大径上部でおよぶと思われる。17は器面の荒れが著しく表面の紋様は不明であるが、口縁部内側にはR LとL Rの単節繩紋を交互に3段施し羽状繩紋をなす。この他に口縁部内側に繩紋を施す例として37・38・98・100がある。L RとR Lの差こそあれ結節繩紋のものは1例もない。これはS D -14出土土器の特徴であろう。18は口縁部内側に扇形紋が3段に施されている。1肩部の羽状刺突紋は2段構成のものが最も多く、次に1段・1段半と続く、43は口縁部を欠損するが…応この類に含めた。他の壺形土器の胴部と比べて丸味を有し、下半部に見られる横ヘラミガキも高い位置から施される。肩部の櫛刺突紋も羽状とはならない。やや異質な感じの上器である。出土状態は溝の底面に接して出土した。10・71・75の肩部羽状紋には楕円形浮紋が貼付される。

壺形土器B 3 (66) 66頸部の内面で稜を有して屈折し、直線的に口縁へ開く形態のもので1点だけ確認できた。口唇部には断面三角形の粘土紐で肥厚させる。内外面共に器面が剥落しているため調整技法は不詳であるが、口唇部及び口頸部の内外面は横ハケが観られる。紋様については不明である。

壺形土器C 1 (72) 受け口状の口縁下端に粘土紐を張り付けて複合口縁にしたものである。72が1点出土している。

壺形土器C 2 (13) 検出時点では頸部も残存していたが保存状態が悪く、取り上げ時に分離してからは接合できなくなった。従って頸部の調整技法は不詳である。口縁部には縦のヘラ描波線がめぐり、口唇部にはL R繩紋を施す。肩部には2段半の櫛羽状刺突繩紋が施され、楕円形浮紋を貼付する。胴部はハケ整形であるが最大径や上部から下部にかけて横ヘラミガキが継られ下部はナデが観られる。底部は上げ底底である。

小型壺形土器A (6・7・59) 6・7がある。6は口縁部がやや内湾しながら開き、口唇部は内側に突出する。調整は口唇部を横ハケ後、横ヘラミガキを施し口縁部から底部にかけても全面横ヘラミガキである。頸部の一部に縦ハケが残る。7の口縁部は直線的に開き、頸部はあまりくびれず、底径より広い。7の器面は全面ミガキが施されるが、口頸部、胴下半部と胴と上半部ではミガキの方向が異なる。胴下半部は縦ヘラミガキによって外反する。

小型壺形土器B (8) 肩部に段がつき、櫛による羽状刺突紋が施される。口縁部は直線的に開き口唇部には薄い粘土紐が貼り付けられ、折返しD線を型作る。端部は水平面をなす。器面の荒れが著しく、調整は不明である。頸部より底部にかけて黒斑がみられる。

小型壺形土器C (44) 脇部中央で最大径を計る偏平な胴部に長頸が付く。口縁部は欠損しており不明であるが、徐々に開くようである。頸部から脇部上半にかけて櫛による羽状刺突紋が連続して付けられる。脇部には横ヘラミガキが施される。内面はナデ調整されるが底辺部には横ハケが残る。底部は中央がやや凹む。

他に83がある。頸部上半を欠損するがそれ以下は完形である。頸部に櫛による羽状刺突紋が2段施される。口縁部は大きく外反するものと思われる。器面には赤色顔料が塗られる。

壺形土器A 1 (28・29・51・92・93・118・119) 刻みには長く口唇部下端から口縁部にかけてのもの(29・118)と短く口唇部下端にとどまるもの(28・51・119)がある。調整技法は甕全体に共通するもので口頸部では縦ハケ、胴部では横から斜めのハケ、口縁部内側は横ハケが観られる。29は他に比べてやや肩の張る傾向がある。

壺形土器A 2 (53・55・91・94・120・121) 口唇部に刻みが施されないものである。91・94では肩部で最大径を測る。

高坏形土器B (21・22・24・27・47・48・49・50・86・88・90・117) 47の土器が典型である。坏部はやや内湾するが直線に近い形状で開き、口縁部は水平よりやや上向きにのび、折り返し部分が厚味のない断面長方形を呈する。口唇部には梢円形浮紋や刻みが施される。脚部は直線的に裾部にいたり、裾部で屈曲して開く。外血では屈曲が明瞭に観察できるが、内血はゆるやかなカーブをなす。脚上部には段を作ら櫛羽状刺突紋が施される。裾部には紋様は観られず、ハケ整形痕が残る。27の裾部は屈曲が強くラッパ状に開く。

高坏形土器C (89) 確認されたのは1点のみである。器面が荒れが激しく説明は不明であるが、外血の一部に縦ヘラミガキが観られる。坏部との接合部から屈曲することなく直線的に開くものである。

S D—16出土土器

下層の砂層出土土器と上層の砂混り粘土出土土器を分けて説明する。出土点数は多かったものの、そのほとんどが破片であり、実測可能な土器は数点に限られる。

下層出土土器 (122~125・135・139・144・148~184)

臺形土器B (123・148・154・169~171・176・177) 拓影図の大部分はこの範囲と考えられるものである。実測図では123が1点あるのみである。123は口唇部をヘラによる縦位のS線列、口縁部内面はL Rの結節縦文地上に浮紋が貼付されている。口縁部しか残存していないので頸部以下の形態・紋様については不明である。拓影図を観る限りでは頸部紋様帯は肩部に集中し、段を有する櫛羽状刺突紋が全周するようである。中には円形浮紋の貼付されるものがある。154には櫛羽状刺突紋から下方にかけて櫛描沈線紋が垂下する。また170には櫛描波状紋が、171には扇形紋がみられる。縦文が施紋されるものもあり、176は付加縫紋が、177には疑似縫紋がみられる。169・170は頸部との境に櫛による沈線紋が施され、下位に扇形紋や刺突紋が付加される。148は厚い粘土紐が付加されて折り返し口縁をなすもので、口唇部と口縁部内側に櫛刺突斜線列が施されるもので時期的にはやや後出するものである。

臺形土器C 2 (122) 口縁部から頸部にかけてのもので、口縁部には斜めハケ、頸部は横ヘラミガキがみられる。口唇部はナデが施され、端部は平坦面をなす。口縁部内側は縦ヘラミガキで調整される。口縁部から頸部にかけては屈折するものの、内血ではゆるやかなカーブをなす。粘土は精選されており、焼成も堅微である。

臺形土器A 1 (144) 実測図が示されるのは144の1点だけである。頸部のくびれが弱く、胴部中央で最大径を測る形態をとる。

臺形土器A 2 (181・183) 拓影図181、183があるのみで良好な資料は出土していない。

臺形土器B (182) 口縁部に粘土紐が貼付され、あたかも折り返し口縁状を呈するもので182がある。肥厚した口縁部に櫛による刻みが施される。焼成、調整等ていねいで他の臺形土器とはやや異質の感じを受ける。

高坏形土器B

(135) 135は口唇部にL R縦紋が施紋されている。

高坏形土器C (139) 139の一点のみであり、胎土、器形、紋様表出技法より異質のものである。恐らく西方よりやや古い時期に搬入したものであろう。

上層出土土器 (126~134、136~138、140~143、145~147、185~221)

臺形土器B 1 (126・127・129) 頸部を中心とするもので口縁部を欠損することから、あるいは臺形土器Aに含まれるかもしれないが、該期のものに単純口縁の臺形土器が圧倒的に少ないと、口縁

部内側に文様帶をもつものがあること等により本類とした。126は頸部縦ハケ後縦ヘラミガキをし、肩部には櫛刺突横線文を3条めぐらした下方にL R 繩紋が2段施されているもので、口縁部内面にもL R 繩紋がみられる。127はL R 結節繩紋が2段、肩部にめぐる。

壺形土器B 2 (128・187) 個体数は多いものの実測し得たものは128の1点である。口唇部には浮紋が付き、口縁部はハケ調整、頸部はハケ調整後縦ヘラミガキが施される。口縁部内側はL R 繩紋が3段にわたって施される。187の口縁部内側にはL R 繩紋地上に扁形紋が施されている。胴部紋様としては肩部に櫛羽状刺突紋が多く、大形円形浮紋(193-199)や絹円形浮紋(194・205)の貼付されるものがある。刺突紋の下位には櫛描波状紋の施されるもの(205)もある。また櫛描横線紋が頸部との境に施され、その下位に扁形紋が付加されるもの(206, 207)がある。

壺形土器C 1 (130~132) 口縁部が直立し、棒状浮紋が貼付される。131の一部と132は棒状浮紋が剥脱しているが、痕跡が残る。131は斜めに貼付されている。器面の荒れが激しく調整の観察が困難であるが、130では口縁部、頸部にハケ調整が認められる。

小型壺形土器D (134) 口径11.8cmの小型壺で頸部で屈曲してやや内湾する口縁部にいたる。頸部内側では明瞭な稜が作られる。口唇部はナデによって内側に突出する。口頭部内面は横ナデ調整がみられる。他に小型壺形土器は133がある。頸部から胴上半部にかけてのもので、胴上半、頸部との境には櫛による沈線紋が6条めぐり、その下に櫛羽状刺突紋が施される。頸部には縦ハケが残る。内外面共に赤彩されている。

壺形土器A 1 (215・218~220) 口唇部がナデによって面をなすのに対して215は口唇部が尖り、ヘラによる刻みが施される。また口頭部は綻ないしは斜めのハケ調整が一般的であるが、215は横方向にナデられている。220は口唇部がやや外側に突出する。

壺形土器A 2 (216・217・221) 216の口頭部はハケ調整が鋸歯状に行なわれている。217の口頭部はやや内湾するものである。

高坏形土器B (136・213・214) 136は口唇部及び口縁部にうすいハケ目が残るが、内面はていねいな縦ヘラミガキが施されている。214は脚端部の破片で、縦のハケ調整後細い棒状工具による鋸歯紋が施される。他に脚部と坏部の接合部である138がある。内外面共に縦ヘラミガキが施され脚上部には櫛羽状刺突紋がみられる。

S D-39II七十器

225は高坏形土器C類である。器面の荒れが著しく調整については不明である。裾が広がり外面においては脚端部の屈曲がみられるが、内面はゆるやかな山線で、端部にいたる。

226は壺形土器A 1類である。口唇部下端に刻みが施され口頭部では縦位の、胴部では斜位のハケ調整がなされている。

S D-82出土上器

壺形土器B 2 (229・234) 229は口縁部に断面長方形の粘土紙を貼付し、幅の広い口唇部を作り出している。口唇部には櫛による鮫歯紋が施される。また口縁部内側にも同一工具による同一施紋がなされる(232・234)。232は口径22.6cmを測る。口縁部内側にL R 繩紋が施紋される。234は口唇部下端に刻みが施され口縁部にはL R 繩紋、口縁部内側にはR L 繩紋がそれぞれ横方向に回転施紋されている。この種の上器で口縁部に紋様をなすのは珍しい。他に胴部破片として櫛描波状紋のみられる233、櫛羽状刺突紋上に円形浮紋の付される235等がある。

高坏形土器B (232)

他に237の坏部で屈折する部分が出土している。

壺形土器A 1 (239)

壺形土器A 2 (238)

S K - 5 出土土器

壺形土器B 1 (240) 頸部が直線的に立ち上る。肩部にはヘラによる羽状刺突紋がめぐる。口縁部内側には横ハケがみられる。

他に形態は不詳であるが、245のように肩部に櫛描横線紋、その下部に櫛描波状紋の施されるものや、口縁部内側に扇形紋(246)、ループ紋(247)の施されるものがある。

高坏形土器B (244) 口径35.6cmと当遺跡では最大の大きさである。口唇部には浮紋が貼付され、下部に刻み目が付く。口縁部でやや肥厚するため図面では段差がつくようになり、その部分にハケ口が残る。

壺形土器が一個体あったが、器面の荒れが著しく接合はできなかった。

以上のように溝4条、上坑1基より出土した土器について述べた。各形態の特徴より時期的には後期後半のものが圧倒的な主体を占める。ただし他地域より搬入されたと思われる土器も少量認められた。例えば小型壺形土器Aの7や同じくDの44、同じくEの134、高坏形土器Cの139等である。いずれもその源は西へ求めることができる。そして44はより後出のものであり、139は前段階のものであろう。

以上概述した5遺構のうち、特に出土遺物の多かった4遺構について器種構成をまとめると次のとおりである。各器種の基準は、壺は実測図で掲載したもの以外は底部で、壺は台部で、高坏は脚部での数を集計したものである。構成比率をみると、壺、壺、高坏はそれぞれ58.4%、24.7%、16.9%となり約6:2.5:1.5となる。これは土橋遺跡のものと比較すると、高坏は同率ながら、やや壺の値が高い傾向となるが、・遺跡の保有量としては標準といえるだろう。

第4表 弥生土器器種構成比率表

遺構	器種	壺	壺	高坏	合計
S D-14		68	22	12	102
S D-16(下層)		9	5	5	19
S D-16(上層)		12	11	7	30
S D-82		10	5	5	20
S K-5		5	1	1	7
合計		104	44	30	178
比率		58.4%	24.7%	16.9%	

第5表 弥生土器観察表

標番 番号	出土位置	分類	法 量			胎土・焼成・色調	調整・紋様	備考
			K口徑	W最大径	H高さ			
42	3	S D-11				胎土 小石粒を多量に含む、かつ色絆を含む 焼成 不良 色調 淡褐色	紋様 肩部は櫛押圧沈線紋下に櫛羽状刺突紋と円形浮紋	頭部完存
	4	S D-14	I-B ₂	K 17.1 H (9.5)		胎土 赤色粒子、小石粒を含む 焼成 良好 色調 明茶色	調整 口肩部は斜めハケ、頸部は斜めハケ後縁ヘラミガキ 紋様 口唇部下端にヘラ刺み、肩部は櫛羽状刺突紋、口縁部内面は櫛描波状紋	肩部以下を欠損
	5	S D-14	I	H (10.3) W 7.9		胎土 小石粒を多量に含む 焼成 良好 色調 明茶色	調整 器皿が荒れているため観察不可 紋様 肩部は櫛羽状刺突紋	頭部～肩部残存
	6	S D-14	II-A	K 10.2 H 10.8 W 11.0 T 5.9		胎土 径1～2mm程度の砂粒を多量に含む(赤色粒含む) 焼成 良好 色調 灰褐色	調整 口肩部は横ハケ後縁ヘラミガキ、頸部～肩部は横ハケ後縁ヘラミガキ、胴下半部は横ヘラミガキ、口縁部内面は横ヘラミガキ、肩部は斜めハケ後ナデ	口縁部から弱欠損、器皿荒れ著しい
	7	S D-14	II-A	K 9.3 H 8.7 W 10.7 T 5.0		胎土 赤色粒、小石粒を多量に含む 焼成 良好 色調 白褐色	調整 口肩部はナデ、口縁部は継ハケ、胴部は継ヘラミガキ、内面は横ナデ	完形
	8	S D-14	II-A	K 10.0 H 12.9 W 11.0 T 5.7		胎土 小石粒、赤色粒を多量に含む 焼成 良好 色調 明茶白色	調整 器皿が荒れているため不明 紋様 肩部は櫛羽状刺突紋	口縁部の少欠損、頭部より頸部・底部にかけて黒斑
	9	S D-14	I-A ₁	K 20.3 H 35.1 W 27.6 T 8.8		胎土 径1～2mmの砂粒を含む 焼成 良好 色調 暗黄褐色	調整 口肩部はナデ、口縁部は斜めハケ、頸部は継ヘラミガキ、胴部上半は継ハケ、下半は横ヘラミガキと斜めヘラミガキ、内面はナデ 紋様 肩部は櫛羽状刺突紋	口縁部の少欠損
	10	S D-14	I	H (8.7)		胎土 径1～3mmの砂粒及び赤色粒を多量に含む 焼成 良好 色調 淡褐色	調整 頸部はヘラミガキ、内面はナデ 紋様 肩部はヘラミガキ突紋上に浮紋	頭部のみ完存
	11	S D-14	I	H (4.6) T 8.0		胎土 若干の赤色粒及び径1～3mmの砂粒を多量に含む 焼成 良好 色調 灰褐色	調整 ヘラミガキ？、内面はナデ	底部完存、胴部下半少欠損
	12	S D-14	III-A	H (8.2)		胎土 小石粒を多いに含む 焼成 良好 色調 淡褐色	調整 器皿が荒れているため不明	台部のみ残存
43	13	S D-14	I-C ₂	K 19.7 H (29.5) W 25.0 T 7.5		胎土 径1～2mmの砂粒及び赤色粒を多量に含む 焼成 良好 色調 外一明黄褐色、内一暗褐色	調整 胴部上半は斜めハケ、下半は横ヘラミガキ 紋様 口唇部はしR細紋、肩部は櫛羽状刺突紋	口縁部及び胴部下半の一部をそれぞれ欠損

地図 番号	番号	出土位置	分類	法 KIJ種 H高さ W最大径 T底径	胎土・焼成・色調	調整	調整・紋様	備考
43	14	S D-14	I-B ₂	K 20.1 H (21.8)	胎土 赤色 良好 色調 淡赤褐色	径1~2mmの砂粒及び 赤色を多量に含む	調整 頭部は縦ヘラミガキ、肩部は ヘラミガキ?、内面は口縁部 でヘラミガキ、肩部は横ハケ 後ナデ	口縁部分、胸 部上半及び 肩部下半以下 欠損
	15	S D-14	I	H (12.7)	胎土 小石粒を含む 焼成 良好 色調 淡褐色	調整 頭部は縦ヘラミガキ、 肩部は横ハケ 後ナデ	口縁部下端はヘラ刻み、肩部 はヘラ羽状刻突紋	口縁部と肩下 半を欠損
	16	S D-14	I	H (5.6)	胎土 小石粒を多量に含む 焼成 良好 色調 淡褐色	調整 頭部は縦ヘラミガキ 紋様	頭部は縦ヘラミガキ 肩部は横羽状刻突紋	頭部~肩部の み残存
	17	S D-14	I-B ₂	K 18.4 H (9.0)	胎土 赤色粒、小砂粒含む 焼成 良好 色調 明茶褐色	調整 頭部の荒れで頭部の一部に横 ハケが残る 紋様 口唇部内面にRしとしRの羽 状雫紋	器面の荒れで頭部の一部に横 ハケが残る 口唇部内面にRしとしRの羽 状雫紋	口縁部分を欠 く
	18	S D-14	I-B ₂	K 14.8 H (6.9)	胎土 赤色粒、小石粒含む 焼成 良好 色調 明茶褐色	調整 頭部は横ハケ、頸部は縦ハ ケ後ナデ? 内面は横ハケ後 ヘラミガキ	口縁部内に一段の崩形紋	口縁部分を欠損
	19	S D-14	I-B ₂	K 14.4 H (4.7)	胎土 赤色粒、小石粒を多量 に含む 焼成 良好 色調 白茶色			口縁部分を残存
	20	S D-14	I-B ₂	K 14.5 H (5.7)	胎土 径1~2mmの砂粒を多 量に含む 焼成 良好 色調 外一黄褐色、内一淡褐 色	調整 頭部はナデ、頭部は縦ハケ 後ナデ	頭部一光 口縁部分欠損	
44	21	S D-14	I-B ₂	K 16.9 H (3.9)	胎土 白色粒、小石粒を多量 に含む 焼成 良好 色調 淡黄褐色	調整 頭部はナデ、頭部は縦ハケ 後ナデ	口縁部分を残存	
	22	S D-14	I-B ₂	K 18.0 H (5.4)	胎土 赤色粒、小石、小砂粒 含む 焼成 良好 色調 外一明茶褐色、内一薄 黒褐色	調整 頭部は縦ハケ、頭部は縦 ハケ後ナデ?	口縁部分を残存	
	23	S D-14	III-A	H (10.3)	胎土 赤色粒、小砂粒多量に 含む 焼成 良好(脆い) 色調 明茶褐色(黒斑有)	調整 斜めのハケ、内面はナデ?	削下半部と台 部若干残存	
	24	S D-14	IV-B	K 26.0 H (4.0)	胎土 小石粒を多量に含む 焼成 良好 色調 赤茶色	調整 口縁部、頭部にハケ		
	25	S D-14	II	H (5.4) W 9.6 T 5.3	胎土 赤色粒、小石粒を含む 焼成 良好 色調 白褐色		口頭部を欠損	
	26	S D-14	III-A	H (7.2)	胎土 赤色粒、小石粒を含む 焼成 良好 色調 暗褐色	調整 一部に横ハケ残る	台部上半残存	

標	番	出士位置	分類	法 長口徑 H高さ	量 W最大径 T底径	胎土・焼成・色調	調整・紋様	備考
44	27	S D-14	IV-B	H (14.8)		胎土 赤色粒、小砂粒含む 焼成 良好 色調 棕褐色	調整 縦のヘラミガキで糊は横へラミガキ、内面はナデで瓶部はハケ後ナデ 紋様 上部に櫛羽状刺突紋	瓶部のみ残存
	28	S D-14	III-A ₁	K 26.2 H (6.3)		胎土 小石粒を多量に含む 焼成 良好 色調 明茶色	調整 II頭部は縦ハケ、胴部は斜めのハケ、I頭部内面は横ハケ 紋様 口唇部下端にハケ刺突紋	I頭部部分残存
	29	S D-14	II-A ₁	K 20.0 H (4.5)		胎土 砂粒を多量に含む 焼成 良好 色調 白褐色	調整 II頭部は縦ハケ、I頭部内面は横ハケ 紋様 口唇部下端にハケ刺突紋	I頭部部分残存
	30	S D-14	III-A	W 16.6		胎土 小砂粒多量に含む 焼成 良好 色調 淡褐色	調整 器面が荒れているが全面ハケと思われる	胴部下位、台部上位残存
45	37	S D-14	I-B ₁	H (33.0) W 27 T 8.7		胎土 小石粒を多量に含む 焼成 良好 色調 淡褐色	調整 頭部は縦ハケ、胴部上半は縦ハケで中央は斜めハケ、下半は横へラミガキ、内面は頭部と底辺部にハケが残る以外はナデ 紋様 脇部に櫛羽状刺突紋、口縁部内面はR字彫文	口縁部を欠損
	38	S D-14	I-B ₂	K 20.3 H (6.0)		胎土 赤色粒、小砂粒含む 焼成 良好 色調 赤褐色	調整 頭部は縦ハケ、内面は横ハケ 紋様 口唇部は9一本単位の棒状浮紋	口縁部強残存
	39	S D-14	I-B ₂	K 19.5 H (8.6)		胎土 赤色粒、小砂粒含む 焼成 良好 色調 明褐色	紋様 口縁部に棒状浮紋	口縁部強残存
	40	S D-14	I-B ₁	K 18.4 H 9.0		胎土 赤色粒、砂粒、小石多量に含む 焼成 不良 色調 外一灰白色、内一黃褐色	調整 器面荒れのため不明、I口縁部内面に一部ハケが残る 紋様 II脇部に棒状浮紋	口縁部欠損
	41	S D-14	I-B ₁	K 18.3 H (7.6)		胎土 赤色粒含む、砂粒小石含む 焼成 不良 色調 外一赤みがかった灰白色(赤橙色)、内一灰褐色	調整 内外面共にハケ	I頭部残存
	42	S D-14	I-A ₁	K 12.7 H 9.0		胎土 赤色粒、小石粒を含む 焼成 良好 色調 黒褐色	調整 口頭部は縦へラミガキ、胴部はヘラミガキ?、内面は口縁部でヘラミガキと思われる以外はナデ 紋様 II脇部にヘラ刺み、脇部にヘラ羽状沈線紋	口縁部強、胴部上半丸及び脇部を欠損
	43	S D-14	I-B ₂	H (26.3) W 21.8 T 8.4		胎土 径1~2mmの砂粒及び赤色粒を多量に含む 焼成 良好 色調 外一明黄褐色、内一暗褐色	調整 頭部は縦ハケ後ナデ?、胴部は縦ハケ後中央部以下を横へラ刺り、内面は胴部底辺部までヘラナデ、それ以下をハケ	I頭部及び胴部下半の一端をそれぞれ欠損
	44	S D-14	II-C	K 26.3 H (13.7)		胎土 径1~2mmの砂粒を多量に含む(赤色粒含む) 焼成 良好 色調 明灰褐色	調整 横へラミガキ、内面はナデで底辺部は横ハケ後ナデ 紋様 櫛羽状刺突紋	口縁部欠損(他は完存)
46	45	S K-14	I	H (3.4) T 7.0		胎土 赤色粒、小砂粒含む 焼成 良好 色調 外一茶褐色、内一黑褐色	調整 内外面共にナデ?	底部のみ残存

備考欄	番号	出土位置	分類	法 H W T 底 高さ	量 胎土・焼成・色調	調整・紋様		備考
						胎 土	焼 成	
46	46	S D-14	I	H (4.0) T 11.9	胎土 赤色粒、小石、小砂粒 含む 焼成 良好 色調 外一薄黒褐色、内一黄褐色	調整 縦ハケ、内面は横ハケ		底部のみ残存
47	S D-14	IV-B	K 26.3 H (20.7)	胎土 径1~2mmの砂粒及び赤色粒を多量に含む 焼成 良好 色調 明褐色	調整 壊部は崩れて不明、脚部は縦ヘラミガキ、根部との境は横ヘラミガキ、内面はナデで擦痕に横ハケ		脚部の1/4欠損	
48	S D-14	IV-B	K 26.5 II (13.6)	胎土 径1~3mmの砂粒及び赤色粒を多量に含む 焼成 良好 色調 明褐色	紋様 腳上部に櫛の羽状刺突紋 調整 内外面共に縦ヘラミガキ 紋様 口唇部に浮紋、脚上部に櫛羽状刺突紋		環部下半の1/4 脚部上半のみ残存	
49	S D-14	IV	H (9.8)	胎土 小石粒を多量に含む 焼成 不良 色調 淡白茶色	紋様 腳上部に櫛羽状刺突紋			
50	S D-14	IV	H (12.0)	胎土 赤色粒を含む 焼成 良好 色調 赤茶褐色	調整 内面は縦位のヘラミガキ 紋様 腳上部に櫛羽状刺突紋		环部下位と脚部上位残存	
51	S D-14	III-A ₁	K 18.3 H (6.9)	胎土 赤色粒、小砂粒含む 焼成 良好 色調 茶褐色	調整 口頭部は縦ハケ、胴上半は横ハケ 紋様 口唇部下端に剝み		口縫部1/4残存	
52	S D-14	III-A	H (8.2)	胎土 径1mm程度の砂粒を含む 焼成 良好 色調 外一暗褐色、内一淡褐色	調整 台部上半は粗い縦ハケ、下半は細かい斜めハケ、内面はナデ		台部下半1/4、脚部下位1/4欠損	
53	S D-14	III-A ₂	K 24.0 H (9.5)	胎土 赤色粒及び径1mmの砂粒を多量に含む 焼成 良好 色調 淡褐色	調整 全面ナデ、内面は口縫部に横ハケ、胴部はハケ後ナデ		口縫部径の1/4残存	
54	S D-14	III-A	H (6.0)	胎土 小砂粒含む 焼成 良好 色調 外一茶褐色、内一赤褐色	調整 縦ハケ		台部のみ残存	
55	S D-14	III-A ₂	K 18.3 H (6.9)	胎土 白色粒及び小砂粒含む 焼成 良好 色調 黒褐色	調整 口唇部は横ハケ、口頭部は縦ハケ、胴上半は横ハケ、内面は口縫部で横ハケ		口縫部1/4残存	
56	S D-14	III-A	H (6.1)	胎土 径1mmの砂粒を多く含む 焼成 良好 色調 灰褐色	調整 全面ナデ、内面は上部に斜めハケ、下部はナデ		台部完存	
57	S D-14	III-A	H (6.2)	胎土 赤色粒、小砂粒含む 焼成 良好 色調 外一薄橙褐色、内一薄黑褐色			台部のみ残存	
47	58	S D-14	I-A ₁	K 14.3 H (10.5)	胎土 径2mm程度の砂粒及び赤色粒を多量に含む 焼成 良好 色調 淡赤褐色	調整 口頭部はヘラミガキと思われる、内面はナデ 紋様 腕部にヘラ羽状刺突紋		口縫部1/4のみ残存、頸部のみ完

測定番号	番号	出土位置	分類	量			胎土・焼成・色調	調整・紋様	備考
				K	W	H			
47	59	S D-14	I-A	K H	11.9 (6.0)	胎土 焼成 色調	径1~3mmの砂粒を多 く含む 良好 淡褐色	調整 口唇部は横ハケ後ナデ、口頭 部は縦ハケ後ナデ?	口頭部完存
	60	S D-14	I-A ₂	K H	13.0 (6.9)	胎土 焼成 色調	赤色粒、小砂粒含む 良好 外一楕褐色、内一暗褐色 (頭部以下黒褐色)	調整 頭部上半は斜めハケ、下半は 縦ハケ後縦ヘラミガキ、口縫 部内面は横ハケ後横ヘラミガ キ	口縫部1/2と頭 部残存
	61	S D-14	I-B ₂	K H	18.0 (7.2)	胎土 焼成 色調	径1mm程度の砂粒を多 く含む 良好 灰褐色	調整 口縫部は斜めハケ、頸部は縦 ヘラミガキ、内面は横ハケ後 ナデ 紋様 口唇部下端にハケによる刺み	口縫部径の1/2 残存
	62	S D-14	I-B ₂	K H	16.9 (5.9)	胎土 焼成 色調	径1~3mm程度の砂粒 及び赤色粒を含む 良好 楕褐色	調整 口縫部は斜めハケ、頸部はナ デ、内面口縫部は横ハケ、頸 部はナデ	口縫部径の1/4 残存
	63	S K-14	I-B ₂	K H	17.2 (8.6)	胎土 焼成 色調	赤色粒、小砂粒含む 良好 明茶褐色	調整 口縫部は横ハケ、頸部は縦ヘ ラミガキ 紋様 口唇部下端にハケ刺突	口縫部1/2欠損
	64	S D-14	I-B ₂	K H	18.3 (5.5)	胎土 焼成 色調	小石粒を含む 良好 灰褐色	調整 口縫部は横ハケ後縦ハケ、頸 部は縦ハケ後ナデ、口縫部内 面は横ハケ 紋様 口唇部下端にハケ刺突、口縫 部内面に櫛齒波状紋	口縫部の1/4残 存
	65	S D-14	I-B ₂	K H	13.8 (7.3)	胎土 焼成 色調	径1~2mmの砂粒及び 赤色粒を多量に含む 良好 外一褐色、内一灰褐色	調整 口縫部はナデ、頸部は縦ヘラ ミガキ?、内面はナデ?	口縫部の1/2、 頸部の1/4を欠 損
	66	S D-14	I-B ₃	K H	15.5 (7.9)	胎土 焼成 色調	赤色粒、小石粒含む 良好 明茶褐色	調整 横ハケ	口縫部1/2欠損
	67	S D-14	I-B ₂	K H	16.9 (9.6)	胎土 焼成 色調	赤色粒、小砂粒含む 良好 薄茶褐色	紋様 肩部は鶴羽状刺突紋	口縫部のみ完 存
	68	S D-14	I-B ₂	K H	20.2	胎土 焼成 色調	砂粒多量に含む 良好 明茶褐色	調整 頸部は縦ハケ後ナデ 口縫部は縦位の沈線、内面は 縦位の沈線列下に櫛齒波状紋 紋様	口縫部~頸部 1/2残存
	69	S D-14	I-B ₂	K H	12.9 (6.8)	胎土 焼成 色調	赤色粒、小砂粒含む 良好 明茶褐色	調整 口縫部は斜めハケ後ナデ、頸 部は縦ハケ後縦ヘラミガキ、 内面はハケ後ナデ 紋様 肩部に鶴羽状刺突紋、内面に 櫛齒波状紋	口縫部1/2を欠 損
	70	S D-14	I-B ₂	K H	12.9 (7.0)	胎土 焼成 色調	小石粒、楕褐色粒を多 量に含む 不良 白褐色	調整 口縫部は横ハケ後ナデ、頸部 は縦ハケ後縦ヘラミガキ、内 面は横ハケ 紋様 肩部は鶴羽状刺突紋	口縫部ほぼ完 存
	71	S D-14	I	H	(5.3)	胎土 焼成 色調	径1mmの砂粒及び赤色 粒を多量に含む 良好 淡褐色	調整 頸部は横ヘラミガキ、内面は ナデ 紋様 肩部は鶴羽状刺突紋に浮紋	肩部1/2残存

標識番号	番号	出土位置	分類	法 K H II W T 高さ 底面 直径 径	胎土・焼成・色調	調整・紋様	備考	
							胎土	焼成
48	72	S D-14	I-C ₁	K 19.7 H 5.1	胎土 赤色粒、小石粒を多量に含む 焼成 良好 色調 淡褐色	調整 紋様		口縁部%残存
	73	S D-14	I-B ₂	K 19.5 H 34.5 W 27.1 T 9.0	胎土 径1~2mmの砂粒及び赤色粒を多量に含む 焼成 良好 色調 外-淡褐色、内-灰褐色	調整 紹様	口縁部はナデ、頸部は縦ヘラミガキで肩部との境は横ヘラミガキ、胴部はハケ後ナデ、内面はハケ後ナデ 口縁部下端にハケ刺突紋、肩部はヘラ状刺突紋	胴部下半欠損
74	S D-14	I	H (10.5)		胎土 小石粒を多量に含む (赤色粒有り) 焼成 良好 色調 淡褐色	調整 紹様	肩部は柳羽状刺突紋	口縁部、胴部欠損
75	S D-14	I	H (6.9)		胎土 小石粒を多量に含む 焼成 良好 色調 淡褐色	調整 紹様	内面はナデ 肩部は柳羽状刺突紋上に円形浮紋	肩部%残存
76	S D-14	I	H (8.7)		胎土 小石粒を多量に含む 焼成 良好 色調 明茶色	調整 紹様	頸部は縦ハケ、内面は横ハケ 肩部は柳羽状刺突紋	頭部のみ完存
77	S D-14	I	H (7.1)		胎土 赤色粒、小石粒を多量に含む 焼成 良好 色調 明茶色	調整 紹様	肩部は柳羽状刺突紋	
78	S D-14	I	H (16.8) T 14.0		胎土 小石粒を多量に含む、白色粒を含む 焼成 良好 色調 白褐色	調整	内外面共にハケ目	胴下半部残存
79	S D-14	I	H (3.5) T 7.3		胎土 径2mm程度の砂粒を多く含む 焼成 良好 色調 外-灰褐色、内-淡灰色	調整	横ヘラミガキ、内面は上部でハケ後ナデ、下部はハケ目	底辺部のみ残存
80	S D-14	I	H (3.8) T 7.0		胎土 径1mmの砂粒を多量に含む 焼成 良好 色調 灰褐色	調整	縦ハケ後横ヘラミガキ、内面はナデ	底辺部のみ残存
81	S D-14	I	H (3.6) T 8.0		胎土 赤色粒、小砂粒含む 焼成 良好 色調 外-明褐色(黒斑有り)、内-灰白色	調整	斜位のヘラミガキ、内面はナデ	底部残存
82	S D-14	I	H (3.7) T 12.6		胎土 赤色粒、小石粒含む 焼成 良好 色調 外-黒褐色、内-橙褐色	調整	縦ハケ、内面はナデ	底部%残存
49	83	S D-14	II	H (11.1) W 13.1 T 5.6	胎土 小石粒を多量に含む 焼成 良好 色調 外-白褐色、内-淡黑色	調整	胴部上半にハケ状工具で凹部をつくり、他はヘラミガキ、内面はナデ、底辺部にハケ目残る	口頭部欠損 (他は完存) 外面に朱
	84	S D-14	II	H (4.6) T 5.7	胎土 赤色粒及び径1mm程度の砂粒を多量に含む 焼成 良好 色調 外-灰褐色、内-褐色	紹様 調整	頭部に柳羽状刺突紋 上半は縦ヘラミガキ、下半は横ヘラミガキ、内面は上半はナデ、下半は斜めハケ	底部完存、胴部下半%欠損

地図 番号	番 号	出土位置	分類	法 KU径 H高さ	量 W最大径 T底径	胎土・焼成・色調	調整・紋様	備考
49	85	S D-14		H (6.0)		胎土 程1~2mmの砂粒及び赤色粒を含む 焼成 良好 色調 外一淡褐色、内-暗灰色	調整 腹部は横ヘラミガキ、内面はナデ 紋様 脚部は柳羽状刺突紋	脚部残存
	86	S D-14	IV-B	K 23.8 H (4.0)		胎上 程1~3mm程度の砂粒及び赤色粒を多量に含む 焼成 良好 色調 淡褐色 胎土 赤色粒、小石含む 焼成 良好 色調 明るい褐色	調整 内外面共に横ヘラミガキ 紋様 内面に柳羽状刺突紋	口縁部弦の残存
	87	S D-14	IV	H (5.0)		胎土 赤色粒含む 焼成 良好 色調 淡褐色 胎土 赤色粒、小石含む 焼成 良好 色調 明るい褐色		脚上端部のみ完存
	88	S D-14	IV	H (5.0)		胎土 赤色粒含む 焼成 良好 色調 明るい褐色	紋様 脚上部に柳羽状刺突紋？	脚部上位のみ残存
	89	S D-14	IV-C	H (9.1)		胎土 赤色粒、小石含む 焼成 良好 色調 橙褐色	調整 横ヘラミガキ？	脚部完存
	90	S D-14	IV	H (11.4)		胎土 程1~3mmの砂粒を多量に含む 焼成 良好 色調 淡褐色	調整 横ヘラミガキ、内面は上部でナデ、下部で紙ヘラナデ 紋様 柳羽状刺突紋	脚部は下位を除き完存
	91	S D-14	III-A ₂	K 38.1 H (7.5) W 36.9		胎土 小石粒を多量に含む 焼成 良好 色調 黒褐色	調整 口頭部は縦ハケ後一部ナデ、副部は横ハケ、内面の口頭部は横ハケ	口縁部弦の残存
	92	S D-14	III-A ₁	K 16.9 H 4.4		胎上 程2mm程度の砂粒を多く含む 焼成 良好 色調 淡褐色	調整 口脣部はナデ、脚部は縦ハケ後ナデ、内面はナデ 紋様 口脣部下端にハケ刻み	口縁部弦の残存
	93	S D-14	III-A ₁	K 22.6 H (8.3)		胎土 若干の褐色粒及び多量の砂粒(程1~2mm)を含む 焼成 良好 色調 淡褐色 胎土 赤色粒、小石粒を多量に含む 焼成 良好 色調 赤茶色	調整 口頭部に縦ハケの痕跡がある以外は不明 紋様 口脣部下端に刻み	口縁部弦の残存
	94	S D-14	III-A ₂	K 22.2 H (10.2) W 23.2		胎土 赤色粒、小石粒を多量に含む 焼成 良好 色調 淡褐色 胎土 赤色粒、小石粒を多量に含む 焼成 良好 色調 赤茶色	調整 脚部にハケ目、内面は口縁部で横ハケ、脚部はナデ	
	95	S D-14		H (17.2)		胎土 赤色粒、小砂粒 焼成 良好 色調 明るい褐色	調整 縦ハケ後ヘラミガキ、内面は環部でヘラミガキ？、脚部で横ハケ後ナデ	脚部完存、环部下半部若く残存
	96	S D-14	III-A	H (7.4)		胎土 白色粒、小石粒を含む 焼成 良好 色調 白褐色	調整 縦のハケ目	台部のみ残存
	97	S D-14	III-A	H (6.8)		胎土 程1~2mmの砂粒を多く含む 焼成 良好 色調 淡褐色	調整 ナデ、内面は脚部はナデで台部はハケ目	台部下半弦欠損

標印番号	番号	出土位置	分類	法 K口径 H高さ		量 W最大径 T底径	胎土・焼成・色調	調整・紋様		備考
				口径	高さ			絞	絞	
51	122	S D-16	I-C ₂	K H	23.8 (5.5)	胎土 焼成 色調	精選された粘土使用 良好 白褐色	調整 絞	II縁部上端にナデ、頭部は横 ヘラミガキ、内面は縦ヘラミ ガキ	台部下半分欠 損
	123	S D-16	I-B ₂	K H	20.0 (2.4)	胎土 焼成 色調	径1~2mmの砂粒を含む が比較的少ない 良好 灰褐色	調整 絞	頭部に縦ハケ 口唇部はヘラ刺突紋、内面は L Rの結節繩文2段以上に円形 浮紋	口縁部径の少 存
	124	S D-16	IV-A	K H	24.0 (3.7)	胎土 焼成 色調	小砂粒を含む 良好 白褐色	調整 絞	内面はハケ後ナデもししくはヘ ラミガキ、坏部は横ヘラミガ キ 口唇部下端はヘラ刻み	口縁部少存
	125	S D-16	(I-C ₁)	K H	20.4 (3.9)	胎土 焼成 色調	小砂粒を含む 良好 白褐色	調整	口唇部は横ハケ	口縁部少存
	126	S D-16	(I-B ₁)	H	(8.4)	胎土 焼成 色調	径1~3mmの砂粒及び 赤色粒を含む 良好 淡褐色	調整 絞	頭部上半は斜めハケ、下半は 縦ハケ後縦ヘラミガキ、内面 は横ハケ ハケによる押庄沈拂紋下にし R繩紋、内面にもしR繩紋	頭部のみ完存
	127	S D-16	(I-B ₁)	H	(5.8)	胎土 焼成 色調	径1~3mmの砂粒及 び赤色粒を含む 良好 外一淡褐色、内一明 褐色	調整 絞	頭部は横ヘラミガキ、内面は 一部に横ハケが、他は横ハケ 後ナデ 肩部にL Rの結節繩文2段	頭部の少存
	128	S D-16	I-B ₂	K H	17.3 (7.6)	胎土 焼成 色調	径1~3mmの砂粒を多 量に含む 良好 暗褐色	調整 絞	頭部上半は縦ハケ、頭部下半 は縦ヘラミガキ、内面はハケ 後ナデ 口唇部に棒状浮紋、II縁部内 面は輪紋(しR)	口縁部は80% 程度残、但し II縁折り返 部は、はゞ完 存
	129	S D-16	I-B ₁	H	(7.3)	胎土 焼成 色調	赤色粒、小砂粒を含む 良好 明茶褐色			頭部のみ残存
	130	S D-16	I-C ₁	K H	26.2 (5.5)	胎土 焼成 色調	赤色粒、小石粒を多量 に含む 良好 淡褐色	調整 絞	II頭部にハケ目 口唇部に棒状浮紋	口縁部少存
	131	S D-16	I-C ₁	H	(6.6)	胎土 焼成 色調	赤色粒、小石粒を多量 に含む 良好 褐色	絞	口唇部に棒状浮紋	
	132	S D-16	I-C ₁	K H	23.3 (5.5)	胎土 焼成 色調	赤色粒、小石粒を多量 に含む 良好 淡褐色	絞	口唇部に棒状浮紋	口縁部少存
	133	S D-16	II	H	(5.0)	胎土 焼成 色調	小石粒を多量に含む、 金雲母が若干含まれる 良好 白褐色	調整 絞	頭部は縦ハケ、胴部はナデ、 内面はナデ 肩部に鶴による横線紋と羽状 刺突紋	少存、表面 に朱
	134	S D-16	II-D	K H	12.1 (3.1)	胎土 焼成 色調	小石粒を多量に含む 良好 淡褐色	調整	II頭部は内外面共に横ナデ	

番号	出土位置	分類	法 K11径 H高さ	量 W最大径 T底径	胎土・焼成・色調	調整・紋様		備考
						調整 紋様	坏部上端はハケ後ナデ 口唇部にL.R.繩紋	
51	135	S D-16	IV-B	K 24.9 H (2.9)	胎土 小石粒を多量に含む 焼成 良好 色調 黒褐色	調整 紋様	坏部上端はハケ後ナデ 口唇部にL.R.繩紋	
	136	S D-16	IV-B	K 27.9 H (4.3)	胎土 小砂粒を多量に含む 焼成 良好 色調 棕褐色	調整 紋様	口縁部から坏上部にうすいハ ケ目、内面は縦のヘラミガキ 口唇部下端にハケ刻み	口縫部%残存
	137	S D-16	III-A	H (10.5)	胎土 小砂粒含 焼成 良好 色調 暗茶褐色	調整	接合部にハケ目が残る	
52	138	S D-16	IV	H (10.2)	胎土 赤色粒含む 焼成 良好 色調 白褐色	調整 紋様	縦ヘラミガキ、内面の坏部に 縦ヘラミガキ 脚上部に櫛羽状刺突	脚上部～坏に かけて残存
	139	S D-16	IV-D	H (4.4)	胎土 小砂粒を含む 焼成 良好 色調 暗褐色	調整 紋様	内面にうすいハケ目 椭描輪齒紋と竹管連弧紋	脚端部%残存
	140	S D-16	IV-B	H (4.3)	胎土 小石粒、金雲母を含む 焼成 良好 色調 茶色	調整	内外面共にハケ目	脚下半%残存
141	S D-16	IV	H (6.4)	胎土 精選された粘土を使用 焼成 良好 色調 棕色	調整	内外面共にハケ目		脚下半%残存
	142	S D-16	IV	H (4.6)	胎土 小砂粒多量に含む、赤 色粒 焼成 良好 色調 明灰白色			坏部と脚部の 接合部残存
	143	S D-16	IV	H (7.0)	胎土 小砂粒 焼成 良好 色調 明茶褐色	調整	外面及び坏部内面は縦ヘラミ ガキ	脚部上半残存
144	S D-16	III-A ₁	K 16.4 H (6.4)	胎土 赤色粒、小石粒を多量 に含む 焼成 良好 色調 棕褐色	調整 紋様	頸部は斜めハケ後一部にナデ 胴部は横ハケ、内面は口頸部 に横ハケ 口唇部下端にハケ刻み	口縫部から脚 上部%残存	
	145	S D-16	III-A	H (5.7)	胎土 白色粒、小砂粒若干含 む 焼成 良好 色調 黄褐色	調整	ハケ目、内面はヘラナデ	台部のみ完存
	146	S D-16	III-A	H (7.5)	胎土 赤色粒、白色粒、小石 粒を含む 焼成 良好 色調 淡褐色	調整	縦のハケ目	台部のみ完存
147	S D-16	III-A	H (8.6)	胎土 白色粒、小石粒を多量 に含む 焼成 良好 色調 淡褐色	調整	縦ハケ目	台部のみ残存	

標示番号	番号	山土位置	分類	法 K口様 H高さ	量 W最大径 D底径	胎土・焼成・色調	調整・紋様	備考
54	225	S D-39	IV-B	H (9.0)		胎土 小石粒を含む 焼成 不良 色調 棕褐色		脚部分残存
	226	S D-39	III-A ₁	K 22.0 H (7.6)		胎土 赤色粒、小石粒を多量に含む 焼成 不良 色調 黒褐色	調整 ヘケ 紋様 口唇部下端に刻み	1/4残存
	229	S D-82	I-B ₂	K 24.0 H (6.3)		胎土 赤色粒、小石粒を多量に含む 焼成 良好 色調 棕褐色	調整 内面はハケ目 紋様 口唇部及び内面に棒による鋸歯紋	口輪部1/4残存
	230	S D-82	I	H (2.3) T 8.6		胎土 小砂粒含む 焼成 良好 色調 外一様褐色、内一灰白色	調整 縦ハケ後横ヘラミガキ、内面はナデ	底部のみ完存
	231	S D-82	I	H (2.7) T 8.0		胎土 赤色粒、小石粒含む 焼成 良好 色調 外一様褐色（黒斑有） 内、灰白色	調整 横ヘラミガキ、内面はナデ	底部1/4残存
	232	S D-82	IV-B	K 22.8 H (4.0)		胎土 白色粒、小石を多量に含む 焼成 良好 色調 黑褐色	調整 内面に横ハケ 紋様 口唇部下端はヘラ刺み、内面はL R 繩紋	口輪部1/4残存
55	S K-5	(I-B ₁)		H (14.6)		胎土 小石粒、棕褐色粒を含む 焼成 不良 色調 黑褐色	紋様 脚部はヘラ羽状剥離紋	頭部～脚上半 が1/4残存
	241	S K-5	I	H (2.3) T 7.2		胎土 普通 焼成 普通 色調 棕褐色		
	242	S K-5	I	H (3.2) T 8.4		胎土 良好 焼成 棕褐色 色調	調整 内外面共にハケ目	
	243	S K-5	I	H (5.4) T 6.8		胎土 白色粒、小石を含む 焼成 普通 色調 白褐色		
	244	S K-5	IV-B			胎土 径1mm程度の砂粒を含むが比較的少ない 焼成 良好 色調 暗褐色	調整 頭部に斜めハケ目、杯部及び内面はヘラミガキ 紋様 口唇部に5本1組の棒状浮紋、 口唇部下端にハケによる刻み	口輪部1/4残存
	249		I-C ₂	K 29.0 H (9.0)		胎土 赤色粒含む、砂粒、細砂粒多く含む 焼成 不良 色調 外一黄褐色、内一灰白色 黄色	調整 口唇部の一部にハケ目が残る	口輪部1/4残存
	250	S D-45	III-A	H (6.0)		胎土 径2mm程度の砂粒を含む 焼成 良好 色調 赤褐色	調整 内外面共にナデ	1/4残存
	251	S K-14	III-A	H (8.5)		胎土 小砂粒含む 焼成 良好 色調 薄褐色	調整 縦ハケ	台部のみ1/4残存

第2節 古墳時代の土器

古墳時代の土器には須恵器と土師器がある。その大部分の資料には S D—109、S X—12からの出土であり、他に S K—39・40があげられる。図示した資料は須恵器が36点、土師器が6点と少ないが、図示可能なものは全て載せている（第56・57図）。

須恵器 器種別には壺身、壺蓋・高坏・翫・短頸壺、甕がある。

壺身は口径が8.5～10.5cm、器高さが3.0～4.0cmのものと、口径が11.0cm、器高さが4.0cmを超えるものとある。また後者は受け部の立ち上りの形態によってさらに二分される。前者をA類・後者をそれぞれB1類、B2類とする。

A類（252、255、261～263、274～277、280～282）；B1類（279）；B2類（264）；受部は長く内傾するが、内傾の度合いが強くあまり上には突出しない。276を除く他のものは体部の3分の1までを回転ヘラ削り調整する。

B1類；受部は長く内傾するが、A類程内傾の度合いが強くないのでかなり突出する、体部のヘラ削りはA類と同様3分の1位である。

B2類；受け部はやや内傾するが上に突出し受け部と体部との比率が1：1に近くなる。体部の回転ヘラ削りもかなり上方まで行なわれる。

壺蓋は口径が9.0～11.0cmのものと12.0cm前後のものとがある。前者をA類、後者をB類とする。

A類（257、259、265～269、283～285）；やや偏平な半球形をしたものである。口縁部がゆるやかに内湾するもの（257、259、265～268）と体部と口縁部との境界に沈線がめぐるもの（269、283、284）と同じく内面に沈線のめぐるもの（285）がある。体部の回転ヘラ削りはいずれも3分の1程である。

B類（256、286）；体部と口縁部の境界が屈折するもの（256）と沈線のめぐるもの（286）とがある。いずれも回転ヘラ削りは体部の3分の1程である。

高坏（281、289）はS X—12で脚部のみ2点出上している。短脚で通しは無い。

翫（290）はほぼ完形に近くS X—12で出土している。口縁部は外反し、頸部との境に沈線がめぐる。頸部は短かく肩部は2条の沈線がめぐる。ヘラ削り調整は穿孔の下部までおよぶ。

短頸壺（271）はS K—38より完形に近い状態で出土している。高さは20.2cm、口径9.2cmと測る。胴部には球形にして底部は丸底である。胴下半部には細かいカキ目が残る。回転ヘラ削りも胴部中央付近まで施される。壺蓋A類と共に作る。

甕の破片は多く出土しているが、ここでは内面のタタキ工具に特徴的な紋様の残る2点を拓影図で示した。291、292は中心に8弁の花芯がありそれを同心円状に開いたものである。中央の同心円の直径は約2.2cmを測るが、工具は異なるものである。

以上の須恵器は壺身A類、壺身AB類が造考研編部第IV期前半に属し、7世紀前葉に位置付けられようか。壺身B1、B2類は口径がA類よりやや大きく、受部も立ち上ることからやや古く6世紀代に位置付けられる。

土師器 器種別には壺蓋・高坏・壺・甕がある。

壺蓋は表面の荒れが著しく器形を示すにとどまるが、口径が11.5cm前後を測り、267は体部と口縁部の境が屈折するが、294はそのまま内湾する。

高坏は260がS D—109から出土し、脚部のみの資料であるが、短脚で上半部に指によるおさえが

鏡られ、下半部はナデによって調整されている。293はS X-12から出土し、長脚の高杯であるが調整等は不明である。

壺はS X-12から口縁部と胴部とのものが出土した。器形は示すにとどまる。

壺はS D-82から出土した258がある。口頭部は外反し、肩部が大きく張ったものである。

第3節 奈良・平安時代の土器

須恵器の杯5点、蓋2点、壺5点と甌が数点出土している。300は口径13.7cm、底径9.4cm、器高4.4cmの法量を測る。底部外面は高台まで下る。底部から胴部へは棱をなして移行する。口縁部はやや外反して開く。高台は、底部と胴部の境よりやや内側に内傾する。しっかりした作りのものを貼付している。胴部にはノタ目がかすかに残る。298は口径13.7cm、底径9.6cm、器高4.0cmの法量を測る。底部外面は高台の下に突き出る。高台は300よりやや外側に付けられるが、器面の磨滅が著しく、高台は原形を留めない。胴部は開きながら立ち上る。内面にはノタ目が顯著に残る。無高台の杯が1点出土している。438は器壁が薄く推定復元で底径9.6cmを測る。胴部にヘラ削りはみられない。

蓋は297と439の2点が出土したが、いずれも小破片のため細部については不明である。

301は口縁部から胴下半部まで残存する壺である。口径11.5cmを測る。器壁は非常に薄く、胴下半部までヘラ削りがみられる、ていねいな作りである。

S K-18出土の甌(395)やS X-13出土の甌(496)は内面がていねいにヘラ削りされている。

灰釉陶器は甌が3点出土している。302は底辺部の破片である。角高台が付き、内面には淡緑色の釉がかかる。399・442も底辺部の破片であるが、399には三日月高台が付き、442には内面が湾曲し、外面に棱の付く高台が付く。303は底部から口辺部にかけてのもので、器面は著しく荒れる。高台は高く二等辺三角形を呈する。器壁は薄く、腰部はややはる。

第4節 中世の土器

山茶碗が量的には多く出土しているが、そのほとんどのが底部を中心とするものであり、器形が知られるものは少ない。418は口径17.0cm、底径7.5cm、器高5.8cmの法量を測る碗である。腰部が張り、口縁部は外反しながら開く。高台は断面三角形の薄いものが、ハの字状に開いて付けられる。高さは0.8cmと高い。底部内面は広く平坦面をなす。色調は灰白色をなし、内面と口縁部外面に自然釉が見られる。XIV-J区で遺構検出中に伏せた状態で出土した。385は推定口径14.6cm、底径8.3cm、器高5.0cmを測る碗である。腰部は張り、口縁は外反しながら開く。高台は断面三角形を呈するが、作りは厚い。底径に比べ高さがない。底部内面は広く平坦である。色調は灰白色を呈し、内面に自然釉がかかる。底部内面には煤が付着する。S K-18より出土した。419は口径13.6cm、底径6.1cm、器高4.9cmを測る。碗である体部は若干の張りが残るもの、直線的に開き、口縁部の外反も見られない。高台は低く、輪状のものが張り付けられる。褐穀痕が残る。胎土は砂粒を多く含み、器面の調整も粗雑である。XII-K区で遺構検出中に出土した。407は口径14.5cm、底径6.5cm、器高5.6cmを測る碗である。体部は直線的に開きが、口縁部直下が若干凹む。高台は断面三角形を呈するが、低く褐穀痕が付着する。底部内面と胴部との接点は浅く凹み、底部内面中央部は指圧痕によって深く凹む。胎土には白色粒子が多く含まれ、色調は暗灰色を呈する。底部外面には「+」記号が墨書きされている。S E-3より出土した。405は口径13.6cm、底径5.7cm、器高6.1cmを測る碗である。体部は直線的に開き、口縁部は尖る。高台は輪状のものが付けられ、褐穀痕が付く。一部剥落している。胎土は長石粒の噴き出しが多く、内面にも鉱物の突出がいたるところにみられる。色調はより白

い灰白色を呈する。口縁部に自然釉が見られる。胎土・色調共に他の碗とは異なり、所謂、東海地方南部系（荒肌手）南部系（荒肌手）のものである。

小碗は356と394が器形を知れる資料として出土している。356は推定口径8.4cm、底径4.1cm、器高3.1cmを測る。内面全体に黄緑色の釉がかかる。S D-102の杭列より出土した。394は口径10.0cm、底径5.3cm、器高2.7cmを測る。体部はやや内凹しながら開く。高台は外側が直立し、厚い作りである。稜筋痕と茎状の圧痕がつく。内面と口縁部の一部に自然釉が付着する。S K-18より出土した。

小皿は304・307・403・409・417の5点が器形を知れる資料として出土している。口縁部の形態から二分できる。307・403・417は口唇部が丸く仕上げられているものであり、304・409は端部がナデにより仕上げられ、口唇部は上方に尖る。また前者の底部はやや突出しており、底部内面と体部との境は浅く凹む。後者の底部内面は指によるナデで薄くなる。403の底部には「大」が墨書きされている。前者は無釉であるのに対して、後者は304で内面全体とI I唇部に、409で口唇部にそれぞれ釉が掛る。焼成も前者より後者の方が良好である。304はS D-6、307はS D-52、403はS K-42、409はS E-3、417はS E-4から出土した。

他に土師質ではあるが、土鍋が出土している。420は口縁部から胴部下半にかけてのもので、XII-I-IVで出土した。器形は口縁部は内凹しながら低く開き、頸部でくびれ、胴部は球形となる。最大径は胴部中位にある。器壁は非常に薄く、胴部で0.3cmを測る。口縁部は肥厚し、内面に段を有する、底部は扁平な丸底となる。調整は外面で口縁部から頸部にかけて横ナデ、胴部上半は横ないしは斜めのハケ、胴部下半から底部にかけてはヘラ削りが施される。内面は口縁部から胴部にかけてはナデ、胴部下半でヘラ削りがそれぞれ施される。胎土には砂粒が多く混入する。同じ形態の土鍋がS E-3からも出土している（第62図411）。

第5節 木 製 品

本製品は時代別には大きく弥生時代と鎌倉時代に分かれる。他に江戸時代に属する清からの出土がある。弥生時代のものはS D-16に限られる。鎌倉時代のものは井戸及び柱穴が主体である、以下機能別に記述する。

容器（2・3・4・11・12・21・22・24）

2~4は弥生時代のもので2・3には脚が付く。2はS D-16から出土したもので現存長で75.0cm、幅22.0cm、盤の高さ40cm、脚の高さ9.0~10.0cmを測る脚付盤である。盤部分の淵は斜めに立ち上り周囲には平坦面がかたち作られている。長軸方向での平坦面は4.5cm、短軸方向での平坦面は1.8cmと長軸方向の方が広い面をなす。残存部分より考えて半割の状態で遺存しているものと思われる。盤の深さは33cmある。3はS D-16から出土したもので現存長で67.0cm、幅13.5cm、盤の高さ3.0cm、脚の高さ4.0cmを測る脚付盤である。盤部分の淵は長軸方向で斜めに立ち上り、短軸方向では垂直に入る。上面は長軸方向で平坦面をなすのに対し短軸方向では鈍く尖る。脚は2のようにシャープに造り出されているのではなく平面橢円形を呈し、高さもない。欠損部分には焦げた跡がある。盤の深さは2.0cmある。4はS D-16から出土したもので周囲には一部平坦面が残る。容器の深さは7.0cmある。12はS E-3から出土したもので底径7.2cm、残存高1.5cmを測る漆塗りの椀である。11はS D-85から出土した口径9.8cm、残存高5.2cmを測る漆塗りの椀である。21・24はS E-4から出土した円形の曲物の板である。21は直径約13.0cm、厚さ約0.5cmを測る。24は直径13.4cm、厚さ0.5cmを測る。曲物としては小型の部類に属する。24は一部に焦げた跡がみられる。22は

S D-85から出土した山物の板で、直径14.0cm、厚さ0.9cmを測る。2箇所に側板を固定したと思われる切れ込みが入る。底板が側板の外側にはみ出して取り付けられたものであろう。

生活用具（5・13～20・23）

ここでは出土数も少ないことから労働用具等を一括する。5はS D-16から出土したもので二方に分れた一方を切断加工したもので、枝木をそのまま腕木に利用した背負子棹木が考えられるが、確証はない。幹部は両端共に欠損しており、現存長25.1cmを測り、幹は根元で直径4.0cm、先端で直径3.0cmある。13はS K-18の底から出土した杓子で柄の一部で欠損するものほぼ完形品近い。長さ22.4cm、幅8.5cm、柄部分の幅3.8cm、厚さ0.9cmを測る。周開は面取りされ、特に先端部は細く加工されている。15～20は一辺が0.4から0.5cmの角に加工されており端部は尖る。17が残存するものの中では最も長く湾曲するものの18.4cmである。これらの木製品は一点が柱穴内から出土している他は井戸からの出土であった。従来これらの木製品については箸ないし箸状と呼ばれているが、果して箸として機能するものであろうか。出土位置とも考え合せ祭祀的色彩の濃いものと考えられないであろうか。14・23は下駄と思われる。14はS E-4から出土したもので上部に二箇所の突起部をもつ。下面の両端には木の節があり最も堅い部分である。下駄の歯にあたる部分と考える。歯の高さは6.8cmである。23はS D-85から出土したもので、両端が細く中央が厚くなる「ぼっくり」型の下駄と思われる。幅が7.0cmと狭いため子供用であろうか。

建築用材（1・10・25・26・27）

1はS D-16から出土したもので現存長94.0cm、幅14.2cm、厚さ2.3cmある。板状のもので一箇所に2.6×40cm角の穿孔がみられる。9はS D-16から出土したもので現存長61.0cm、幅11.8cmを測る梯子である。両端とともに欠損する。足かけ部分が2箇所突起する。その間隔は28.2cmであり、高さは4.2cmある。足かけ部分は直角に削り取られているが、反対側は斜めに削られている。ていねいな作りの梯子である。25～27は柱穴内に柱頭として遺存していたものである。いずれも丸太材を1/5～1/8に切裁したもので断面形は扇形を呈する。27は最もていねいな作りがなされているもので基部に面取りが全周する。

用途不明の木製品（6・7・8・9）

6はS D-16出土のもので全長24.9cm、幅38cm、厚さ0.9cmの板状のものである。2箇所に方向の異なる長方形の穿孔がある。8は全長20.3cm、幅14.0cm、厚さ1.0cmの板状のもので平面形はやや台形を呈する。端部寄りに2箇所の横円形の穿孔があり、この穿孔の内側及び中央に小さな穿孔がそれぞれ2箇所づつみられる。9はS D-16出土のもので全長19.4cm、幅5.7cm、厚さ1.3cmを測る板状のもので平坦面は長方形を呈する。端部はそれぞれ面取りされており、下部端のそれは階段状に行なわれている。

第6表 木製品計測表

番号	捕図 番号	出土位置	名 称	大きさ			樹 種	備 考
				全長	幅	厚さ		
1	65	SD-16	建築用材	(94.0)	14.2	2.3	モミ	鑑定No. 58
2		SD-16	脚付盤	75.0	22.0	14.0	ヒノキ	57
3		SD-16	脚付盤	67.0	13.5	7.0	ホオノキ	28
4	↓	SD-16	容器	73.5	21.5	10.5	スギ	30
5	66	SD-16	背負子(?)	(25.1)	--	--	エノキ	48
6	↓	SD-16	用途不明	24.9	3.8	0.9	スギ	27
7		SD-16	"	(37.0)	1.9	1.7	ヤマグワ	26
8		SD-16	"	20.3	14.0	1.0	スギ	99
9		SD-16	"	19.4	5.7	1.3	カシ類	100
10	↓	SD-16	梯子	(61.0)	11.8	7.2	タリ	102
11	67	SD-85	漆塗り鏡				トチノキ	97
12		SE-3	"				ケヤキ	103
13		SK-18	杓子	22.4	8.5	0.9	ヒノキ	94
14		SE-4	下駄の歯	8.0	11.9	2.8	ヒノキ	93
15		SE-1	箸？	(12.0)	0.5	0.5	ヒノキ	84
16		SE-1	箸？	(15.3)	0.5	0.5	ヒノキ	83
17		SE-1	箸？	(18.4)	0.6	0.5	ヒノキ	82
18		SE-1	箸？	(3.6)	0.4	?	ヒノキ	86
19		SE-1	箸？	(9.1)	0.4	0.4	ヒノキ	85
20		SP-109	箸？	(8.8)	0.5	0.5	ヒノキ	81
21		SE-4	曲物	13.6		0.5	ヒノキ	91
22		SD-85	曲物	14.0(直徑)		0.9	ヒノキ	95
23		SD-85	下駄	11.9	7.4	1.6	ヒノキ	96
24	↓	SE-4	曲物	13.4		0.5	ヒノキ	92
25	68	SP-2	柱痕	(59.4)	10.6	8.5	ヒノキ	60
26	↓	SP-1	柱痕	(53.8)	12.0	8.0	ヒノキ	59
27	↓	SP-386	柱痕	(78.0)	8.0	6.1	ヒノキ	61

第7表 石 鐵 計 測 表

	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 (g)
1	2.9	1.3	0.4	1.7
2	(2.5)	1.8	0.4	2.4
3	(2.6)	1.8	0.4	1.6

第6節 石 製 品

玉越遺跡では、同一面において時代を違えた9ヶ所の遺構から石鎚、砥石、宝篋印塔、一・石五輪塔等の石製品が出土した。そのうち砥石は調査区西側の溝、土坑、井戸等の遺構内覆土から、宝篋印塔一石五輪塔は金山堤内のS X-13を中心に出土している。

石鎚（第69図）

形状の異なる石鎚が3点出土した。石質はすべて粘板岩である。

1・2は溝状遺構（S D-16）を埋める覆土最下層より検出された。1は有茎の石鎚で、長さ2.9cm、幅1.3cm、厚さ0.4cmを測る。先端部は鋭角で全面に剥離調整の痕跡が見られる。2は先端部を欠損しているが、平面が二等辺三角形を呈する無茎石鎚である。現長2.5cm、幅1.9cm、厚さ0.4cmを測り、周縁に細かい加工がなされており、基部に浅い抉が入る。

3はS X-13内覆土より出土した。有茎で片側にかえしを有し、長さに対して基部の幅が広い。また断面を見ると鎌本体の厚さに比べ茎部は薄い。刃部、茎部及びかえしの先端が欠損していて、現状での大きさは長さ2.6cm、幅1.9cm、厚さ0.4cmであり、粗い周縁加工が施されている。

砥石（第69図）

出土した砥石は9点を数えるが、すべてが欠損品である。

4はS D-16内覆土最下層より出土した。軽石を石材とし、長さ6.7cm、幅5.6cm、厚さ4.4cmの長方体が推定される。側面は研磨によって曲面を成す部分と一条の平面を成す研面とを見出すことができる。各面には数本の条痕を残す研磨痕が見られる。

5~12は調査区西側の遺構内より検出された。石材は5~8・10が凝灰岩、9・12が石英斑岩、11が砂岩であり、これらは小型で薄手のものと巾~大型で厚手のものとに大別できる。

前者には5~7がある。5は両端を欠損しているが、不規則形の偏平な礫を転用したものである。側面の片側は平坦で、他方に向けて厚みを増していく形状をとる。6は平面長方形を呈する砥石の両端を欠損し、中央部がさらに緩割りした一片である。5同様、厚さに偏りがみられる。7は幅4.2cm、厚さ2.0cmの長方形砥石で前記同様、両端を欠くものであり、現長6.6cmを残している。5はS D-53、6はS D-52、7はS D-66内覆土より出土した。

一方、厚手のものには8~12がある。8は長方形の砥石の端部を示す残欠であり、S D-85内覆土から出土した。9・10は丸味のある厚い礫を砥石に転用したものである。9はS D-88、10はS K-30より出土した。9は大型で半分近くを欠損しており、片側平坦面が研面とされている。10は両端を欠くが研面が全体に認められる。

11は礫を転用した平面隅丸長方形を呈する大型の砥石である。長辺・短辺の各一辺を欠損し、平坦研面の表裏に軽い数条の擦痕がみられ、さらに平坦面から側面に移行する稜部を幅狭く研磨した痕跡も認められる。S E-4内覆土出土である。

12はS X-13基底面から出土した大型の砥石である。方形体の一辺のみが残る欠損品であって大きさを推定することはできない。研面が幅広の平滑な面を形成しているのは、他の砥石に比べ、被研物が大型であったことが想定される。なお、当例の色調は淡褐色を呈するものであるが、部分的に火熱によるものとみられる色調の変化が観察できる。

宝鏡印塔（第70図）

宝鏡印塔は基礎、塔身、笠、相輪の各部より成る石造物である。本遺跡からはS X-13の傾斜面から基底面にかけて、相輪3、笠1、塔身1が検出されているが、散在して出土しており、組み合せを想定できるものではない。石材はすべて砂岩である。

相輪（13、14、15） 13は柄部分を欠損したものである。上端部で2つに割れており、そのうち九輪以下の部分はS X-13基底面の集石群に混じて発見された。上方に伸び気味の宝珠は頂部が尖り、それに丸味を帯びた詣花が付く。九輪部は四輪であり、伏鉢に向って幅は徐々に広くなる。しかし、丈は短く、かえって下半部の詣花・伏鉢の方が大きく誇張されている。現高31.0cm、幅10.8cmを測る。

14は伏鉢と柄のみの残欠である。伏鉢の直径9.2cm、長さ5.0cm、柄の直徑5.2cm、長さ3.3cmを測り、伏鉢は平たい円柱状を呈している。

15はS X-13の落ち込み上端付近で発見された。上半分の宝珠、詣花を欠く相輪である。現高23.8cm、幅9.3cmを測る。形状は伏鉢に最大幅がある台錐形をなし、九輪部は浅い凹線でほぼ等間隔に四輪を表現している。

笠（16） 隅飾突起は上方に向って直線的に外方にやや開いて伸び、突起部の先端は平らに仕上げられている。側面にはコの字形の線刻が各面に施される。隅飾突起のつけ根から笠を成す段部が形成され、3段をもって立ち上がっている。軒下にも1段が彫成されているが、各段の稜線のつくりは甘い。笠頂部の中央部には、相輪との枘穴が幅7.0cm、深さ3.2cmに穿たれている。等の裏面と枘孔内面にはノミ痕が認められる。

塔身（17） 立方形をなす塔身は幅に対し丈が低く、歪んでいるため安定感を欠く。大きさは高さ8.5cm、…辺12~13.0cmで、上・下面の中央部が若干窪んでいる。四方側面の中央部には月輪が彫り込まれているが、形状、大きさは一定しない。全体的に粗雑なつくりである。

・石五輪塔（第70図）

・石五輪塔は通常の五輪塔を小型化し、柱状の石に空・風・火・水・地の各輪を彫り刻んだものである。本遺跡ではS X-13を中心にして一石五輪塔残欠4点が出土した。

18は、空風輪を欠き火輪上端部と地輪下部を欠損したものである。現高14.6cm、最大幅9.0cmを測り、かなり小型化し風輪も著しい。水輪は球形を成さず、中央部に稜を有するごとき形状を呈している。出土地点はS X-13基底面である。

19は水輪の下半部から地輪を欠くものである。現高は14.4cm、最大幅は9.8cm。空輪は偏平をなし縦半分を欠失している。風輪は上方が開き気味の側面逆台形を呈する。火輪の表現は著しく退化し、わずかに笠の裾の広がりを留めているにすぎない。

20は空・風輪であるが、風輪の一部を欠損している。空輪は丸味を帯び、先端がかすかに尖る。風輪はやや外彎気味に下方に下がる。大きさは現高10.8cm、幅8.9cm。2・3とも層位は不明であるがS X-13上部より出土した。

21は金山堤上層のかなり新しい搅乱坑から出土した。空・風輪を失っているものの、4点の中では大型で最も均整がとれ、一石五輪塔の古式の型式を留めている。現高27.9cm、幅11.9cmを測る。笠形を呈する火輪は軒隅にわずかな反りがみられ、水輪は偏平な球形、地輪はほぼ正方形を成している。

これら石造塔婆は中世後半期を示すものであるが、S X-13における他の出土遺物とは明らかに年代差が認められる。石造塔婆は追善供養塔、墓塔として墓地で使用されるのが通例であり、当遺跡においても周辺にかつて存在した中世墳墓に使用されたものと考えられる。しかし、何故にこのような

第8表 石製品観察表

標図番号	出土地点	名 称	長さcm	幅 cm	厚さcm	重さ(g)	石 材	残存部位
69-4	S D-16	砥 石	6.7	5.6	4.4	36.5	鈍 石	
69-5	S D-53	砥 石	(4.4)	5.6	1.9	57.3	凝灰岩	
69-6	S D-52	砥 石	(5.5)	(6.1)	2.1	76.7	凝灰岩	
69-7	S D-53	砥 石	(6.6)	4.2	2.0	56.0	凝灰岩	
69-8	S D-85	砥 石	(4.6)	5.9	5.8	201.1	凝灰岩	
69-9	S D-88	砥 石	(10.9)	(8.6)	5.3	545	石英斑岩	
69-10	S K-30	砥 石	(6.9)	7.5	5.1	300	凝灰岩	
69-11	S E-4	砥 石	14.2	(8.3)	3.9	710	砂 岩	
69-12	S X-13	砥 石	(9.2)	(7.4)	(9.6)	730	石英斑岩	
70-13	S X-13	宝鏡印塔	4.4	7.9	8.1		砂 岩	風輪
70-14	S X-13	宝鏡印塔	5.2	5.5	5.2		砂 岩	柄
70-15	S X-13	宝鏡印塔	23.6	9.3	9.7		砂 岩	相輪・柄
70-16	S X-13	宝鏡印塔	9.4	18.0	18.0		砂 岩	笠
70-17	S X-13	宝鏡印塔	8.5	13.0	12.0		砂 岩	塔身
70-18	S X-13	一石五輪塔	13.8	9.0	9.3		砂 岩	火・水・地輪
70-19	S X-13	一石五輪塔	13.9	(6.1)	7.3		砂 岩	空・風・火・水輪
70-20	S X-13	一石五輪塔	9.5	8.0	7.3		砂 岩	空・風輪
70-21	金山堤復乱層	一石五輪塔	26.0	11.9	11.3		砂 岩	火・水・地

十坑に投棄されたのか、その性格は明らかでない。あえて推測するならば、これらの石造塔婆は築堤に際して水害防止の祈願、祈禱の祭礼的性格を有していたと想えられはしないであろうか。

第7節 錢貨・金属製品

錢貨は6点出土した。「天保通宝」を除く4点は腐食が激しく、図示が不可能なため、写真で示した。図版50-2・3はS X-13から出土した。2は北宋錢の「聖宋元宝」(初鑄101年)、3は明錢の「洪武通宝」(1368年)である。4はSS-1から出土したもので、北宋錢の「皇宋通宝」である。1は水田状遺構出土のもので、「寛永通宝」(1636年)である。他に「天保通宝」(1835年)が2枚SD-85から出土した。

金属製品は煙管と簪である。5は雁首で水田状遺構から出土した。6は簪でSS-1から出土した(第70図1)。全長18.4cmあり青銅製である。頭部には耳搔き状の突起が付く。動物を形どった紋様が表わされているが、動物は不明である。

第8節 土 製 品

土馬が破片で三体分出土している。いずれも灰白色～青灰色を呈する須恵馬である(第70図1～3)。1は金山堤の桿乱層中から出土したもので、表面は磨耗が激しい。胴部のみ残存する。かすかに鞍が着装されていた痕跡がみられる。現長度10.5cmあり、人形の製品である。欠損部の面をみると、頭部から尾部は一体のつくりをなし、足はつけられていたようである。2・3は遺構検出中に出土したもので、2は胴部から尾部にかけての部分である。後足のつけ根後方に、棒状工具による窪みが付けられる。3は足の部分で、接合面で剥離している。長さは3.2cmある。接合面より左前足と思われる。

第5章 まとめ

第1節 検出遺構について

検出された遺構は弥生時代から近世にいたる長きにおよぶ。しかし、中世を除く時代の遺構は溝を中心とするものであり、築落の外縁部にあたると思われる。中世の築落跡については、新たに一節を設けたので、ここではそれ以外のものについてまとめる。

中世を含めた溝について、共通する点として方向性がある。規模の大小のこそあれ、その方向は南西から北東方向を示す。これは調査区南端で検出された砂礫層の分布と関連するものである。溝内堆植物の中に S D-16で検出されたような砂の混入するものが少なく、積極的に流路であったことを示す根拠は見あたらないが、時代を越えた共通性や、周辺の微地形と比較した場合、排水路的機能を考えられよう。沖積地上に立地する遺跡にとって、排水の対策は常に念頭におかなければならぬ宿命であったのであろう。生活の場は、南側の砂礫層の分布する範囲が推定できようか。

S D-16は検出された溝の中で最大の規模を有する。最下層には砂が堆積し、覆土巾には植物の未分解のものが混入する。東側において直径3cm前後の杭が北側を中心に打ち込まれていた。この部分は幅が一段増していることから、足場の確保を目的とした杭列とも考えられる。対岸には杭列はみられなかった。この施設を利用した集団の居住地は、先に推定した生活の場と異なり、より北側の範囲が考えられるのであろうか。出土遺物は砂層を中心に細片化した上器が出上している。S D-14で出土したような大形品は一点もない。また多量の木製品が出土したことでも特徴としてあげられる。自然の流路を利用した施設が推定できようか。

土坑は40基検出された（通し番号で42基あるが、うち2基は欠番）。うち S K-39は円形を呈し、須恵器の蓋坏を伴なって短頸壺が出土している。上部は S D-90によって掘り込まれており、検出はできなかったが、深さは55cmを測り深い。何らかのものを埋納した上坑であろう。同一形態のものに S K-18がある。時期は12世紀初頭を下らない。底面から杓子状木製品が出土した。このタイプの木製品は出土例が多く、羽子板状の木製品として扱っているものがある。今回の場合は周間に削りがみられ、ヘラ状を呈していることから杓子と考えた。伴出遺物には奈良時代の須恵器も含まれており礫も混在した状態で出土していることから、杓子以外は直接この土坑に共伴した遺物ではないものと思われる。他には弥生時代の土坑である S K-5から上器の出土があった。土器は壺・甕・高坏の三器種が出土しており、その出土状態も上坑内に散漫な状態でのものであった。出土遺物・出土状態から十坑の機能を推察することは不可能である。以上3基の上坑以外からの遺物の出土は、ほとんど見られなかった。形態としては円形・長楕円形を呈するものが多い。中世の屋敷内には墓を伴なう例が多い。その屋敷内における位置としては、北側に設けるものが多く、あるいは一部の土坑について墓壙としての機能があったことも推察される。

井戸は中世に属するものとして3基検出された。いずれも井戸枠は見られず、素掘りのものである。S E-1・3からは祭礼として埋納されたものか、山茶碗が出土した。特に S E-1でみられた竹をつきさす事例は、民俗例にもあり、現に今日でも周辺には、井戸埋没時にこのような風習が行なわれている。13世紀後葉、すでにこのような風習の行なわれていたことは興味深いものである。

第2節 出土遺物について

調査対象面積、検出遺構の数からみて、出土遺物は決して多いとは言えない。中世の集落跡に伴なう遺物も、井戸から出土した甌以外には小破片が多い。環溝屋敷と考えられる溝で区画された建物群が、いかなる階層の居住地であったのか、遺物の面から検証することは不可能であった。

ここでは、ある程度まとまりがみられた弥生時代の遺構から出土した土器群について、簡単に述べてみたい。土器は壺3類7種、小型壺4類、甌2類3種、高杯4類に分類した。完形品が少なく、形態分類は各部位の分類で行なったものがあり、統一性に欠ける面がある。玉越遺跡出土土器の特徴は以下のとおりである。

壺形上器については、頸部から口縁部にかけて渦巻しながら外反して広がり、折り返し口縁となる。胴部は下半において最大径を測り、屈曲して底部にいたる。所謂無花巣形を呈するものである。文様帶は口唇部・胴部上半（肩部）・口縁部内側にみられる。紋様は工具として櫛を用いるものが主体を占め、ヘラ・繩紋が続く。口唇部には刻み・刺突紋・浮紋が貼付され、肩部は一段の羽状刺突紋を基本に、羽状刺突紋や横線紋・網紋が施され、口縁部内側には網紋・波状紋・刺突紋が施される。繩紋は単節繩紋のものが多くLRが主体を占める。結節繩紋はSD-14からは1点の出土もみられず、SD-16上肩から数点の出土があった（繩紋に規制されたものと思われるが、羽状刺突紋も下りりから始まる例が主体をなす）。調整は、頸部では縦ハケ後縦ヘラミガキが、胴部では縦ハケ後最大径やや上半より底部にかけて横ヘラミガキが施される。底部は木葉痕や中央がやや凹む上げ底がみられる。

甌形土器は、台付甌が主体で、口唇部に刻みが付くものと付かないものが半ばする。成形は頸部においては横ハケ、胴部は斜めハケとなる。全形が知れる資料は一点もない。

高杯形土器は、杯部が直線的に開き、口縁部は屈曲してやや上方に開く。所謂鶴状口縁となる。脚部は筒形のもので、裾部でゆるやかな段差をなして開く。紋様は口唇部に貼付紋、脚部に柳羽状刺突紋が施され、裾部はハケ目が残る程度で紋様は施されない。

以上のような特徴を有する土器群は、編年的にはいかなる位置付けがなされるのであろうか。

天童川以東、東近江の弥生時代後期の土器編年は從来二之官式→菊川式土器への変遷が考えられていた。しかし最近の動向として、中嶋郁夫氏や鈴木敏則氏の精力的な研究により、弥生時代後期を一様式として統括し、形態の変化・文様帯のあり方・施紋方法の相違・新たな器種の出現等から段階的細分案が提示されている。ここでは二型式案と一様式案の是非を論ずる用意はない。しかし型式間ににおいての紋様の消長はいずれの時代においてもみられる現象であり、文化は突然変異で生まれるものではなく、伝統の上に形成されるものと考える。新たな器種の出現は、生活様式に変化を生じさせるものであり、意識の改革をうながすものである。この逆説もまたしかりである。

さて、二氏の論じている諸変遷を中心当遺跡出土土器群との器種別比較を試みるならば、壺形土器において、B2のII縁は大きく外反し、端部は水平面をなすものがある。これは向笠西1号遺跡の住居跡出土例（柴田1983、第10図）や、一色前田遺跡の住居跡出土例（第7図5）に比べ、外反が強い。頸部の調整は縦ハケ後縦ヘラみがきのものが多く、その上にナデの施されるものはない。胴部下半のみがきも最大径や上位から底部にかけてであり、土橋遺跡SK-77出土例（第56図145・第57図154）のように狭い範囲にみがきの施されるものとは異なる。紋様施紋具として結節繩紋の希少なことも特徴である。胴部上半・肩部紋様直下で右下りのハケ目を施した後にナデのみられるものがあるというが、当遺跡のものには類例が少ない。

壺形土器については、刻み目を有する台付壺と刻み目のない台付壺とがあり、肩の張るものと、なで肩のものとがある。刻み目には、口唇部下端を短く刻むものと、頸部にかけて長く刻むものとがある。器面の荒れが著しいが、新しく出現するという頸部のナデが施されるものは確認できなかった。

高环形土器については、分類Bが主体となるもので、脚上部の櫛羽状刺突紋が盛行し、脚裾部の紋様が消滅する点は新しい段階のものであるといふ。また器形の特徴からもそれは指摘されよう。分類Cとして掲げた脚部については類例も少なく、時代差であるのか、地域差であるのか不明である。

以上のように三器種について、従来の変遷観に照し合せてみた。当地方における後期後半の特徴を有しており、隣接する土橋遺跡と対比すれば、SK-77の組み合せに近いものといえよう。ただし、細部の特徴から、やや前段階の系譜が色濃く残存しているものと考えられる。

当遺跡出土の土器群には古式土師器の混入がみられず、弥生時代後期後半の限定された時間幅における様相が抽出し得たものと思われ、今後の研究に貴重な一資料が提示できたものと確信する。

最後に形態別個体数を表で示した(第9表)。先の器種別一覧表とは異なる数値であるが、これは分類基準の相違によるものであることを付け加えておく。

第9表 弥生土器形態別比率表

	壺						小 型 壺				甌			高 环				
	IA ₁	IA ₂	IB ₁	IB ₂	IB ₃	IC ₁	IC ₂	IIA	IIB	IIC	IID	III _{A1}	III _{A2}	III _B	IVA	IVB	IVC	IVD
SD-14	3	1	3	23	1	1	1	4		1		9	6			6	1	
				17						3			7				5	
SD-16 上		1	3	2		3					1	5	3			4		
SD-16 下				1	1	1					1	3	1	1	2		1	
SD-82				2							1	1				1		
				2														
SK-5			1	1		1									1			
				3														

第3節 環溝屋敷について

今回検出された遺構の中で、特にXライン以西で検出されたSD-52・53によって閉まれた建物群は「環溝屋敷」と称される一つのまとまりが指摘できる(ここでは、屋敷地周辺の独立住建物群を含めたものを集落跡と考え、溝に囲まれた建物群跡を便宜的に環溝屋敷跡とする)。存続期間はSD-53がSK-18を切ることより12世紀前葉を初現とし、またSK-19に切られることから13世紀前葉には機能を停止していたものと思われる。しかしSE-3出土土器より集落としてはその後も営みが続けられていたようである。

ここでは環溝屋敷周辺で検出された建物遺構を含めて玉越遺跡の分析を試みたい。方法としてはまず、市内における中世遺跡の調査例を紹介し、次に県内および県外の発掘調査による中世村落の概要を記し、その中で玉越遺跡との比較検討を行なっていきたい。

I : 市内に於ける中世の遺跡調査事例

磐田市内には、中世(鎌倉~安上・桃山時代を指す。)の遺跡が数多く存在し、発掘調査も実施されている。そのいくつかをここに掲げると、(a)大原墳墓群発掘調査に代表される所謂、中世墳墓関係

(b)見付端城発掘調査に代表される中世城館跡関係、(c)野際、長江崎遺跡発掘調査に代表される集落跡関係等が掲げられるであろう。

(a)中世墳墓関係：大原墳墓群発掘調査は、昭和42年に工場建設に伴う事前調査として行われたものであり、当時、未確立であった中世～近世の発掘調査のさきがけともいべきもので、記念的な発掘調査といえる。調査では、墳墓の形態や鎌田御厨領所属村落の総墓として形成され、近世の周辺19ヶ村の墓地として発達していく墓域の変化等、村落構造と墓域構造との関係及び墓制研究等に極めて貴重な資料を提供した。

(b)中世城跡関係：見付端城は、駿遠地方を支配下においていた今川氏の手によってつくられたもので、現在の見付の集落の中心に位置している。またこの地は、故藤岡謙二郎氏が遠江国府の所在地と推定されており、古代より、政治的・商業的要衝の地であったといえる。

数度の発掘調査によって、井戸跡、溝状造構及び多くの柱穴群がみつかっており、見付端城の全体像および、周囲の集落景観等の復元の上で貴重といえる。

(c)集落跡関係：野際・長江崎遺跡は、いずれも洪積台地端の沖積地に接する比高1～2m上に立地する。とくに野際遺跡の発掘調査では、建物群を区画すると思われる溝がみつかっており、玉越遺跡の中世前期集落跡との関係で注目されよう。

II：磐田市周辺における中世の集落調査例

磐田市周辺地における中世の集落調査例は、第10表に掲げる通りである。この表に掲げた遺跡に共通する点として①立地場所が洪積地端もしくは、沖積地上に存在する微高地であること。②これ等の集落の多くが、大なり小なり建物群を区画する溝を有することが掲げられる。これ等の点は、野際・玉越遺跡にも共通する点であり、このあと述べる県外の調査例にも同様な事が指摘できることからも、当時の集落形成において普遍的であった要素の一つであろうことが指摘できよう。

III：県外に於ける中世の集落調査例

県外に於ける集落の調査例は、磐見によれば第11表に掲げる通りで、計17遺跡を数える。前記した様に遺跡の立地等類似点は多い。ただ、前記した遺跡例を含め、集落及び集落内を区画する溝の在り方によつていくつかのパターンに分類することが出来よう。

A：建物群を区画する溝が比較的小規模であり、集落そのものと外界を区画するものでないもの。(例：宮田遺跡・野際遺跡)。

B：建物を区画する溝が比較的大規模であり、集落と外界とを隔離する性格を有するもので、内部を更に同規模若しくは若干小さめの溝で区画をつくるもの。(例：玉越遺跡、上橋遺跡、馬場遺跡、横江遺跡、吉地大寺遺跡、下右田遺跡、犀敷内遺跡)。

B'：溝の在り方は、基本的にBタイプと同じであるが、区画された敷地及び細区画された敷地内部を、Aタイプの如き小溝で、建物群を区画するもの。(例：友坂遺跡、祝田遺跡、江上A遺跡、江上B遺跡)。

C：区画溝を持たずして集落を形成するもの。(例：西川島遺跡群、上牧遺跡群)。

以上の様に4つのタイプに分類を行なったわけであるが、Aタイプは、B・B'タイプに比べ集落と外界との隔離性は薄く、開放的な集落とでもいえるだろうか。宮田遺跡は、近郊村落の代表的な例として挙えられており、そのAタイプの集落は極めて一般的な集落であるといえよう。

これに対しB、B'タイプの集落は、外界との隔離性が指摘でき、極めて閉鎖的な集落といえよう。横江遺跡、吉地大寺遺跡、友坂遺跡例は、集落内部を更に区画しており、敷地間における閉鎖性というよりも、むしろ階層的な優劣関係が指摘できる。また、豊富且つ特殊な出土遺物は、他の遺跡

(当該遺跡周辺に存在する集落址を意味する)と比較した時、かなりの経済的優位性を指摘でき、その集落形態を含めて考慮した時、きわめて政治的色彩が強く、当該タイプの集落の性格を暗示するものといえよう。

Cタイプについては、西田島遺跡群を構成する白山橋遺跡、御館遺跡等、自然河川を濠の如く利用しているものもあり、一概に全てをCタイプに含めることには無理がある。上牧遺跡は、建物の密度および、建物規模等からみると、特殊な状況ではなく、一般的な形態を有した集落といえよう。

IV：玉越遺跡の環溝屋敷跡について

玉越遺跡は、太田川左岸の太田川の流土砂がつくった自然堤防上に立地し、前面には沖積地が広がっている。この自然堤防及び微高地には、弥生時代以降の遺跡が連続するように存在し、玉越遺跡と同様、溝によって区画された集落址を検出した土橋遺跡も、この一連の遺跡群を構成する一つであり、玉越遺跡と土橋遺跡とは隣接する関係にある。これは現在の集落とほぼオーバーラップするものであり、現在の集落の初現がこの頃にあたると思われる。

i) 遺跡の概要

今回発見された環溝屋敷跡は、周囲が東西約40m、南北約40m、幅約2mの外溝(S D-25)と、東西約35m、南北約30m、幅約2mの内溝(S D-53)によってほぼ方形に区画されている。敷地は約1,200m²である。これ等2条の溝は、東辺部ほぼ中央北側において内溝より外溝へ向かって傾斜をする溝によって接続しており、また、遺構覆土・出土遺物の検討から、両者はほぼ同時期のものと思われ、その時期は、出土遺物より12世紀前半～13世紀前半に比定される。

溝は、南に向かうに従い浅くなり、内溝は途中で跡切れている。また建物群は、全体的に南へ向かって開放された「コ」の字形を呈しており、これらより、当集落の入口が南辺中央部であろうことが推測される。この設計には、太田川の氾濫による水害防止が配慮されていたものと思われる。つまり南側を除く三辺には2重の溝が掘られ、また溝と溝との空間には土盛りのような施設が考えられ、屋敷内の冠水防止策が施されていたのであろう。また東海道という当時の幹線道の存在も意識されていたものと考えられる。

建物群は、その配置より大きく3のグループに分けることができる。

即ち、通路及び広場的性格を有するであろう中央の空閒地を境にして西側のS B-4、5、12のグループと東側のS B-6、7のグループ、及び両グループに直行する形で存在するS B-8、9、10、11のグループに分類可能であり、それぞれI、II、IIIグループとする。

Iグループ：S B-5と重複し方位を異にするS B-12を除外してみてみると、S B-4は1×2間で廂を持ち、S B-5も2×3間で通路側に縁を有し且つ廂を有する。

IIグループ：S B-6が1×2間、S B-7が1×2間の規模を有する。面積的に若干小さいS B-7の他は、規模的にはIグループの建物とは差がない。しかし廂や縁を有しないということが指摘でき、Iグループと比べ差を認めることができる。

IIIグループ：S B-9が3×2間(北東隅の柱穴は確認できていないから、2×2間の建物に1×1間の突出する部屋割りを有する建物とすることも可能といえよう。)の規模を有するS B-9は柱穴内に礎板や礎石を有する例が多いことが指摘でき、規模的にも構造的にも同グループの核的住居であったことが窺える。S B-9の両脇には、同規模のS B-8、10が、また背後には、S B-11が存在する。S B-9の前面にはS A-1があり、通路的空閒地およびI、IIグループより同グループを隔離する機能を持っていたと考えられ、同グループが当集落の核的存在であったことがいえよう。

屋敷内には、S E-3及び4の2つの井戸が確認されているが出土遺物で、S E-3が13世紀～14

世紀S E—1が13世紀前半とみられ、溝に区画された敷地内につくられた建物群とは、S E—3は時期的に隔りがある。また環溝屋敷外で検出されたS E—1は、S E—3と焼棄された時期が同一で集落全体の存続期間の最終段階のものである。

当集落よりの出土遺物としては、所謂山茶碗と称される陶器が、溝中及び井戸より出土している他、若干の漆桶、曲物、土師器壺があるにすぎない。他例は豊富な遺物があり、一般集落とは異なる状況をそこより読みとることができたのに対し、当集落の状況は、他例とは異なることが指摘できるのである。

しかしながら、溝によって外界と隔離された空間地を形成していることや、建物配置が「コ」の字形を呈し、集落が設計された造りになっている点から考えて、当集落を一概に一般の集落として扱うことにも無理があるといえよう。加えて、周囲にはS B—1、2、3、13の様な建物群が存在し、繩手遺跡（西川島遺跡群）の如き村落構成をもっていたと考えられ、当集落が村落の中心であったことは想像に難くない。

V：まとめ（池田莊を参考にして）

以上、県内外の中世の集落調査状況と、玉越遺跡における環溝屋敷地の状況とをみてきたわけであるが、玉越遺跡の中世前期集落址の位置付けを行なってみたい。

静岡県史によれば、遠駿豆三国に於ける莊園は103あったことが記されており、遠江国における平安・鎌倉時代の史料に現われる莊園名は、45を数える。

そのうち池田莊は立券文書が残っていることで、莊園の全容が窺い知ることができ、極めて貴重なものといえる。ここで、池田莊の状況をみていくことにしよう。

立券文書による池田莊の範囲は、南は竪洋町東平松～中平松、北は浜松市白鳥町付近、西は同市松小池町付近、東は豊田町上力能付近であると推定される。また同文書によれば、池田莊内における在宅は50宇と記されている。宇は数世帯を意味するから莊内には数百戸が存在していたと推測される。そして娘島例から一在家の面積は1,000畝前後と考えられるという。

当時の開発は、水利の便利な自然堤防上及び微高地上が最初に行われ、かかる土地に上記の在宅50宇がそれぞれ分散していたものと思われる。

池田莊は、その成立を長承年間（1132～35）には果たしていたと考えられ、それから史料に登場する最後の文永元年（1264年）までの132年間がその存在期間であったと思われる。この池田莊の存在期間は、玉越遺跡にみられる集落の存続期間にはほぼ一致するもので興味深い。

当集落のつくられた12世紀は、古代から中世への移行期であり、貴族階級、武士階級、農民階級は耕地の不安定を解消するため、耕地の拡大を目指し、土木技術の発達とも絡まって、大規模な灌漑技術を必要とする冲積地へと進出していた時期である。

玉越遺跡の集落址や、他例の多くが、沖積地を前面にした自然堤防や微高地上に造られる背景には、こうした状況があったからだと思われる。しかしながら、開発はこうした微高地を中心としていたことが池田莊の状況で窺われ、沖積地の本格的開発は後世になってからだと思われる。池田莊立券文書に記されている在宅各々は、こうした微高地に住み開発を行なっていたと思われ、この在宅の具体的姿を、玉越遺跡と土橋遺跡とで発見された集落跡に求めることは可能であろうし、宇の具体的姿を玉越遺跡の集落跡と周辺の小規模建物群にみることも可能であろう。

以上、玉越遺跡の中世前期集落跡について触れてみたが、開発者たる在宅の活動や彼等の社会的地位、そして沖積地に対する丘陵及び台地の開発の実態など、今後に残された問題は多い。

第10表 県内における中世村落調査例

遺跡名	所在地	立地場所	時代	遺跡概要	タイプ
1 祝田遺跡	綾江町	微高地	12C末～13C	敷地が大溝によって区画され、その内部を小溝が更に区画する。掘立柱建物3棟と井戸3基を検出。	B'
2 越前遺跡	高松市	微高地	13C～14C		
3 野原遺跡	磐田市	台地末端	13C～14C	建物群を区画する溝（幅30～40cm、深さ25cm）	A
4 馬場第1、第2遺跡	浅羽町	微高地土上	14C	L字形をなすと思われる二条の溝と柱穴群を検出。	B
5 土橋遺跡	袋井市	微高地土上	鎌倉	集落が溝（一条）によって区画される。溝はコの字形に検出。	B

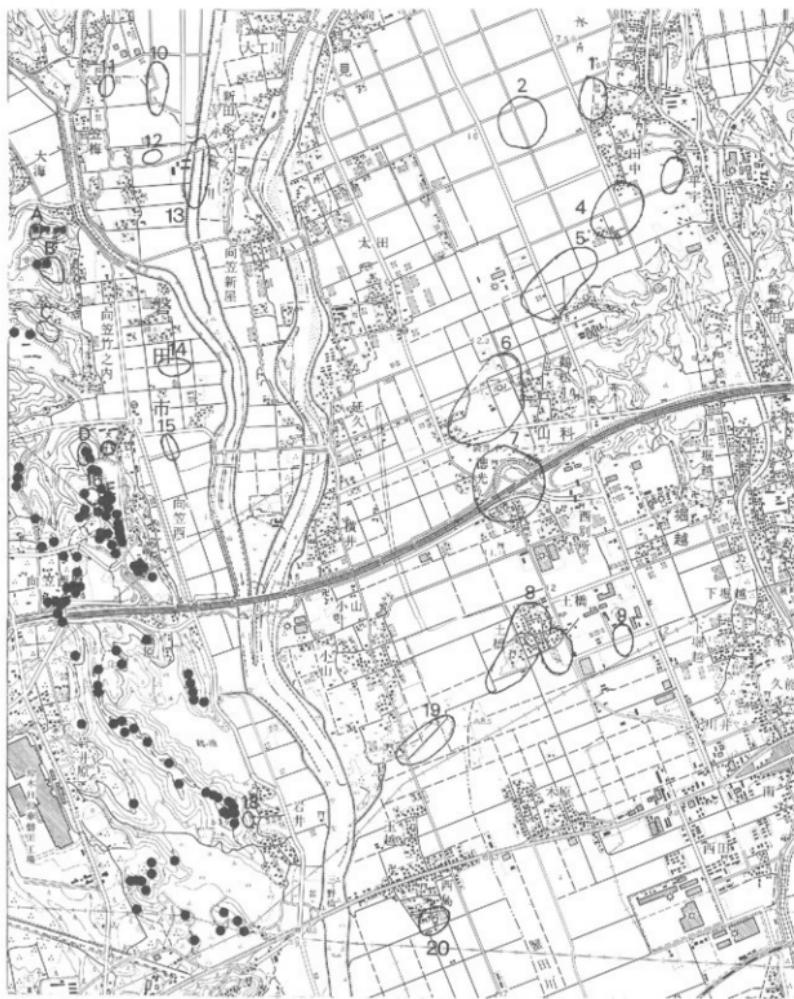
第11表 全国における中世村落調査例

遺跡名	所在地	立地場所	時代	遺跡概要	タイプ
1 尾敷内遺跡	群馬県	台地上	15～16C	自然地形を利用した館跡。舶載磁器、國產仏具、石臼が多く出土し、陪層として、武士、僧侶が考えられる。溝は27条検出され、紀作あるいは牛糞のための区画としている。	B'
2 神田遺跡	富山県	微高地	鎌倉前～中期	掘立柱建物20棟が検出され、一期期3棟を推定、遺跡は公的性質が強い。	C
3 若宮B遺跡	"	"	鎌倉前～中期	掘立柱建物10棟が検出され、すべて純柱の構造、建物の方位から西群に分けられる。	C
4 江上B遺跡	"	"	鎌倉中～室町前期	掘立柱建物13棟が検出され、溝による区画で6群に分られる。	B'
5 友坂遺跡	"	自然堤防上	13C～16C	幅約4m、深さ1.5mの大溝と幅約2m、深さ約0.8mの中溝、幅約0.2～0.5m、深さ約0.05～0.1mの小溝によって区画される。中溝は大溝と直交する形で結合し、敷地を細区画し、細区画した中を小溝が更に区画する形をとる。掘立柱建物は2×1間のものが8棟、5×2間のものが1棟と貧弱であるが、出土遺物として、珠州焼、越前焼の他、中国製陶磁器、鐵岸、羽口、石臼、五輪塔、その他木製品があげられ、出土土器の粗成り、在地一般集落と比べ異なりがあり、一般集落と異なる性格を有する集落であろうと報告している。	B'
6 西川島遺跡群 ・美麻奈比古神社前遺跡	石川県	微高地	13～14C	4×4間の純柱建物周辺に、2×2及び2×3間の掘立柱建物が配された形態をもつ。出土遺物としては、珠州焼、土師器、青磁白磁、瀬戸、火器、その他漆器、木製品等があげられ、鐵澤も出土していることから内部で、小礎治が行われていたと思われる。	C
桜町遺跡	"	微高地	12C末～13C前	7×5間の純柱建物の他、5×4間の純柱建物等、計10棟以上が確認されている。建物群は南北棟群と東西棟群とに大別されるが、詳細は不明、井戸内より、祭祀遺物と思われる組合人形等が出土している。	C
白山橋遺跡	"	微高地	13C～14C 14C～15C	自然河川の蛇行した内側に立地する。建物群は2時期に分けることができる。出土遺物としては、中国製天目茶碗、白磁合子の他珠州焼、漆器等がある。	B?

遺跡名	所在地	立地場所	時代	遺跡概要	タイプ
6 御館遺跡	石川県	微高地	12C末~13C	自然河川の蛇行した内側に立地する。7×6間の総柱建物(孫廻をもつ)の他掘立柱建物が8棟以上みつかっている。出土遺物としては、鳥形木製品、御札漆器等がある。他、白磁、青磁、染付(15~16C)が出土している。	B?
繩手遺跡	〃	微高地	11C後、13C中	7×5間の総柱建物(四面廻)の周辺に1×1間及び2×2間の小型建物が、配される状況が確認されている。このような状況は、大型建物に隣接した階層(下人、所從)の住居であったことが推測される。出土遺物としては、珠洲焼、七條器の他、木製櫛がある。	C
7 横江遺跡	滋賀県	微高地	13C~14C	幅1.5~3mの溝が直し、何区画かの屋敷地を形成している。出土遺物としては、日常用器である黒色土器、土師器の他、常滑・信楽焼、青磁、白磁の碗、皿等が出土している。敷地には、地面を周囲のものより高くしたものがあり屋敷地内部において階層差の存在が窺われる。	B
8 吉地大地遺跡	滋賀県	自然堤防上	南北朝を中心とする鎌倉~室町	幅約8m、深さ1.5mの外溝と幅約3~5m深さ1~2mの内溝に囲まれた集落。集落内側に幅1~2mの溝が十字に設けられ、細く画する。集落規模は東西76m以上、南北68m以上と推定されている。 報告者は、集落の性格を単なる屋敷地とは考え難く、環濠集落または城館と考えるべきと述べている。	B
9 宮田遺跡	大阪府	微高地	12C~13C	遺跡は、溝によってA・B・Cの三区画に分類可能。A区は、9棟の建物と2基の井戸及び墓が検出され、建物は2時期に分けられる。 B区は建物6棟、井戸2基、墓が検出され、年根で分割される。建物規模は小さい。 C区は一段高く、3×3間の倉庫等が存在し、A、B両区とは異なっていることが指摘できる。即ちA、Bを居住空間、Cを倉庫を中心とする作業空間などの存在が、想定できる。各区の南側には水田址が存在し、近郊村落の代表的例としてとらえられている。	A
10 福万寺・上之島遺跡	〃	微高地	鎌倉	里道を挟んで屋敷跡を検出。南側の屋敷は25×25mの範囲があり、北側の屋敷は15×25mの溝に囲まれている。	B
11 上牧遺跡	〃	微高地	11C末~13C	中世の建物は1×1間といった、極めて小規模なものが大半をしめる。遺物としては、いわゆる柿葉型の瓦器窓の代表例としてとらえられている。	C
12 下石田遺跡	山口県	微高地	平安~室町	条里方向に沿った屋敷地を形成している。溝に囲まれた集落跡は鎌倉時代に入ってから、大規模農家間において発生し、室町時代に入ると、小規模農家にも、溝に囲まれた屋敷地を有することが、確認されている。このような背景には、錢金の出土や、持仏堂の存在、鍛冶屋の存在が裏づける様に、農業から商工業への移行というものがあげられ、それによる富の蓄積によるものであろうとしている。	B
13 田村遺跡	高知県 LOC 6	〃	室町	35×20mの長方形に囲まれた溝の内側から掘立柱建物、作業場、井戸、墓が検出されている。名主層の屋敷地と考えられる。	B

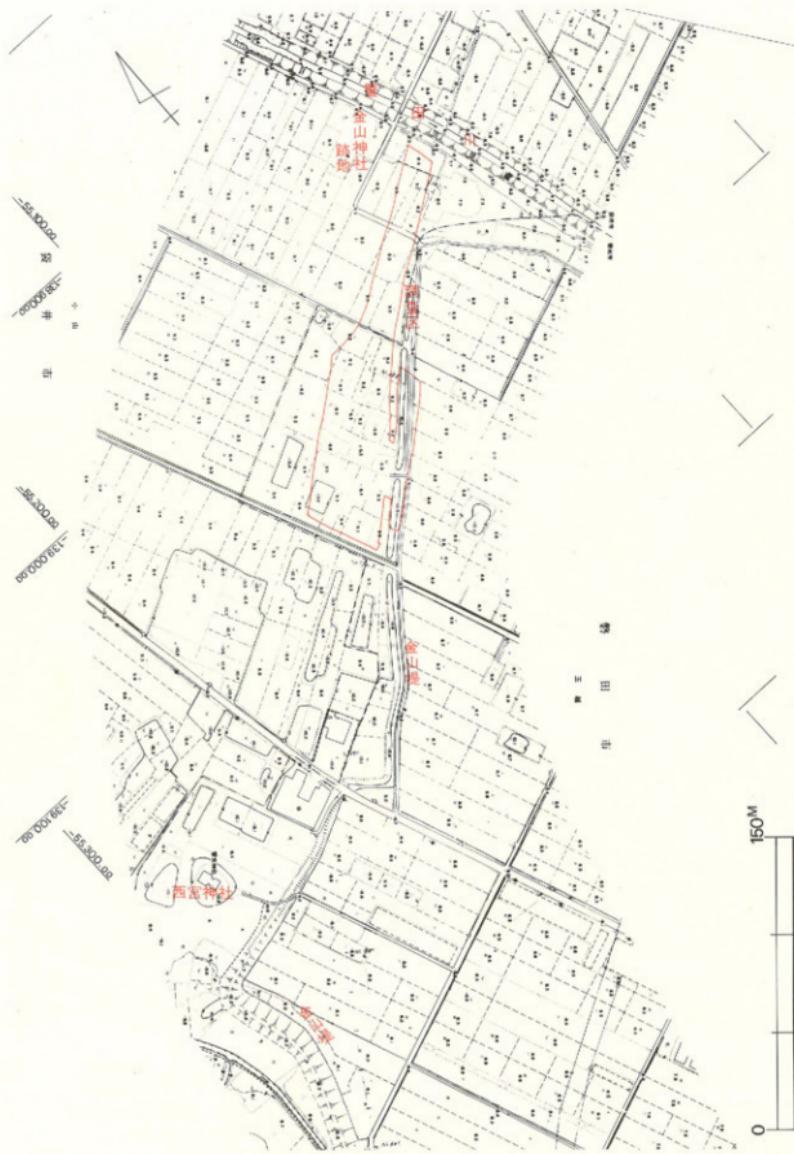
参考文献

- 浅羽町教育委員会 1984 青木、馬場第1、第2号遺跡
- 磐田市教育委員会他 1978~81 磐田原（先土器～古墳）時代遺跡地名表
- “ 1981 御殿、二之宮遺跡発掘調査報告1
- “ 1982 野際遺跡発掘調査概報
- “ 1982 新豊院山墳墓群
- “ 1984 大原墳墓群調査報告書
- “ 1984 野際遺跡
- 上市町教育委員会 1981 北陸自動車道遺跡調査報告～上市町遺構編～
- 可美村教育委員会 1981 城山遺跡調査報告書
- 菊川町教育委員会 1985 三沢西原遺跡
- 木村 碩 1983 村の語る日本の歴史、古代、中世編、『そしうて文庫8』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985 浜町屋敷内遺跡C地点
- 滋賀県教育委員会、守山市教育委員会、(財)滋賀県文化財保護協会 1985 横江遺跡現地説明会資料
- 静岡県教育委員会 1985 静岡県内指定文化財要覧
- 柴田 稔 1983 「中遠地区の弥生後期の土器」『静岡県考古学会シンポジウム5』
- 柴田 稔 1983 「弥生時代の袋井市域」『袋井市史、通史編』
- 下村公彦、井本葉与 1983 「田村遺跡IV—滝に閉まれた中世屋敷」『考古学ジャーナルNo.225』
- 鈴木 敏則 1983 「二之宮式土器について」『森町考古18』
- 高槻市教育委員会 1973 高槻市史6 考古編
- “ 1980 1:牧遺跡発掘調査報告書 高槻市文化調査報告書第13冊
- 谷岡 武雄 1966 「天龍川下流域における子松尾神社領池田莊の歴史地理学的研究」『史林49-2』
- 富山県教育委員会 1981 北陸自動車道遺跡調査報告～立山町遺構編～
- 中嶋 郁夫 1985 「弥生土器から土師器への画期一遠江地方を中心として」『静岡県考古学会シンポジウム6』
- 中主町教育委員会 1985 中主町文化財調査報告書 第3集
- 浜松市教育委員会 1978 伊場遺跡遺物編 I
- 浜松市遺跡調査会 1982 越前遺跡発掘調査報告書
- 原 秀三郎 1983 「律令制下の袋井市域」『袋井市史、通史編』
- 袋井市教育委員会 1981 袋井市一色前田遺跡
- 袋 井 市 役 所 1983 袋井市史通史編
- 袋井市教育委員会他 1984 玉越遺跡
- 袋井市教育委員会他 1985 七橋遺跡
- 姉中町教育委員会他 1984 友坂遺跡調査報告書
- 八尾市教育委員会他 1983 昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査
- 山口県教育委員会 1980 下右田遺跡第4次調査概報
- 義江 彰夫 1984 「莊園公領体制と武士団」『日本歴史大系I』
- 四柳 嘉章 1981 「原能登・穴水盆地における中世遺跡群の調査」『信濃33-4』
- “ 1983 「能登の中世村落」『日本歴史421』

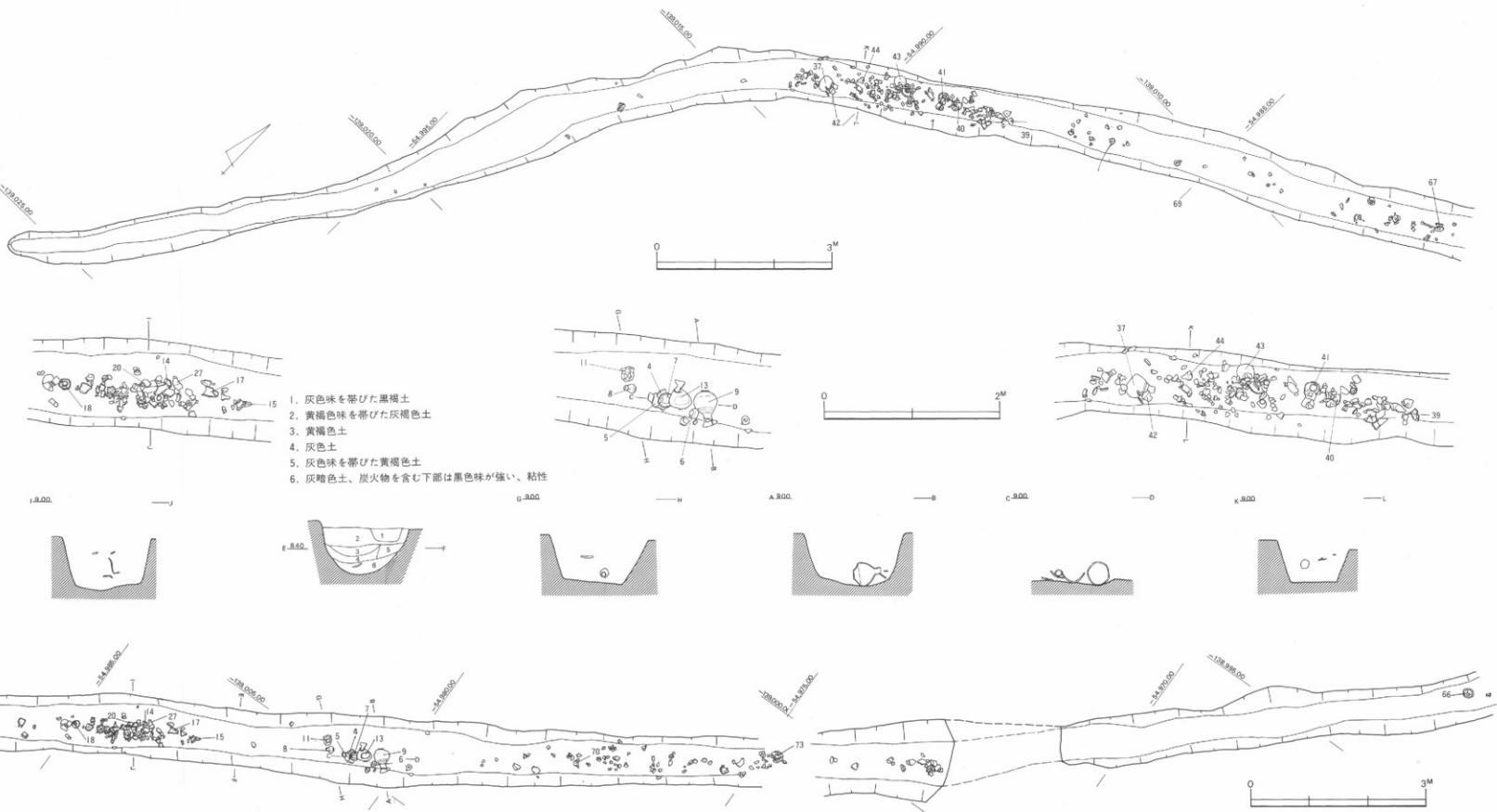


第1図 周辺の遺跡分布図

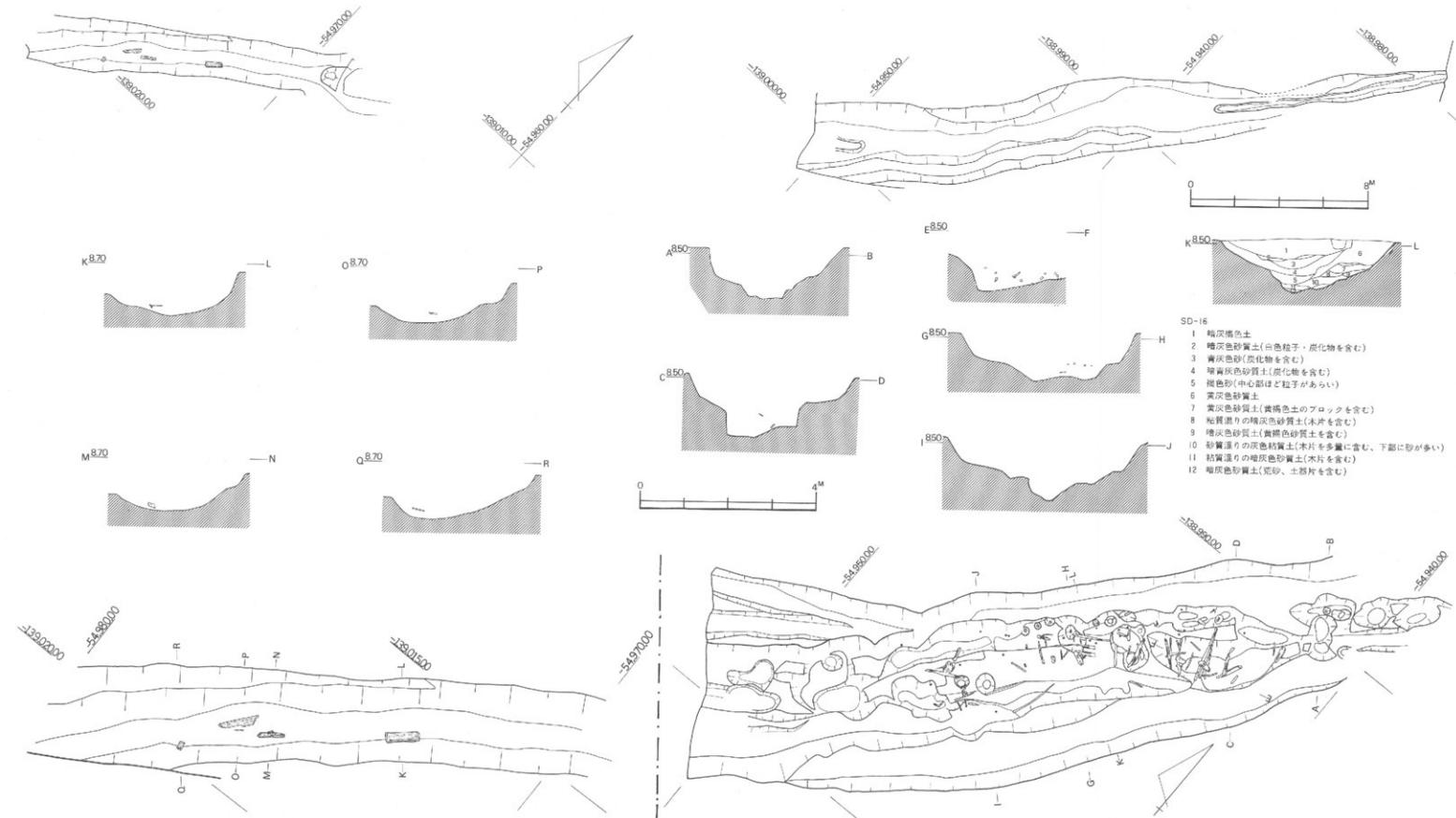
- | | | | | |
|-------------|-----------|--------------|----------------|-----------|
| 1. 特持I遺跡 | 2. 特持II遺跡 | 3. 川田遺跡 | 4. 鶴田I遺跡 | 5. 鶴田遺跡 |
| 6. 鶴松遺跡 | 7. 德光遺跡 | 8. 土橋遺跡 | 9. 堀越遺跡 | 10. 中村遺跡 |
| 11. 笠梅遺跡 | 12. 年寄遺跡 | 13. (散布地) | 14. 大坪遺跡 | 15. 七反田遺跡 |
| 19. 玉越遺跡 | 20. 西島遺跡 | 17. 檻現下遺跡 | 18. 岩井・安全寺境内遺跡 | |
| C. 向笠竹之内原遺跡 | | A. 新豊院山遺跡C地点 | B. 新豊院山遺跡A地点 | |



第2図 発掘区位置図

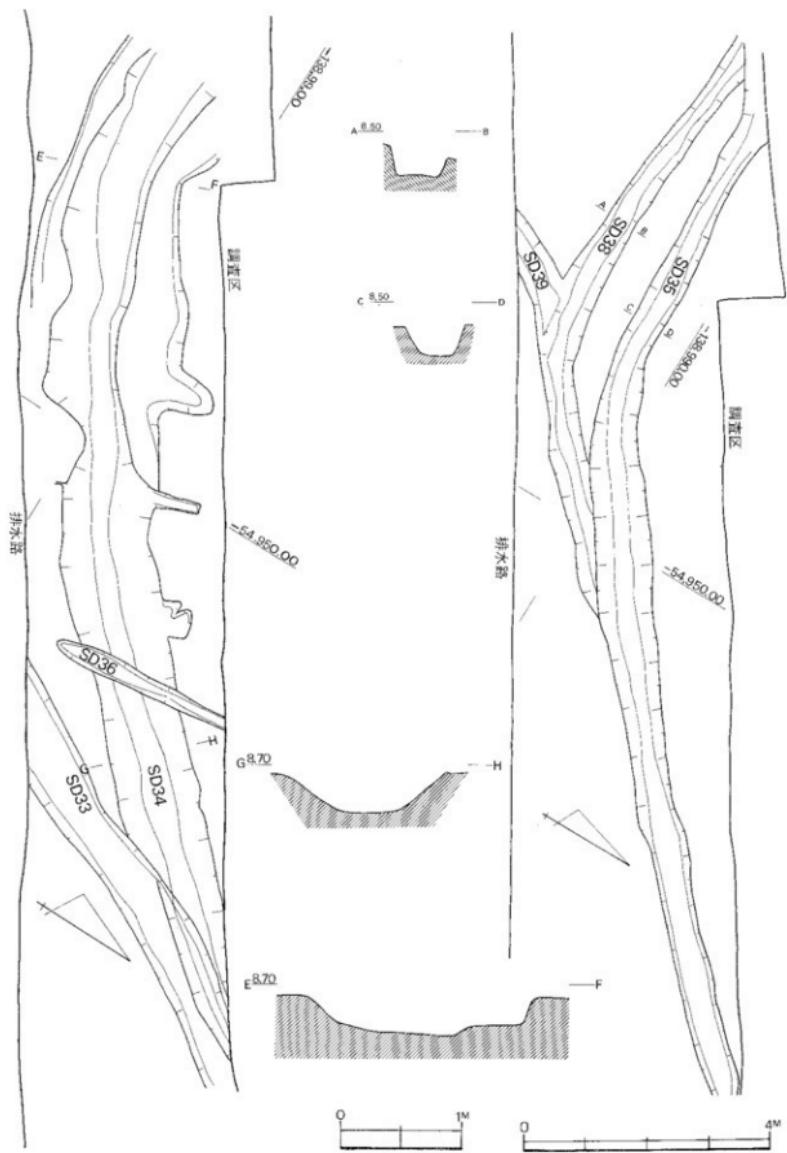


第3図 SD-14実測図



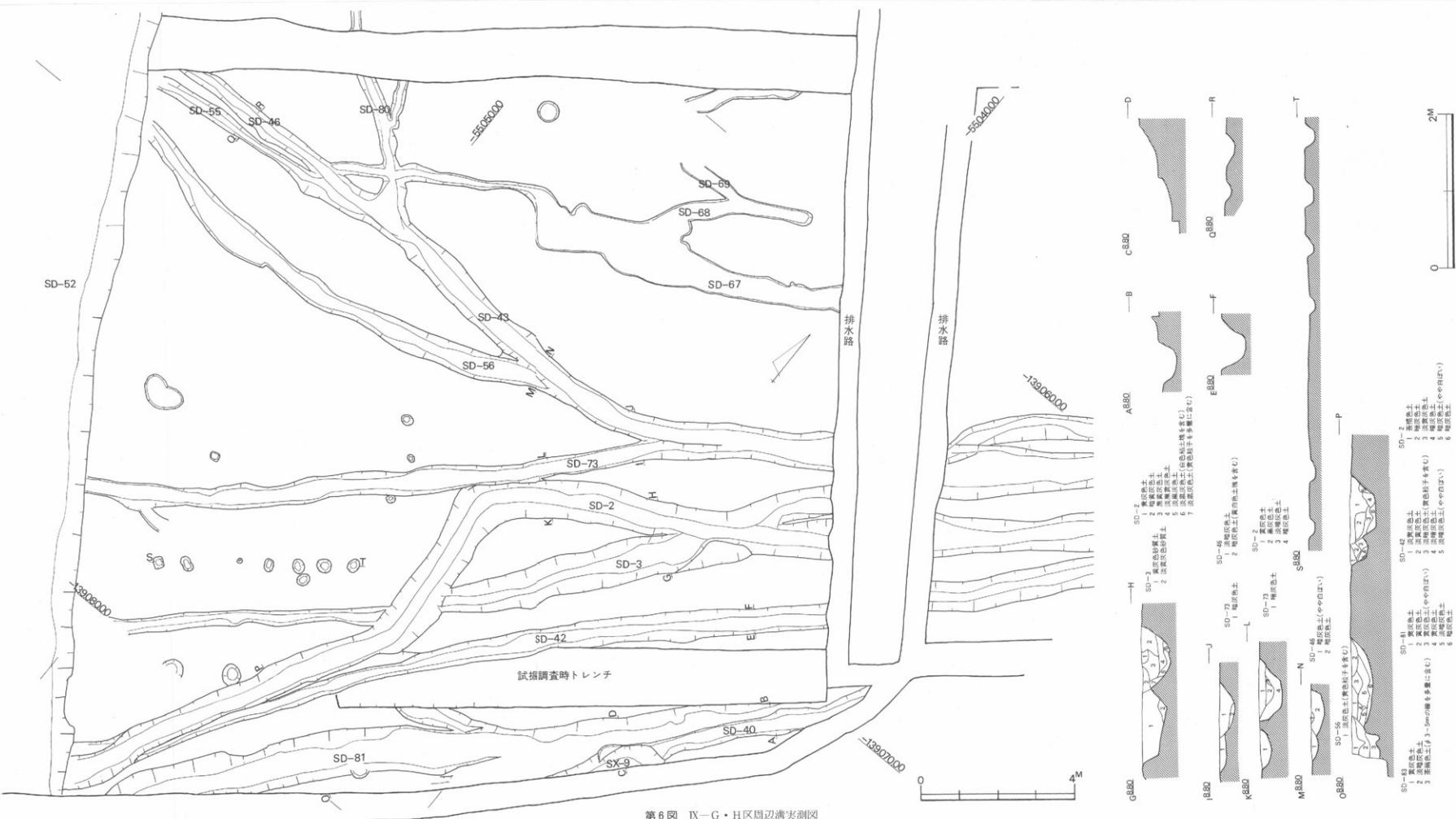
第4図 SD-16実測図

挿 図



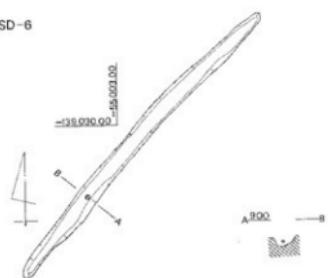
第5図 0 I -- Y区周辺溝渠測図



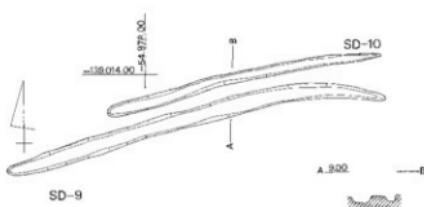


第6図 IX-G・H区周辺溝尖測図

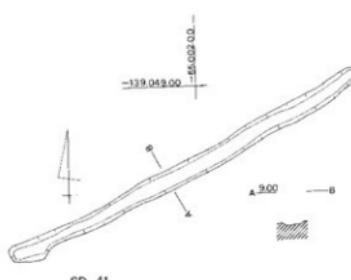
SD-6



A 900 —— 8



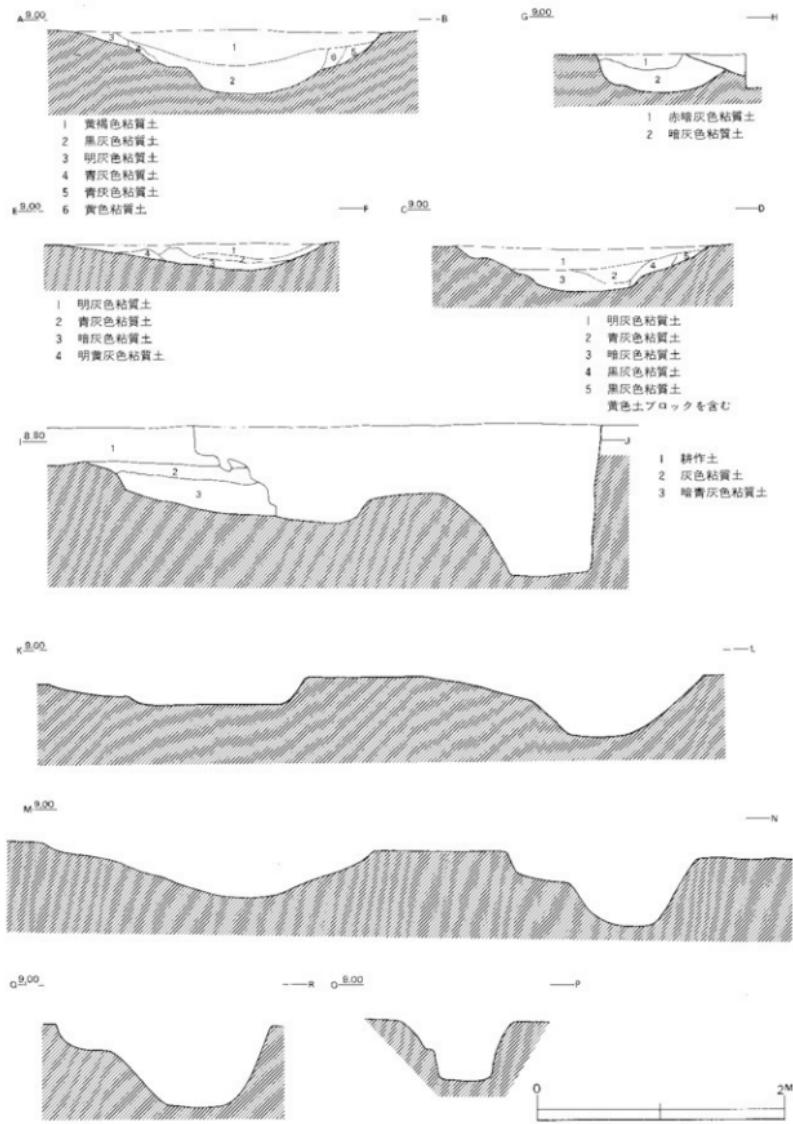
A 900 —— 6



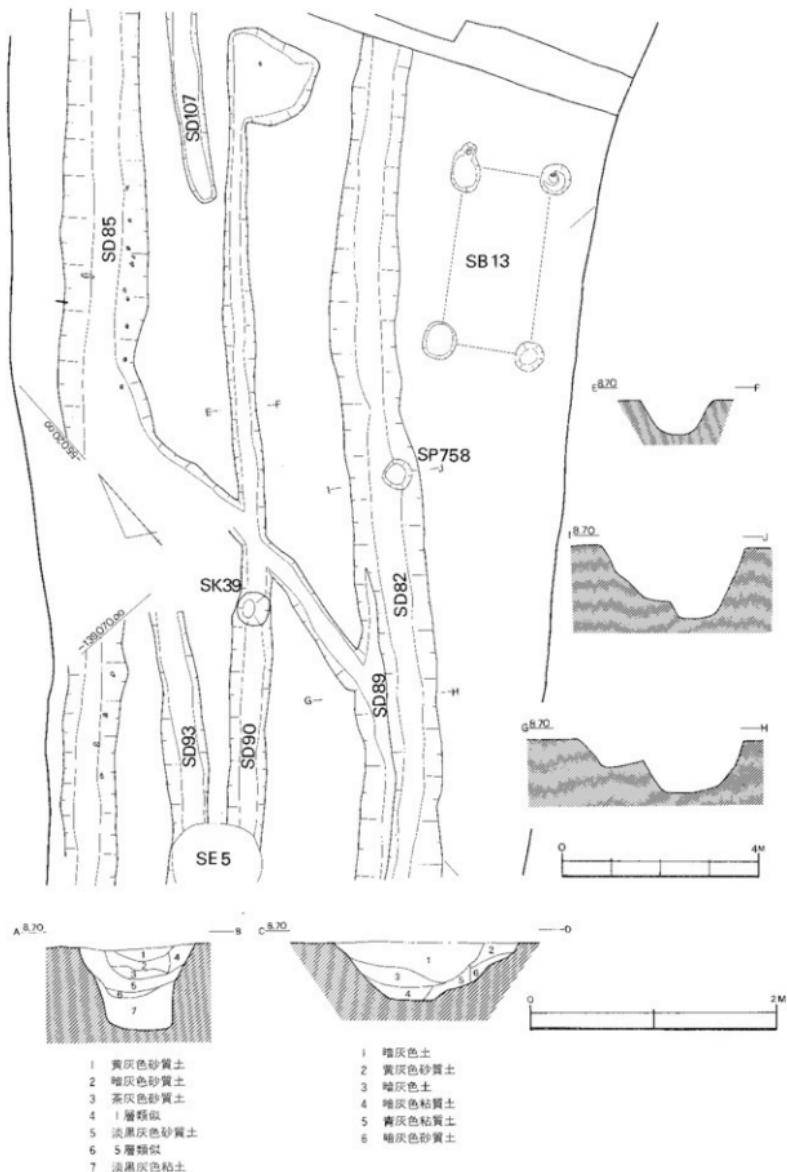
SD-41



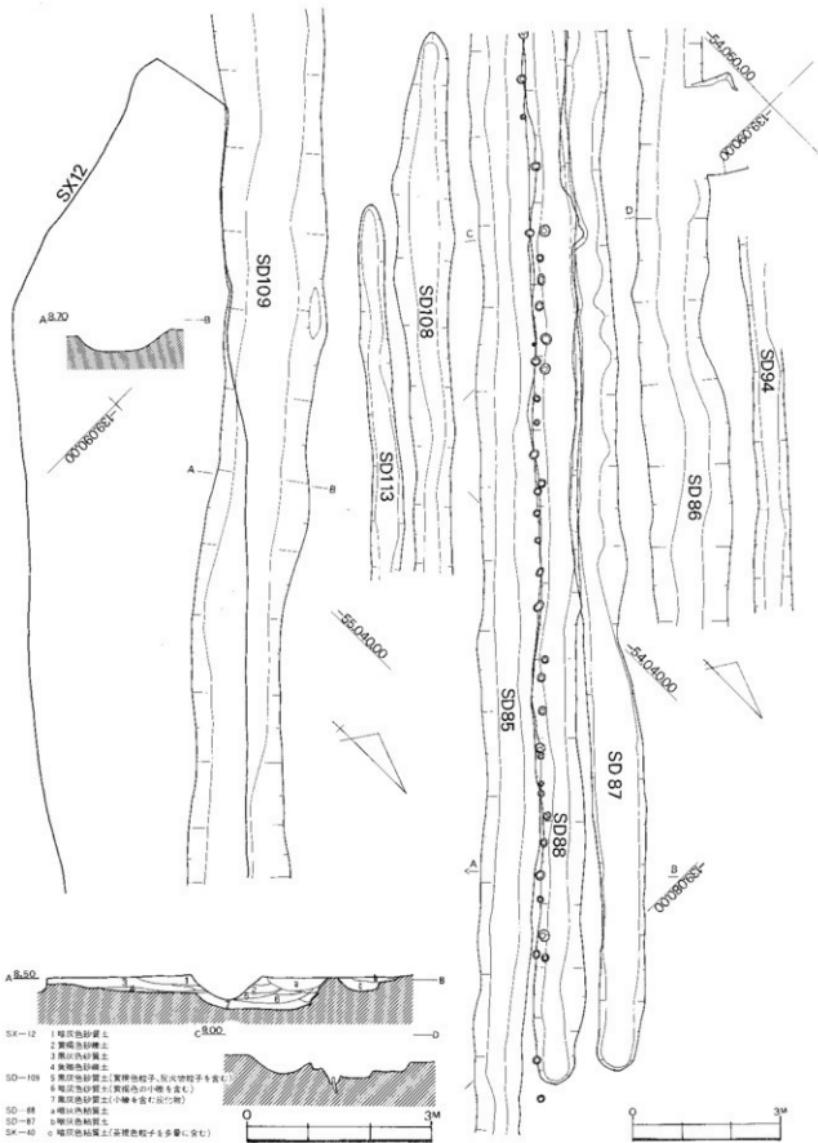
第7図 SD-6・9・10・41実測図



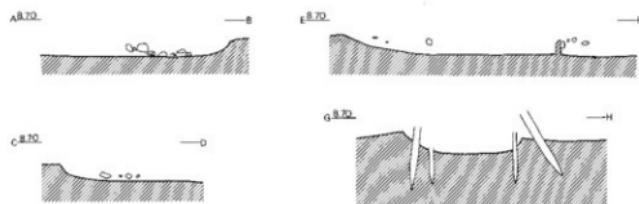
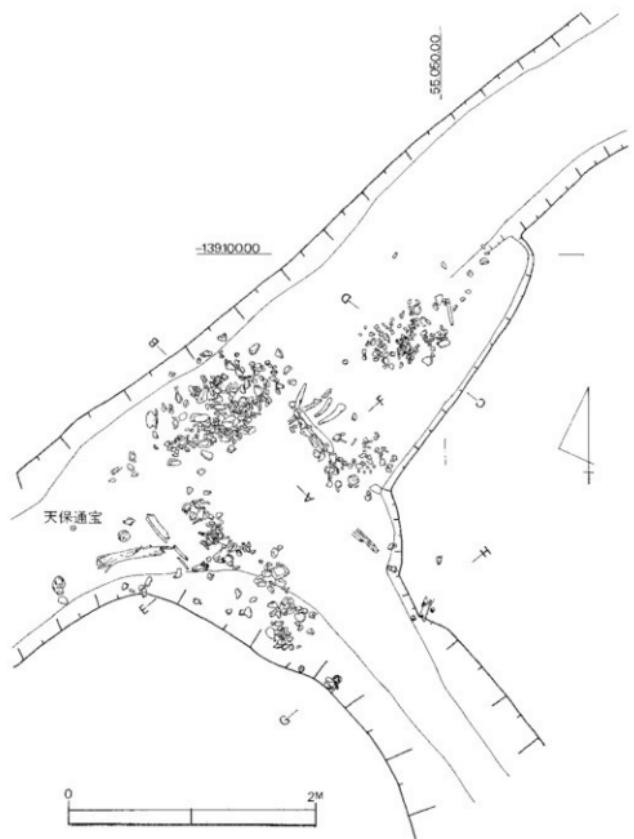
第8図 SD-52・53断面図



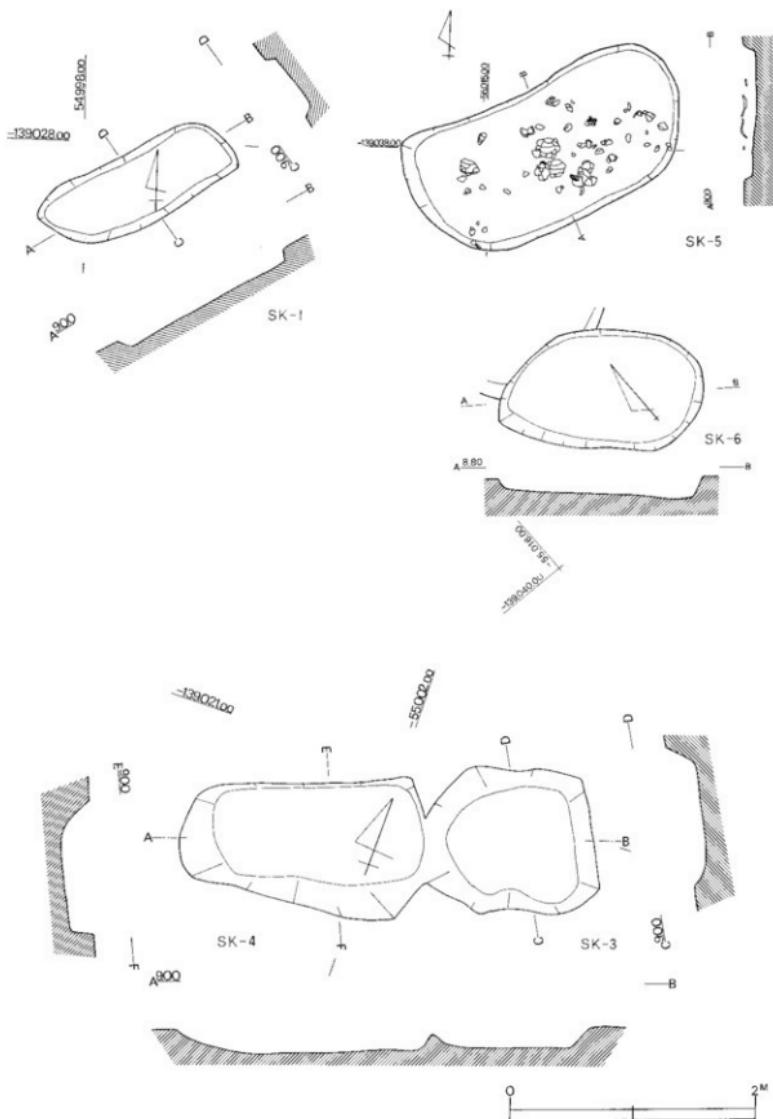
第9圖 VI—G区周辺溝尖測図



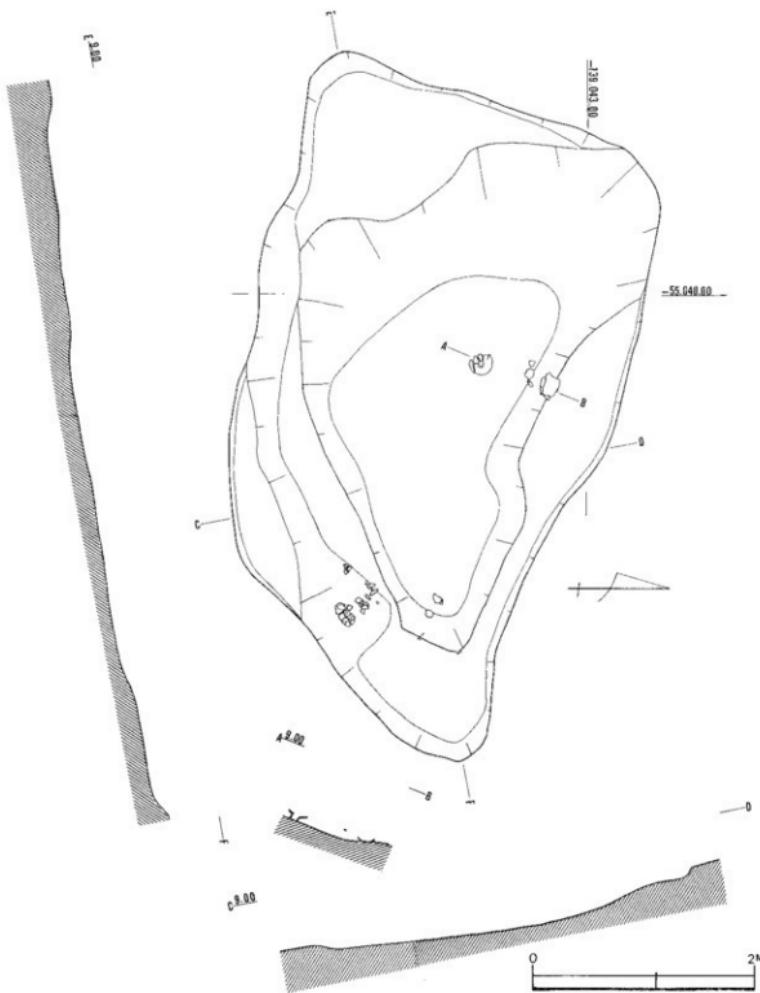
第10図 VII-IX-1区周辺測定図



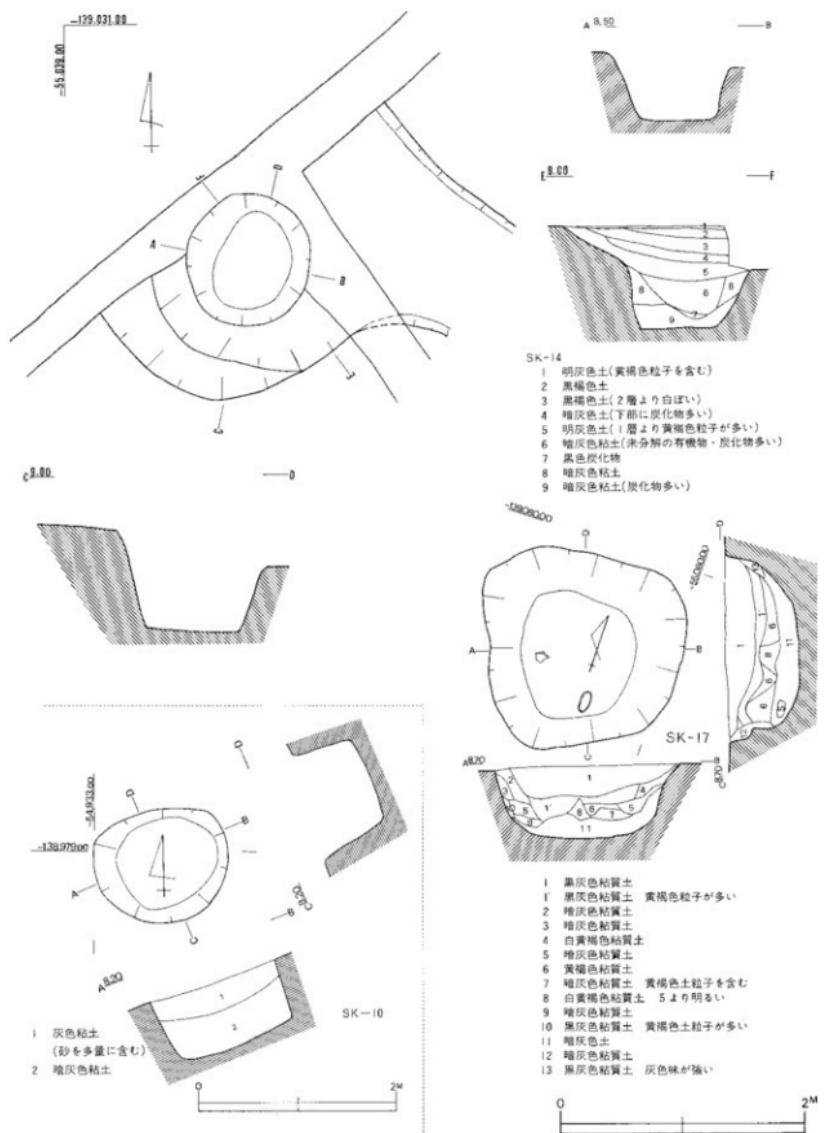
第11図 S D - 85 • 102交差部分尖測図



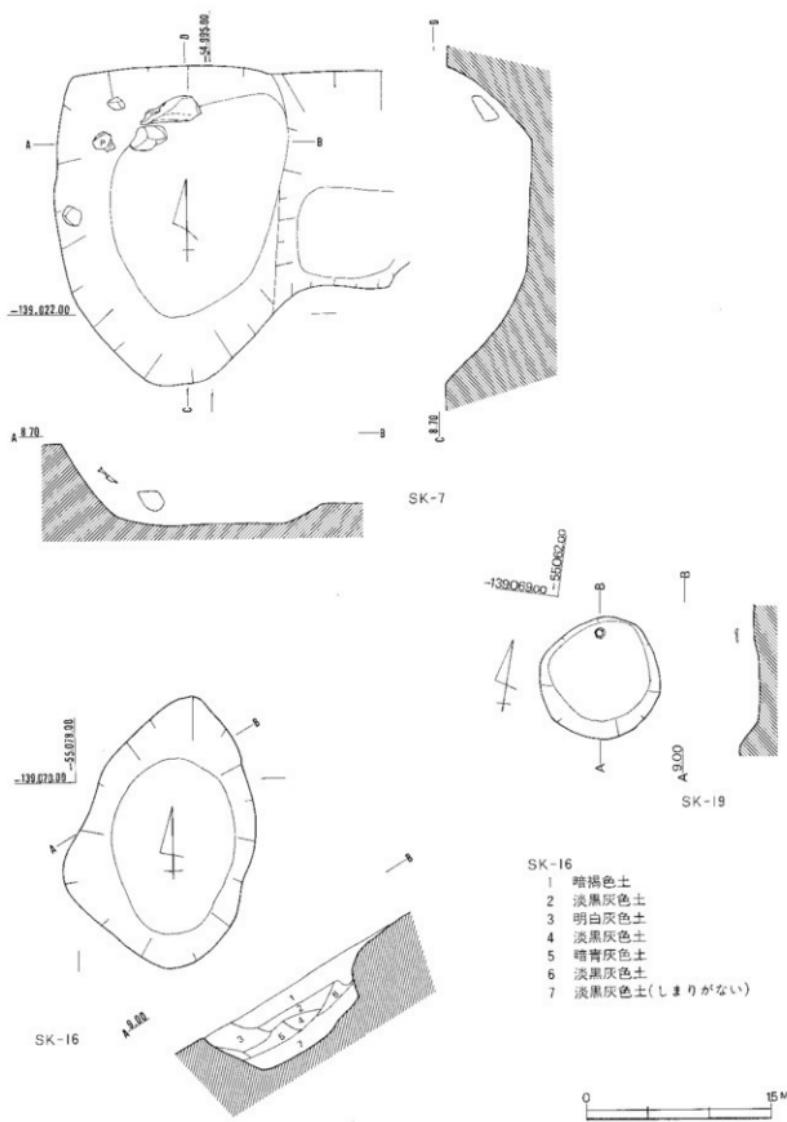
第12図 SK-1・3・4・5・6実測図



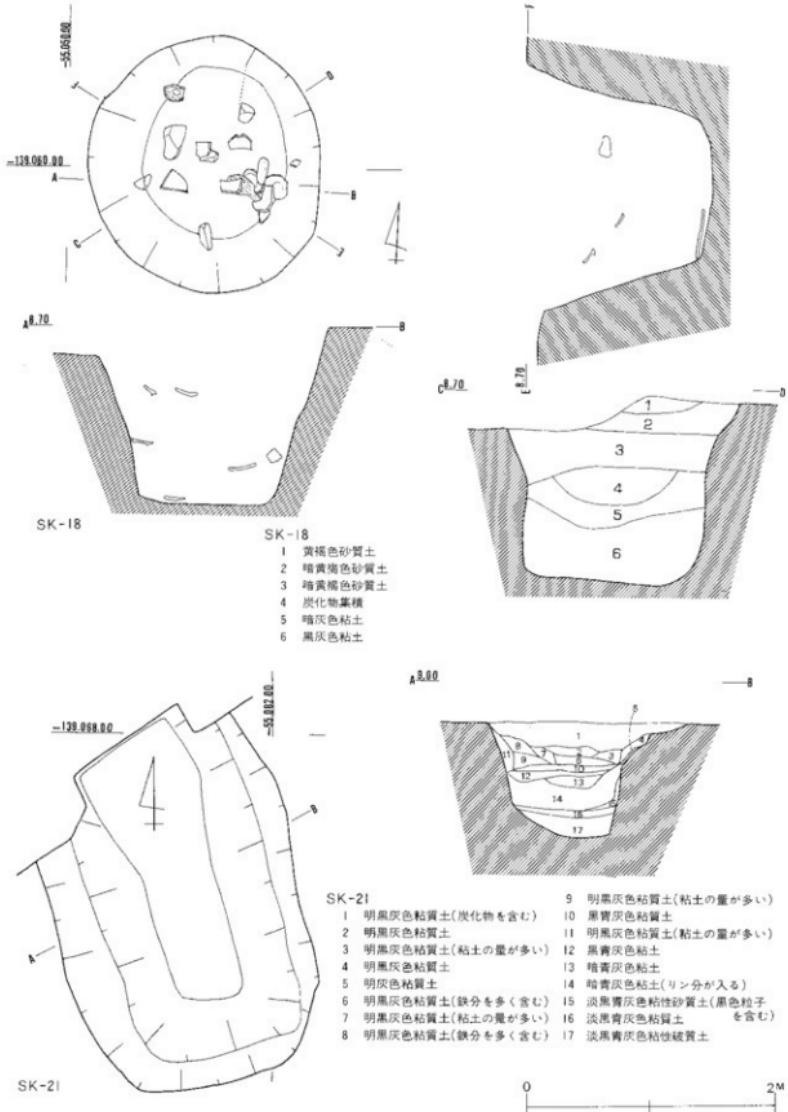
第13図 SK-13実測図



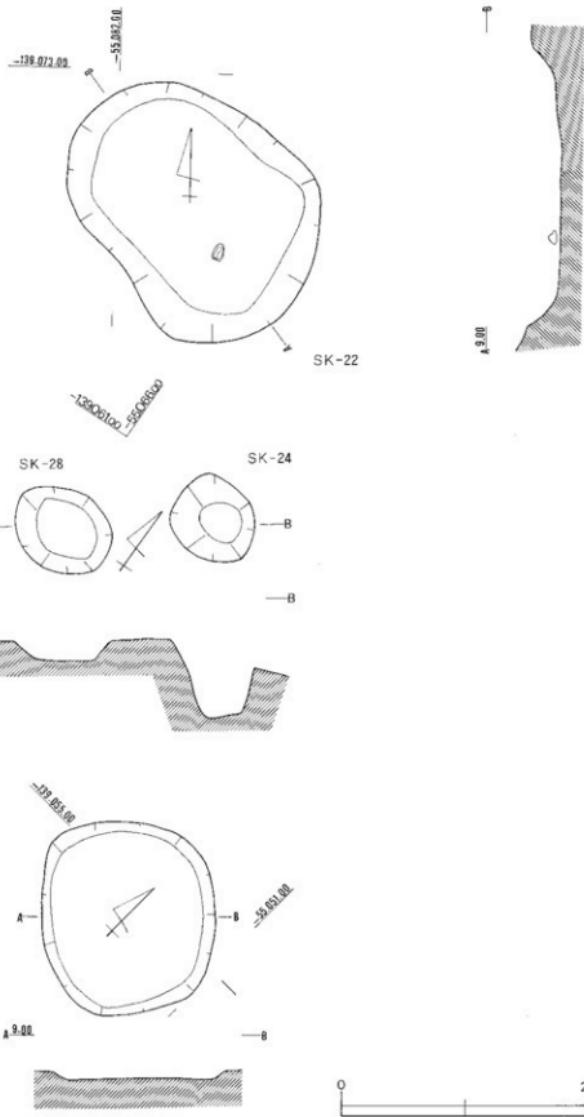
第14図 SK-10・14・17実測図



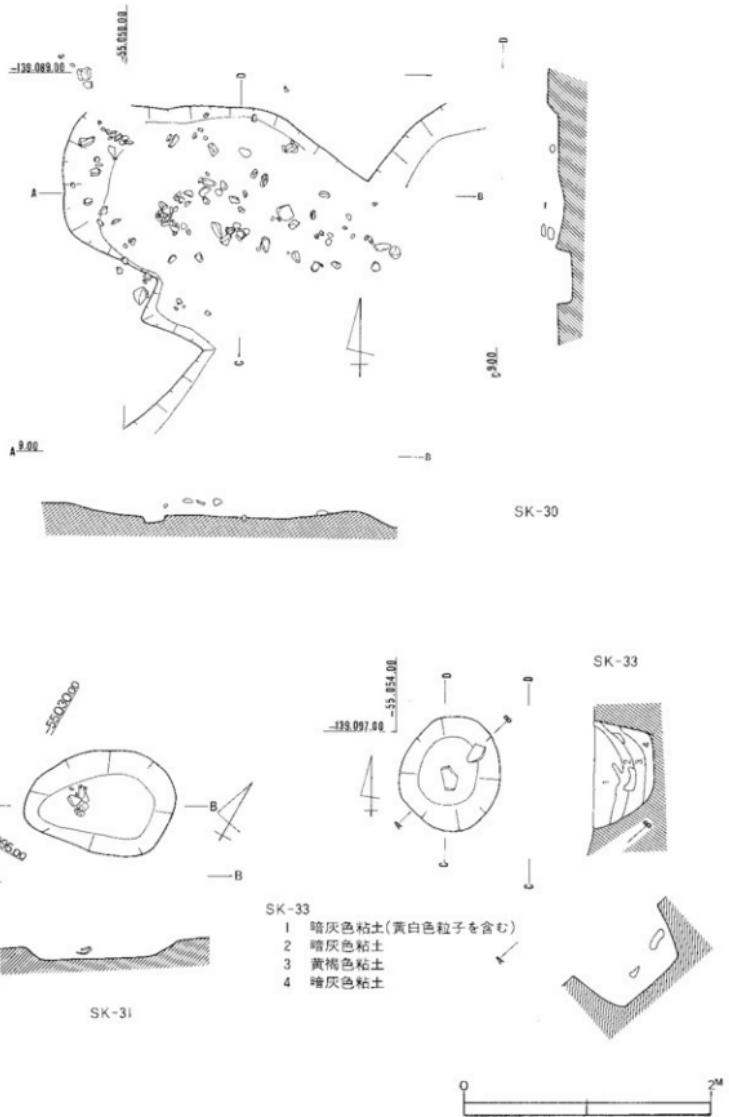
第15図 SK-7・16・19測図



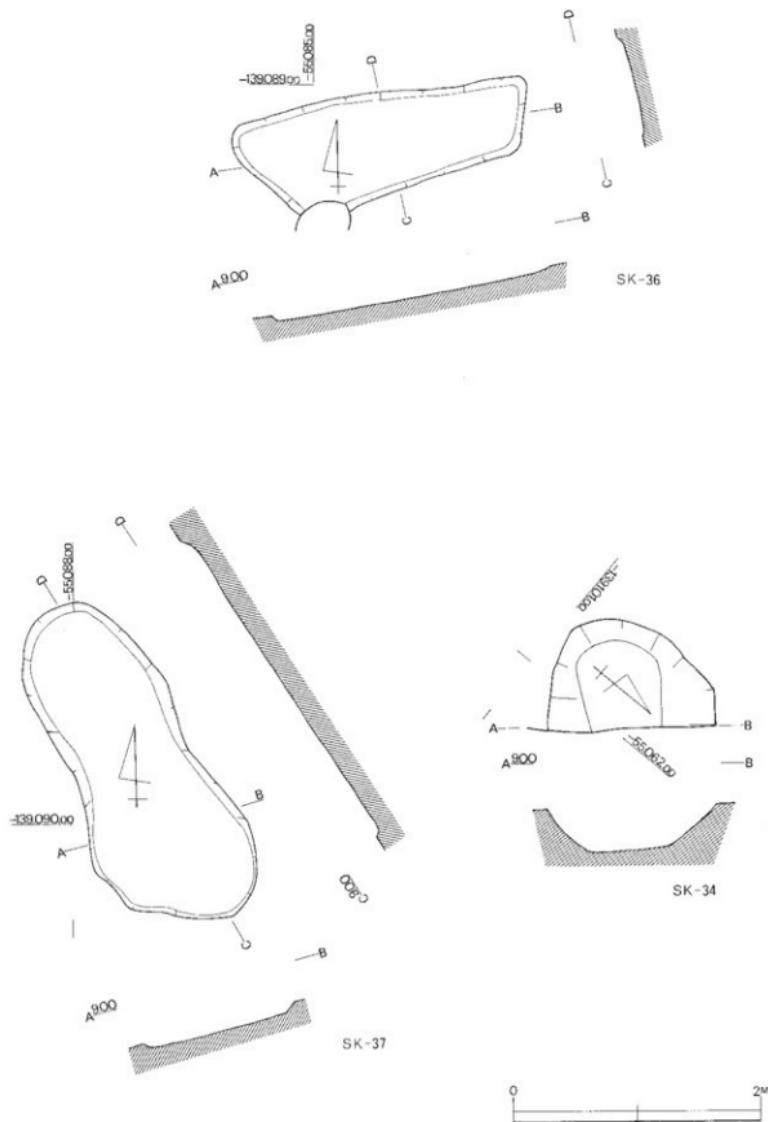
第16図 SK-18・21実測図



第17図 SK-22・24・27・28実測図

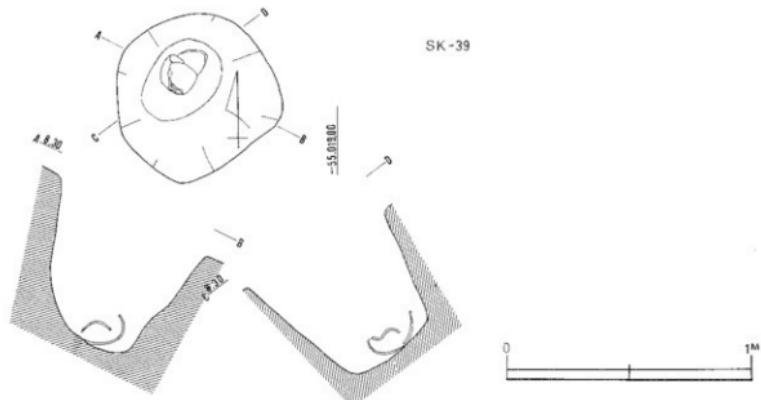


第18図 SK-30・31・32尖測図



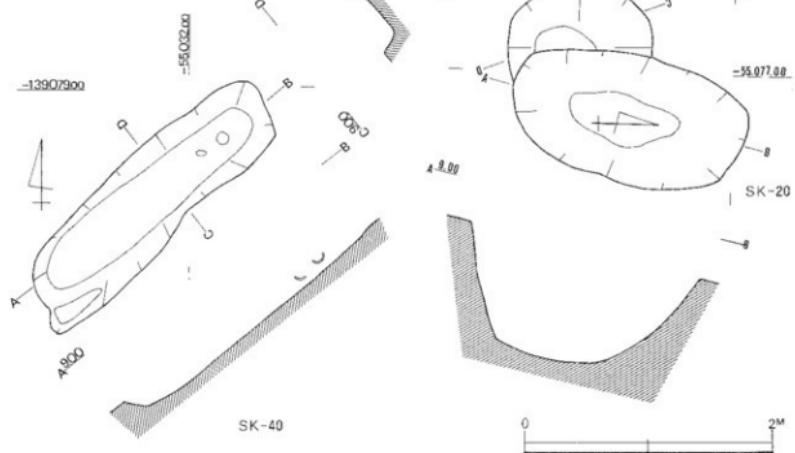
第19図 SK-34・36・37実測図

-139.0700



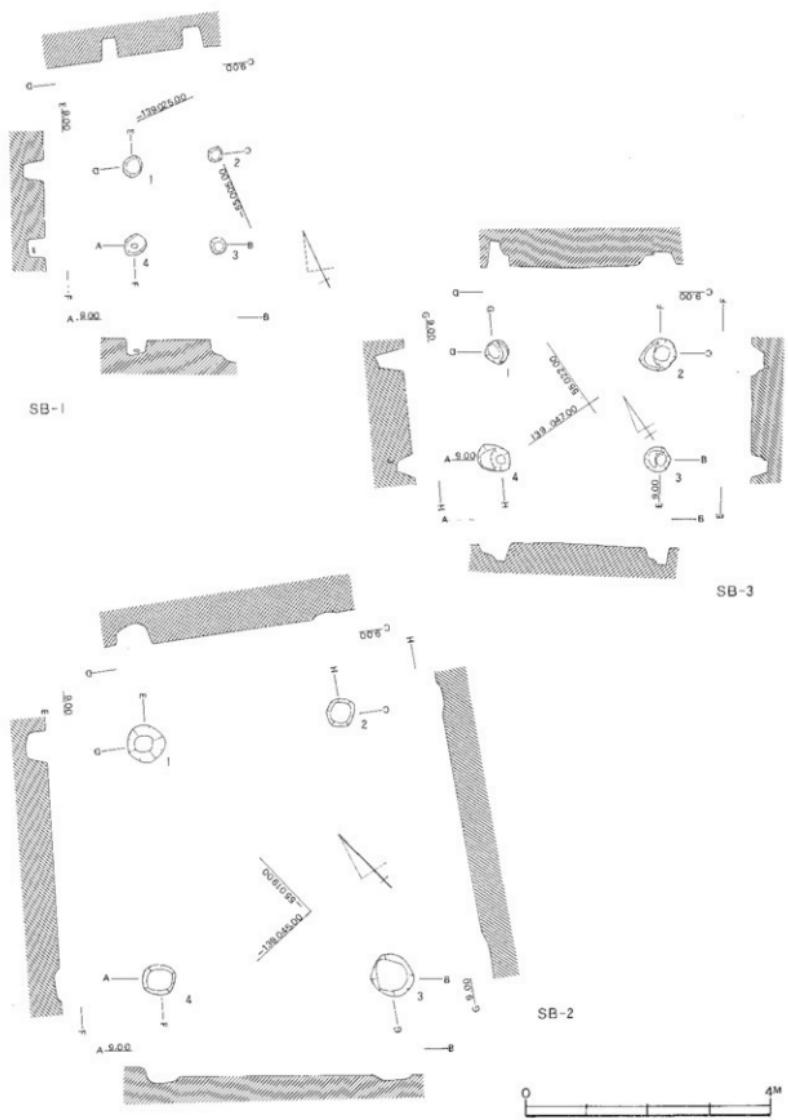
SK-39

-139.0700

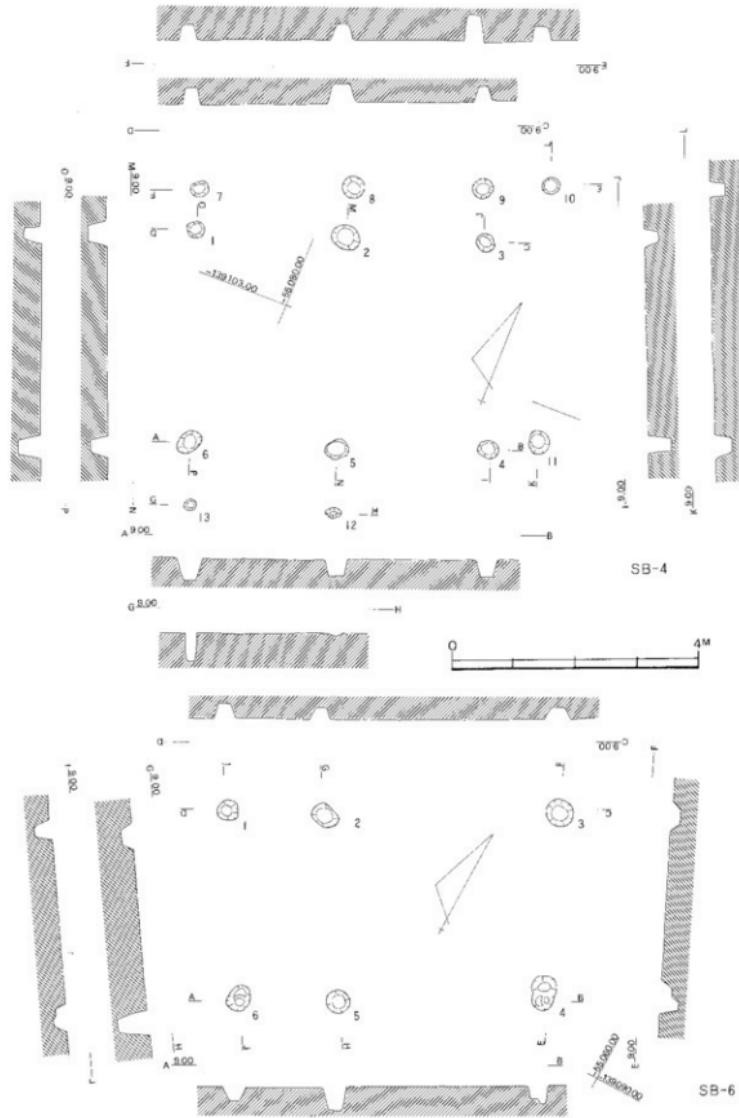


SK-41

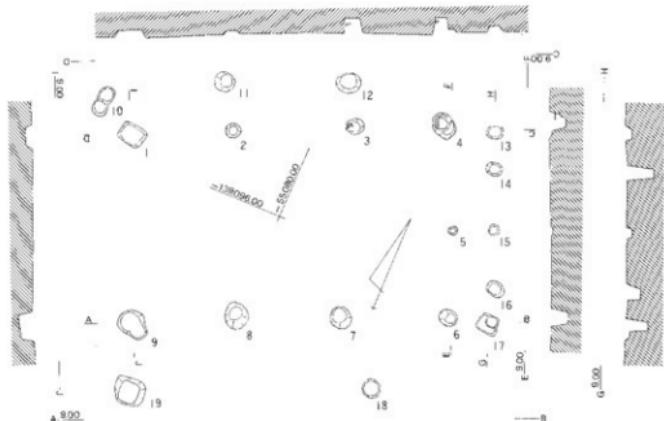
第20図 SK-20・39・40・41実測図



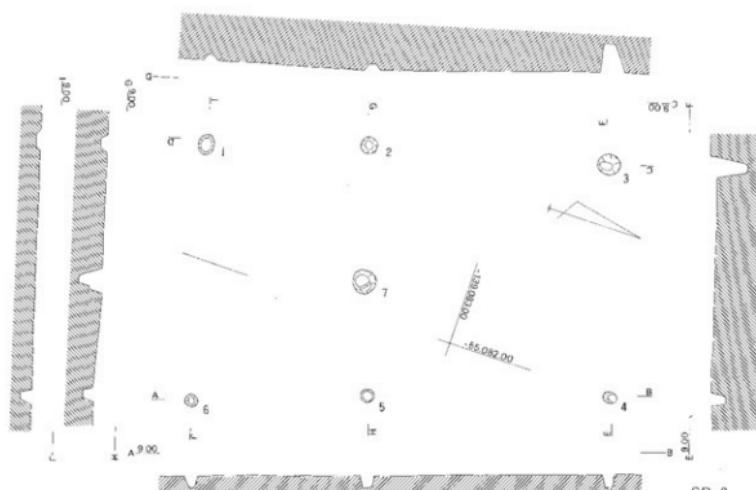
第21図 SB-1・2・3実測図



第22図 SB-4・6 実測図



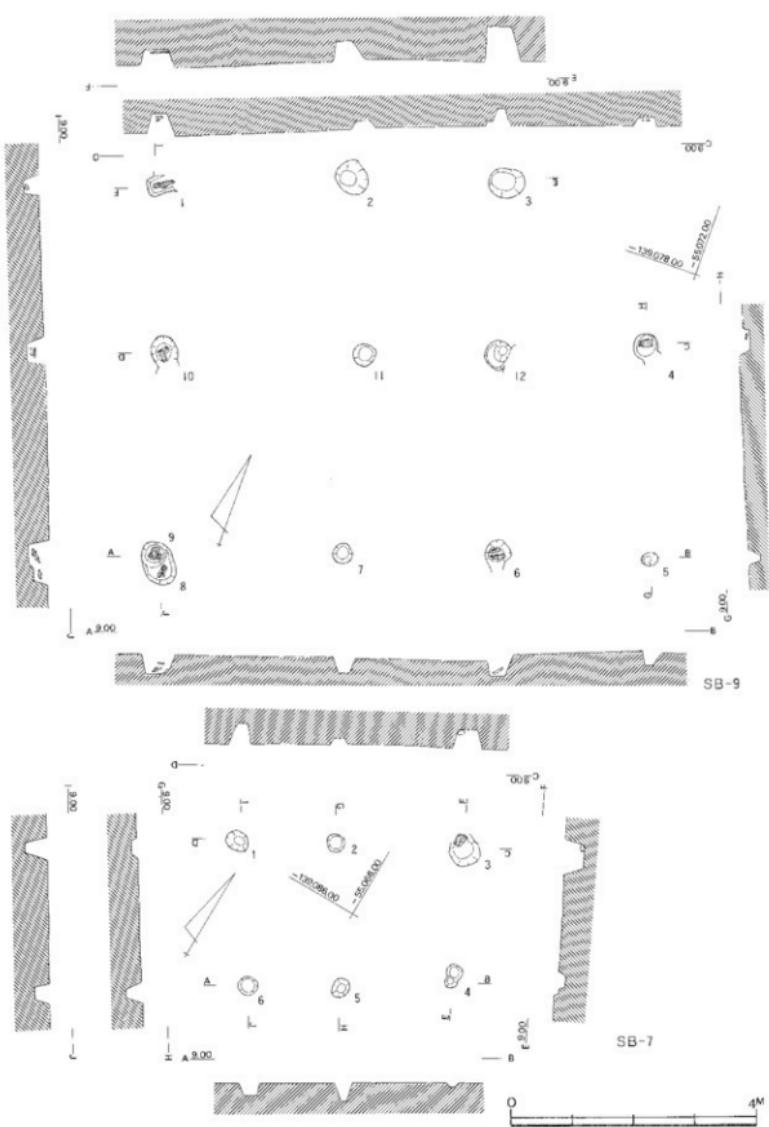
SB-5



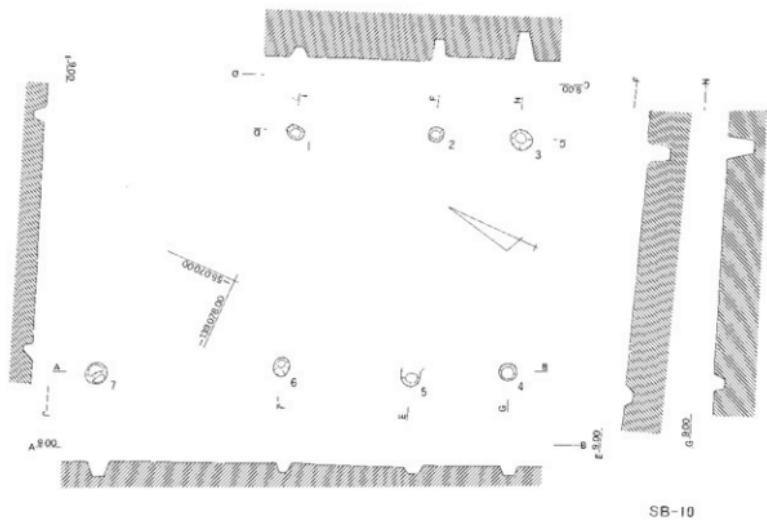
SB-8



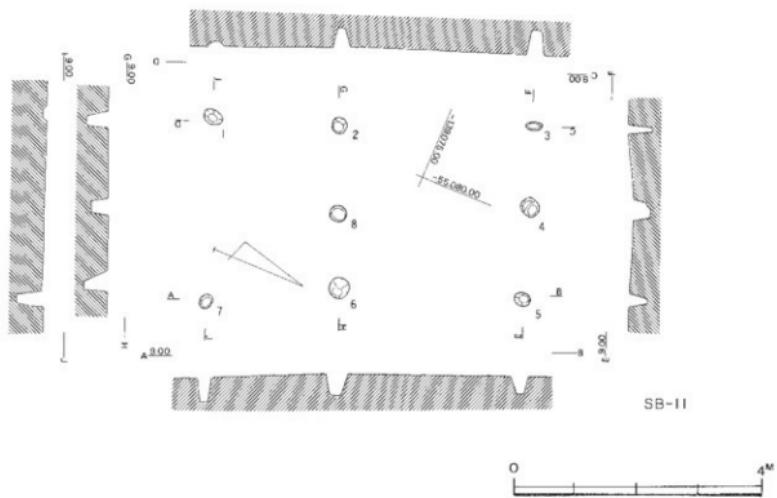
第23図 SB-5・8実測図



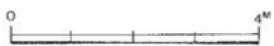
第24図 SB-7・9実測図



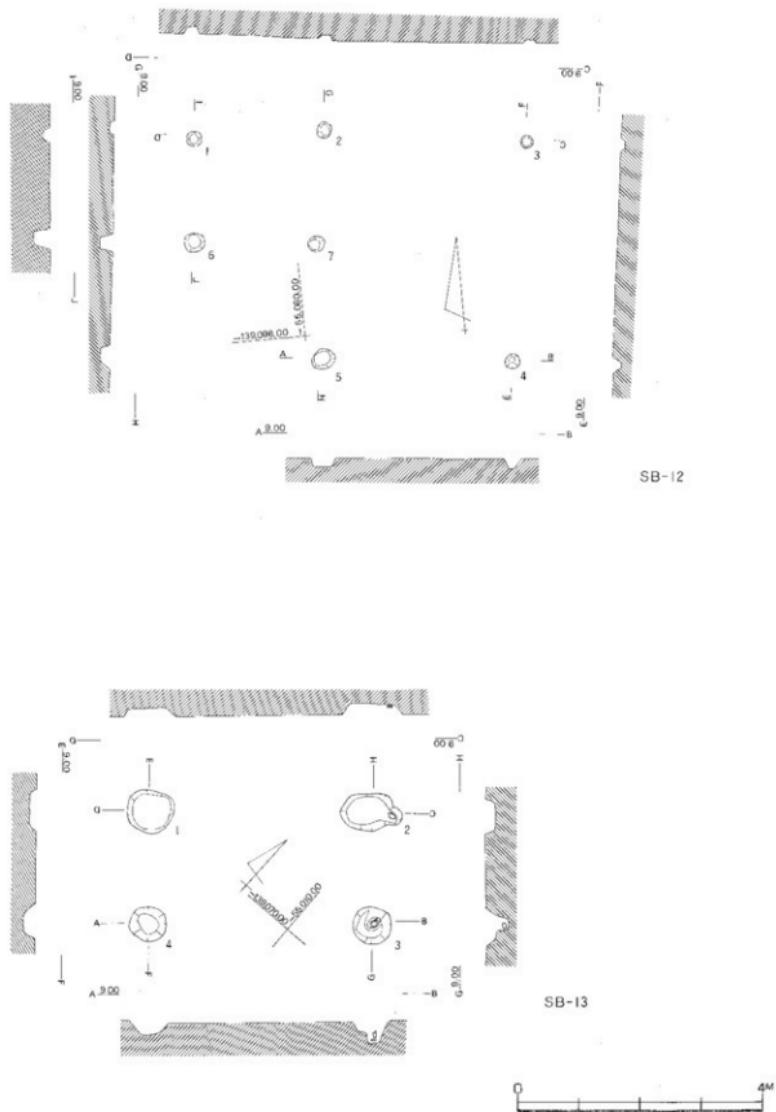
SB-10



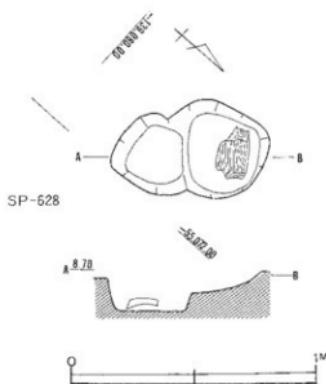
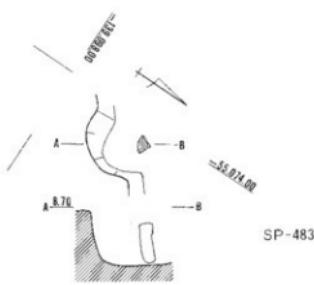
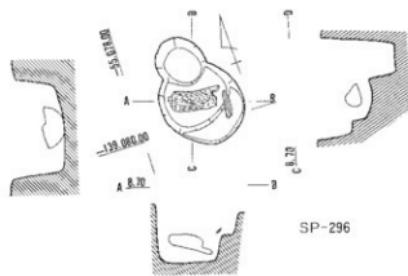
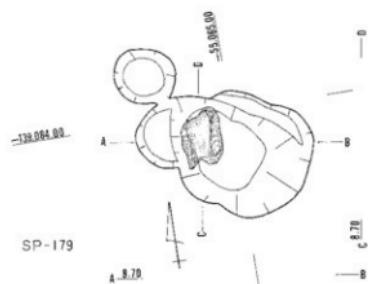
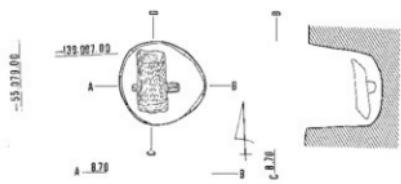
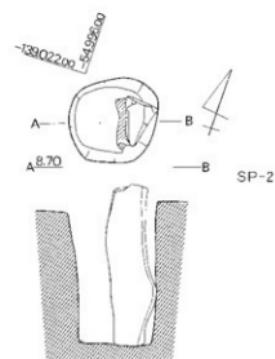
SB-11



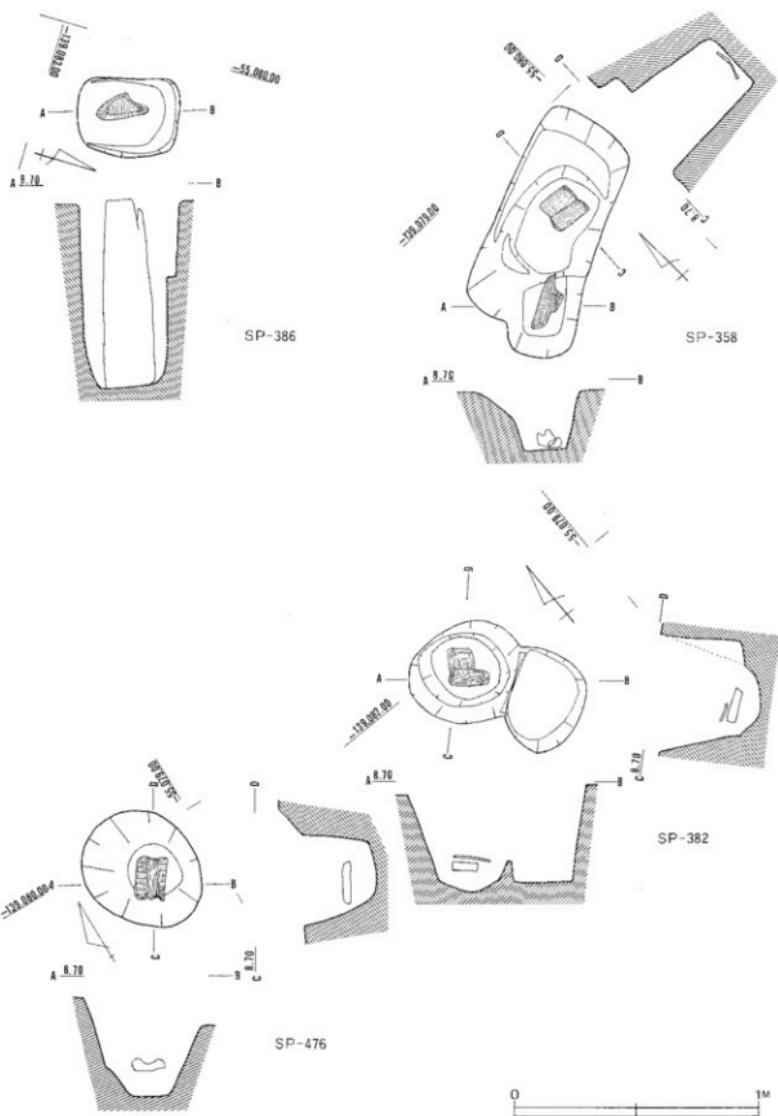
第25図 S B -10・11実測図



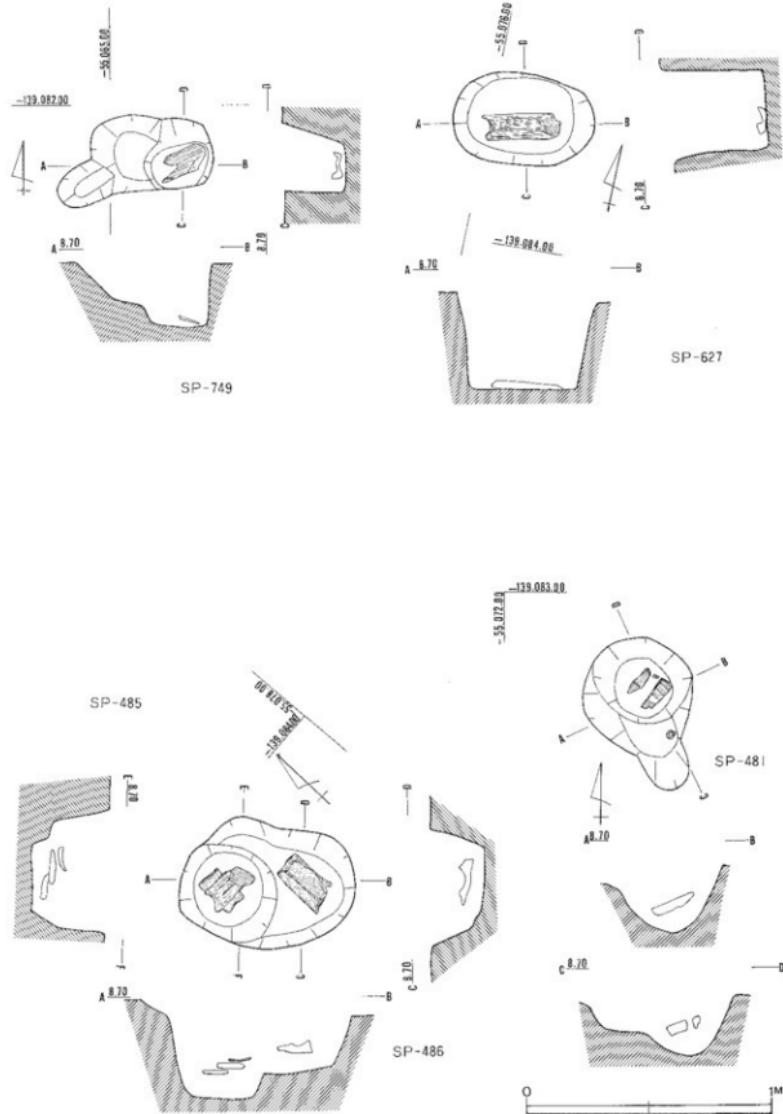
第26図 S B-12・13実測図



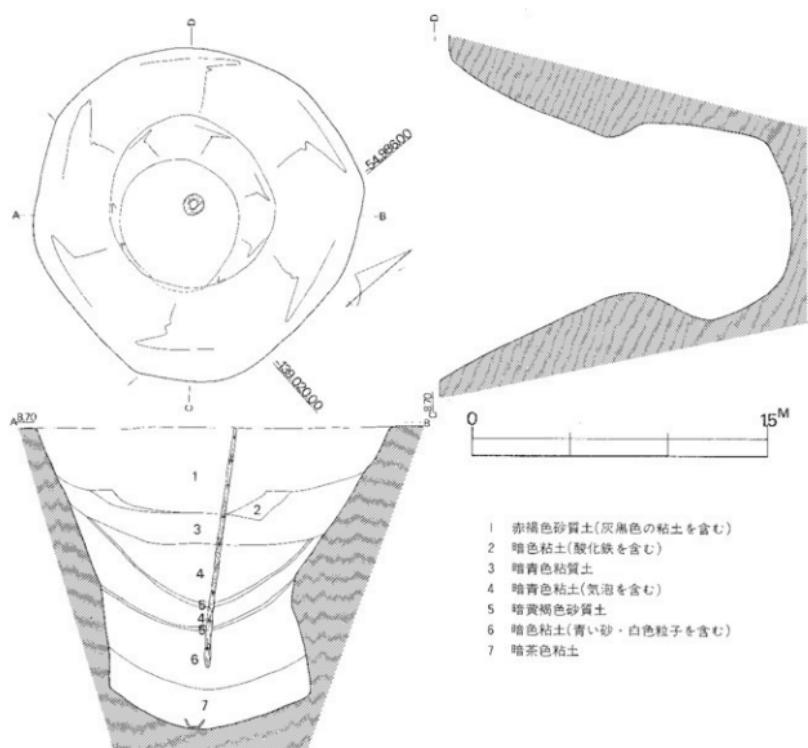
第27図 S P - 2 • 124 • 179 • 483 • 628 • 実測図



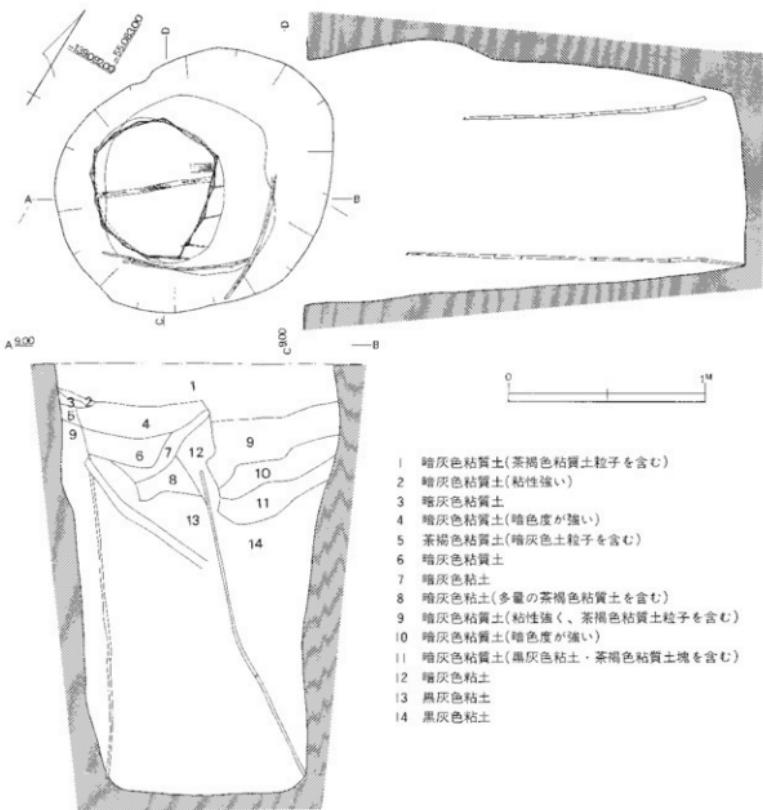
第28図 SP-358・382・386・476実測図



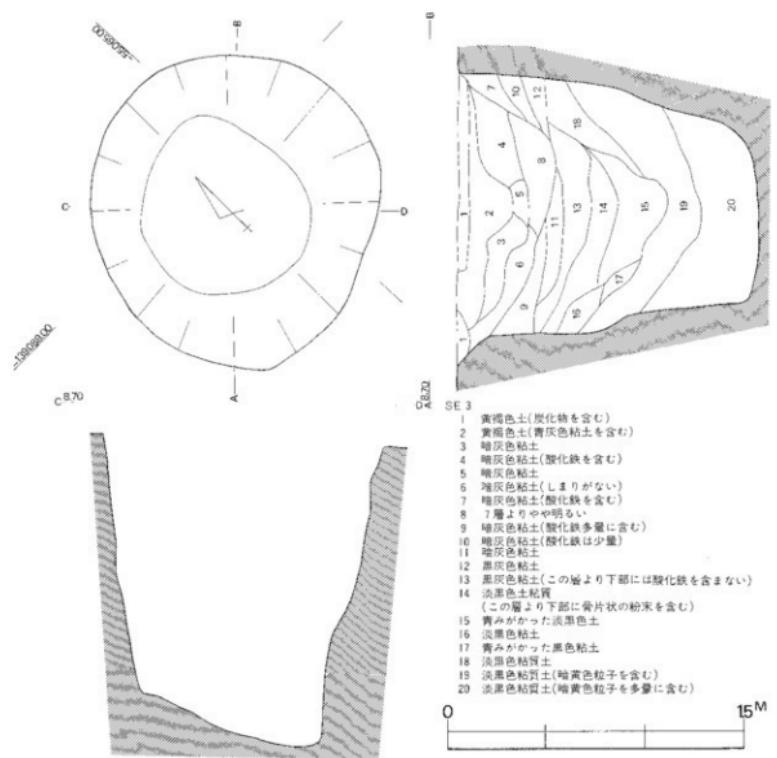
第29図 S P - 481 • 486 • 627 • 749実測図



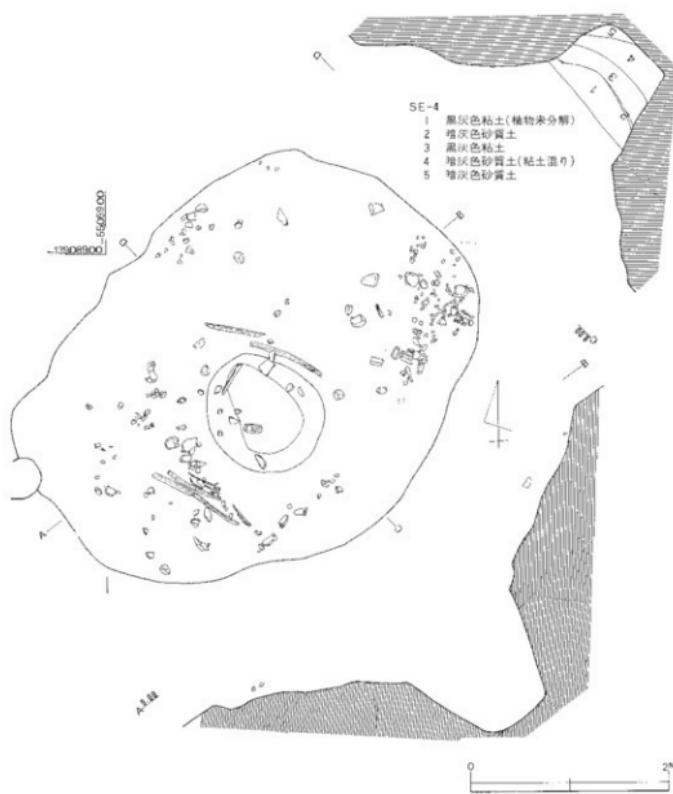
第30図 S E - I 実測図



第31図 S E - 2 実測図



第32図 SE-3 実測図

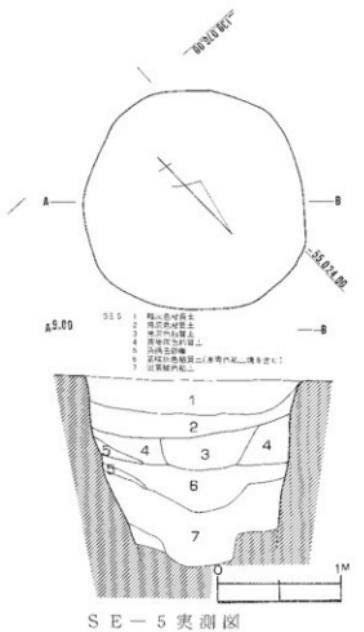


第33図 S E - 4 実測図

S A - 1 実測図



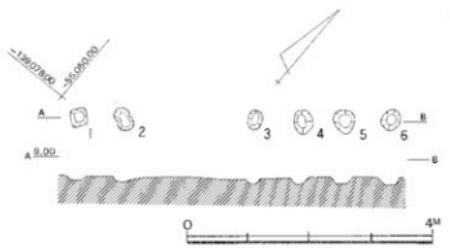
— 8
② 6 5 4 3 2 1



S E - 5 実測図

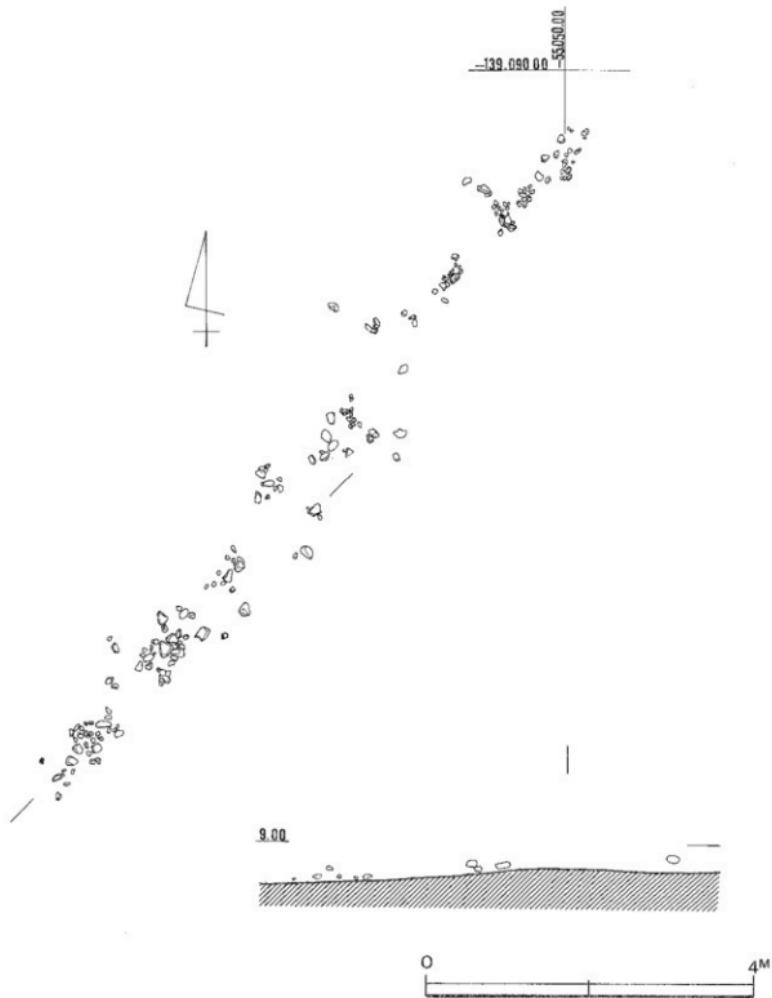


— 8
② 6 5 4 3 2 1

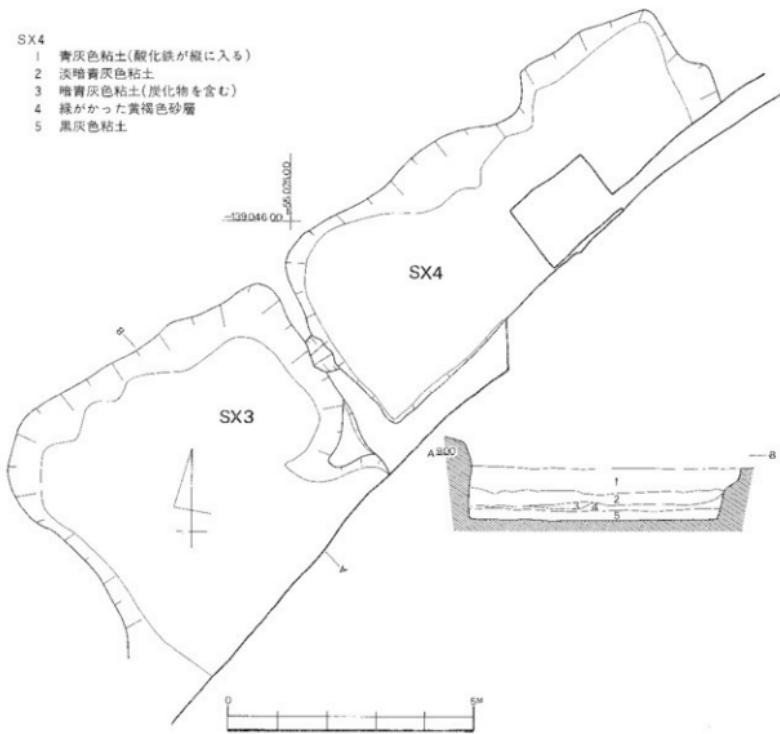


S A - 2 実測図

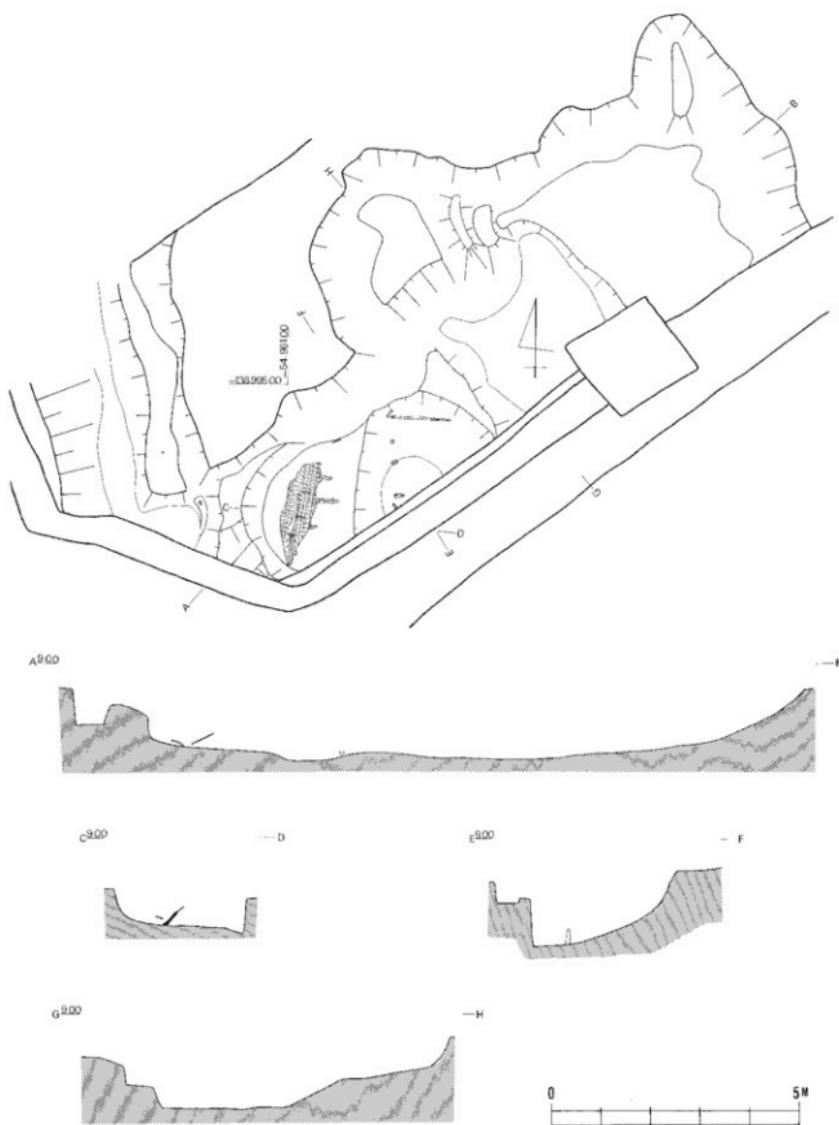
第34図 S E - 5 • S A - 1 • 2 実測図



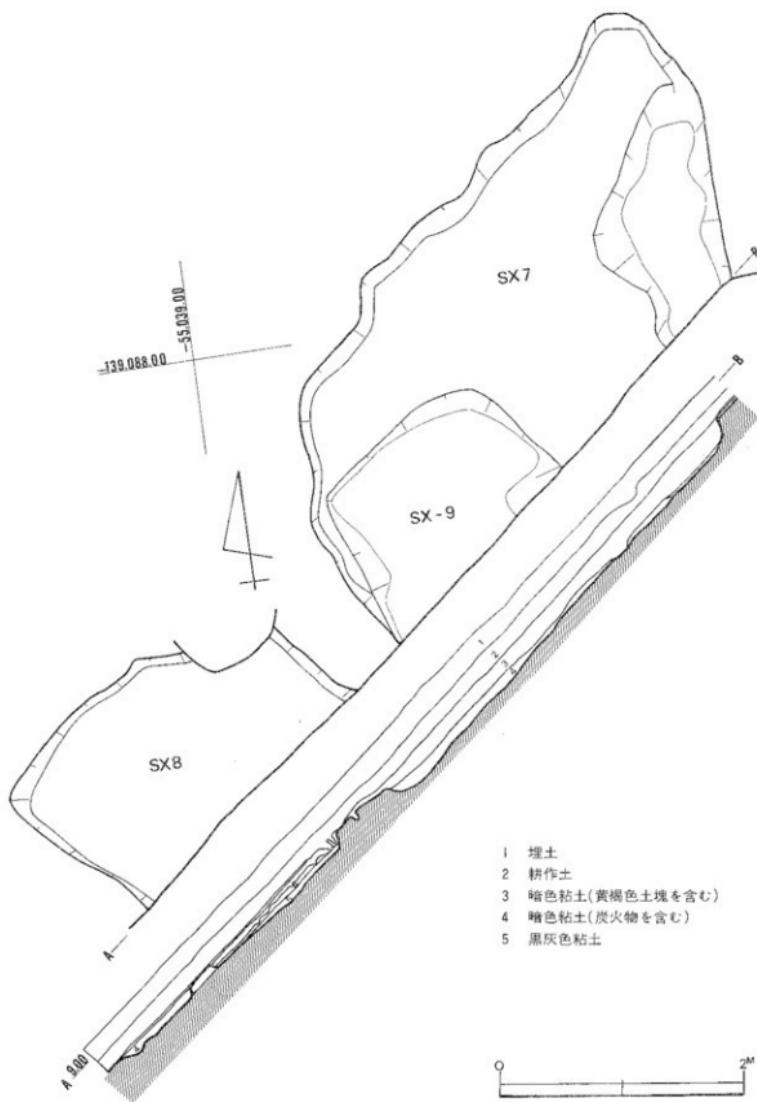
第35図 配石道構尖測図



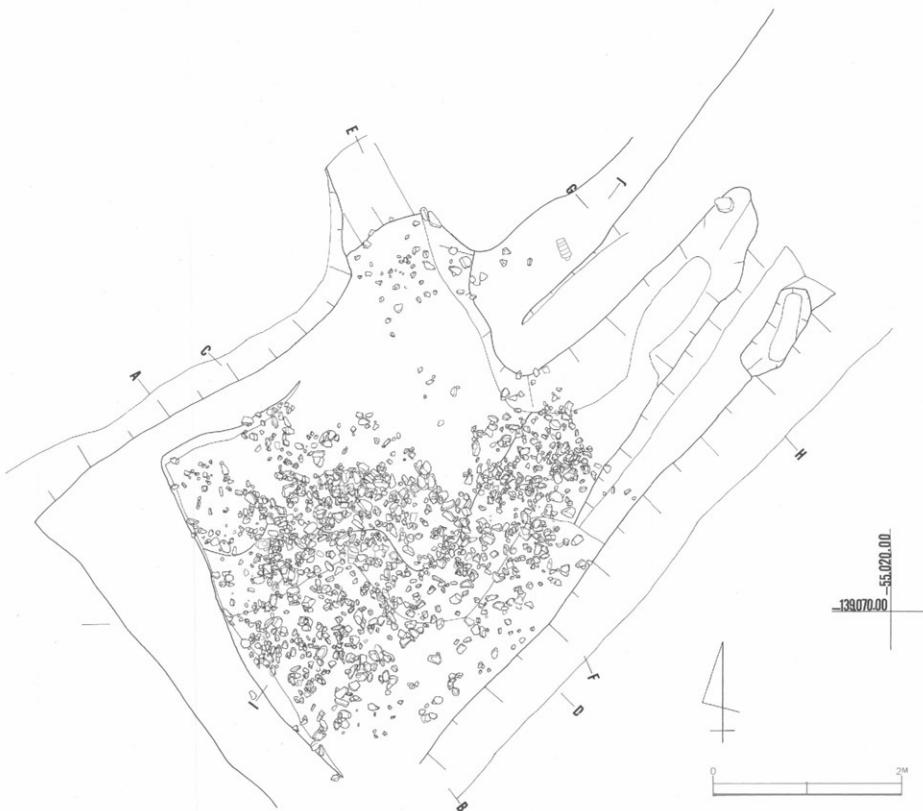
第36図 SX-3・4 美測図



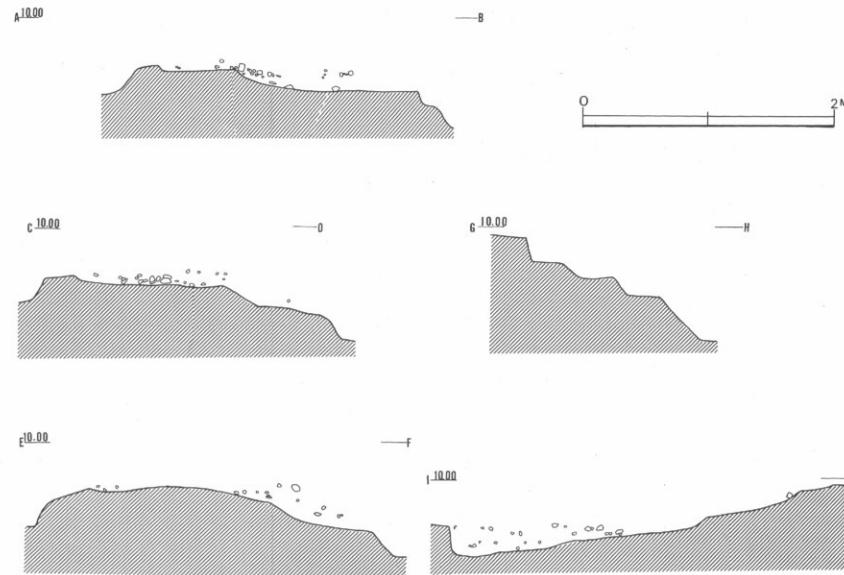
第37図 S X - 6 断測図

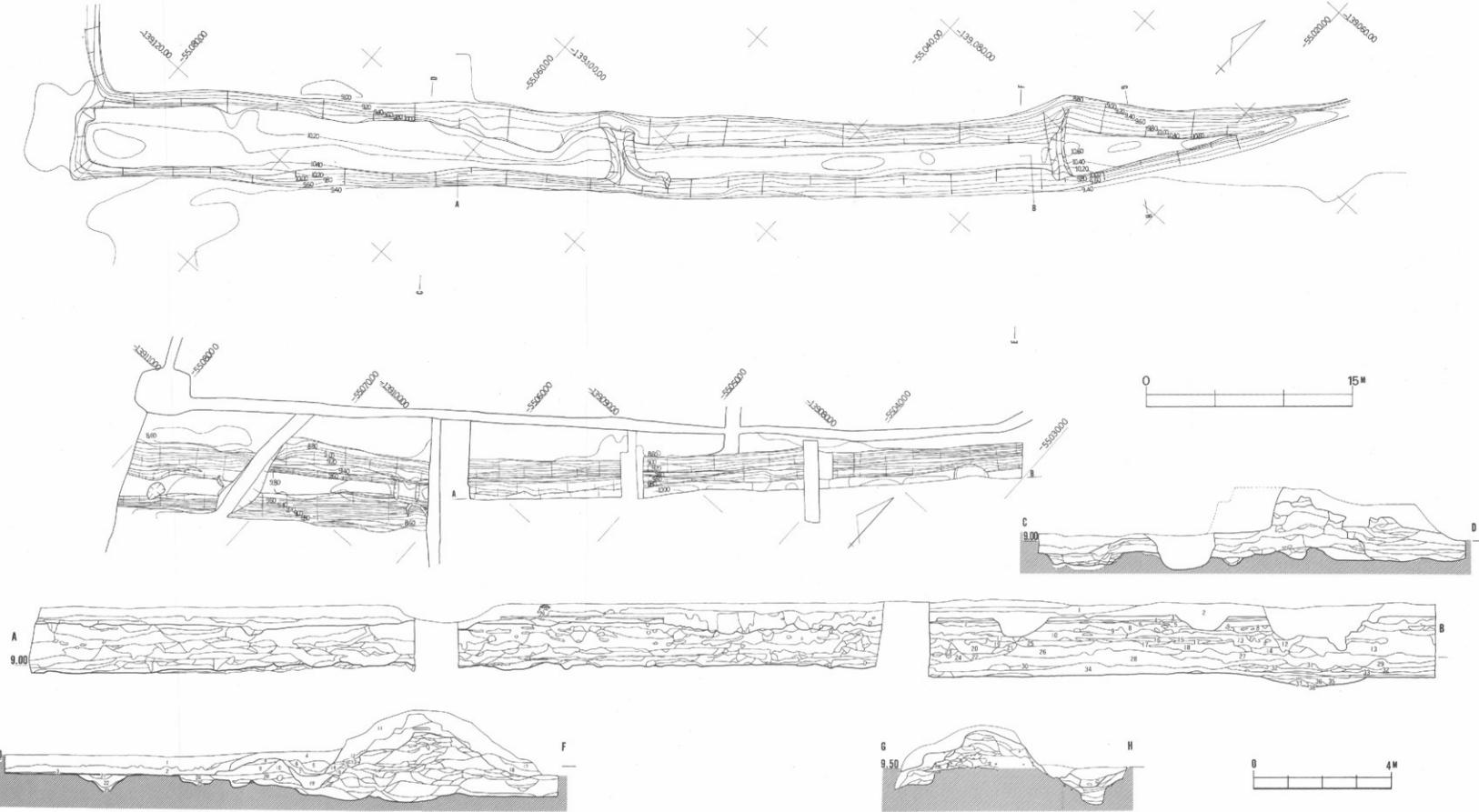


第38図 SX-7・8・9実測図

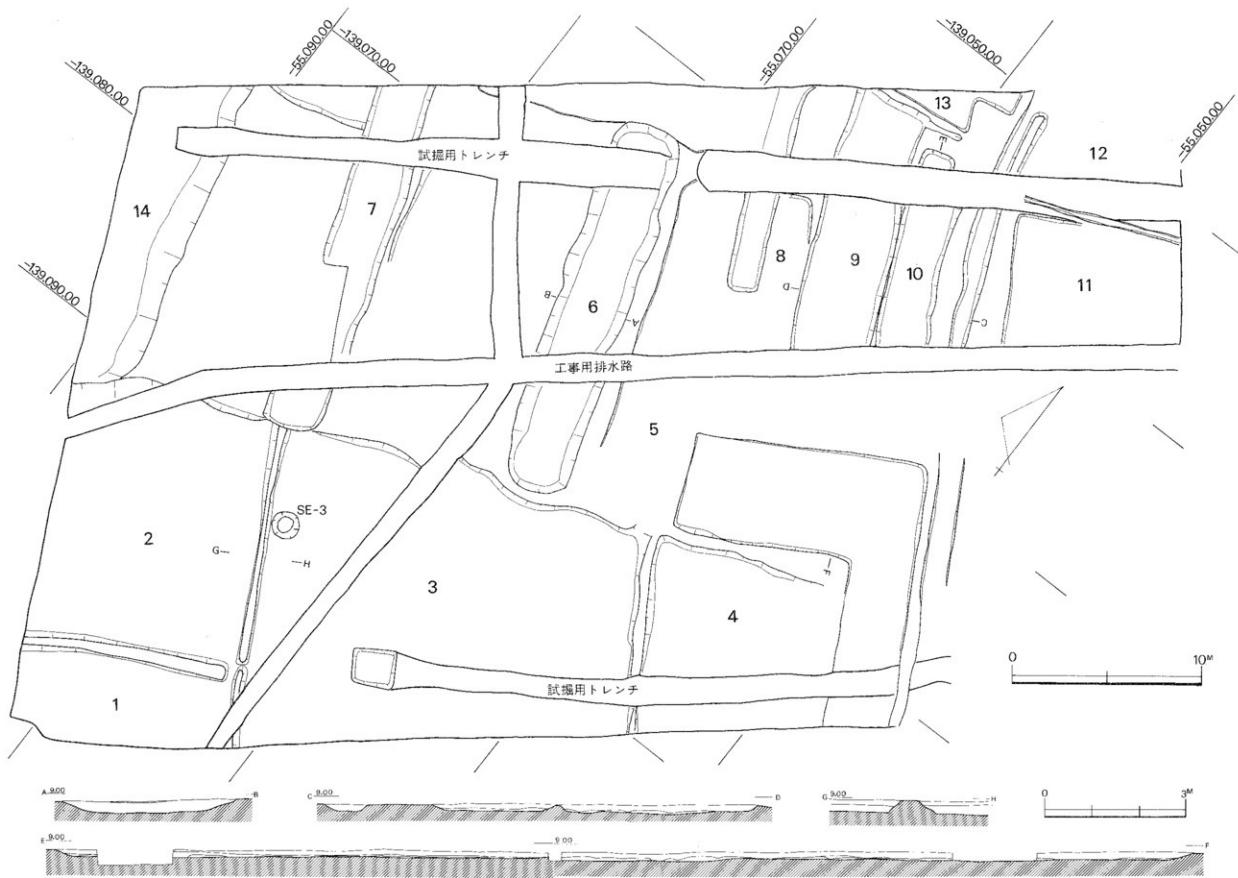


第39図 SX-13 実測図

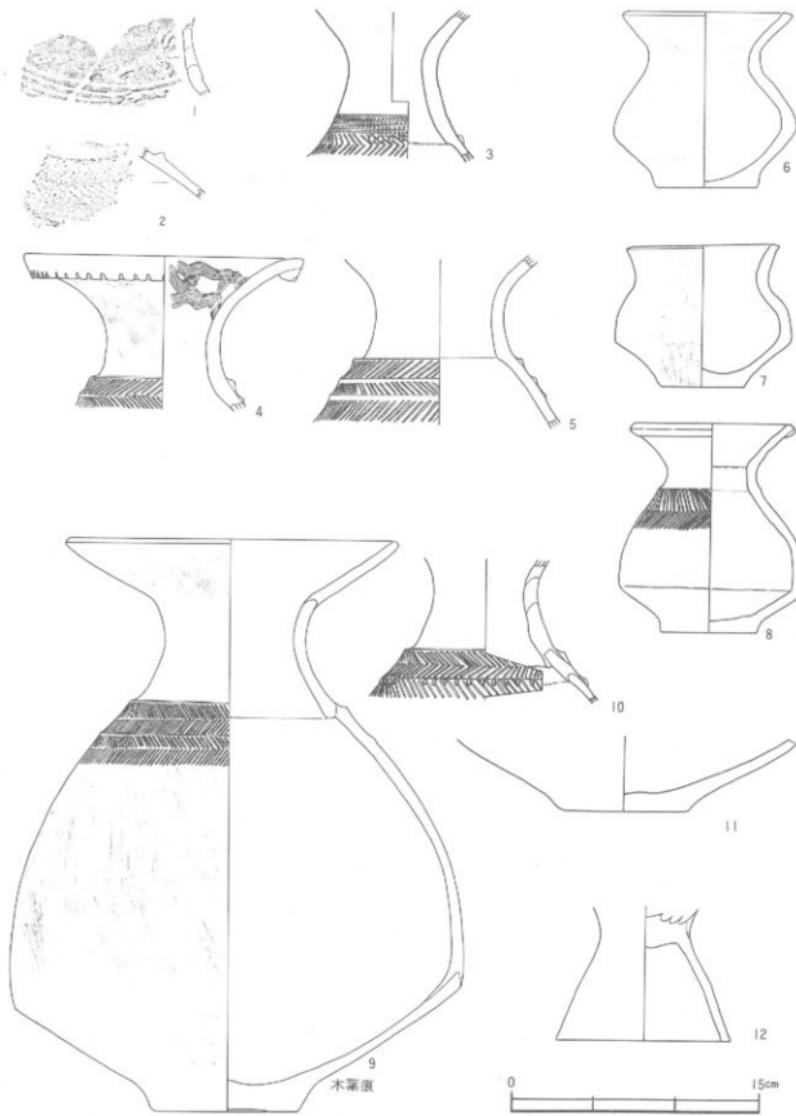




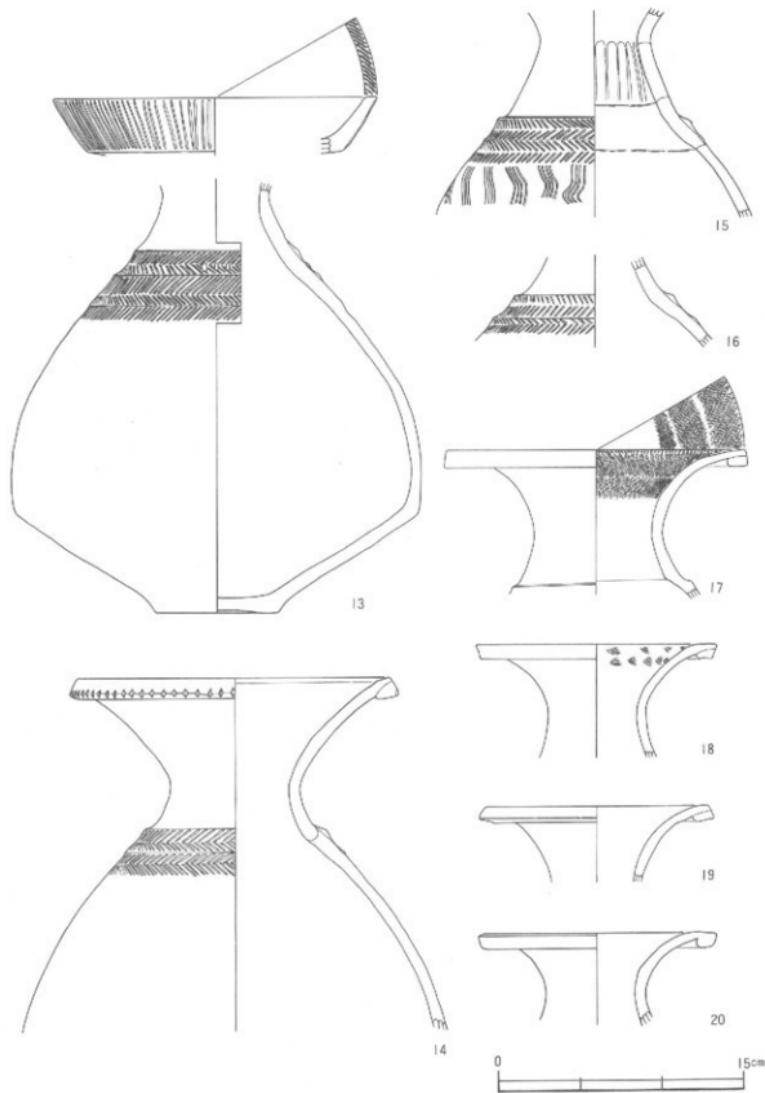
第40図 金山堤実測図



第41図 水田状況実測図

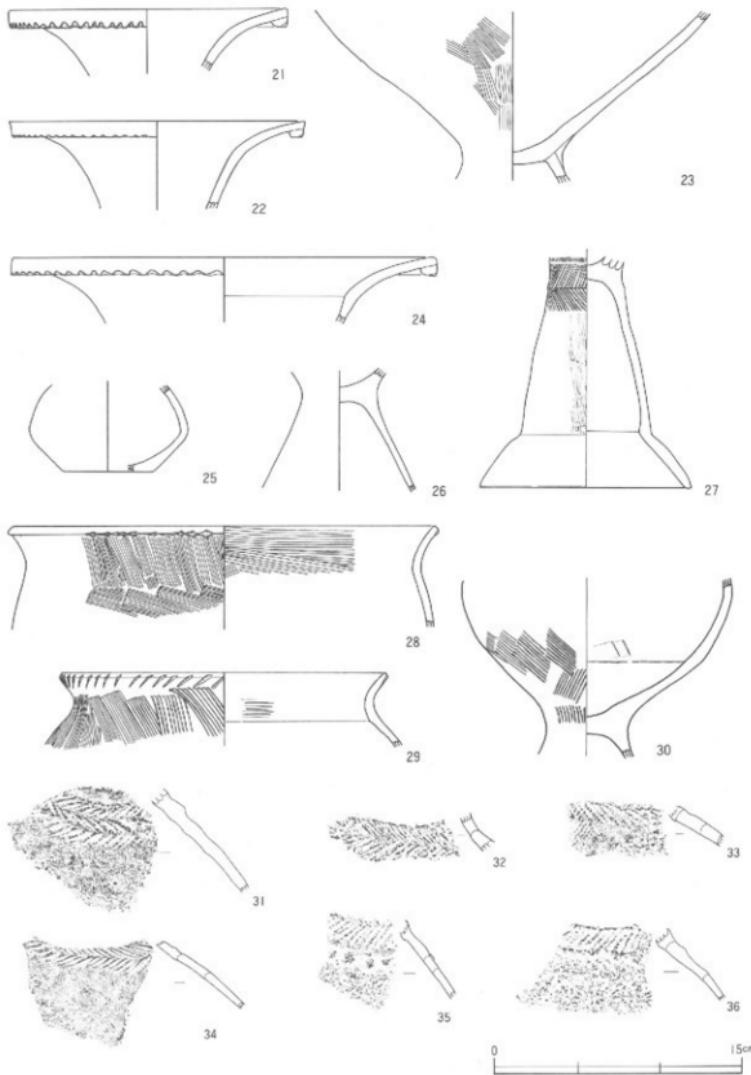


第42図 土器実測図
(1 : SD-1、2 : SD-2、3 : SD-11、4~12 : SD-14)



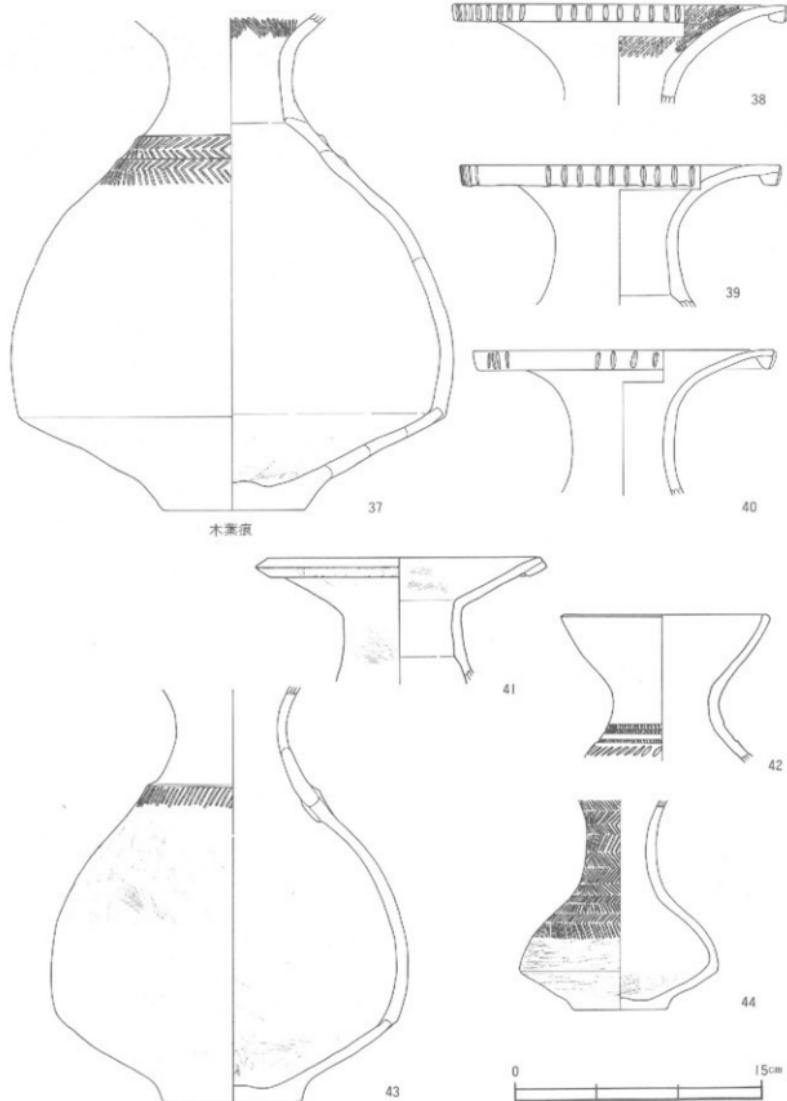
第43図 土器実測図

(13~20: S D~14)



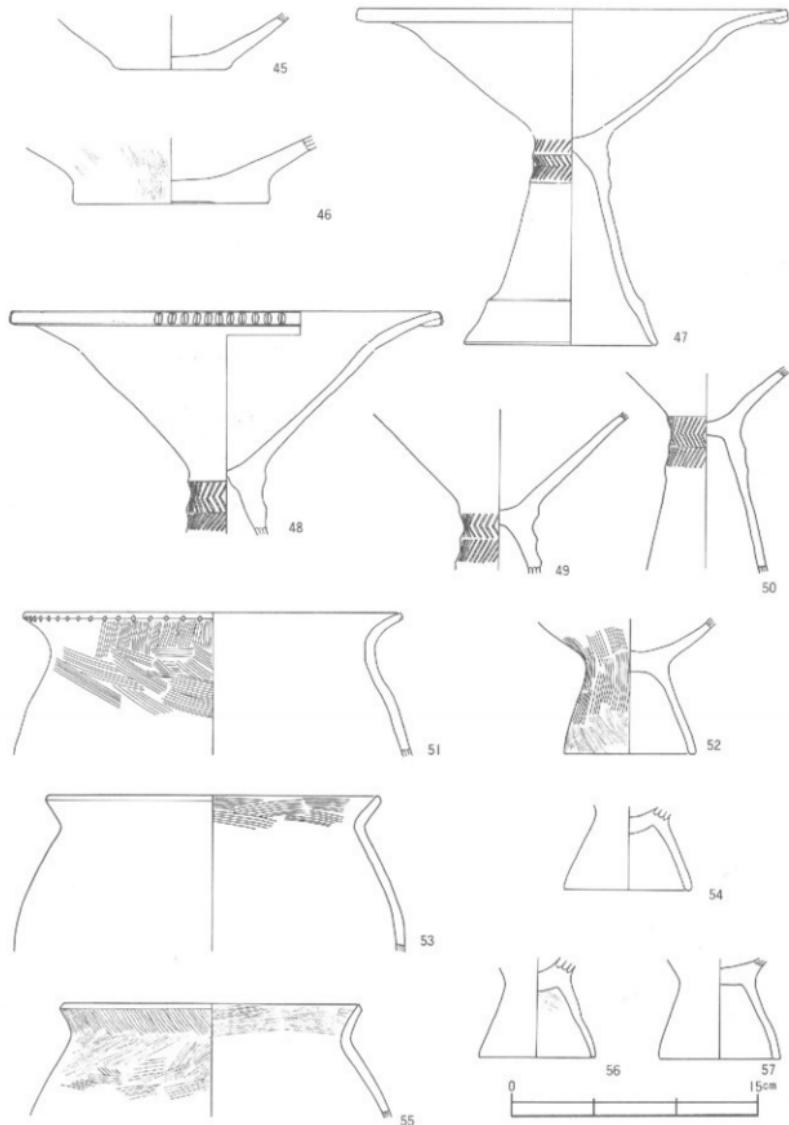
第44図 土器実測図

(21~36: S D-14)



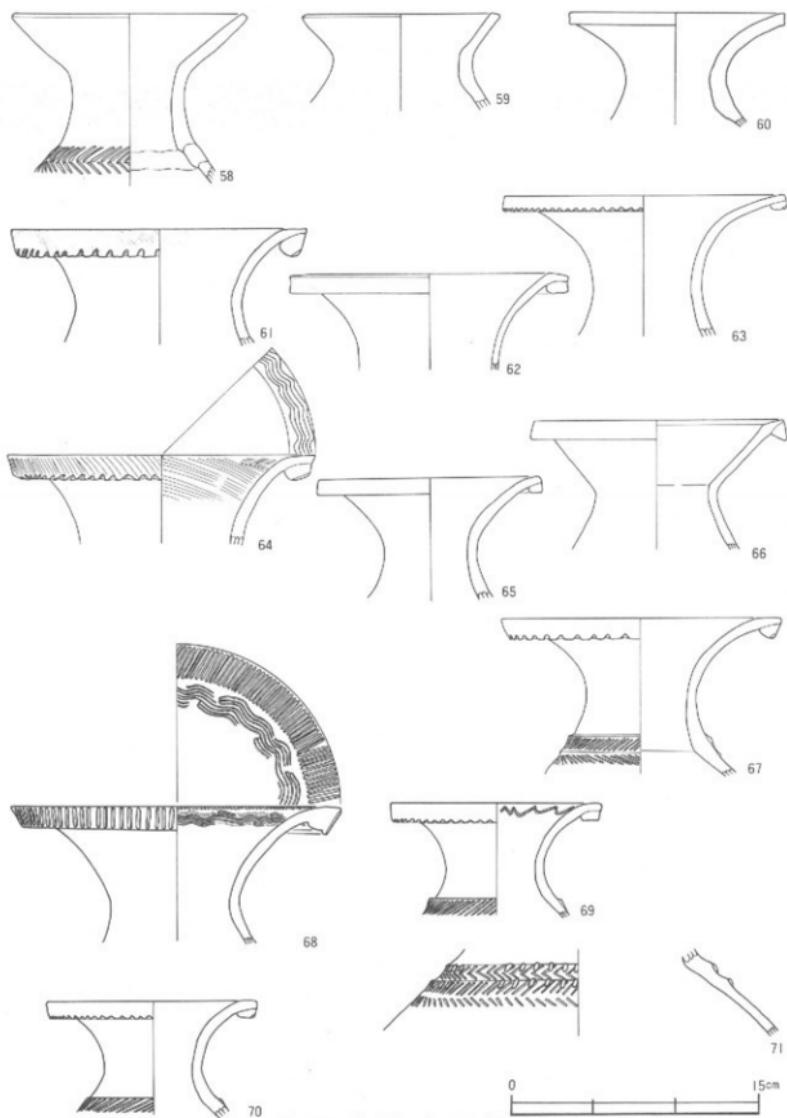
第45図 土器実測図

(37~44 : S D-14)

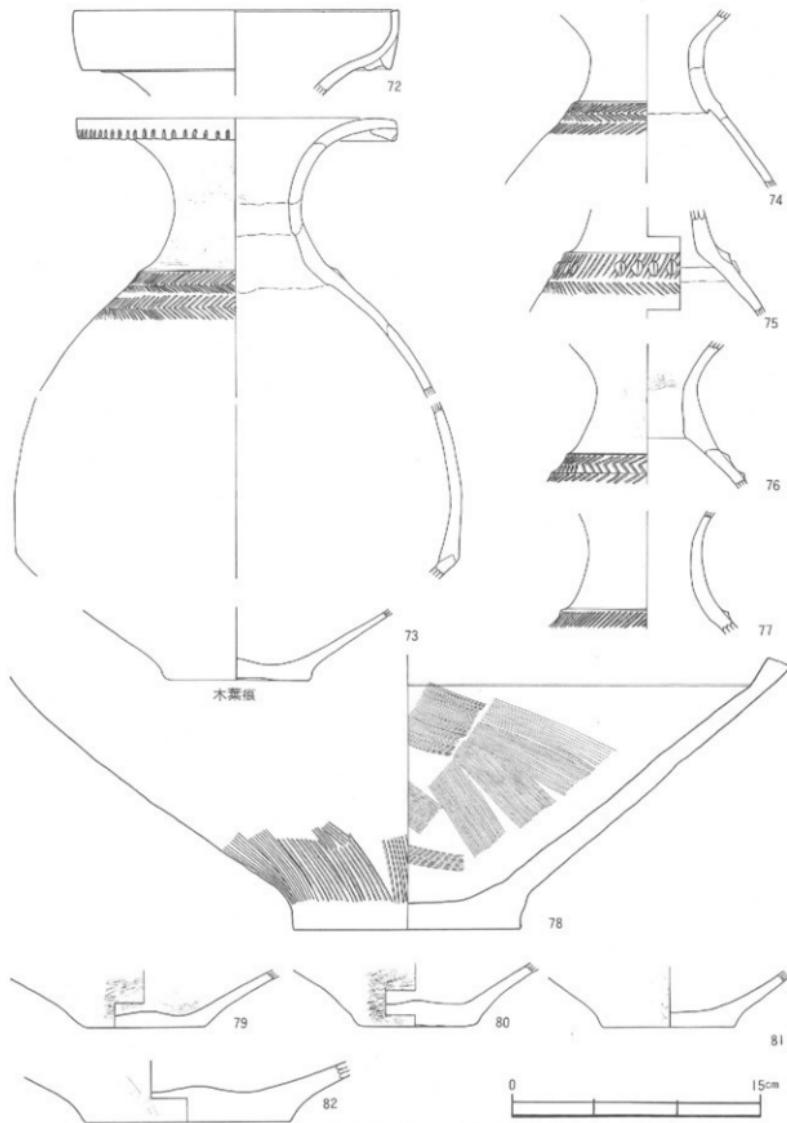


第46図 土器実測図

(45~57 : S D-14)

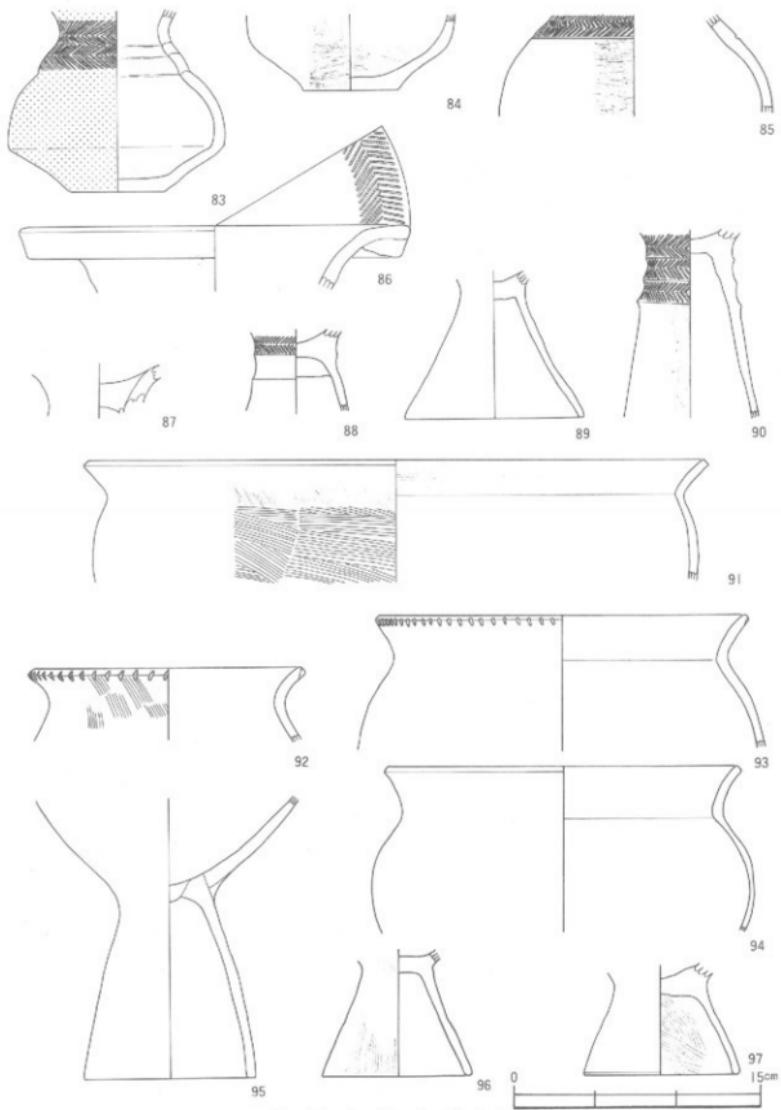


第47図 土器実測図
(58~71 : S D-14、63 : S K-13)



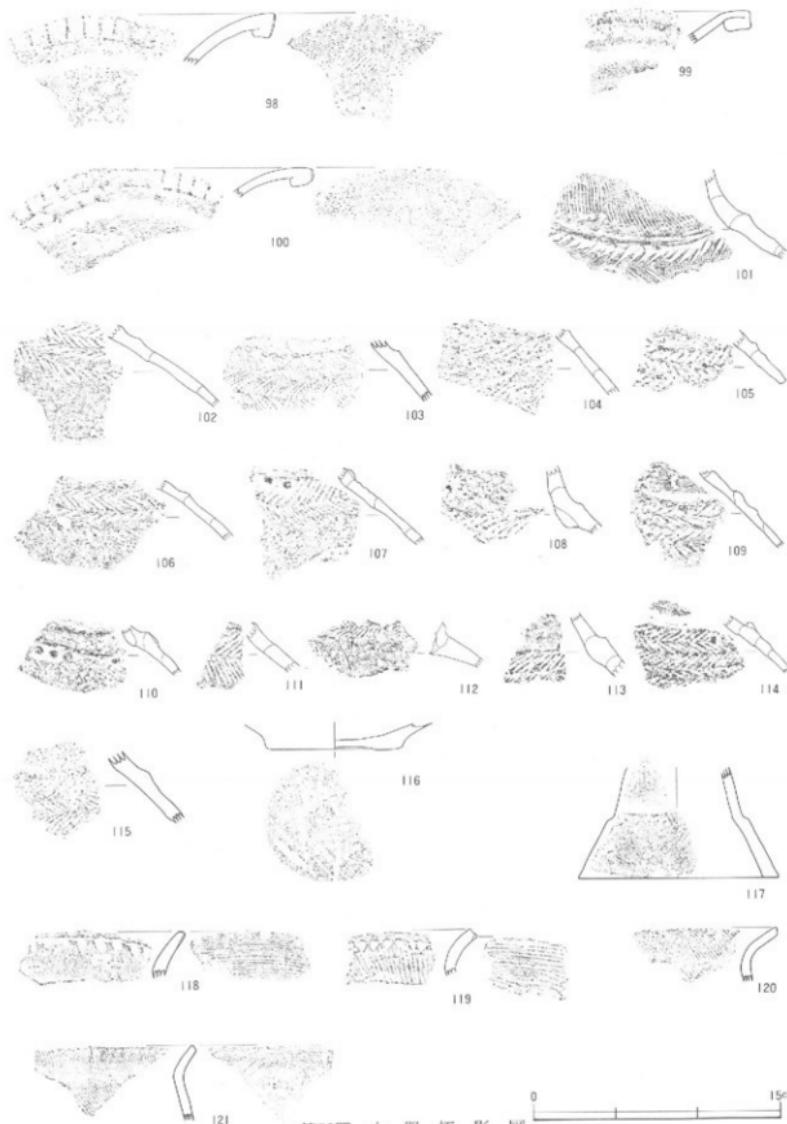
第48図 土器実測図

(72~82: S D-14)



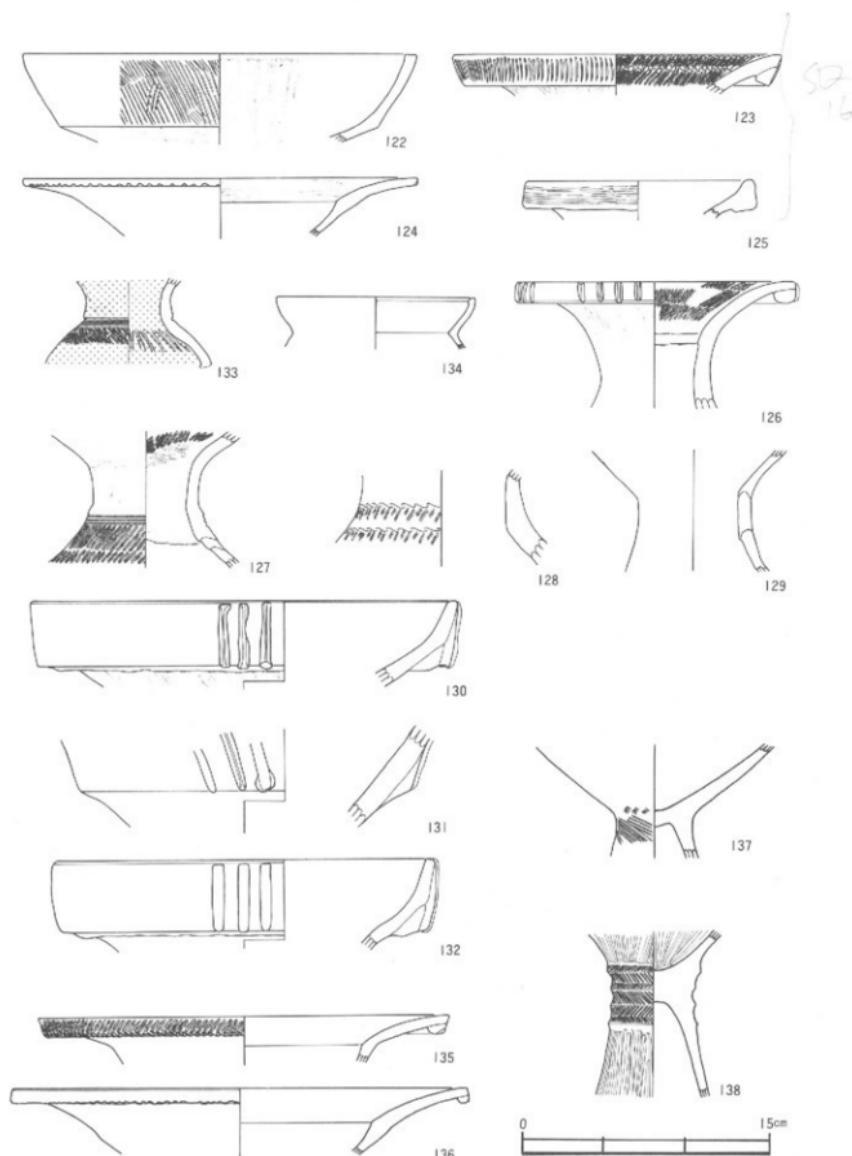
第49図 土器実測図

(83~97: S D-14)



第50図 土器拓影図

(98~121 : S D-14)



第51図 土器実測図

(122~125: S D-16下層、133~138: S D-16上層)



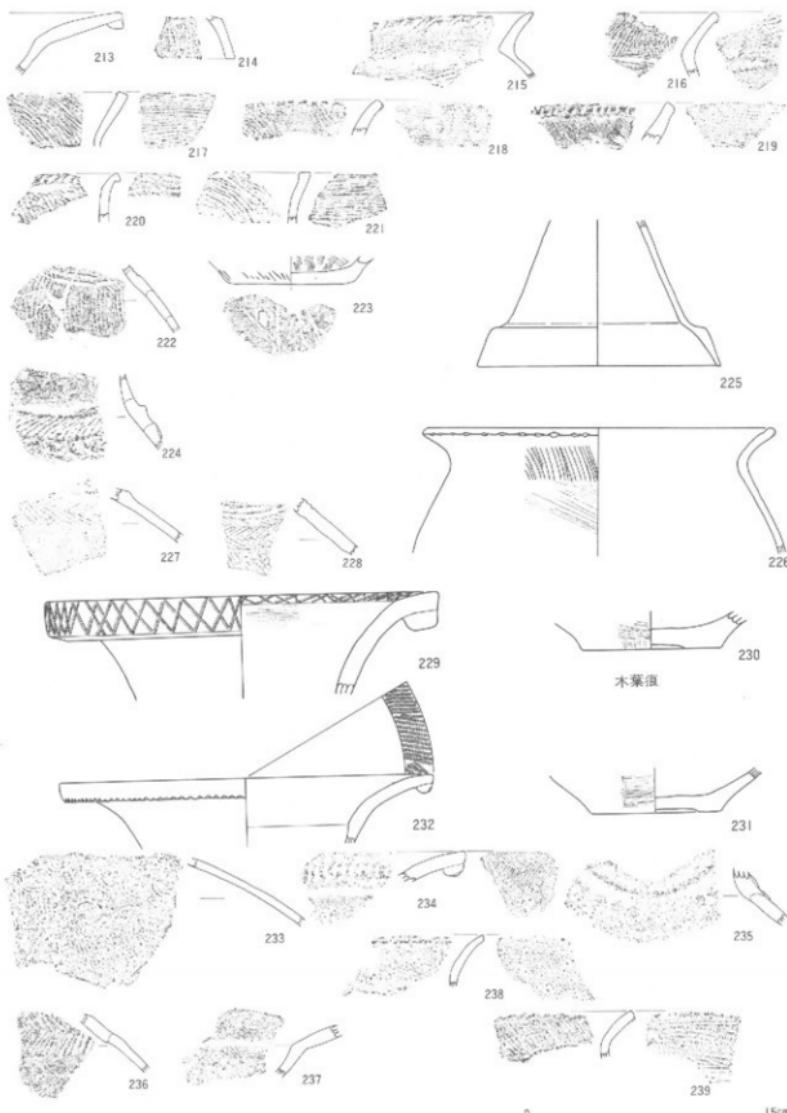
第52図 土器実測図

(139・148~168: SD-16下層、140~147: SD-16下層)



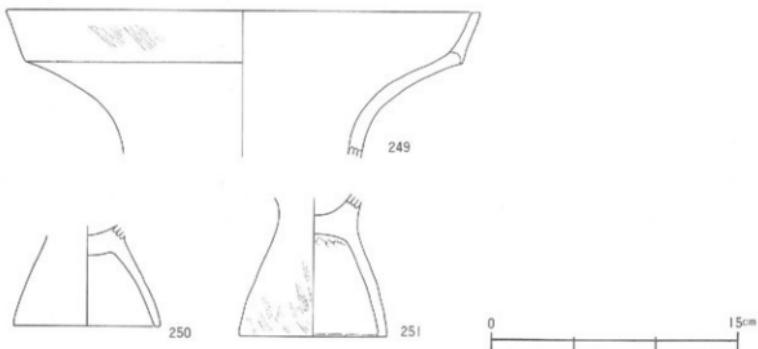
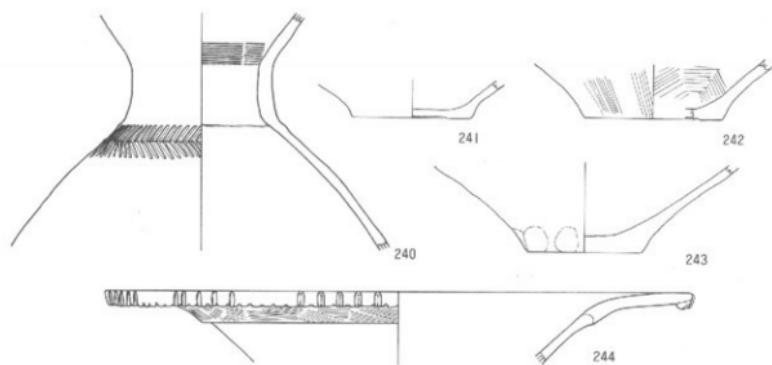
第53図 土器拓影図

(169~184 : S D-16下層、185~212 : S D-16上層)

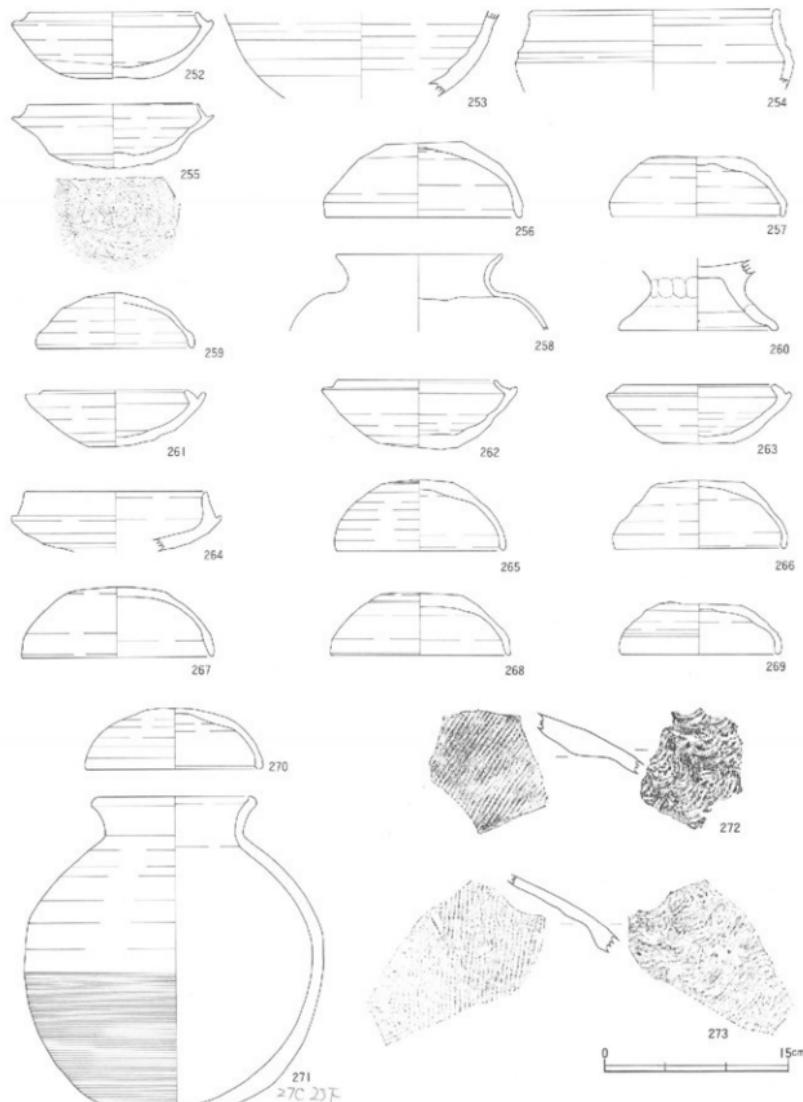


第54図 土器実測図

213~221 : S D-16上層、222~223 : S D-17、224 : S D-34、225・226 : S D-39
227・228 : S D-43、229~239 : S D-82

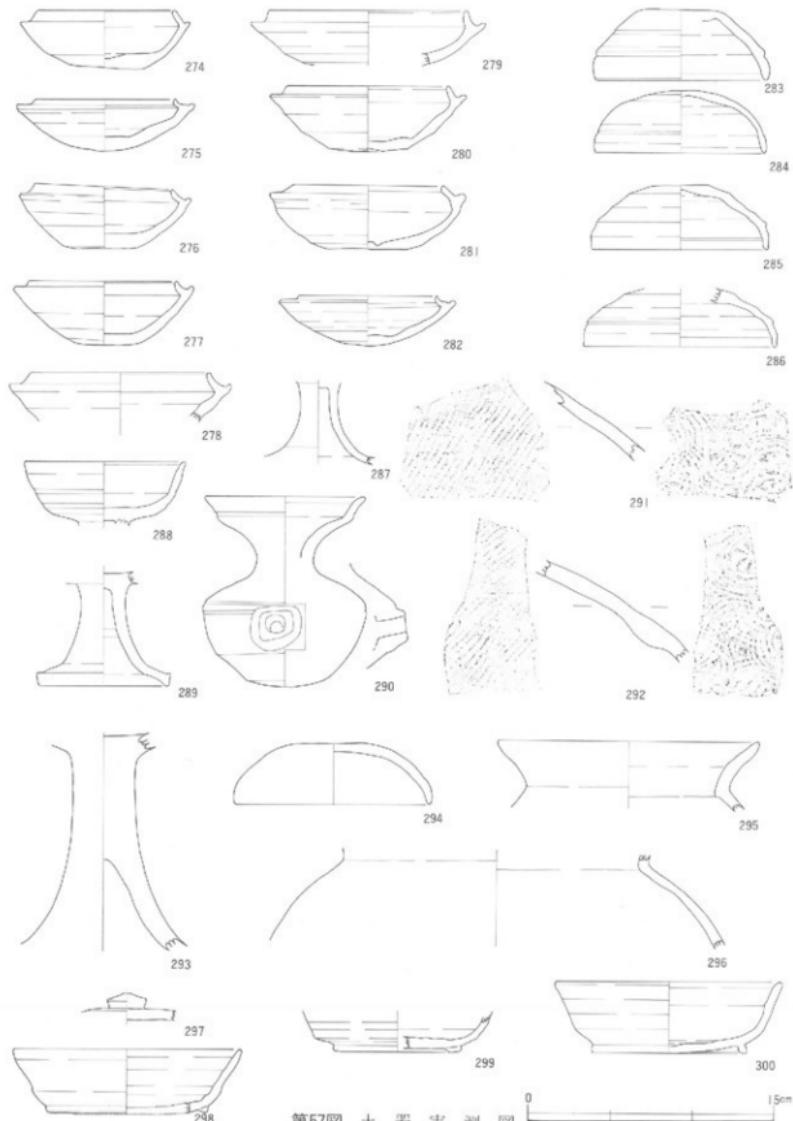


第55図 土器実測図
(240~248 : SK-5、251 : SK-13、250 : SK-14; 249 : III-C区)



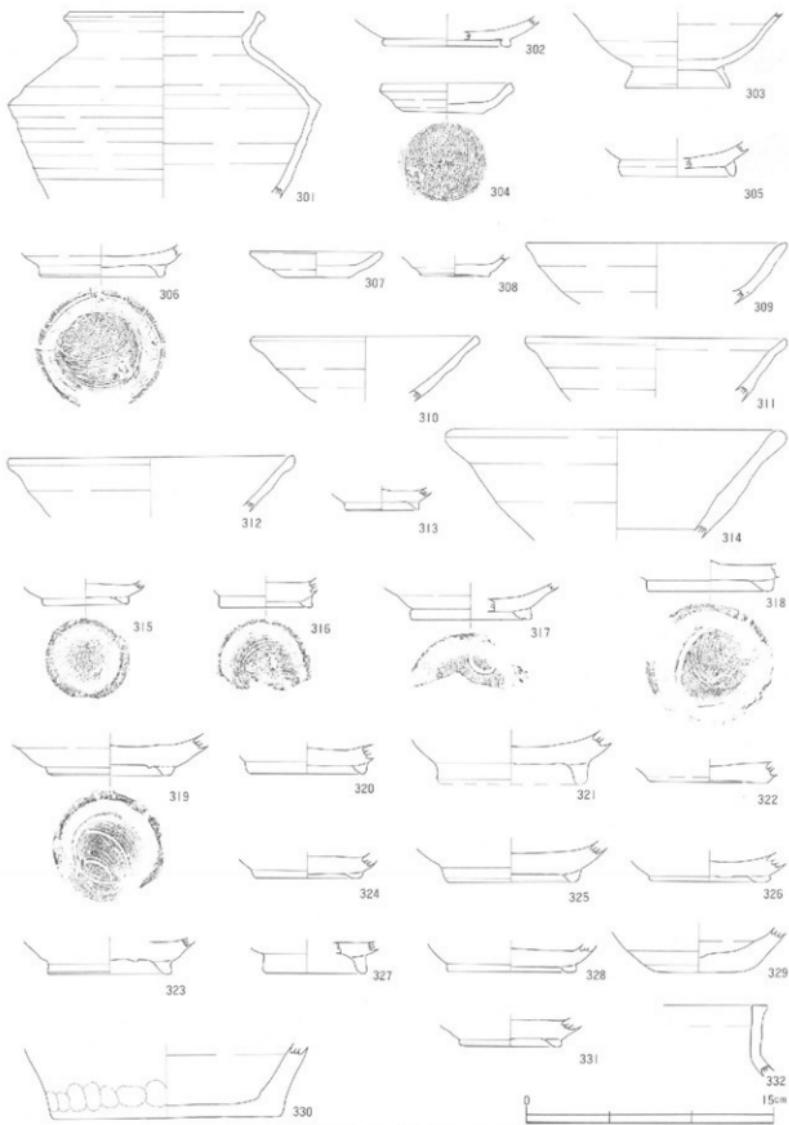
第56図 土器実測図

252: S D-2、253: S D-3、254: S D-12、255: S D-53、256: S D-54、
 257: S D-81、258: S D-82、259: S D-87、260: VII-I区、
 261~268・272: S D-109、269: S K-40、270~271・273: S K-39



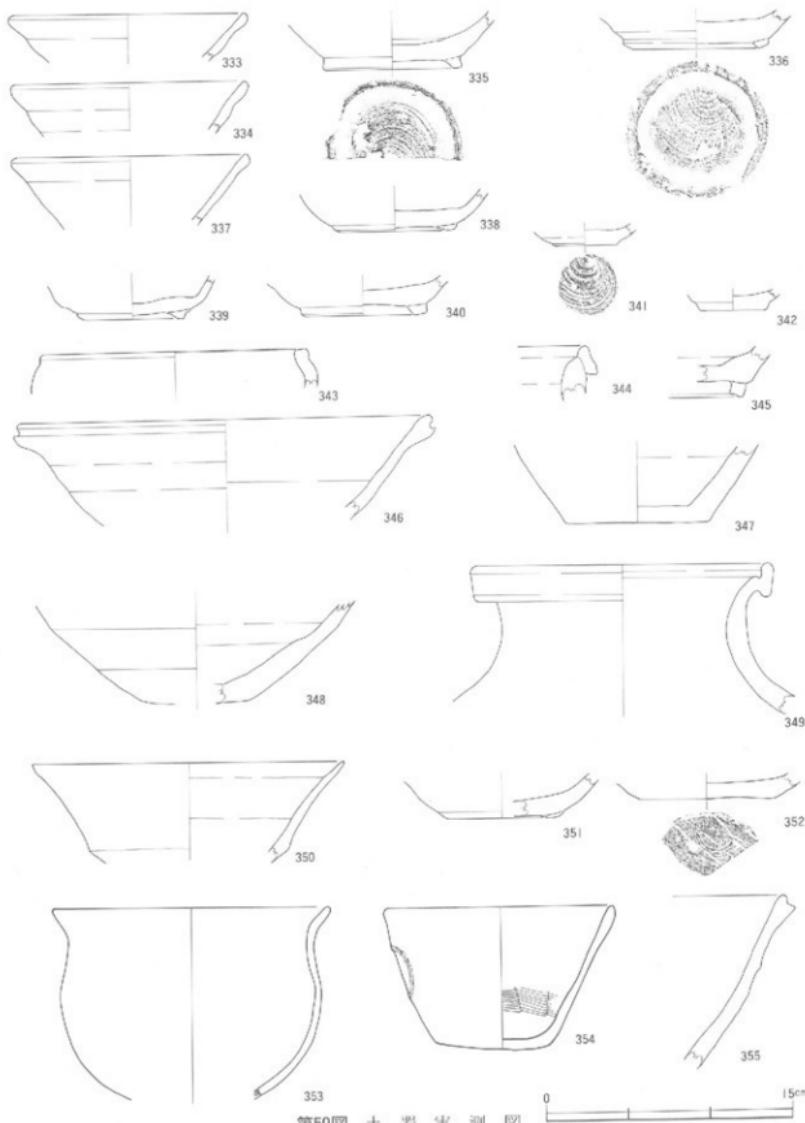
第57図 土器実測図

(274~296: S X-12, 297: S D-53, 298: VII-H区, 229: S D-58, 300: S D-96)



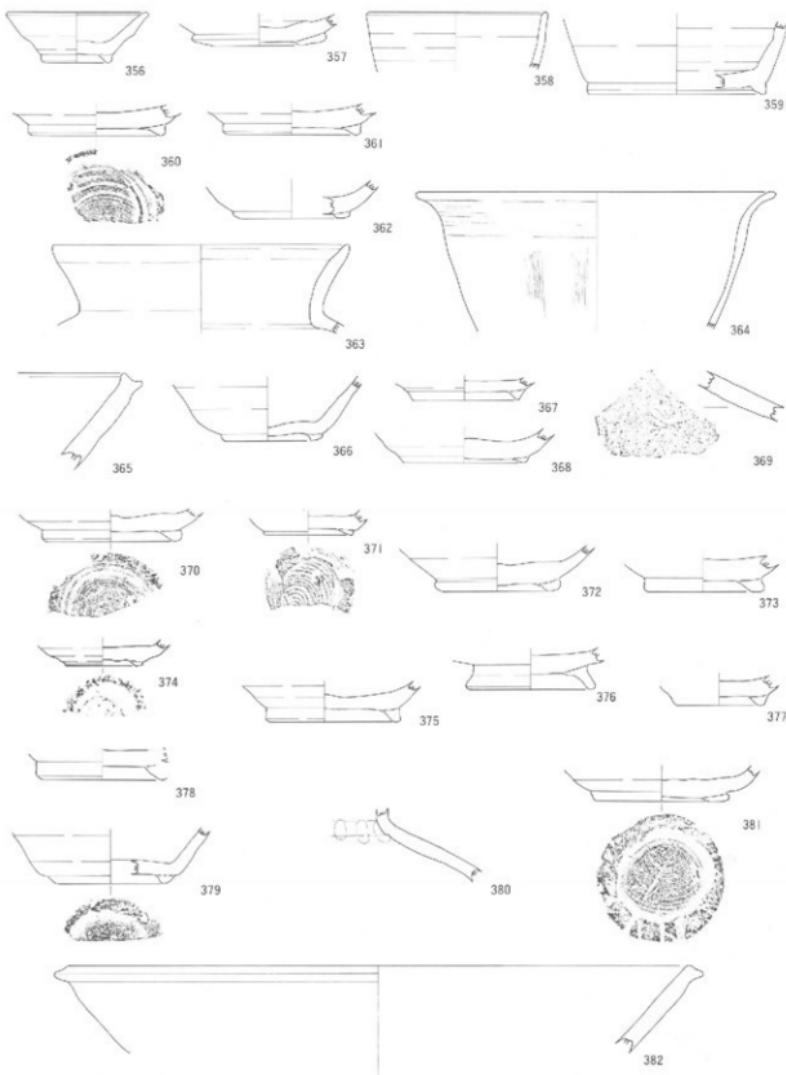
第58図 土器実測図

301: VII-H区、302: XIII-J区、303: SK-7、304: SD-6、305: SD-12
306: SD-15、307~332: SD-52



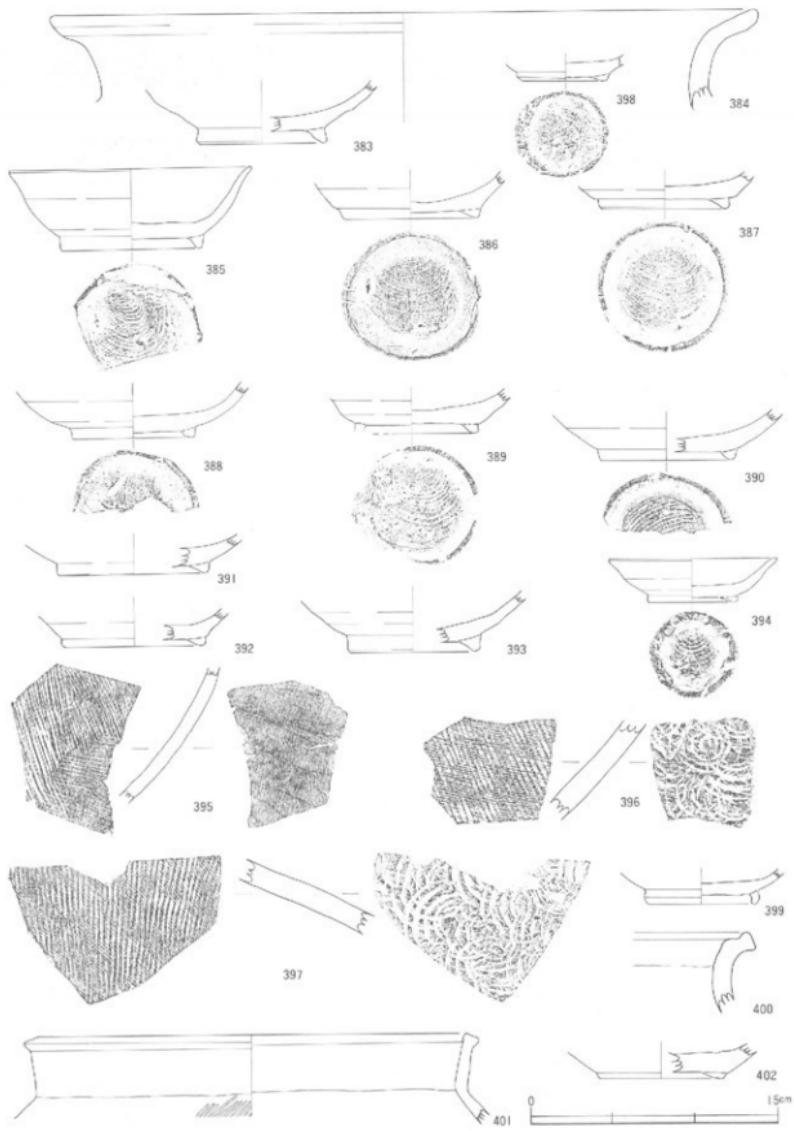
第59図 土器実測図

333～347 : S D—53、348～349・354・355 : S D—54、350 : S D—55
351・352・355 : S D—66、353 : S D—56



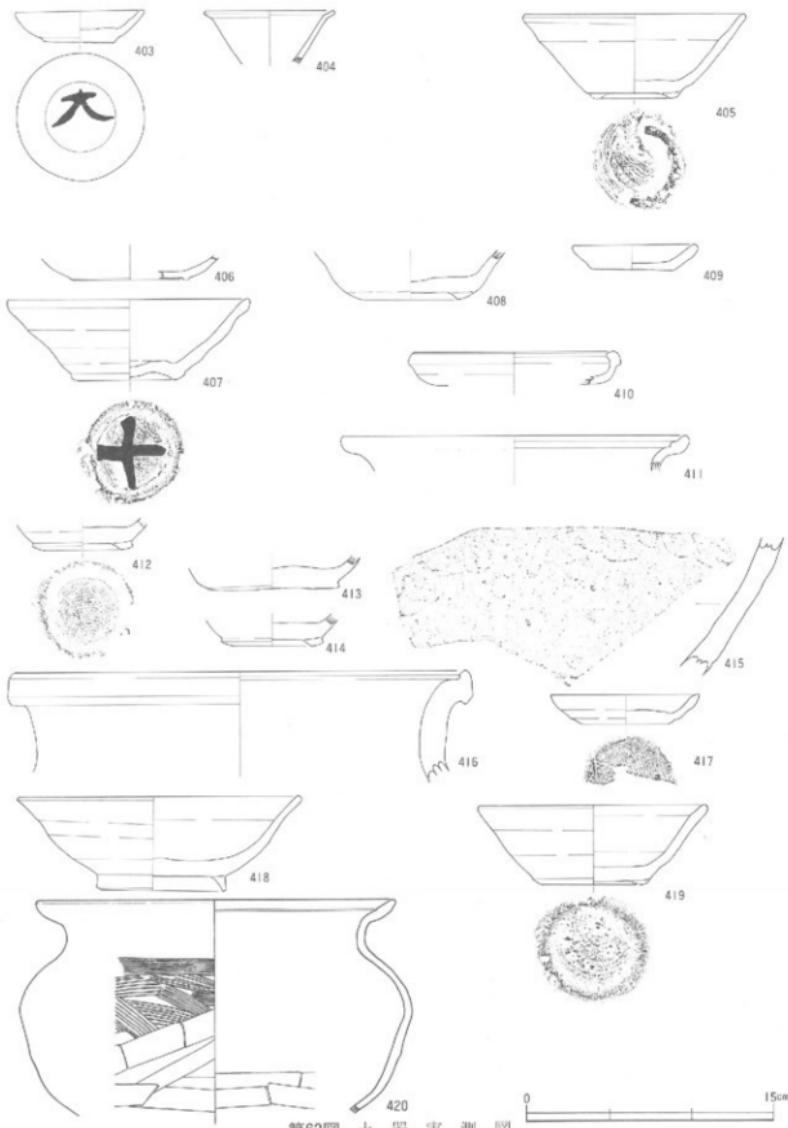
第60図 土器実測図

356~358 : S D-85、359~361 : S D-88、362~364 : S D-89、365 : S D-97。
 366~368 : S D-99、369~373 : S D-102、374~375 : S D-111、376 : S D-115、
 377 : S P-73、378・379 : S P-182、380 : S P-193、381 : S P-271、382 : S P-193



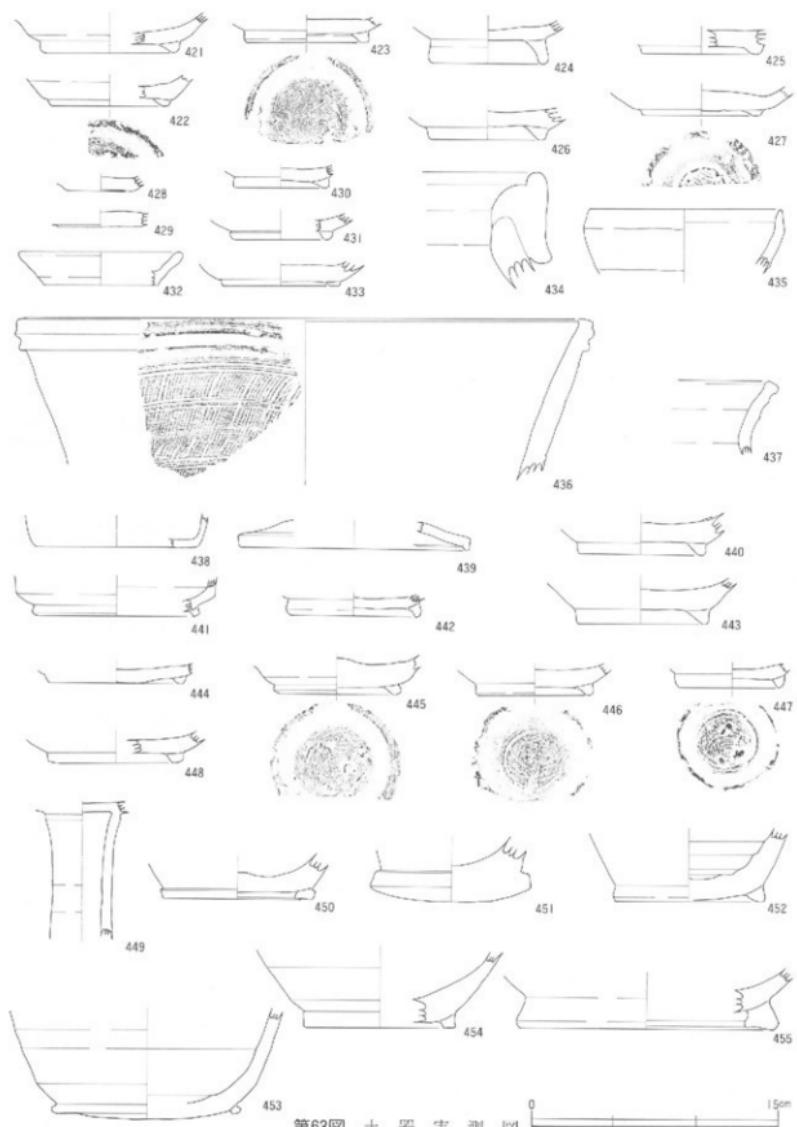
第61図 土器実測図

383 : SK-16、384 : SK-17、385~397 : SK-18、399 : SK-28、
400 : SK-30、401・402 : SK-34

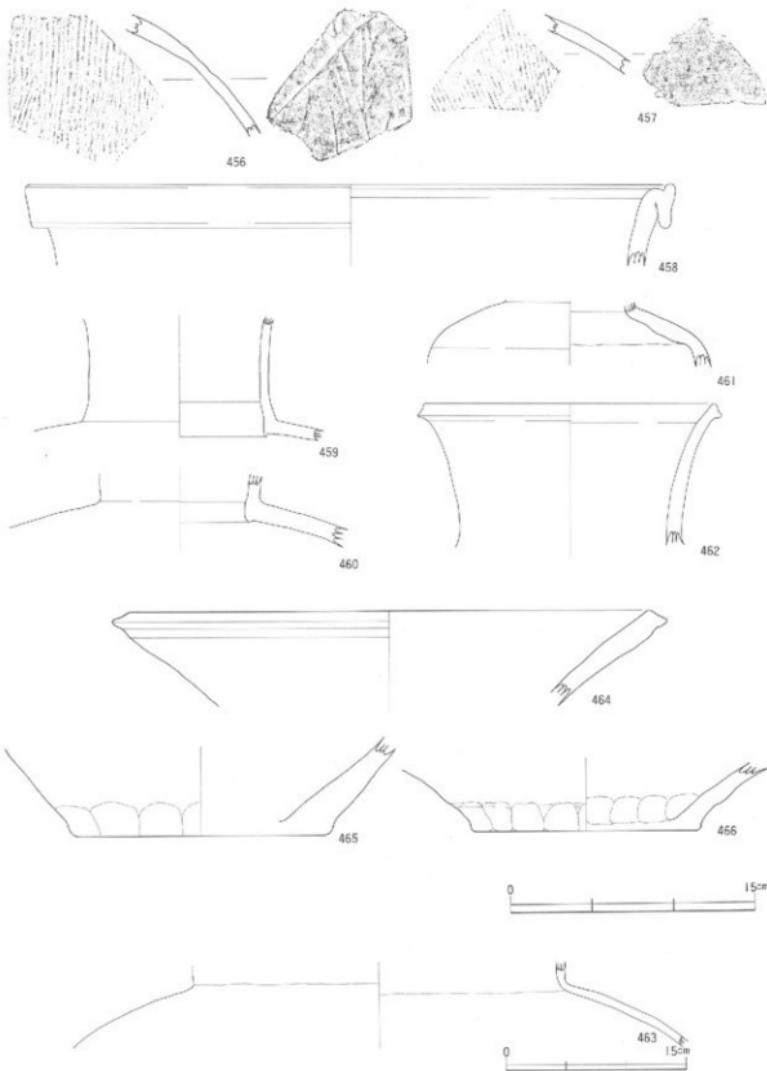


第62図 土器実測図

403・404: SK-42、405: SE-1、406~411: SE-3、412~417: SE-4、
418: XIII-J区、419: XII-K区、420: XI-I区

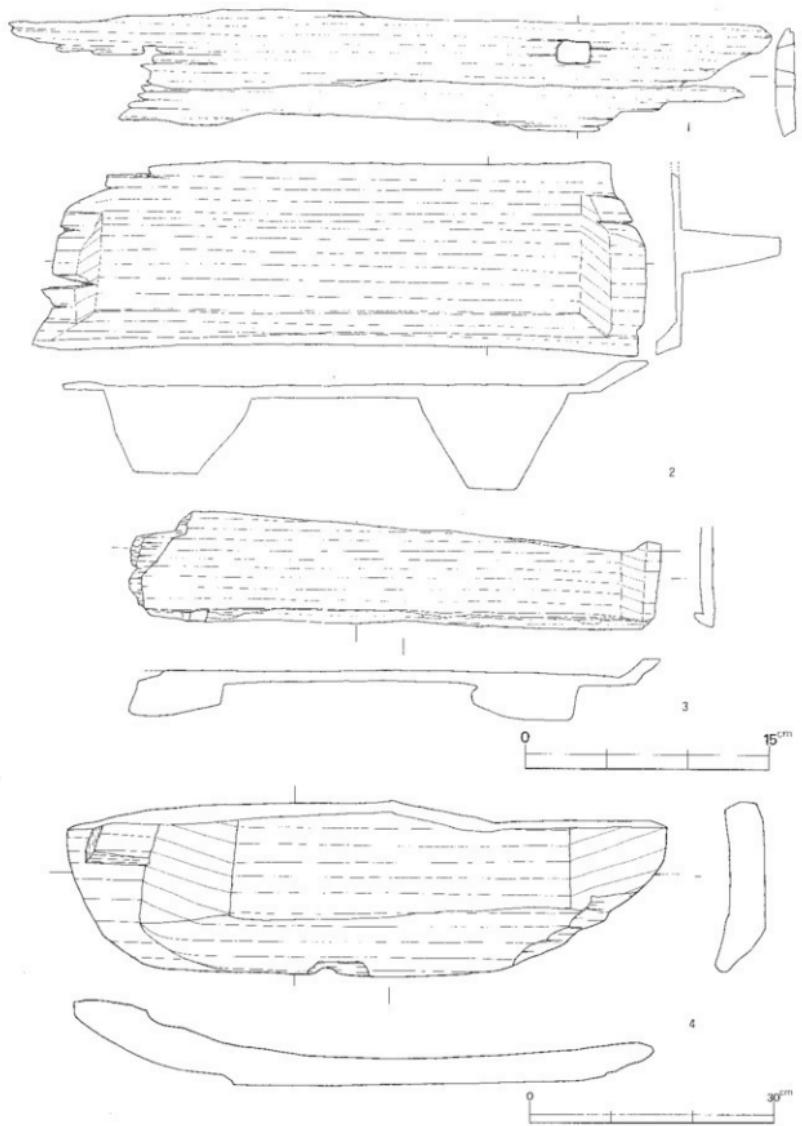


第63図 土器実測図
(421~437: S S-1, 438~455: S X-14)

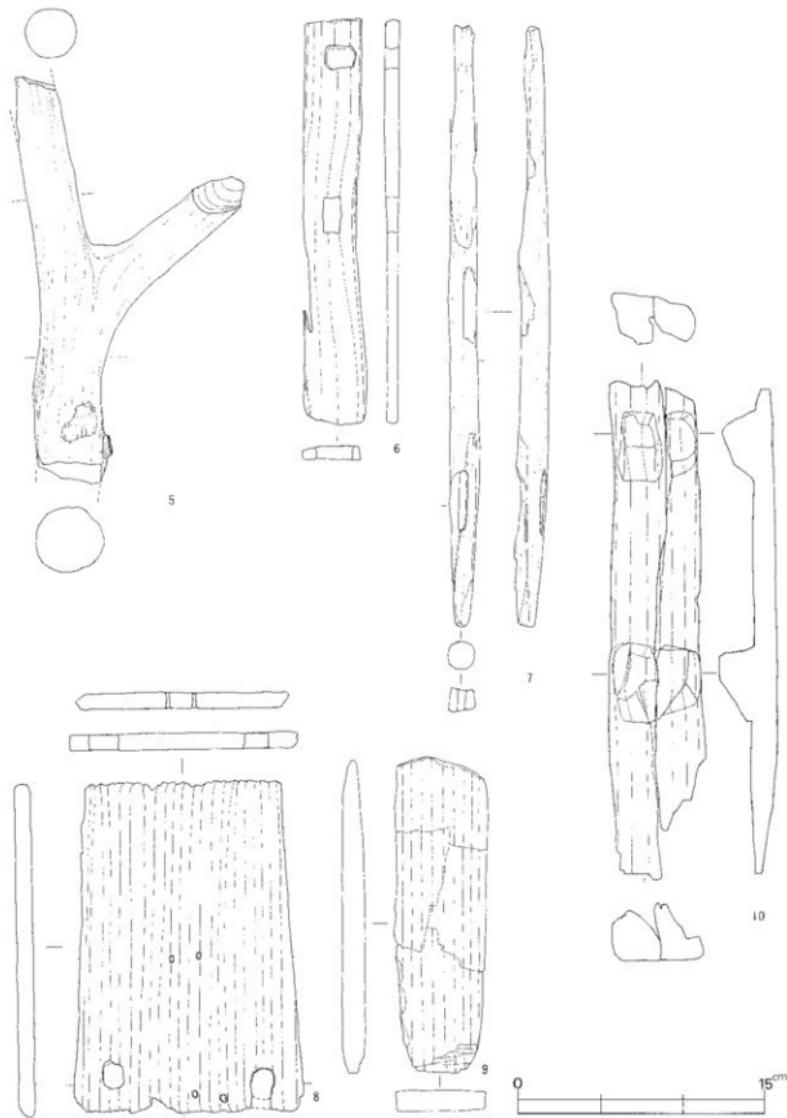


第64図 土器実測図

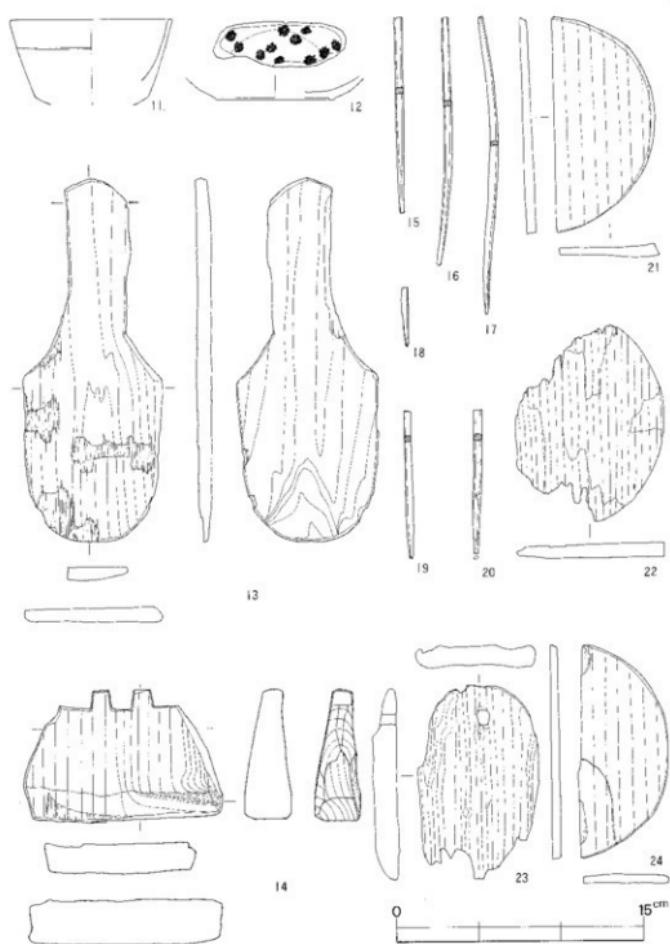
(456~466: SX-14)



第65図 木製品実測図

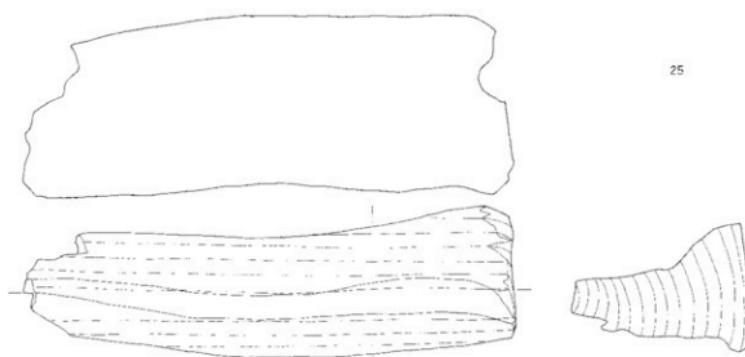


第66図 木 製 品 実 測 図

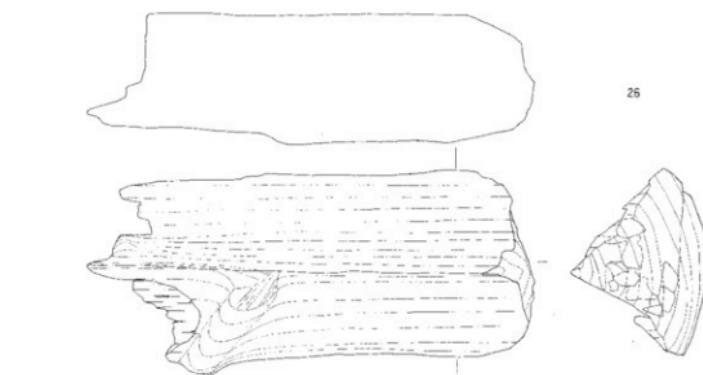


第67図 木製品実測図

25



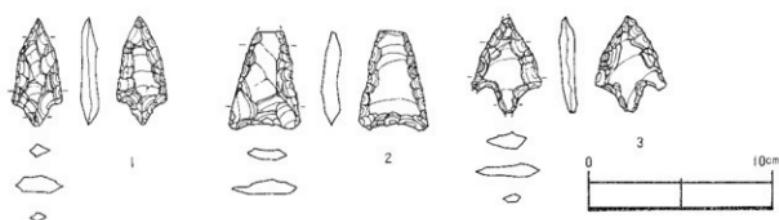
26



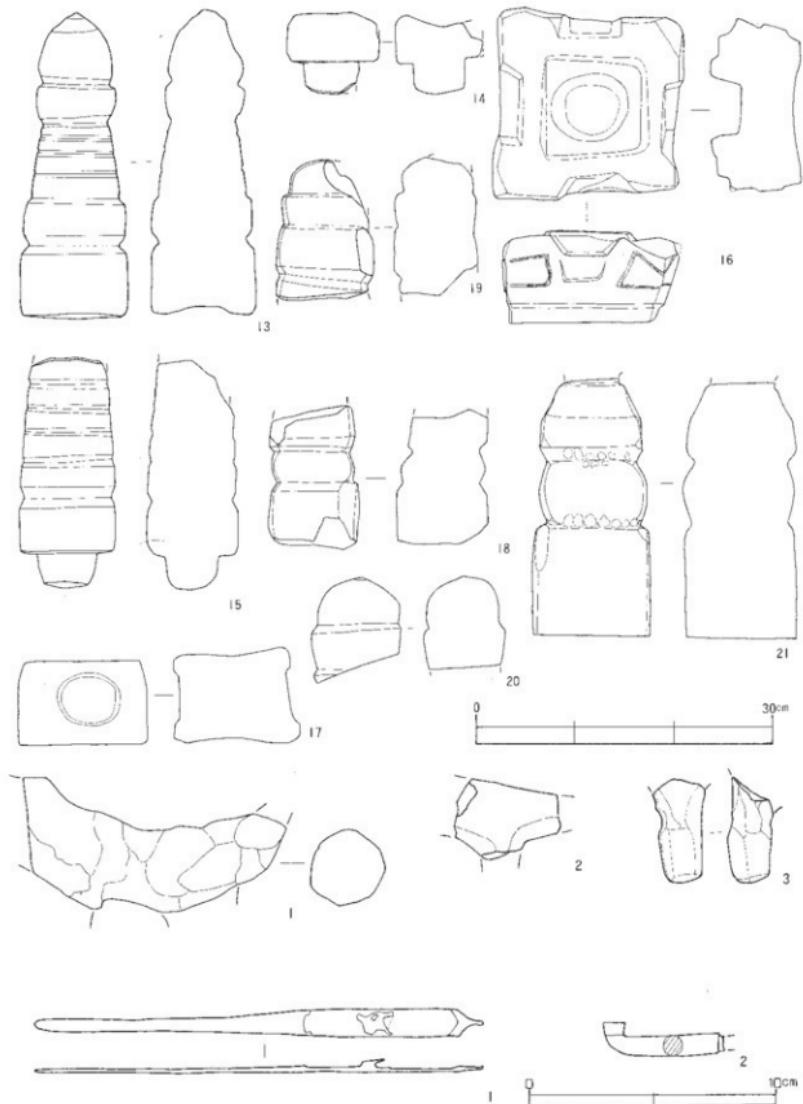
27



第68図 木 製 品 実 測 図



第69図 石製品実測図



第70図 石製品・土製品・金属製品尖削図

付 編

付編1 玉越遺跡の基盤砂礫層の地質学的検討

静岡大学農学部教授 加藤 芳朗

1. まえがき

本遺跡は太田川左岸の自然堤防と後背低地との境界付近に位置する。発掘区は粘土・砂が錯綜する部分が主体であるが、南東縁に砂礫層が浅く出る部分（以下浅礫帶と呼ぶ）があり、この性格が問題となつたので以下検討を行つた。

2. 遺跡周辺の地形・地質

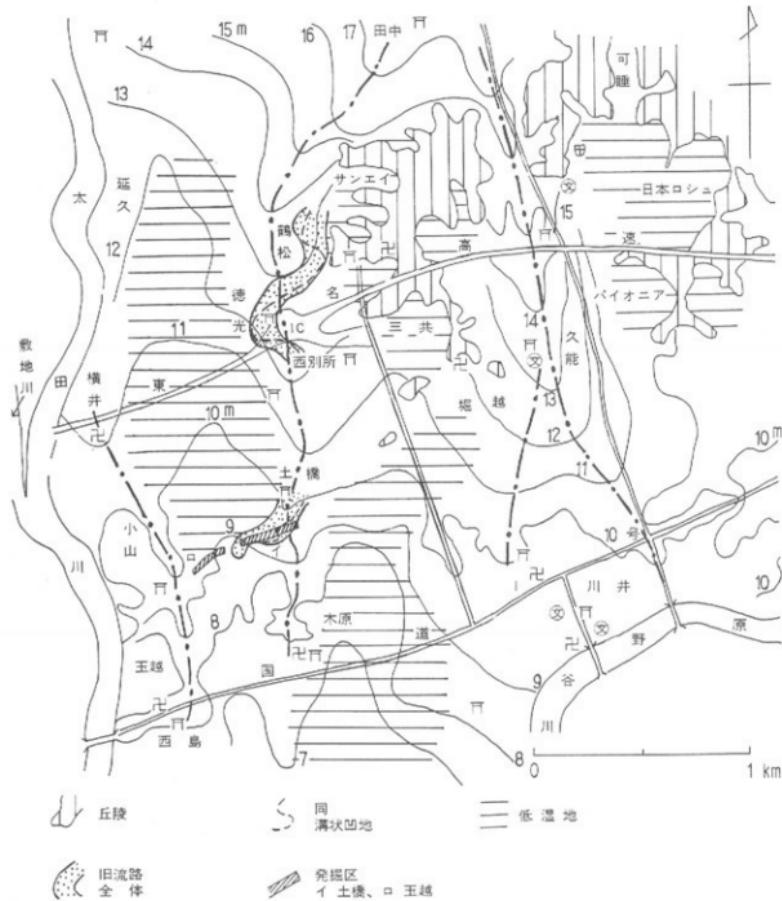
第71図のごとく本遺跡は太田川左岸近くに位置する。付近は茶畑が島状に点在する水田地帯である。



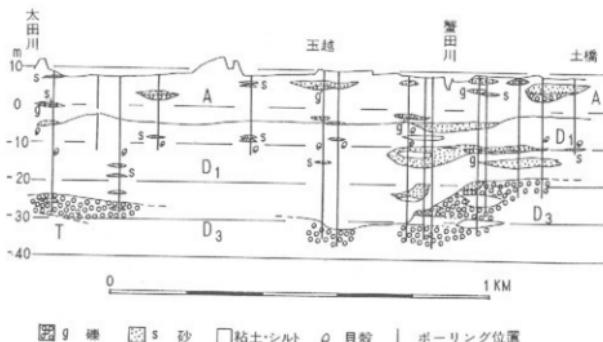
第71図 玉越遺跡周辺の地形・地質図

一帯の微地形をくわしく見るため、袋井市図2（1万分の1）にもとづいて等高線を引くと第72図のごとくなる。本遺跡は横井一小山一西島を連ねる微高地（小山微高地）に隣接する。東方の袋井市域には別の微高地（徳光微高地）が山梨一田中一鶴松一徳光一土橋一木原に沿って走る。これは山梨から派生する古太田川の一支川であることが判明している（加藤、1985b）。

国道1号線袋井バイパスの地下地質断面図（第73図）をみると、玉越とした地点で地表から数mの位置に砂、礫が存在するのがわかる。これが冒頭に記した浅縫帶と関係がありそうである。なお、土橋付近の地表近くの砂、礫は上記の支川の運搬堆積物である。



第72図 玉越遺跡周辺の微高地帯と低地湿地



第73図 袋井バイパス予定路線沿いの地下地質断面図

3. 発掘区内の砂礫層の確認

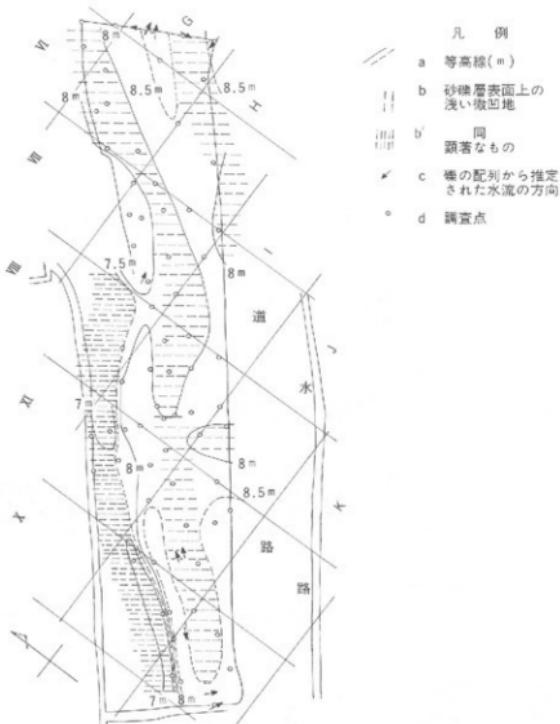
発掘区内の遺構底や試掘トレンチに露出する砂礫、およびボーリングステッキ調査でつかんだ砂礫の頂部の海拔高度を記録し、それをもとに等高線を描き、浅礫帯表面の凹凸の模様を示したのが第74図である。浅礫帯は海拔8～8.5mのレベルで、浅い凹凸を示しながら、南西から北東に連なる。その北西側は直線をなして1～1.5m落ちこむ。浅い凹凸の交錯パターンも南西～北東向きである。

礫の配列（クロスラミナ、インブリケーション）から判定される水流（礫を運んできた）の向きを図中に矢印で示した。その多くが南西～北東方向を示す。また、浅礫帯表面の高度も南西側が高く北東側が低い。礫の粒径も北東ほど小さい。これらから、砂礫は南西から北東に向かって運ばれたと推定される。礫の岩質は頁岩、砂岩を主とした亜角礫で、現太田川のそれとよく似ている。浅礫帯表面の微凹地は水路の一部に当たるであろう。

4. 発掘区南東側の砂礫層調査

上記浅礫帯の延長を追跡するため、外側の水田地帯で、1.5mまでのボーリングステッキ調査を行い、田面から砂礫層頂部までの深さを求めた。第75図の等深線はこれに基づいたものである。深さ100cmの線が南西～北東に延びる、細長い、やや不規則な形を描いており、その外側は急に深くなる（図の縦線部）。内側は最小深度30cmまでの高度差の微起伏を呈する。このことから北東～南西の浅礫帯の存在が明瞭である。これと第74図の浅礫帯の、おのおのの北西側の落ちこみ部分はうまく連続する。第75図の浅礫帯表面の海拔高は発掘区に近い方で8.1m前後であり（田面高度は8.75m）、発掘区のそれとほぼ一致する。従って、両面の浅礫帯が同一であると結論づけてよいであろう。第75図では、これを受けて、発掘区での浅礫帯外側の落ちこみ部分を（第74図と発掘区の壁面スケッチを参考として）縦線で記してある。こうして得られた浅礫帯の全体像は、発掘区の北東端を終点として約80mの幅で南西方に走り、外側落込みとの比高は1～1.5mに連するものと思われる。小山に通ずる南北道路に接するあたりで向きを東西ないし北西へ転ずるような気配もある。

なお、グライ層の浅い部分（100cm以浅、地下水位が浅く、還元状態にある）は浅礫帯の外側の落ち込み部分にしか存在しない。これは袋井市坂尻遺跡の場合と似るが土橋遺跡の場合と逆である。後者は砂礫層内に被圧地下水が豊富であったことと関係がある（加藤、1985a、b）。

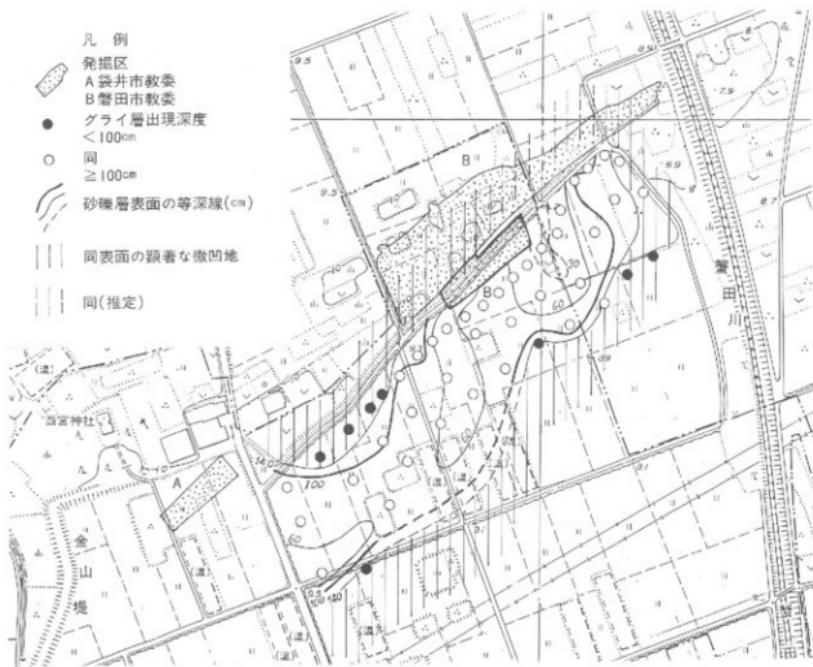


第74図 発掘区の砂礫層表面の海拔高度

以上のことから、浅縁帶は小山微高地に対して直角方向である北東へ向かって押し出した砂礫の堆積帶と見ることができる。その先には、小山、徳光両微高地に挟まれた低湿地がある（第72図）。上橋遺跡の立地した支川の自然堤防とは生成の点で全くつながりを持たないということができる。

その成立時期は小山微高地と同時であり、また、おそらく、徳光微高地とも同時であろう（繩文中～後期ごろ）。くわしくは別に考察したのでここでは省略する（加藤、1985 b）。

調査に際し、平野和男郷土館長（当時）をはじめ山崎克巳調査員・遺跡調査関係の皆さんにお世話になった点を記し、謝意を表する。



第75図 発掘区南東側の砂礫層・グライ層の出現深度

参考文献

- 門村 浩 (1965) 地形分類図5万分の1「磐田・掛塚」—土地分類基本調査—P.1—22、経済企画庁。
- 加藤芳朗 (1985 a) 坂尻遺跡をめぐる地形・地質学的背景「坂尻遺跡—自然科学編—」P.1—12 袋井市教育委員会他。
- 加藤芳朗 (1985 b) 土橋遺跡をめぐる地形・地質学的背景「土橋遺跡」、P.10—25、袋井市教育委員会他。
- 基礎地盤コンサルタント (1983) 昭和57年度袋井バイパス土橋地区地質調査報告書。建設省中部地建浜松工事事務所

付編2 王越遺跡出土材の樹種および果実・種子について

東京国立科学博物館 山 内 文

材

本遺跡は弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡であるが、出土材はそのほとんどが弥生時代のものであり、これに若干鎌倉時代のものがある。判名した樹種名、調査数、製品を表14に示す。針葉樹5種、広葉樹21種である。いずれもその植物の自然分布上問題となるものはない。木製品は割合に少なく、最も多く出土しているのは杭で全体の35%強を占めている。樹種別ではその70%を占めている。特別の樹種を杭として選んだということではなく手近なものを杭に利用したという感じのするものであった。梯子は高床の倉庫の存在を示すものである。これまでに比較的多くの遺跡から出土している。これに使われる樹種もその土地で得やすく、かつ加工の割合に容易な材が選ばれている。静岡県下の登呂：イスマキ、ヒノキ又はサワラ、山木：スギ、八ツ島：イスマキなどいずれも針葉樹が使用されている。本遺跡と同種のクリは、群馬県日高遺跡、浜松市国鉄工場内梶子遺跡から出土している。鎌倉時代のものは、住居址が発掘された関係で、柱および礎板が出土している。これらはいずれもヒノキが使用されていた。これらのほか箸、下駄、杓子などすべてヒノキが使用されていた。挽物あるいは剣物としては楳がある、いずれも漆喰りであり、ケヤキおよびトチノキが2点の計3点出土している。ケヤキは楳木地としては現在でも最高級品であり、奈良県唐古遺跡を始めとして多くの遺跡から出土している。トチノキも挽物や剣物には、硬さが適していることと大木であるため材料が得やすいためか、トチノキの楳が新潟県千種遺跡、広島県草戸千軒町遺跡、東京都葛西城址などから出土している。

静岡県下では大井川を境にしてこれより東側の遺跡静岡市登呂、並山町山木、伊豆長岡町八ツ島、富士市三新田などの遺跡からはスギの出土が多いが、西側では本遺跡に近接する袋井市坂尻遺跡、浜松市伊場遺跡、国鉄工場内梶子遺跡などではその出土数はきわめて低く、坂尻遺跡ではスギに代ってヒノキ、イスマキが、伊場遺跡ではヒノキが圧倒的に多くなる。玉越遺跡もその例外ではなく、スギの出現率は低く、ヒノキが圧倒的に高い出現率を示している。スギは杭などに使用されることなく剖板として加工されることが多い。このことはスギは割合に得にくい材であったと同時に、割裂し易く、かつ加工の容易な貴重な材であったと考えられる。

出土材および果実・種子類の植物名リストを表15に示す。いずれの植物も暖温帯の山地、丘陵、路傍あるいは川流に沿う山野あるいは川畔、泥沢などの湿地などにきわめて普通にみられるものばかりである。しかし「磐山の自然（1979）」でもすでにこれらのうち数種は記載されていない。

カヤ 39、40

仮道管の接線径および放射径ともに大径のもので35 μm 、仮道管に螺旋肥厚がある、分野膜孔はヒノキ型である。放射組織は1—8細胞高である。

イスマキ 杭：39、43

仮道管の有縁膜孔の開孔はやや斜めのレンズ状である。木部柔細胞は散在状で長さは550～650 μm あり他種のそれと比べて長くかつ内容が乏しい。

セミ 建築用材？58

放射組織の放射膜および垂直膜はともに肥厚し単膜孔が多く存在する。放射仮道管はない。

スギ 使途不明木器（木製品）27、容器：30、42、99

春材部仮道管の接線径は大径のもので50～55 μm 、同放射径55～70 μm である。木部柔細胞は夏材

部およびその付近に存在する。分野膜孔はスギ型で1分野に2—4個ある。

ヒノキ 脚付盤：57、柱：59、60、61、62、754、755、礎板：64—1、2、65—68、69—1、2、71—88、曲物：91、92、95、不明：93、杓子：94、下駄：96

木部柔細胞は主として夏材部に存在する。分野膜孔はヒノキ型で1分野に2—4個存在する。上記のスギより細胞は一般に小さくかつ細胞壁が厚い。

シイノキ 杠：19、不明：32—35、49、56、105

環孔材、春夏材部の移行はさまざまである。広放射組織は見当らない。放射組織は1細胞列。多室柔細胞に藤酸石灰の結晶が含有されている。材色は褐色である。クリ材はきわめて黒く着色されていた。従って材にタンニンを含むことの少ないコジイである可能性が高い。

クリ 梯子：102

環孔材、春材部の道管はきわめて大径であり小道管は集まって波状、扁状および火災状に分布する。広放射組織は無い。放射組織の並列細胞は1列である。材はきわめて黒かった。

アカガシ属（カシ類） 杠：3、14、20、不明：33、100

放射孔材、広放射組織が存在する。道管と放射組織との交わる部分に縦長槽状の膜孔が存在する。

屢々多室柔細胞に藤酸石灰の結晶が含有している。以上の特徴からカシ類であることは明らかであるが、この属の特徴は互によく似ているため解剖学的特徴による互の材の識別は困難であるため、一括してカシ類とした。

クヌギ又はアベマキ、杠：4、5、11、不明：45、46

環孔材、小道管は存在数が少なく、切口の形は円形で厚膜である。広放射組織が存在する。以上の特徴からクヌギ又はアベマキであることは明らかである。植物分布上からは両者の可能性があるが、クヌギである可能性が高いと考えられる。

コナラ 不明：51

環孔材、小道管は集まって放射状および叉状に配列する。孔径は小さく薄膜であり、切口は多角形である。多室柔細胞が存在する。以上の特徴からコナラあるいはナラガシワがこれに該当するが、道管と放射組織との交わる部分に現われる膜孔の形そのほかの特徴などからコナラと同定した。

ムクノキ 杠：29

散孔材、道管は単独または2—3個充放射方向に複合する。接合膜が厚い。木部柔組織は、夏材部付近で数層接線状、周団状およびこれらが連なって分布する。藤酸石灰の結晶が多室柔細胞および放射組織に含有されている。放射組織は異性で1—4細胞列である。

エノキ 杠：2、55、不明：47、背負子：48、楔形：50

環孔材、小道管は集まって斜状に配列する。春材部の道管大径のもので接線径 $170\text{ }\mu\text{m}$ 、同放射径 $230\text{ }\mu\text{m}$ 、放射組織は異性で1—6細胞列あり、内に結晶を含有している。鞘状細胞が多数存在する。

ケヤキ 杠：52、漆塗柵：103

環孔材、小道管は數個集まって接線状に配列する。道管内に時にガム物質が充満している。放射組織は異性で1—6細胞列で時に結晶を含有している。柾材に使用されていたのは年輪幅が狭い軽い柾用の材であった。

イヌビワ 杠：15

散孔材、単独道管が多く、大径のもので、接線径 $100\text{ }\mu\text{m}$ 、放射径 $120\text{ }\mu\text{m}$ 、木部柔組織と木部纖維組織とが数層づつ交互に配列する。柔組織に結晶を含有している。放射組織異性1—6（7）細胞列となる。

ヤマグワ 不明 : 26

環孔材、大道管は単独または2～3個宛複合する。小道管は2～7個宛複合する。単独道管の大径のものは、その接線径230μm、放射径280μmあり、填充体が多数存在する。柔部柔組織は周囲状および年輪状に分布する。放射組織は1～6細胞列で、内に結晶を含有している。出土材でも材色は黄褐色を呈していた。

ホウノキ 杭：1、脚付盤：28

散孔材、道管は複合するものが多く、2～4個宛各方面に複合する。穿孔板は單一時に階段状である。穿孔の形は角丸の四角形～矩形をしているものが多い。道管の側壁の膜孔は階段である。放射組織は異性で1～2（3）細胞列である。

カツツカ 杭：9、22

散孔材、単独管孔が多いが時に2個宛接線および斜状に複合する。単独道管の大きさ、大径のもので、接線径50μm、放射径55μm、木部柔細胞は接線状に分布しその多くは多室柔細胞となって結晶を含有する。放射組織は異性で1～5細胞列である。

サイカチ 杭：37

環孔材、人道管は単独または2～3個宛複合する。小道管は数個宛複合する。道管内にガム物質が充填している。木部柔細胞は周開状、翼状および連合翼状であり、輪初の木部柔細胞に結晶を含有することが多い。放射組織は1～3細胞列である。若い材であるため放射組織の並列細胞数が少ない。

ユズリハ 杭：23

散孔材、単位面積当りの道管数が多く、直徑は小さい。単独または2～3個宛複合する。穿孔板は階段状で横線数は多い。道管と放射組織との交わる部分の膜孔は横長（階段状）である。放射組織は異性、1～2細胞列である。

アカメガシワ 杭：7、10、16、不明：41

環孔材、道管は主として放射方向に2～3個宛複合する。小道管は比較的に厚膜、穿孔板は單一である。木部柔組織は時に多室となって結晶を含有する。放縫組織は異性で単列である。

スルデ 杭：13、18、31

環孔材（散孔材）、道管は次第に小さくなる。穿孔板は單一、放射組織は異性で1～2、部分的に3細胞列となる。放射組織の中に結晶を包含している。試料は2年目の材である。

トチノキ 漆塗瓶：97、98

散孔材、道管は単独または2～4個宛放射方向斜方向に複合する。道管の切口は、卵形、橢円形である。道管の大きさは大径のもので、接線径60μm、放射径90μm、穿孔板は單一、道管内壁に螺旋肥厚がある。放射組織は単列で層階状配列をする。

ウコギ 杭：25

散孔材、輪初の道管はやや大径で、接線方向に数個複合することが多い。これに続く道管は数個集合して斜方向に配列する。穿孔板は單一、道管の側壁の膜孔は交互状配列をし、大径である。放射組織は異性で1～5（6）細胞列である。

エゴノキ 杭：6、8、17、不明：54

散孔材、道管は次第にその大きさを減少して行き、輪初と終りでは大きさに可成りの相違がある。複合道管が多い。穿孔板は階段状で横線数は少ない。木部柔組織はやや接線状に配列する。放射組織は異性で1～3細胞列である。多列放射組織の単列部の直立細胞部が高い。

ニワトコ 杭：112、21、53

散孔材、輪初に道管が密に並び、これにつづく道管は接線状および斜状に配列する。道管は単独または2～3（4）個宛接線および斜方向に複する。道管の直径は大径のもので、接線径60μm、放射径100μm、穿孔板は單一である。放射組織は異性で1～3細胞列で鞘状細胞が多くある。

ヤブデマリ 杭：36、不明：44

散孔材、道管は多くは単独で、大きさは、大径のもので接線径は60μm、放射径は70μm縦長の矩形に近い六角形である。穿孔板は階段状、横線は数えられたもので、34、42本の2例である。本部柔細胞は散在状で多量に存在する。道管と放射組織との交わる部分の膜孔は横長の階段状である。放射組織は異性1～2（3）細胞列で多列部の上下にある単列の直立細胞が高く1～12細胞高で830μmに達する。

竹・箇類 1種 90

節は2環、径の直徑19.4mm、肉の厚さ3.6mmあり、かなり肉厚である。3.6mm間に維管束が5～6肩ある。維管束は中心柱に密に分布する。維管束は横径120～300μm、縦径140～210μmでかなり大きい。維管束端の発達がよく、これを含めた維管束の大きさは、横径380～470μm、縦径310～560μmある。秤の基本組織の縦断面での細胞は長短の2細胞がある。短細胞は10～15μm、長細胞は80～150μmある。以上、節が2環である、維管束が大径でありかつ中心柱に密に分布することおよび基本組織の長細胞が150μm以内であることなどからは、モウソウチク（節が1環）を除くマダケ属のものが該当するが、竹・箇の類は種類も多く、与えられた試料から得られた特徴のみでは、属の決定も困難である。従ってタケ・ササ類1種とした。

果実・種子類

イヌガヤの種核が25点ほど出上している。そのほとんどが完形である。これらの種子は臭気が強いため食用とはならないが、搾ってとれる油は燈油として使用する。光度があり、窓中でも凍らないという、延喜式にある閑美油というのはこれである。遺跡のあった時代にこれを利用していただか否かはわからない。

マテバシイの果実、一名サツマイトイいわれ九州南部に多い、果実は食用となる。

カシ・ナラ類の果実。いわゆるドングリ類である。ドングリとは圓錐でこれは丸い大きな尖のクマギのそれを指していたが現今はこれらの仲間のすべてをドングリと称しているようである。

ムキノキ、ヤマグワの果核、ともに子供が食べたものであるが、近頃は如何なものであろうか。甘味の多い果実である。

カナムグラ、タデ類の果実とともに多数出上している。

第12表 桃の果核計測表

時 代	S D-16 (弥 生) 9コ	S D-109 (古 墳) 1コ	S X-12 (古 墳) 3コ	S E-1 (鎌 古) 2コ
長 さ	18.3～25.7 (22.3)	21.6	18.6～21.2 (19.8)	17.3～20.3 (18.8)
幅	17.4～22.6 (20.0)	18.5	17.7～19.3 (18.5)	14.3～18.7 (16.5)
厚 さ	15.1～20.1 (16.2)	8.6×2=17.2 (半分のみ)	13.9～14.6 (14.4)	12.7～14.6 (13.7)

（ ）は平均値 単位はmm

ムラサキケマンの種子。

キイチゴ類の果核

モモの果核、弥生・古墳・鎌倉各時代を通して出土している、出土数が多くないので数値的にあまり問題としにくいが大々についての計測値を示しておく（第12表）。

この数値からは時代が降る程核の値が小さくなっている。つまり果実が小型化していることを示している。長野県産および平塚市産のともに野生桃と称するものの核の値は、

第13表 野生桃の果核計測表

	(長 野)	(平 塚)
長	23.8	22.2
幅	17.4	17.2
厚	14.8	14.4

単位はmm

両者の平均値は230、17.3、14.6でSD=16より出土した核の平均値に近い値を示すが出土品の核が厚味が大きい値を示している。

カタバミの種子、鎌倉時代のみから出土している。

イヌザンショウ、サンショウとともに果実

アカメガシワの種子が多数

ヤマハゼの種子

ノブドウ、エビヅルとともに種子が多数

ヒサカキの種子

ヤブジラミの果実

エゴノキの種子多数

クサギの果核

ナス類の種子

ニワトコの果核多数

イネの果実、いわゆるコメ

カンガレイ、ホタルイ類同属のもので沼澤、泥地などに生える。

第14表 木製品利用材一覧表

時代名 樹種名\製品名	弥生時代					鎌倉時代						合計					
	杭	部	盤	容	梯	横	背	不	柱	礎	曲	漆	杓	箸	下	不	
	材			器	子	?	負	明	板	物	楳	子	?	駄	明	合	
カヤノキ							2										2
イヌマキ		2															2
モミ		1															1
スギ				1			3										4
ヒノキ		1							4	19	3	1	1	1	1		31
シイノキ	1				6												7
クリ			1														1
カシ類	3					2											5
クヌギ又はアベマキ	3					2											5
コナラ						1											1
ムクノキ	1																1
エノキ	3			1	1	1											6
ケヤキ	1										1						2
イヌビワ	1																1
ヤマグワ							1										1
ホオノキ	1	1															2
カマツカ	2																2
サイカチ	1																1
ユズリハ	1																1
アカメガシワ	3					1											4
ヌルデ	3																3
トチノキ											2						2
ウコギ	1																1
エゴノキ	3					1											4
ニワトコ	3																3
ヤブデマリ	1				1												2
計	34	1	2	1	1	1	1	21	4	19	3	3	1	1	1	1	95

第15表 出土植物名（材および果実・種子）一覧表

材	果 実・種 子				
	SD-16	SD-109	SX-12	SE-1	SE-2
カヤノキ	Torreya nucifera	+			
イヌマキ	Podocarpus macrophyllus	+			
イヌガヤ	Cephalotaxus harringtonia		+		
モミ	Abies firma	+			
スギ	Cryptomeria japonica	+			
ヒノキ	Chamaecyparis obtusa	+			
オニグルミ	Juglans mandshurica subsp.sieboldiana		+		
シイノキ	Castanopsis cuspidata	+			
クリ	Castanea crenata	+			
カシ類	Cyclobalanopsis spp.	+	+		
マテバシイ	Pasania edulis		+		
クスギ又はアベマキ	Quercus acutissima Or Q.variabilis	+			
	Quercus serrata	+			
ナラ類	Quercus sp.		+		
ムクノキ	Aphananthe aspera	+	+		
エノキ	Celtis sinensis var.japonica	+			
ケヤキ	Zelkova serrata	+			
イヌビワ	Ficus erecta	+			
ヤマグワ	Morus bombycis	+	+		
ナムグラ	Humulus japonicum	+			
タデ類	Polygonum spp.		+		+
ホウノキ	Magnolia obovata	+			
ムラサキケマン	Coldyadis incisa		+		
キイチゴ類	Rubus sp.	+			
モモモモ	Prunus persica		+	+	+
カマツカ	Photinia laevis	+			
サイカチ	Gleditsia japonica	+			
カタバミ	Oxalis cernuifolia				+
イヌザンショウ	Fagaria mantshurica		+		
サンショウウ	Zanthoxylum piperitum		+		
エノキグサ	Acalypha australis		+		
ユズリハ	Daphniphyllum macropodium	+			
アカメガシワ	Mallotus japonicus	+	+		
スルデ	Rhus javanica	+			
ヤマハゼ	Rhus sylvestris		+		
トチノキ	Aesculus turbinata	+			
ノブドウ	Amelopsis brevipedunculata		+		
エビヅル	Vitis ficifolia var.lobata		+		
サルナシ類	Actinidia sp.		+		
ヒサカキ	Eurya japonica		+		
ウコギ	Acanthopanax spinosum	+			
ヤブジラミ	Torilis japonica		+		
エゴノキ	Styrax japonica	+	+		
クサギ	Clerodendron trichotomum		+		
ナス類	Solanum sp.		+		
ニワトコ	Sambucus sieboldiana	+	+		
ヤブデマリ	Viburnum plicatum var.tomentosum	+			
イブズネ	Oryza sativa		+		+
カンガレイ	Scripus mucronatum		+		
ホタルイ類	Scripus sp.		+	+	
タケ・ササ類1種					+

SD-16: 拝生時代後期

SD-109、SX-12: 古墳時代後期

SE-1: 鎌倉時代

SE-2: 江戸時代以降

第16表 材質鑑定一覧表

山内先生に材質鑑定を依頼した資料は下記の通りである。

番号	出土遺構	名 称	番号	出土遺構	名 称	番号	出土遺構	名 称
1	S D-16	杭	36	S P-16	杭	71	S P-481	礎 板
2	"	"	37	"	"	72	S P-485	礎 板(a)
3	"	"	38	"	"	73	"	" (b)
4	"	"	39	"		74	"	" (c)
5	"	"	40	"		75	S P-382	" (2)
6	"	"	41	"		76	S P-486	礎 板
7	"	"	42	"		77	S P-606	"
8	"	"	43	"	杭	78	S P-627	"
9	"	"	44	"		79	S P-628	"
10	"	"	45	"		80	S P-749	"
11	"	"	46	"		81	S P-109	箸?
12	"	"	47	"		82	S E-1	"
13	"	"	48	"	背 負 子	83	"	"
14	"	"	49	"		84	"	"
15	"	"	50	"		85	"	"
16	"	"	51	"		86	"	"
17	"	"	52	"	杭	87	"	"
18	"	"	53	"	"	88	"	"
19	"	"	54	"		89	"	竹
20	"	"	55	"	杭	90	S E-2	"
21	"	"	56	"		91	S E-4	曲 物
22	"	"	57	"	脚 付 盤	92	"	"
23	"	"	58	"	建築用材?	93	"	
24	"	"	59	S P-1	柱	94	S K-18	均 子
25	"	"	60	S P-2	"	95	S D-85 (109)	曲 物
26	"	"	61	S P-386	"	96	S D-85	下 駄
27	"	"	62	S P-483	"	97	"	漆 塗 梶
28	"	脚 付 盤	63	S P-3	礎 板	98	S D-87	"
29	"	杭	64	S P-125	"	99	S D-16	
30	"	容 器	65	S P-177~ 179	"	100	"	
31	"	杭	66	S P-296	"	101	S E-3	箸?
32	"		67	S P-357	"	102	S D-16	梯 子
33	"		68	S P-358	"	103	S E-3	漆 塗 梶
34	"		69	S P-382	礎 板(1)	104	S E-4	
35	"		70	S P-476	礎 板	105	S D-16	

S D-16 で杭以外のものは流木が多い。

付編3 玉越遺跡から出土したウリ科植物の種子について

大阪府立大学農学部助教授 藤下典之

全国各地の遺跡から出土が確認されたウリ科植物の種子には、ヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria* Standl. メロン仲間 *Cucumis melo* L.、トウガラシ *Benincasa hispida* Cogn. スイカ *Citrullus lanatus* satsum. et Nakai カボチャ仲間 *Cucurbita* sp. などの栽培植物とカラスウリ仲間 *Trichosanthes* sp., ゴキヅル *Actinostemma lobatum* Maxim.、スズメウリ *Melothria japonica* Maxim. などの野生植物がある。これらの内、最初の二者の出土は、イネやモモとともに出土頻度も数種もばらぬけて多く、1985年11月現在までに筆者がそれらの出土を確認できた遺跡数は、ヒョウタン仲間が110箇所、メロン仲間が103箇所におよび、さらに大きさの計測できた遺跡数はそれぞれ57箇所と60箇所にものぼる。これら出土種子の大きさや形態の調査結果からは、筆者が専攻するウリ科栽培植物の系統発生的研究（ルーツ、渡米・伝播経路の探索など）に役立つ数々の貴重な指唆が得られている。出土した遺体の調査から、文字や絵画による記録のなかた古代の農耕の様子や栽培されていた植物の種類が次々と明らかになってきつつある。

これまでに静岡県下の遺跡から出土したウリ科植物の種子の種類、粒数、大きさなどを第17、18表に示した。玉越遺跡も含めて、ヒョウタン仲間が9遺跡、メロン仲間が5遺跡から出土しており、この遺跡数は、大阪、奈良に次いで多い県となっている。しかし、出土種子数は両仲間とも少なく、完形成熟種子が100粒を越えたのは、有東遺跡のヒョウタン仲間の495粒と、坂戸遺跡のヒョウタン仲間の293粒およびメロン仲間の163粒のみで、遺構当たりの種子数にするとさらに少なくなる。大きさの変異（分散のひろがりや、かたよりなど）を重視する筆者の立場からすると、栽培植物の種類を同定する上では残念ながら資料不足と言えよう。現生のウリ科の栽培植物では、一個の果実に含まれている種子数が100～800もあるので、もう少し多くの種子が出土してもよさそうな気がする。次に出土遺跡の編年であるが、今回の玉越遺跡の1遺構占墳時代後期（別の1遺構は弥生後期）と坂戸遺跡の古墳後期～奈良時代以外はすべて弥生時代、なかでも後期が多い。東日本の弥生遺跡は西日本に比べて少ないだけに、地理的位置や編年とウリの種類との関係を論じていくうえで、静岡県下の、しかも、伝播経路の問題もからむ太平洋岸沿いの遺跡から出土する遺体は、大きな意義を持つと言えよう。

計測方法：筆者が從来から行ってきたものと同じである。乾燥した状態で送られてきた種子を、完形成熟（正常）種子、ないし（批、不受精または未熟種子。今回の出土遺体中には含まれていなかった）、奇形種子、部分欠損種子に類別し、それぞれの粒数を数えたあと完形成熟種子1粒ごとの長さと幅を0.1mmまで読みとれるルーペで計測した。種子の厚みは栽培や採種環境によって変化し易いので計測していない。

計測結果と考察

1) メロン仲間

弥生後期後半期のSD-16(溝)から出土した16粒には、長さが6mm以下の雑草メロン型が1粒、6.1～8.0mmのマクワ・シロウリ型が12粒、8.1mm以上のモモルディカメロン型が3粒であった。16粒の平均長は7.31mmで、既往の弥生時代出土種子1,557粒の平均長6.23mmに比べると1mmほど大きかった。雑草メロンは、今日も西日本の離島や世界各地の畑の中で作物の雑草として自生するメロン仲間の一変種 (*C. melo* var. *agrestis*) で、ウズラからアヒルの卵大の、苦くて（未熟の内）不

第17表 静岡県下の遺跡から出土したメロン仲間の種子

遺跡名	遺 横 横	推定時代	出土完熟種子数	計測種子数	種子の長さ(mm)			種子の幅(mm)			長さの変異 ^{**} (%)		
					最大	最小	平均	最大	最小	平均	6.0mm以下	6.1~8.0mm	8.1mm以上
登呂	—	弥生後期	—	3	7.8	7.1	7.50	3.7	3.5	3.60	(3)		
山木	—	弥生後期	3	3	7.5	6.7	7.00	4.0	3.5	3.66	(3)		
坂尻*	NSD11B KSD8B	古墳後期~奈良	146	100	10.3	5.9	7.95	4.3	2.9	3.60	1	45	54
坂尻*	NSD3	奈 良	16	16	9.1	6.8	8.14	4.0	3.1	3.53	(9)	(7)	
伊場	大溝内	奈 良	—	1	—	—	8.20	—	—	3.70			(1)
玉越	SD-16	弥生後期後半期	16***	16	8.6	5.7	7.31	4.1	2.8	3.35	(1)	02	(3)

* 他の遺構から完形成熟種子1粒が出土 **()は%ではなく実数を示した。6.0mm以下を雑草メロン型、6.1~8.0mmをマクワ・シロウリ型、8.1mm以上をモモルディカメロン型としている。 *** 他に部分欠損8粒

山木遺跡出土種子の大きさは「静山山木遺跡」1962より引用した。

味な果実をつける野生種に近いものであるが、温室メロンやマクワ・シロウリなどとは自由に交雑できる。モモルディカメロンは、東南アジアからインド、中東にかけて多量に栽培されているメロン仲間の一変種 (*C. melo* var. *momordica*) で、日本では本土から離れた伊豆の八丈島と長崎の福江島でのみ、絶滅寸前の姿で残っている。甘味と水気はないが、1kg近い果尖となり、香りよく、成熟すると果肉が粉に砕け、それに少量の砂糖をふりかけて食べる。既往の全国各地から出土種子の計測結果を編年別にみると、マクワ・シロウリ型のほかに、弥生時代20遺跡の1,557粒中には雑草メロン型の小粒種子が37.6%、奈良・平安時代14遺跡の1,280粒中にはモモルディカメロン型の大粒種子が42.1%含まれ、中世から江戸時代にかけての12遺跡の1,890粒の種子は、マクワ・シロウリ型の中粒が大部分を占めていた。玉越遺跡の場合は、出土種子の数が少ないために多くを論じられないが、弥生後期後半期のこの遺跡から、長さが8.2、8.3、8.6mmのモモルディカメロン型の種子が、16粒中に3粒も含まれていた事実は、この種類のメロンは古墳時代から奈良・平安期にかけて、高頻度に渡来・伝播したものと考えていただけに興味深い。ちなみに同じ静岡県下の古墳時代後期~奈良時代の坂尻遺跡の場合は、163粒の過半数がモモルディカメロン型であった。

2) ヒヨウタン仲間

①弥生後期後半期 SD-16 (溝) からの出土種子

7粒の平均長12.14mmと平均幅6.04mmは、既往の弥生時代17遺跡1,302粒の平均長11.31mmと平均幅5.72mmや、同じ静岡県下の弥生中期の有東遺跡177粒の11.10mmと5.51mm、奈良時代の伊場遺跡26粒の10.41mmと4.91mmに比べると大きかった。

②古墳時代後期 SD-109 (溝) からの出土種子

37粒の平均長12.91mmと平均幅6.9mmであった。以上の種子は37粒中に6粒 (14.1mm以上は3粒) しか含まれていなかった。1粒ごとの長さと幅を方眼紙上にとり、変異の分散の様相から、1個の果実の種子が、種類の違う複数個の果実の種か、あるいは長さと幅の比の変異から果形が漆型かフラスコ型かなどを推定することは、種子数が少ないと不可能であった。ただし、長さが16.2mm、幅が6.8mmと1粒だけとび離れて大きい種子があった。奇形的に大きいのではなく正常な形をしていたことから、別の果実に由来する種であるかもしれない。今までに計測した出土種子の内に、16mm以上の長さがあったのは、繩子遺跡 (古墳時代、大阪) や鳥羽離宮跡 (鎌倉時代、京都)

第18表 静岡県下の遺跡から出土したヒョウタン仲間の種子

遺跡名	遺構	推定時代	出土実形成熟種子数	計測種子数	平均長mm	平均幅mm	平均長さ／幅	長さの変異(%)			
								8.1 ～10mm	10.1 ～12mm	12.1 ～14mm	14.1 ～16mm
有東	S D03	弥生中期	418 ^{**}	100	11.60	5.70	2.03	80	20		
石川	—	弥生後期	—	—	—	—	—				
白岩	—	—	—	—	—	—	—				
登呂	—	—	—	—	—	—	—				
山木	—	—	10	—	—	—	—				
沢田	—	—	—	—	—	—	—				
坂尻	K S D 11 B K S D 8 B 貝塚	古墳後期 ～奈良	193	100	11.05	5.51	2.00	7	88	5	
坂尻	N S D 3	奈良	40	40	14.62	6.32	2.31	(6)	(3)	(2)	
伊場	大溝内貝塚	—	457 以上	26	10.41	4.91	2.12	(6)	(2)		
玉越	S D 16	弥生後期後半	7 ^{***}	7	12.14	6.04	2.00	(4)	(3)		
—	D 109	古墳後期	37 ^{****}	37	12.91	6.09	2.12	(8)	(3)	(3)	

* 推定時代別の最多出土遺構の資料のみを示した。他の遺構から60粒出土。
** 他にS P 04 F の土坑から77粒出土。*** 他に奇形、部分欠損各1粒。
**** 他に部分欠損11粒、奇形4粒。

山木の資料は「蛭山山木遺跡」1962より引用した。

からの数粒のみであった。静岡県下の古墳時代後期～奈良時代の坂尻遺跡N S D 3 から出土した種子は40粒であったが、平均長14.62mm、平均幅6.23mmと大きく、本邦出土のヒョウタン仲間の種子の中では最大級のもので、現生の種子の大きさに近く、長さ／幅は2.3という細長いもので、特徴のはっきりした種子であった。

3) スズメウリ

弥生後期後半のS D-16（溝）から、長さ6.0mm、幅3.5mmのスズメウリとみられる種子が1粒出土した。スズメウリの種子出土の報告例には、弥生時代の板付、池上、平安時代の壇田、中世の草戸千軒町などの遺跡がある。スズメウリは野生植物であり、種子、果実とも小さくて利用例がなく今回出土数も1粒のみであることから、たまたまS D-16の溝にまぎれこんで残ったものと思われた。

むすび

玉越遺跡から出土したウリ科植物の種子は、メロン仲間、ヒョウタン仲間とともに多くを論じるうえには種子数が少なかった。しかし、弥生後期後半の遺構から、古墳時代から奈良・平安時代にその多くが渡来したとみされていたモモルディカメロン型の、マクワ・シロウリよりひとまわり大きい大粒種子が、わずかではあるが出土した事実は、新しい課題を提起したと言えよう。また古墳時代後期の遺構から現生の大果品種の種子に匹敵する極めて大きいヒョウタン仲間の種子が1粒出土した事実も見のがせない。前述したように、同じ静岡県下の古墳時代後期～奈良時代の坂尻遺跡からは、メロン仲間ではモモルディカメロン型の大粒種子が過半数を占めるほど出土し、ヒョウタン仲間では中世遺跡からのもの（草戸千軒町・烏羽離宮跡・水原城館跡の遺跡135粒の平均長13.46mmと平均幅6.37mmである。）同様の最大級の種子（現生のものに近い）が出土した。これらの事実を参考にしながら

ら、地理的位置や編年とウリの種類との関係を考えていきたい。晴天日数に恵まれ、今日の温室メロン栽培の中心地となったこの地方であるだけに、栽培植物の遺体が豊富に埋蔵されている可能性もあり、古代の農耕の姿や栽培植物の種類を明らかにしていくうえで、今後の発掘資料に期待するところ大である。

引 用 文 献

1. 藤下典之 1980: 「本邦各地の遺跡から出土したウリ科植物の遺体について」『考古学・美術史の自然学的研究』日本学術振興会 東京、223~233
2. 藤下典之 1982: 「本邦各地の遺跡から出土したヒョウタン仲間の遺体について」『近畿作育会報27』40~45
3. 藤下典之 1983: 「メロン仲間 (*Cucumis melo*) の系統分化と多様性」『育種学最近の進歩 24』3~21
4. 藤下典之 1984: 「出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』総括報告書、638~654
5. 藤下典之 1985: 「坂尻遺跡より出土したメロン仲間 *Cucumis melo* L. とヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria* Standl. の遺体について」『坂尻遺跡・自然科学編』49~56
6. 藤下典之 1985: 「*Cucumis* 属を中心としたウリ科植物の資源探索、その方法と収集資源の活用」『園芸学会昭和60年度秋季大会シンポジウム講演要旨』30~42
7. 藤下典之 印刷中、有東遺跡から出土した *Lagenaria siceraria* Standl. ヒョウタン仲間の遺体について

付編4 近世史料にみる「金山堤」について

磐田市役所・市誌編纂係 徳橋伸一

国道1号線・三ヶ野橋から北へ約0.5kmの太田川左岸堤防に接続した、延長約0.8km（現存部分）のいわゆる「横堤」が北東へ向かって蟹田川まで延びている。

この堤は宝曆12年（1762）「玉越村堤ニ閣スル請文一札」（小山村文書『袋井市史史料編』近世所収）、大明7年（1787）「遠江国豊田郡小山村と山名郡玉越村堤上置再論御裁許上ヶ證文」（前同）に掲ると、「横堤」あるいは「内堤」と称され、文化2年（1805）の史料には「字金山堤」（前同）とある。「金山堤」の築堤に関する起源は不明であるが、元禄元年（1688）『土橋村堤上置等ニ閣スル裁許状』に「上橋村堤長百七拾九間之所前々より満水之節者堤之上致越水來候處、至去春從土橋村右之堤江致上置」とあることによって、少なくとも貞享年間には既に存在していたことがわかる。

因に中世の土橋郷は、永暦9年（1566）今川領、同12年徳川領、元亀4年（1573）武田領、天正7年再び徳川領といったように支配の変遷が著しい。土橋郷のほか、小山、西島なども戦国期の史料に初見できるが知行関係に限られている。「金山堤」と集落のかかわりについて中世まで溯ることは今のところ困難な状況にある。

「金山堤」は、袋井バイパス建設工事により道路敷下に埋没することとなったが、近世においては堤の高さ、修復をめぐり、小山村と七橋村、玉越村、さらに南部の下郷に当る新池村外5か村との間に争論が繰り返し起きている。「金山堤」すなわち内堤は玉越・土橋・小山3か村境にまたがる。太田川氾濫の際、逆水が小山村へ流入し、水嵩が増すと内堤を乗り越えて川下の玉越村、土橋村へ押し流された。今回の発掘調査において、堤の縦断面に小礫まじりの砂層がかなり広い範囲で認められている。これはかつての氾濫による土砂堆積を示すものである。

元禄期において、川下の土橋村が内堤に置土したことから、川上の小山村と争論となった。元禄元年（1688）、土橋村の堤上置と道通置上に対する小山村の訴えにより、堤・道通の置土の撤去とその後の置土禁止、堤の高さ、敷（堤の基底幅）、馬踏（堤の上部幅）及び堤の長さについて、幕府勘定奉行の裁許が出された。この裁許で堤の長さは、上橋村分179間（325m）、玉越村分203間（369m）となっている。元禄当時、上橋村・小山村・玉越村はともに幕府領であった。

下って宝曆11年（1761）川下の玉越村が山水の度に水防のため堤へ置土をしたことに対して、川上の小山村は、定寸より高くなつた畠土の削除を要求し、再び争論が生じた。訴訟方の小山村としては、太田川氾濫時の逆水が村内に滞留し、排水ができず田畠冠水の難を蒙ることとなり、一方川下の玉越村は、度重なる堤決壊により耕作上が流出し田面が1尺（30.3cm）余り低くなつたという。相手方である玉越村の返答の趣は、元禄年間に小山村と上橋村との間に紛争が生じた際、玉越村は争論外にあって裁許の堤定寸に閑知せず、裁許絵図もない。また、堤決壊の場合その原形に復すのみであり、堤修復に小山・土橋両村の立合をうけて定寸を改めることはないというものである。

争論吟味後、評定所宛の連判一札では、元禄裁許当時の玉越村も幕府領であり、争論外ではあったが地改に立合い、裁許絵図にも玉越村堤の規模が規定されていることから、玉越村堤長203間のうち5か所の高さを西から1間6寸（1.99m）、5尺6寸（1.69m）、1間（1.81m）、1間1寸（1.84m）、5尺8寸（1.75m）とし、その馬踏は4尺5寸（1.36m）から3尺7寸（1.12m）まで、敷は3間4尺2寸（6.72m）から2間2尺4寸（4.36m）までの規模でいずれも耕地面に即した定寸の記載がある。宝曆12年（1762）8月、これらの定寸に従い、玉越村堤について小山村（旗本花房氏・同鈴木氏・同丸毛氏の相給）、玉越村（旗本菅谷氏知行）、土橋村（旗本菅谷氏知行）3か村立合の上、堤の

高低を改め、以後は土橋村堤同様に心得ることを約した。

元禄裁許では、土橋村堤179間（325m）のうち上置削除の長さ75間4尺（137.56m）の間の11か所について高さ・敷・馬蹄の定寸も規定されていた。

しかしながら、天明7年（1787）再び小山村は、玉越村・土橋村の地境横堤への上置（置上）、腹付（堤側面の修復）による落水文障を訴えることになった。玉越村・土橋村は、天明4年（1784）川下に位置する新池村外5か村から、横堤の普請がなおざりであるとの訴えが出たため、御定の寸尺に従って修繕を施したのみであり、過分の上置ではないとした。代官、手代らの地改によると、玉越村堤・土橋村堤の総間数457間余（830.8m）のうち、玉越村堤の御定寸3番の箇所がこれまで切所にはならなかったが、土砂流出により低くなつたため、同箇所へ5寸（15cm）上置し、それより水盛（水平）を以て総間数457間余の全堤に置土したところ、訴訟方の小山村は押堀によってできた届底からの堤の寸尺を基準として御定寸より高い旨を主張し、堤補強のため植えられた篠・小笹を刈り払った。

宝曆裁許の後、小山村・玉越村・土橋村3か村立合のもとで、堀と田地形との中分（中間点）から御定寸に照合し堤の高低を修正したが、天明7年（1787）8月の裁許においても、論所の横堤は水盛によって高下を修正し、置上のほか篠・小笹などを植えず、全て「元禄裁許」に相当する堤の規模を双方は順守し、以後再論に及ばないことを約し、和解に至った。

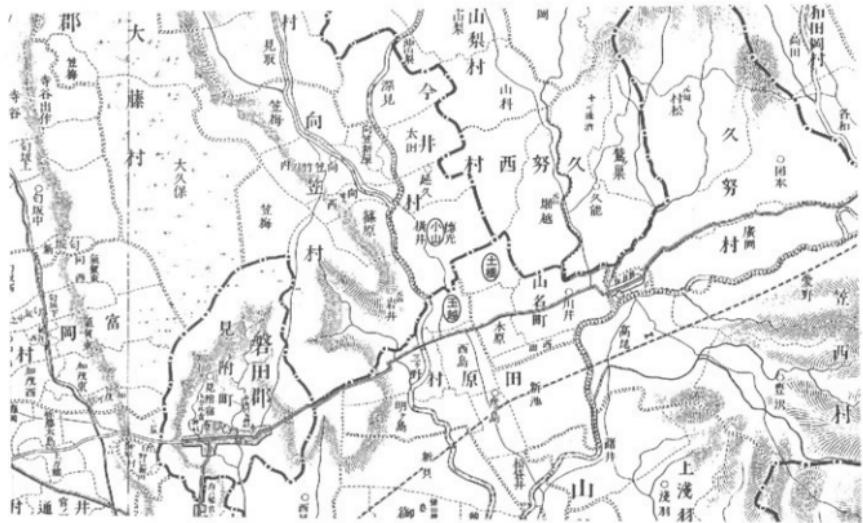
「元禄御裁許御裏書」には、「土橋村ハ地形高く、小山村ハ地形低く候故、堤越水吐セ候而茂、小山村水怒（洪水）に可成處」とあって小山村が「水腐村方」であると認められてはいたが、再三の出入は堤高さの改方から争いが生じた。

文化2年（1805）の「字金山堤新規抜樋伏込御裁許背出入」では、玉越村が「金山堤」を切割り、溝堀を設けて用水を引こうとしたため、新池村・西田村・彦島村・松袋井村など南部村々は、「金山堤」が水下の村々と袋井宿から見付宿の東海道往還を守る「大囲」の役割を果しているとして、これに反対した。

「金山堤」は、太田川中流の乗越堤あるいは控え堤として、結果的には洪水を滞留させながら流下することによって、下流の洪水調節を行なうとともに、耕地の保全と街道を防備し、また洪水の溢流によって、沿岸耕地を肥沃にする氾濫灌漑に類似した面をもっていたといえる。



第76図 「見付」五万分の一地形図（明治22年測図・昭和15年部分修正、大日本帝国陸地測量部）より



第77図 「静岡県管内全図」（明治22年）より

一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)
埋蔵文化財発掘調査報告書

玉 越 遺 跡

編集 磐田市教育委員会
発行 磐田市文化財保存顕彰会
発行日 1986年3月31日
印刷 株式会社 山田印刷所

図 版



遺跡周辺航空写真



発掘調査前の全景（北東より）



I-II区遺構全景（南西より）
後方は土橋遺跡



I-II区遺構全景（南西より）





SD-14遺物出土状態（北東より）



SD-14発掘状態（北東より）



SD-14遺物出土状態（北東より）



SD-14遺物出土状態（北より）



SD-14遺物出土状態（南より）



SD-14遺物出土状態（南より）



SD—I6遺物出土状態(北東より)



SD—I6遺物出土状態(北東より)



SD—I4発掘状態(北東より)



S D-16遺物出土状態(北東より)



S D-16遺物出土状態(北東より)



S D-16完掘状態(北東より)



V～X区南側遺構全景(北東より)



VII～IX区南側遺構全景(北東より)



SK-5遺物出土状態(南より)



SK—I3遺物出土状態（西より）



SK—I4土層断面（西より）



SK—I4完掘状態（東より）



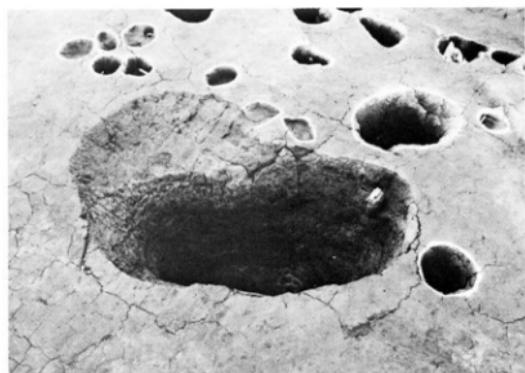
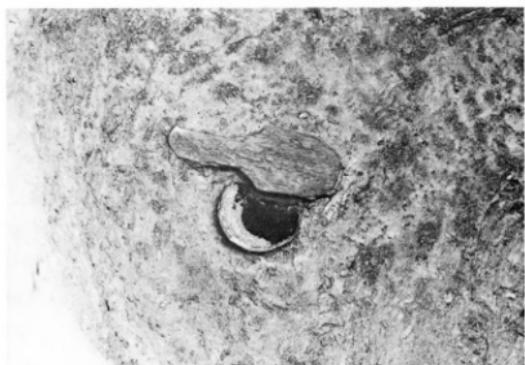
SK-7 遺物出土状態（東より）



SK-17 完掘状態（西より）



SK-21 完掘状態（東より）





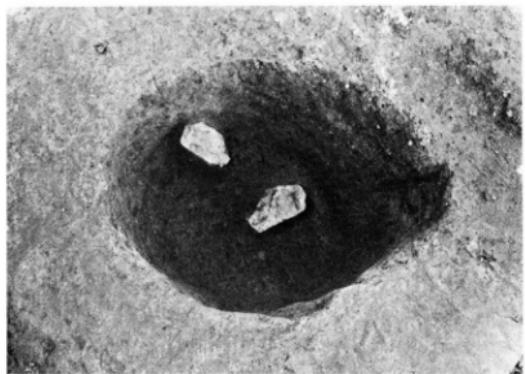
S K-39遺物出土状態（東より）



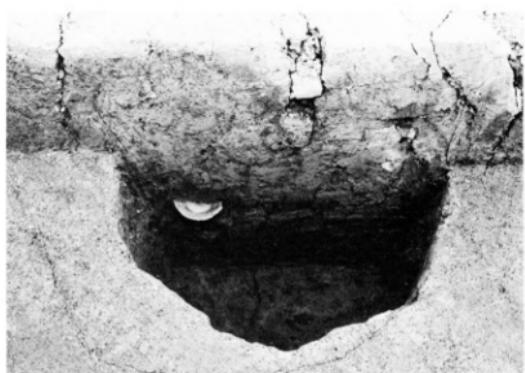
S K-39遺物出土状態



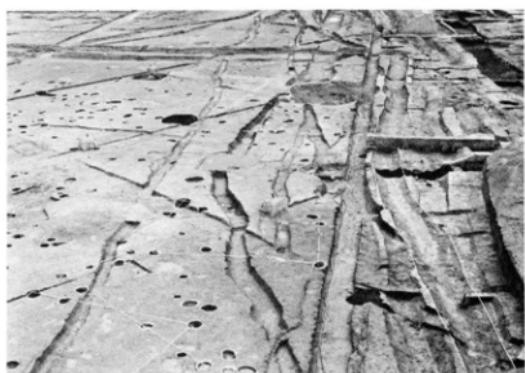
S K-30砾出土状態（北より）



S K-33出土状態（西より）



S K-42遺物出土状態（北より）



環溝敷南東隅全景（南西より）



環溝屋敷南側全景（北東より）



環溝屋敷東側全景（南東より）



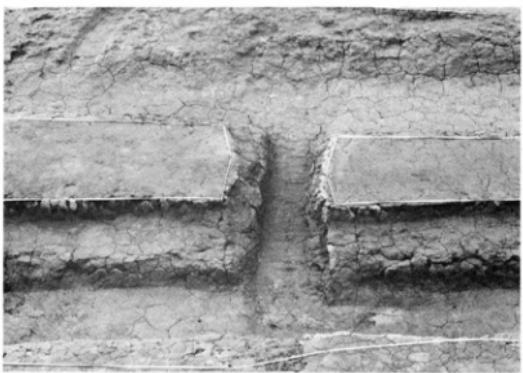
環溝屋敷全景（北東より）



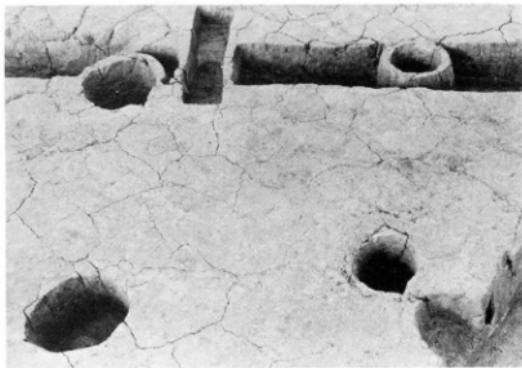
SD-52・53コーナー部分近景
(北西より)



SD-52・53コーナー部分近景
(南東より)



SD-52・53接続部分近景 (北東
より)



SB-1全景 (南より)



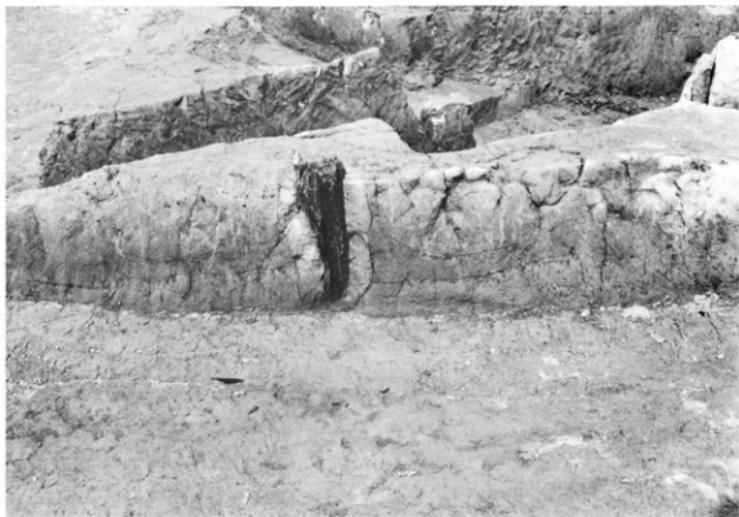
SB-2・3全景 (南西より)



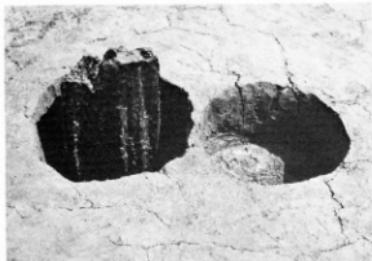
SB-13全景 (北西より)



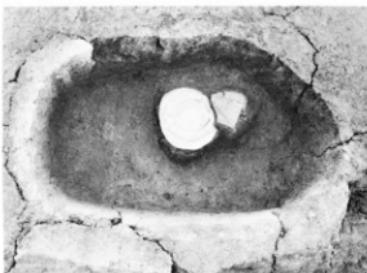
S P - I . 2 周辺柱穴群全景（南東より）



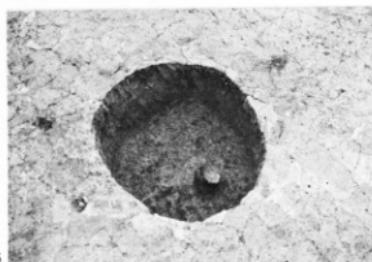
S P - I 検出状態（南東より）



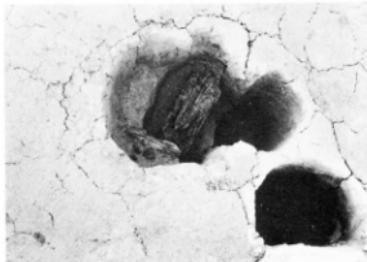
2



271



45



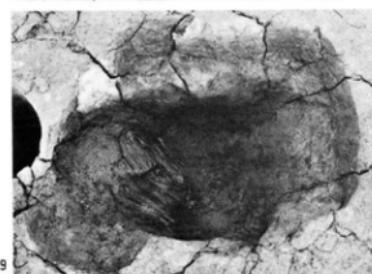
296



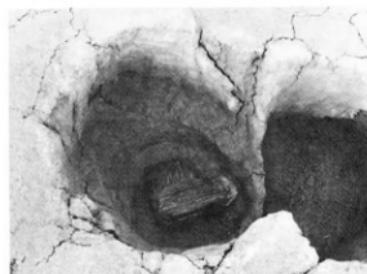
124



358

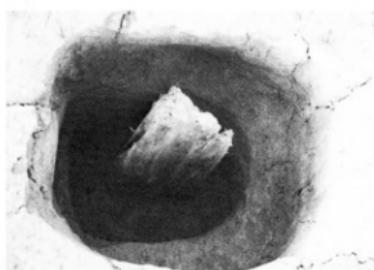


179

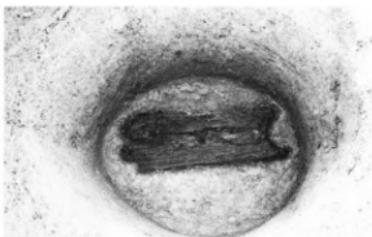


382

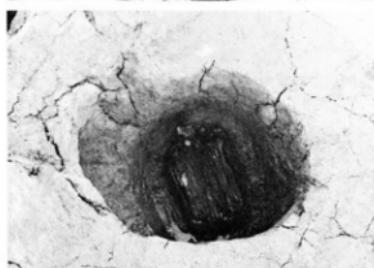
柱穴完掘状態 (S P—2・45・
124・179・271・296・358・382)



386



627



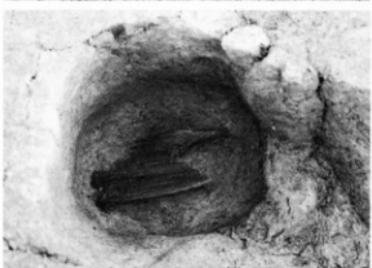
476



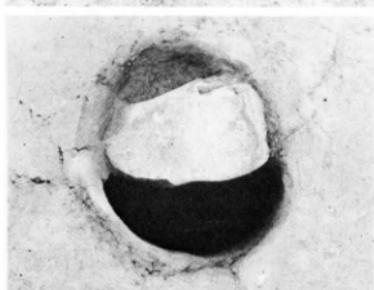
628



485



749

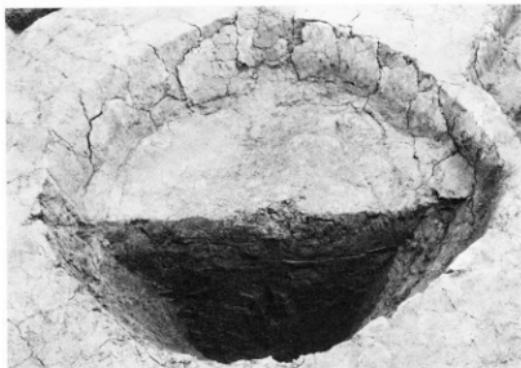


487



754

柱穴完掘状態 (S P - 386 · 476 ·
485 · 487 · 627 · 628 · 749 · 754)





SE-2 井戸枠検出状態（北東より）



SE-2 完掘状態（北東より）



SE-3 完掘状態（南東より）



SE-4 遺物出土状態(北東より)



SE-4 完掘状態（北西より）



SE-5 井戸枠検出状態(西より)



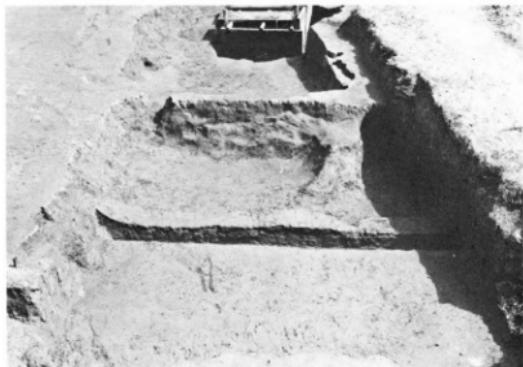
配石造構検出状態（北東より）



S X-6 炉櫓状態（北東より）



S X-6 杖としがらみ検出状態
(西より)



S X-3・4 完掘状態(南西より)



S X-12完掘状態(北東より)



S X-13礫検出状態(南東より)



S X - I3 砂出状態（北西より）



S X - I3 遺物出土状態



金山堤調査前の状況（北東より）



金山堤近景（北東より）



金山堤半壠状態（北東より）



金山堤横断面（北東より）



金山堤縦断面（南西より）



S D-85横断面（北東より）



SD-85-102接合部分疊出土状態
(北西より)



SD-85-102接合部分疊出土状態
(北東より)



SD-85-102接合部分完結状態
(北西より)



水田状遺構全景（北東より）

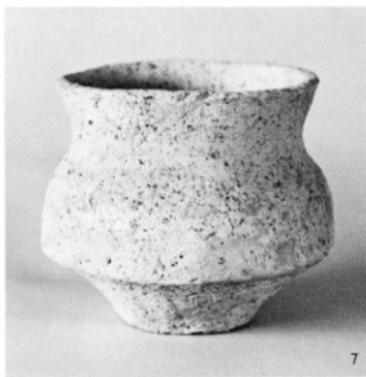
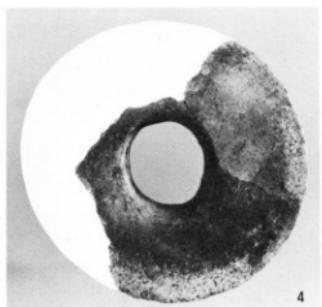


水田状遺構全景（南西より）



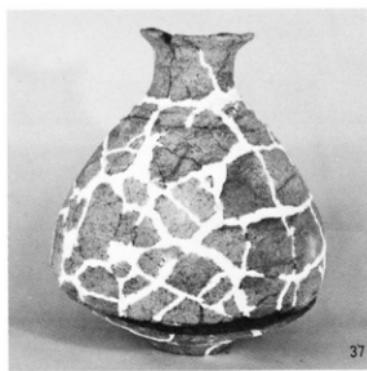
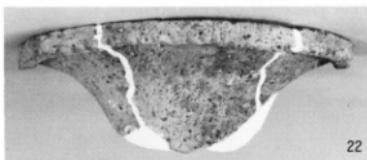
金山神社跡地

図版30(出土土器(1))





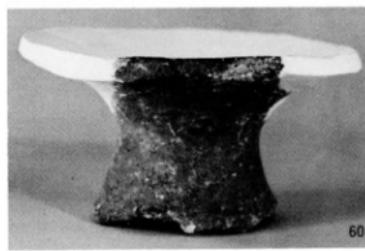
図版32(出土土器(3))

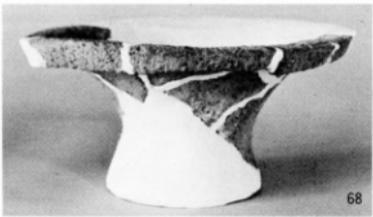
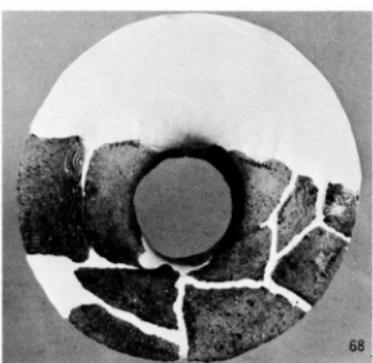


図版33(出土土器(4))

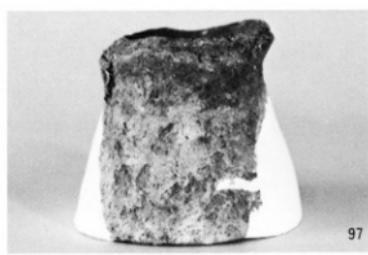
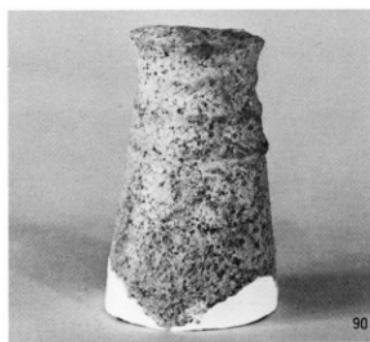
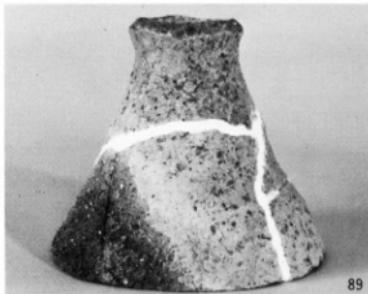


図版34(出土土器(5))

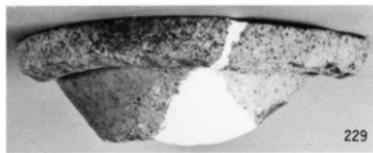
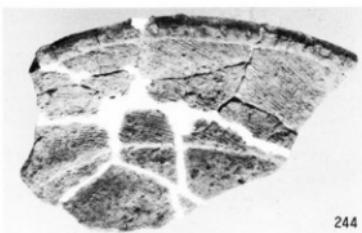
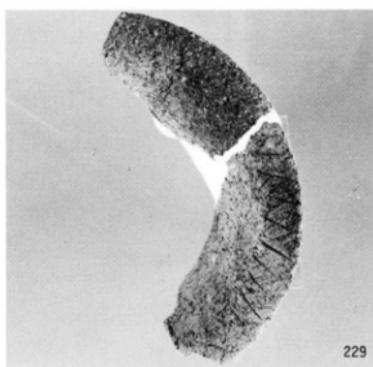
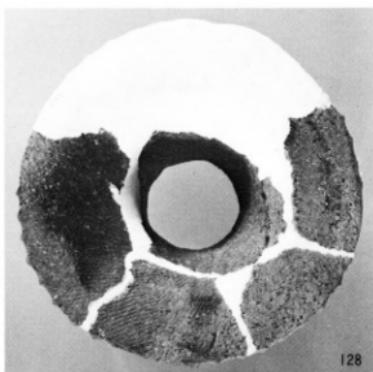




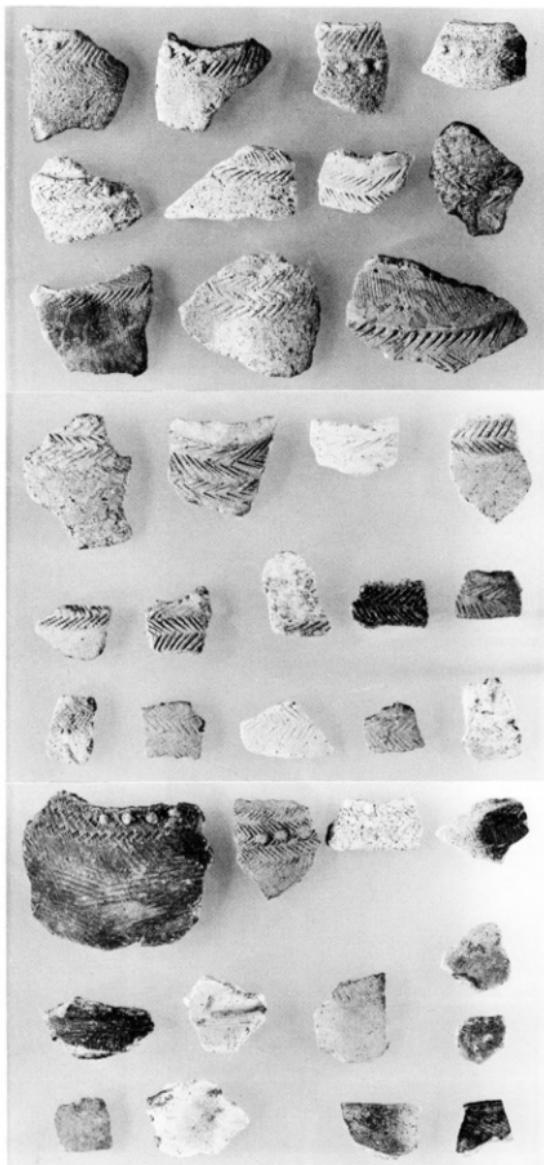
図版36(出土土器⑦)

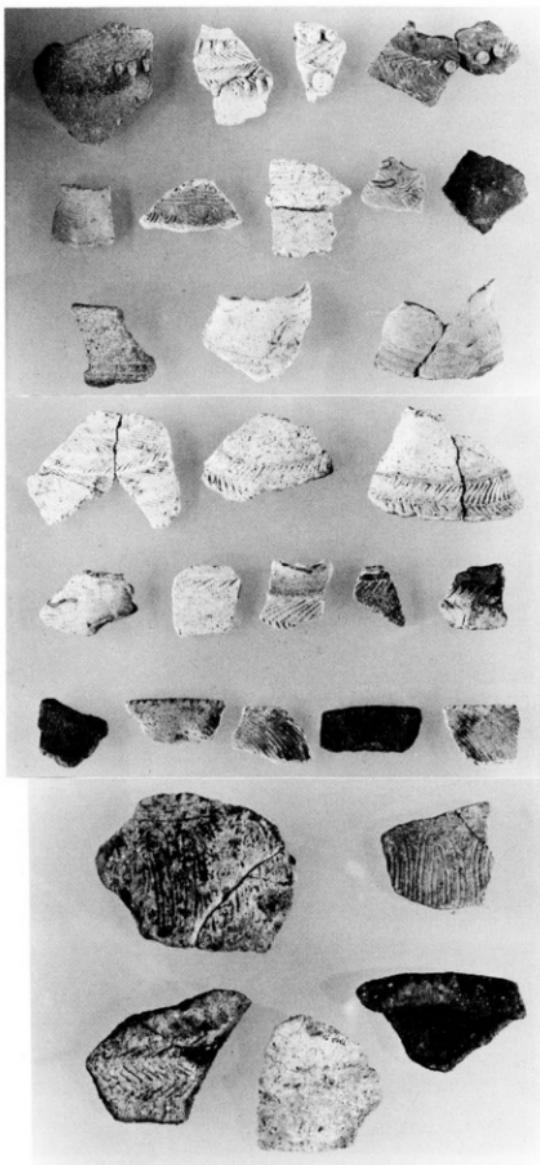


図版37(出土土器⑧)

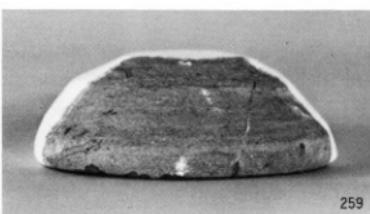
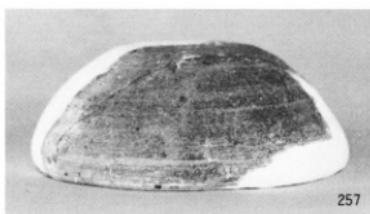
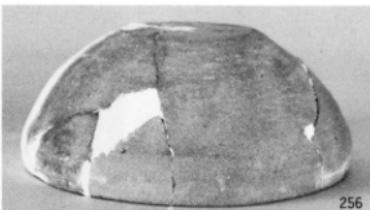


図版 38 (出土土器(9))



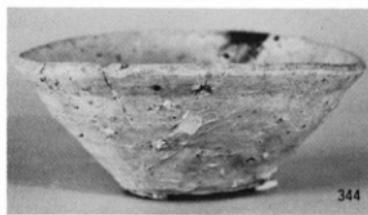
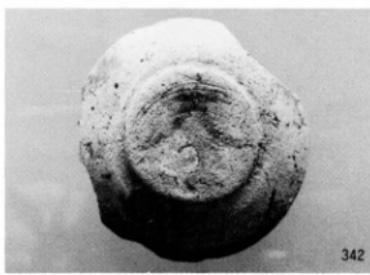
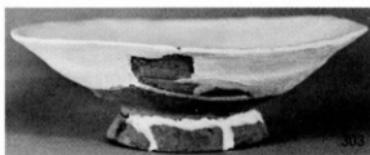
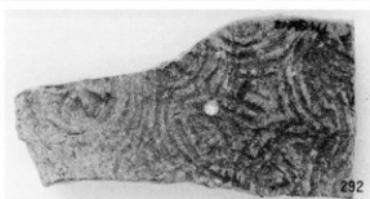


図版40(出土土器)(II)

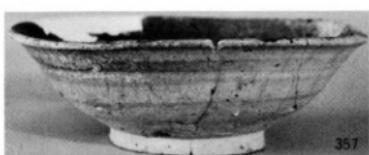




図版42(出土土器(13))



図版43(出土土器(14))



図版 44 (出土木製品(1))

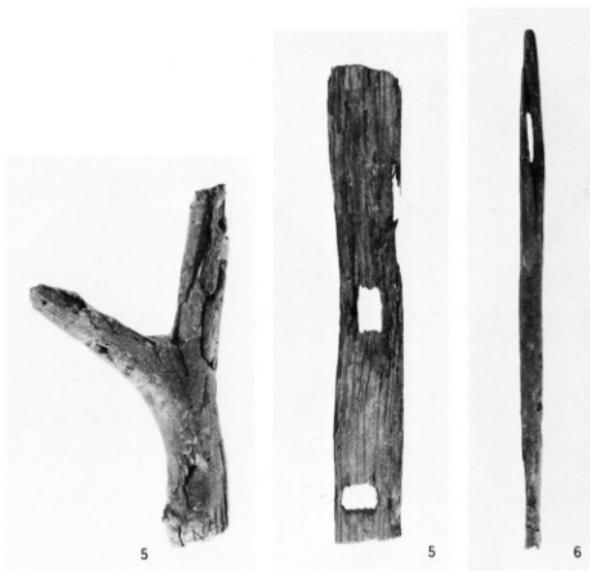


2



3





図版46（出土木製品③）



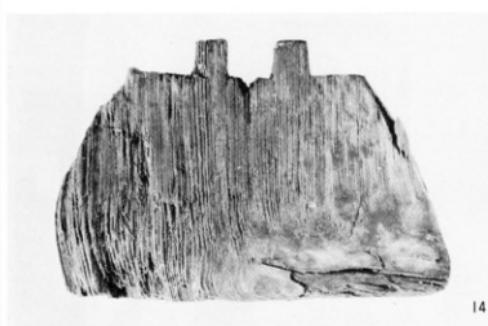
7



10

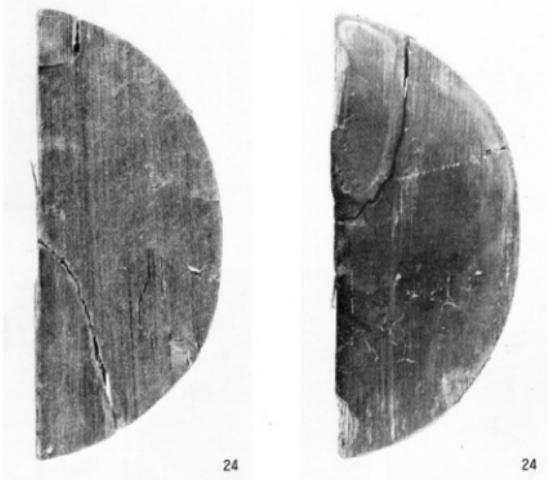
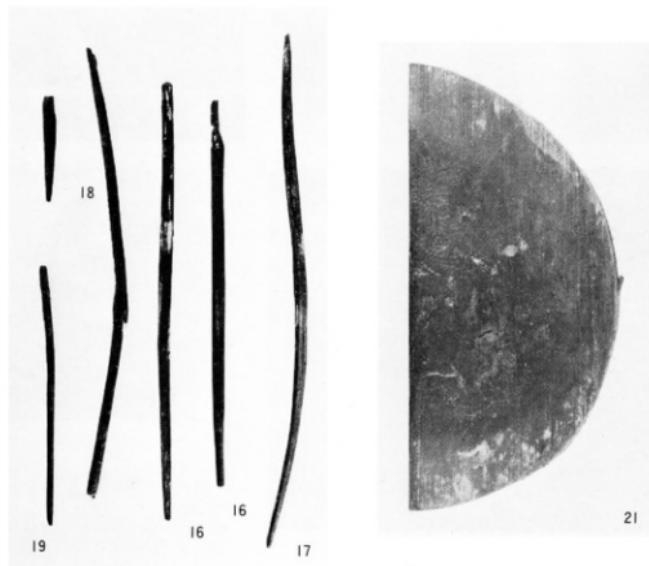


13

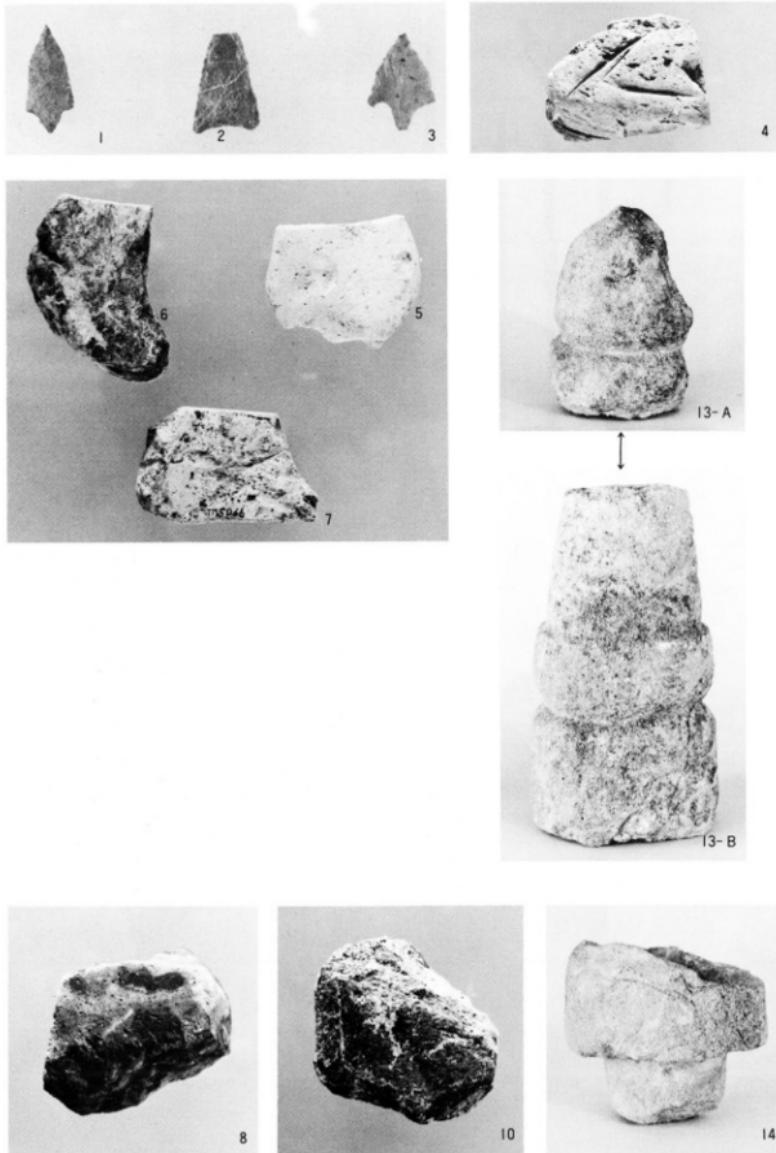


14

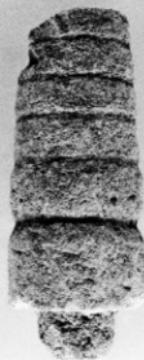
図版47(出土木製品(4))



図版48(出土石製品①)



図版49(出土石製品(2))



15



16-A



17



16-B



18



21

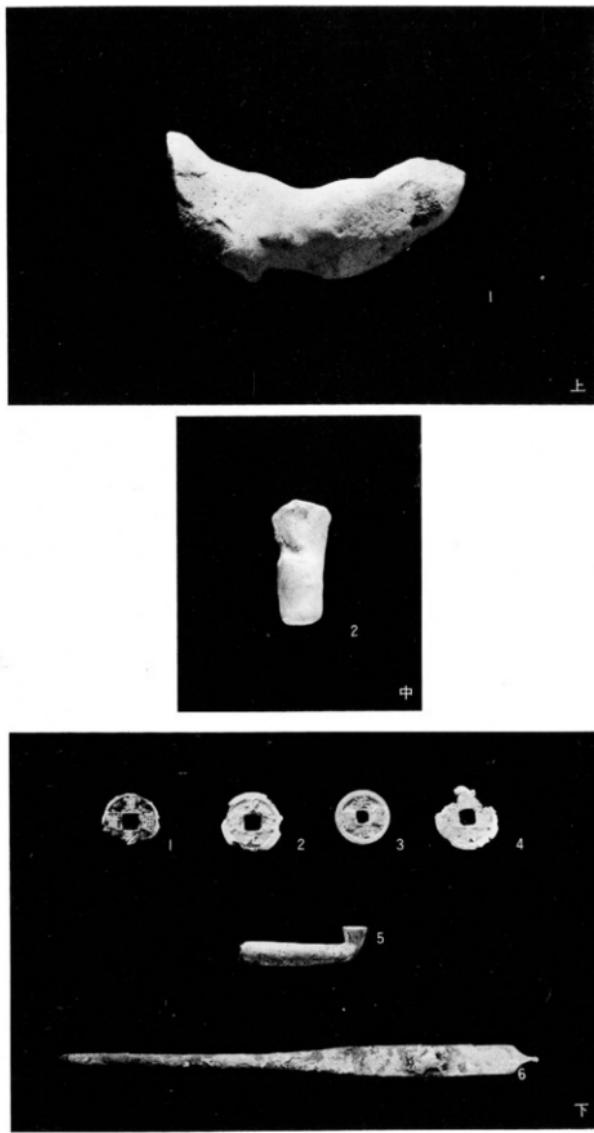


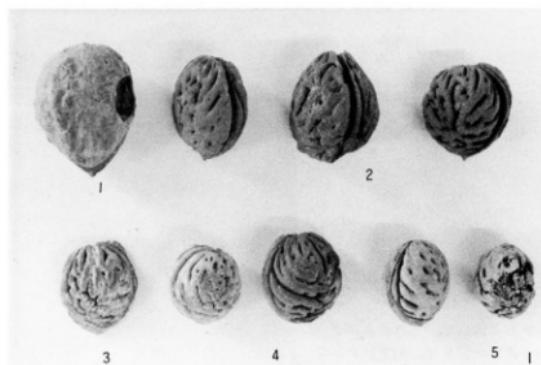
19



20

図版50（出土土製品・金属製品）

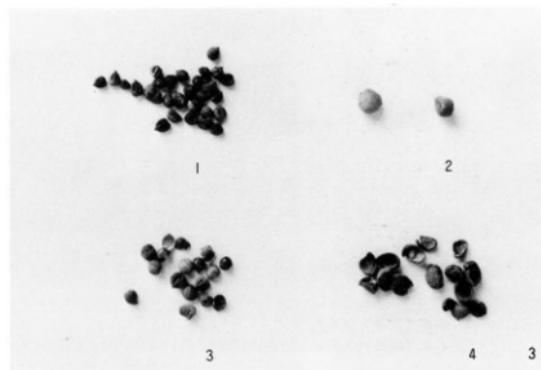




(1)オニグルミ(S D-16), (2)モモ(S D-16), (3)モモ(S D-109)
(4)モモ(S X-12), (5)モモ(S E-1)

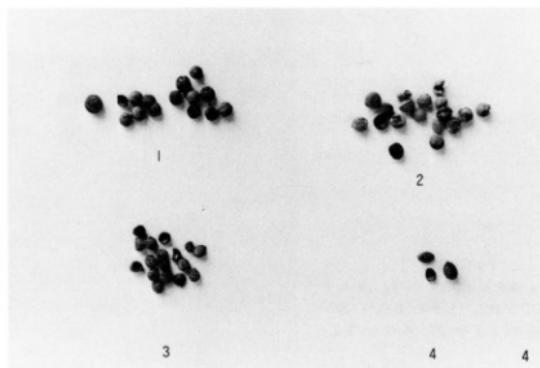


(1)イヌガヤ, (2)カシワ属,
(3)マテバシイ, (4)アカガシ属

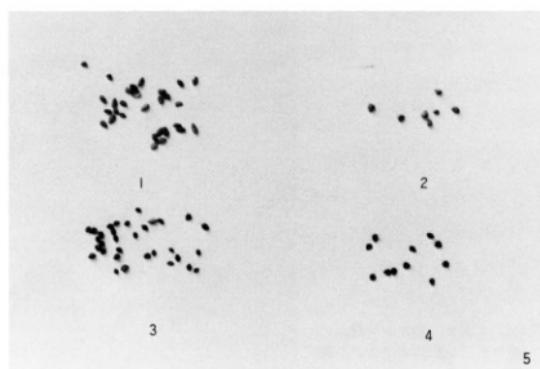


(1)エビズル, (2)ムクノキ
(3)ノブドウ, (4)クサギ

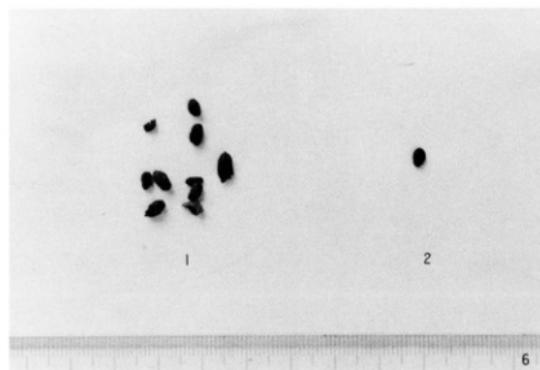
図版
52(出土種子(2))



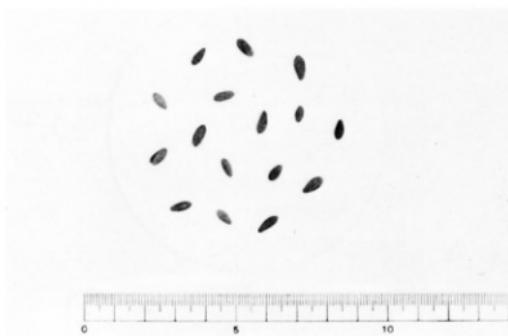
(1)アカメガシワ, (2)カナムグラ
(3)イヌザンショウ, (4)サンショウ



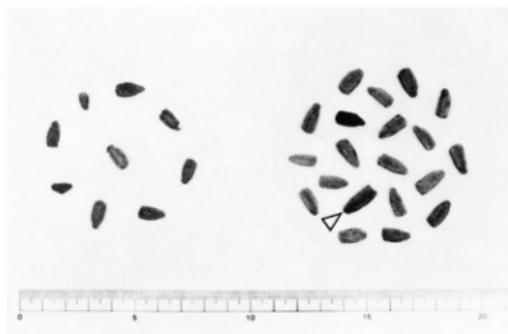
(1)ニワトコ, (2)ヤワグワ
(3)タデ属数種, (4)ホタルイ属 (カ
ンガレイ)



(1)イネ (S P I - 6)
(2)イネ (S E - 1)



SD-16(弥生後期後半期)から
出土したメロン仲間 *Cucumis
melo L.* の種子



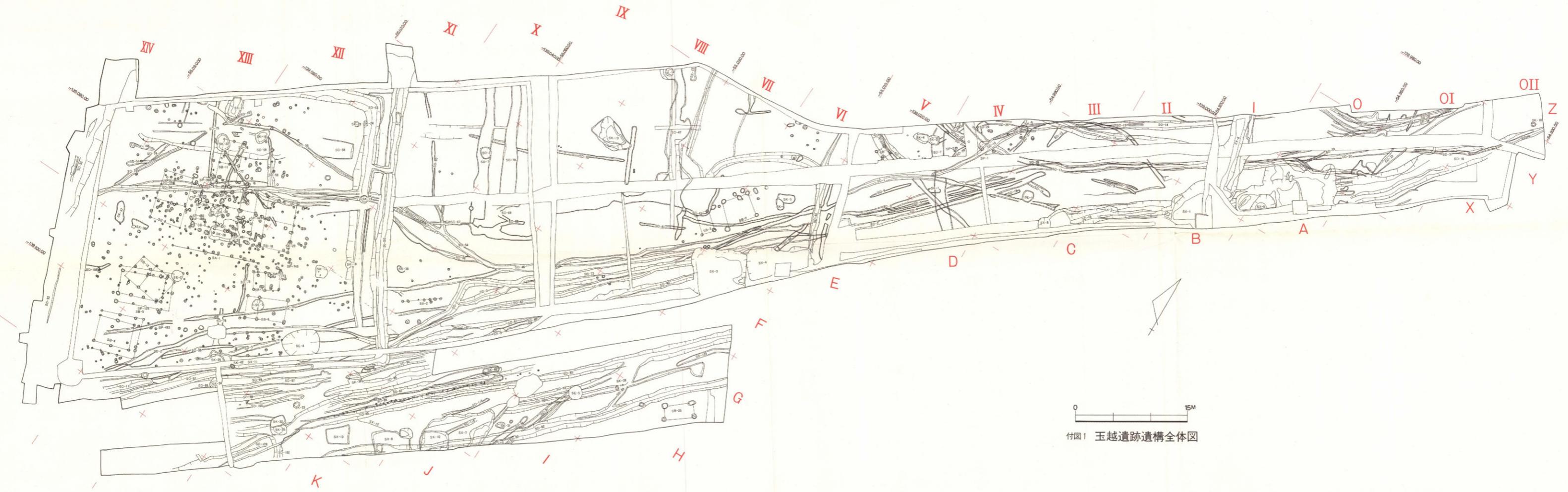
SD-16(弥生後期後半期、左)とD-109(14世紀、右)
から出土したヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria standl.* の種子
(△印の1粒が長さ16.2mmの大型種子)



S D - 14出土土器



記念写真



付図1 玉越遺跡遺構全体図



付図2 環溝屋敷遺構全体図

